

奇譚クラブ

10



奇譚クラブ

金剛つうづ  
昭和三十一年四月二十三日三曜郵便物認可  
昭和四十一年四月二十一日國鐵大島特別列車運賃表第一〇号

10

## THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

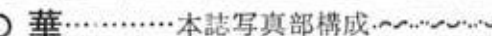
Osaka Japan



10月号 ¥350



△女体緊縛写真集▽  
定価一〇〇〇円(送50円)



專の

~~~~~女体緊纏

・本誌写真部構成・

~~~~~ 緊縛女体の光と影……………編集部構成……………~~~~~

### ·編集部構成

水痛責 痛柱海奔妖酒な可は美 荒柱前 失責高汚麗浮水身黒俯愛逆一苦美 こ

\_\_\_\_\_

女本緊縛の醍醐味を語る……塚本鉄三

女性モデル募集

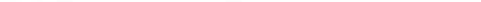
## 勇敢な女性の出現を望む

一、応募作品は編集部に於て慎重銓衡の上、入選決定しましたものは速かに筆者に通知致します。入選作品に対しては掲載の如何致すは猶御応募下さるようお願い致します。

▽規定△

入選作品の著作権は当社に移行することを前

以て御承知おき願います。一、応募作品はたとえ未発表の作品でも他の作品に限りませんでした。たゞ未発表の作品の中へ他社へ出稿されたものはお断りします。作品の中に他人の作品を引用する部分があります。作品の中に他人の作品を引用する部分があります。作品の中に他人の作品を引用する部分があります。





# 女子大生前田真知子天然色緊縛フォト

本誌上に姿を現して以来、その手記と共に非常に人気を博しました。美貌の女子大生前田真知子嬢のカラーフォトは、広くファンの方々から要望されていまして、このたびは新しく特写の機会を持ちましたので、好事家のお目にかけます。

## 柱縛りと脚挙縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号△すき  
肉づきのよいふくよかで美しい太腿を引き上げられて柱に全裸で縛られたM女の本領をあばく。

## 麻縄高手小手首縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号△すめ  
黒ずんだ麻縄が真白い柔肌に喰い込んでピンク色に染まった美しいカラ―でまた格別である。

## 荒縄強烈エビ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号△すけ  
トゲトゲとした荒縄で情容赦なく強烈なエビ縛りに責められたば流石のM女も白肌を赤く彩る。

## 荒縄悦虐羞恥責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号△すら  
赤い絨氈の上に荒縄でぎゅぎゅ縛られた全裸の女体が芋虫のように浅間しくうごめいている。

## 悶える強烈海老責

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号△すへ  
高小手に縛られた上二つ折りに屈曲させられた女体は秘所もあらわに畳の上を転々と悶える。

## 柔肌をくびる縄目

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号△すれ  
正面と側面と横臥と、その姿態は変れども全裸の美しい女体に重に掛った縄目はむごたらしい。

## 緊縛女体をいびる

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号△すろ  
身動きも出来ない縛られた裸身を動かすのはS男子の本望である。

## 羞恥を晒す女体柱

大手札三枚一組 一〇〇〇円  
前田真知子 略号△すそ  
立柱に棒縛りになった女体は、加虐者の思いのままに、その嗜虐心の欲望の犠牲となつて哭く。

◎右に掲げました総天然色のカラープリントは、美人女子大生前田真知子嬢の一糸まとわぬ緊縛フォトばかりです。必ずや女体緊縛フォト蒐集家の方のお気に召すものと信じます。

# ☆深田菊子浣腸悦虐責めフェチフォト

## 〔悦虐浣腸写真〕

### 溶液を圧入される

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△みは  
エネマと硝子シリンドラーで浣腸液を圧入される時の姿態と表情。

### 全裸で受ける浣腸

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△みふ  
三種の浣腸器具でお尻を突っ立てたあられもない姿で施す浣腸。

### イルリの嘴管挿入

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△みほ  
二千CCのイルリガートルからドクドクと注ぎ込まれる溶液。

### 刺す浣腸器の恐怖

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△みち  
百CCの硝子製ポンプの先端がズブリと突き刺さる浣腸の恐怖。

### 自ら施す浣腸悦楽

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△みそ  
強制されて自分自ら浣腸器を握って施す浣腸の羞恥と被虐悦楽。

### 体内に奔流する液

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△みや  
浣腸液が体内に奔流する。

尻つき出した四つ這いで浣腸液はグングンと体内に奔流する。

## 浣腸を楽しむ美女

大手札三枚一組 四〇〇円  
深田 菊子 略号△みぬ  
羞かしい浣腸もやがては自ら慰め楽しむ愉悦の小道具となる。

## 〔オシメ着用写真〕

### オシメからカバー

大手札十二枚一組 二〇〇円  
深田 菊子 略号△みめ  
浣腸のあとオシメを装着する。

### おムツに排便する

大手札十二枚一組 二〇〇円  
深田 菊子 略号△みし  
おムツを当ててカバ―を着けるまでの段階を順序を追って見せる。

### 生ゴムのオムツへ

大手札十枚一組 一八〇円  
深田 菊子 略号△みせ  
ヌメヌメとした生ゴムのカバー。

◎以上発表しました「浣腸写真」とのオシメ写真とは、フェチファンの要望によりまして、特にこの種のS.M.に興味を抱く深田菊子嬢を煩して作成しました。お申し込みは前金にて、大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号、天竺社宛、略号記載の上、どうぞ。





## 奇譚クラブ

〈第二五巻 第十号・通刊第二八四号〉

### （昭和四十六年） 十月号 目次

#### 〈本文〉

- 扉で一言「緊縛フォト・コレクション」……村井孝一郎……（9）  
三度目の撮影行「黒い縄」……城 章夫……（10）  
懸賞入選創作『輪（りんね）廻』……黄 好夫……（18）  
告白・奴隷の法悦「御神水拝受」……中田 裕史……（30）  
女責め図絵の系譜 坂田山心中事件……南 彦造……（32）  
拾ったテープから「あたしは静子」……山 光 純……（40）  
連載・青春の陥穽 ⑨『実験報告』……芳野 眉美……（50）  
告白「鼻責めにつかれて」……中村葉奈男……（58）  
連載小説『紫蘭の門』（2）……風流極道軒……（60）  
辻村隆語録 SMプレイ・ルール……画竜 点晴……（77）  
セミ告白「わが妻は最良の協力者」……縄木縛太郎……（80）  
連載「M派交友録」〈附・ニセモノ「毛皮」のヴィナス〉を斬る……鬼山 絢策……（84）  
告白手記 好美夫人を縛る……木山 春夫……（98）  
連載小説『幻想帝国』（6）……花影 叢……（106）  
昆侖子女王憧憬の記「拝 謁」……庭 房之……（114）

## 徹底の自粛本誌

一、本誌は特殊な風俗文獻を研究する平和で  
穩健な社会生活を営む真面目な成人を対象  
として編集しておりますが、青少年の保護  
育成に関する条例には抵触しないよう、十  
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ  
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵  
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順  
次整えて参りましたが、更に挿入写真の検  
討及び見出し、キャッチフレーズの改訂な  
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの  
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲  
載した文章は十二分に検討を加え、いやし  
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな  
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部  
数は最低限度にとどめ、その増大を企るた  
めの努力はいたしません。

## ク サ ロ ン

…(233)…



- 私好みの家畜人……小山 郁子  
「夫婦プレイ」に参加を求む……若山 巨人  
サロン楽我記〈第八十八回〉……辻村 隆  
プレイ・フォト「妻・純子」……三浦 敬一  
美少女無惨絵秘帖「竹藪の怪」……桐原 紫門  
詩「柔 庄」……M・比徒理  
四ツ足歩行願望……黒田 貴夫  
フォト「馬のよるいび」……佐野 寿  
緊縛フォト雑感……朝野 裕  
緊縛生活より「縄を洗う」……早木 夢二  
イメージ画「おいしいカンズメ」……府和 糸男  
夫婦プレイと我が願望……土田 純一  
編集部だより……編集部  
スケッチ稼業……編集部  
団鬼六先生への公開状……西宮 M K 生  
感想と期待「花と蛇」に寄せて……日和 見  
プレイ・フォト「枯木の花」……山本 五郎  
九月号読後感……吉岡 隆二  
TVレポ 刺青嬢のピアシング……柴 利好  
モデル緊縛「想いを遂げて」……乃美 対造  
頭髮フェチ 冥想「髪」……松原 千次  
イメージ画「月」……一宮 ひかる  
私のプレイ・フォト通信……紀川 正信

#### △縄とカメラのルポ

『深田菊子のSM生活について』……塚本 鉄三……（124）

被虐の旅シリーズ「男二人」……由利美千子……（140）

懸賞入選創作「荒遊会」（上）……神 久……（148）

下着愛好告白 黄色い幻想……久留米 I E……（162）

SMカメラ・ハント△三浦純子の巻△

『悦 虐 の 生 態』……辻村 隆……（164）

懸賞告白「鼻腔の被虐に溺れて」……大橋美代子……（186）

連載小説「大 噴 火」〈第三十七回〉……千葉 青鬼……（198）

鬼六談義 随筆「花と蛇」……団 鬼六……（206）

懸賞告白「夢と現実」……清野由紀夫……（212）

うれしい新聞記事 楽しきかな「人生」……虹丸 虹吉……（222）

水田真紀子「バスガイドの電話」……水田真紀子……（224）

読者通信……編集部選……（252）

読者ギャラリ―Ⅱ「ショーの開幕」須坂 旭・「SM交響楽」

岡たかし・「いたぶり開始」志羽利也・「倅せな日課」春

川ナミオ・「不安と期待」志野春秋・「燭台」小川茂正・

「狂った果実」岡たかし・「ベット」室井亜砂路・「夏の

夢」岡たかし・「車」志羽利也・「夜の衣裳」絹川美代子・

「物置」須坂旭・「お掃除」怒り「春川ナミオ・「氷上の

舞踊」あらい・かず・「終電の忘れもの」伊達忍

目次カット「休憩」あらい・かず・「テッポウ」府内 宏  
扉カット「ZOOIO」……東 風紅



☆読者通信のうら若き美女を緊縛する

読者通信に或は本文の告白文に登場した若々しい本誌愛読者の鮮明な印象紙焼付の変わった緊縛姿態を要求される方々に捧げます。

逆エビ縛吊り上げ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろて  
後手首と足首を締めつけた切点を吊り上げ弓のように反らせる。

縄付きで愛してネ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろせ  
縛られたままで愛されるのが最高という彼女のマゾヒズム要望。

棒責めの開股縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろひ  
棒の両端に左右の足を括りつけた開股羞恥責めの最高傑作姿態。

可愛い牝犬の珍芸

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろり  
両手の自由を奪われた可憐な牝犬が全裸の肢体で演ずる珍芸。

開股責めの種々相

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろみ  
羞恥責めの極致である開股縛りの数々を三枚で御覧に入れます。

肌に喰い込む麻縄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろし  
もがけばもがく程黒ずんだ麻縄はぐいぐい柔肌に喰い込みます。

海老責めで虐める

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろめ  
全裸の海老責めは両腿を一直線に開ききつて羞恥の中心を晒す。

責め抜かれた結末

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろに  
あくなき羞恥責めの末、ぐったりと放心状態になった緊縛肢体。

股間縛りにあえぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろち  
柔らかき女体を縦に真つ二つに割った妖しくも艶やかな縄一筋。

高手小手首縄悦楽

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろと  
首縄は顔面を紅潮させマゾヒズムの女の薔薇の花をしとど濡す。

脚吊り柱強烈縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろも  
柱を利用して脚線美の片足を或は両足を吊り上げた羞恥の姿態。

白ロープの亀甲縛

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろへ  
鮮やかな白縄がふくよかな肌を妖しい亀甲縛りの綾模様で彩る。

逆エビに晒す美形

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろす  
柔軟な若々しい肢体が逆エビ縛りで悶えながら美しくうねる。

開股開陳羞恥責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろは  
そこを露出するのが目的の羞恥責め好みの開股縛りを披露する。

白縄強烈縛り地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろそ  
白太縄が強烈に肌を埋め弘田三枝子ばりの美貌が苦痛にゆがむ。

牢舎へ引回す囚女

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろい  
牢舎へ通う冷たい階段を全裸の囚女を縛ったままで引回す。

菱縄縛りで責める

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
深田 菊子 略号 八ろふ  
麻縄を用いて整然とした菱縄を白肌にきびしく喰い込ませる。

荒尾慶子のすべて

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号 八ろに  
可憐な慶子未亡人のすべてをばっちり捉らえた緊縛フォト。

浣腸溶液受入態勢

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号 八ろし  
この格好で浣腸液をドクドクと体内に注ぎ込まれるのです。

剃毛の美女を縛る

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号 八ろん  
童女のようにスベスベと剃毛された跡もあざやかに晒して。

私をよく觀賞して

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号 八ろな  
全裸で縛られた私の隅々までを穴の開くほどよく御覧になって。

ベッド上での狂態

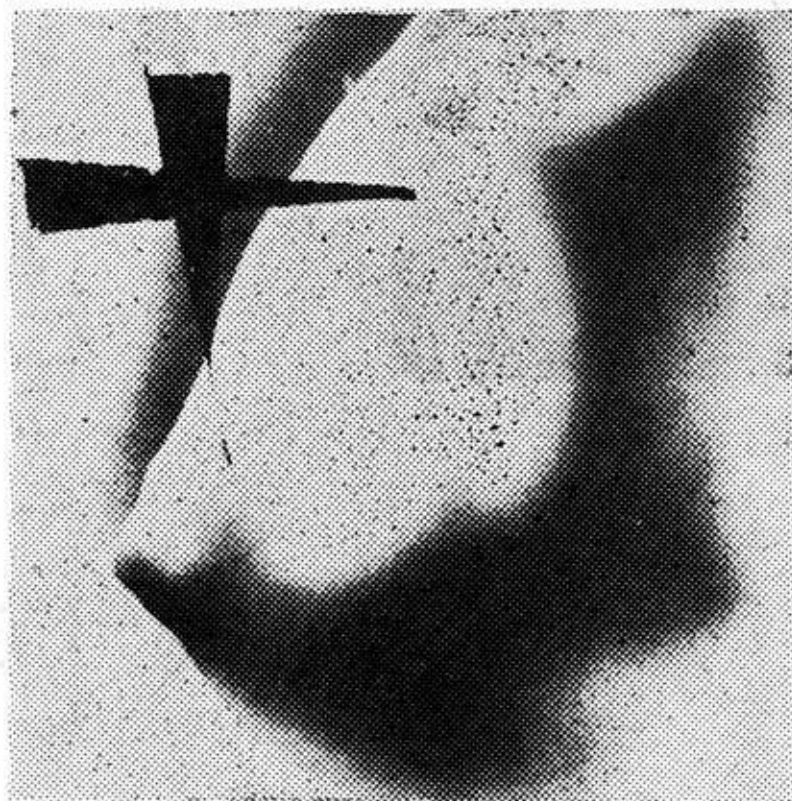
大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号 八ろは  
全裸で縛られた彼女がベッドの白いシーツの上でもだえ抜く。

強烈菱縄股間縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円  
荒尾 慶子 略号 八ろい  
股間縛りは厳しく締めつけた菱縄と麻縄で厳しく締めつけた菱縄と。

◎御注文はすべて前金にて略号記載の上、大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社宛お申込み下さい。送料当方負担にて急送致します。





東 風 紅・作

# 緊縛フォト・コレクション

過去十数年の間に、数千枚にも及ぶ女性の緊縛写真を蒐集してきた。

肥った女や、痩せた女。年増女に、幼い顔の女。玄人っぽい女に、素人じみた女。一様にそれぞれ個性を持った美しい女性が縛られているのだが、やはり好ましい写真もあれば余り好ましくないものも混じっている。女体緊縛写真が飯よりも好きでありながら、中には見るのも嫌な写真もある。そんなのは、破って棄てたり同好者にやったりしてしまう。

女性の縛り写真を一枚一枚じっと眺めていると、それが撮影されている場面が想起され、そして自分があたかも、その場に居合わせているような気持になって飽くことがない。縛り方や縄の種類、それに女の肢体の各部分の微細な状態や表情を凝視していると、派生してくる妄想は次々と湧いて止まる所を知らない。

集めも集めたり女体緊縛写真数千枚。雨の降る宵など、女体の哀歓が、それらの写真の間から激しい慟哭となって耳に響いてくるように思える。

美しく、そして華やかな女体の饗宴のなかに、コレクションは、かすかに息づき、幾度手にしても、繰り返し眺めても飽きさせることはないのだ。

(村井孝一郎)





三 度 目 の 撮 影 行

黒

い

縄

城

章

夫

ぼくの好きな歌のひとつに——  
碓氷嶺の 南おもてとなりにつけり

くだりつつ思う

春の深きを

(北原 白秋)

いま、ぼくらを乗せた特急「あさま」は、白秋のたどった旅路とは逆に、碓氷嶺を南から北へ越えようとしている。春浅い関東平野をつつ切って、山気ようやく濃い横川の宿にたどりついた「あさま」は、碓氷嶺の横腹にくり抜かれた幾つものトン

ネルを、あえぎあえぎ、くぐりぬける——とそこはまだ、蕭々たる冬の国だった。

もう高原には雪こそ消えているとはいえ、裸のから松が、さむざむと肩を寄せあい、そして、その上に大きくわだかまる浅間山は、真白な雪の衣に覆われていた。

その白い山の姿を見ながら、ふと思いだして、となりの座席で熱心に本を読みふけている那津子に訊ねた。

「あれ、うまく染まったかい？」

「ええ、染まったわ。ただ、長いのが一本、まっ黒にならないのよ。二度も染め直してみたけれど、やっぱり駄目。ほかのと糸の質が違うらしいのね」

ぼくらの愛用する縄のことについては、本誌六月号の『二度目の撮影行』で書いたとおり、白い木綿の糸で編んだ縄を、長短それぞれ二本ずつ、合わせて四本を使っているのだが、こんど三度目の撮影行に出かけるにあたって、それらの縄を黒く染めてみようと思いついたのだ。写真にとった場合、光線の具合で肌が光って、まっ白に写ることがある。そういう部分を同じように白い縄が走っていると、縄が殆ど目立たなくなってしまう。縄が黒ければ、どんなに肌が白く写っても、くっ



きりと撮れるだろう。

それに、白い艶やかな女の肌に、真黒な縄が蛇のようにまといつくのは、白い縄の場合とは、また違って蠱惑的な眺めに相違ない。そういうわけで、那津子の管理にゆだねてある四本の縄を黒く染めるように、いつておいたのだ。

今夜、その黒い縄でキリキリと縛りあげたら、那津子はどんなに魅力的に見えるだろうか。そして撮影効果は、どうだろう。車窓にくりひろげられる浅間野の冬景色もどこへやら、ぼくのおもいは早くも、今宵の緊縛プレイへと飛んでいった。

列車がガタンと揺れる。はっと我にかえると、列車は浅間の山裾をゆっくり回り、やがて千曲川の谷めがけて駆け下って行くところだった。

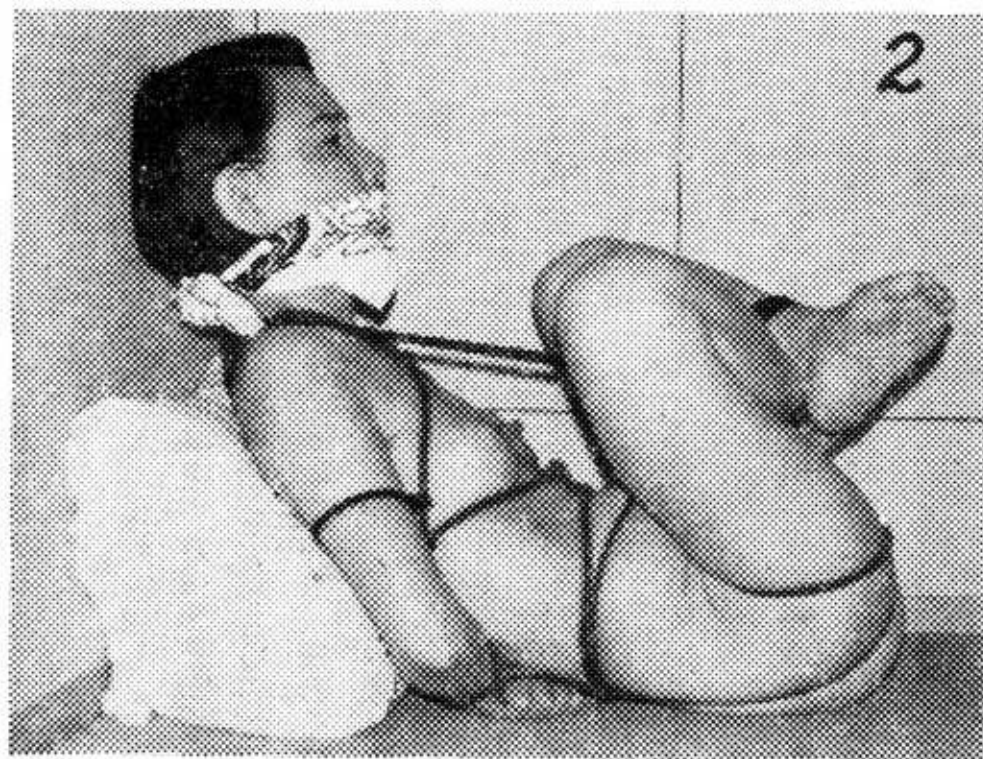
小諸から上田をすぎると、車窓の左手を流れる千曲川の川幅は、ますます広くなり——ということとは、対岸がそれだけ遠くなるということだが、その遠い対岸に点々と賑やかな灯が見えはじめる。それが今宵の、ぼくらの目的地、T温泉の町の灯だった。

ぼくらの予約したのは、近代的な高層ホテルだ。信濃路の、いで湯の町に来て、鉄筋コ

ンクリート造りのビルに泊まるのも味気ないようだが、もう暦の上では弥生に入ったとはいえ、ここはまだ冬の国。裸でたわむれあうぼくらにとっては、数奇を凝らした、しかし隙間風の多い日本風の宿よりは、例えば味わいに乏しくても、スチーム暖房で部屋全体が春のように暖かいホテルの方が有難い。

エレベーターが、ぼくらを五階に、すうっと運び上げてくれる。部屋に入ると、その真中にシングル・ベッドが二つ、並んで置かれている。かなり広い部屋なのだが、ツインのベッドに、そうやって頑張っていられると、撮影には、ちょっと勝手が悪い。だが、ちょっと押したぐらいでは厚い絨緞の上に、どっしりと置かれたベッドは、びくともしない。こういう点は、和室の融通無碍な処に叶わない。布団を敷かないかぎり八畳なら八畳の部屋を、その広さいっぱいには使えるのだから。

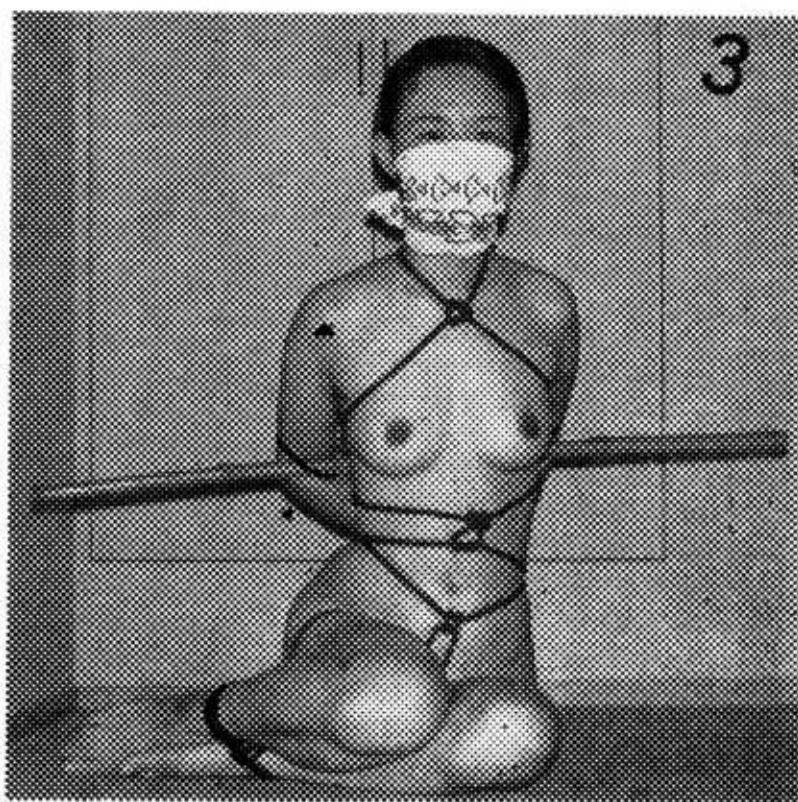
ベッドの移動は諦めて、入口からはいった直ぐのところ、洋服ダンスの前の、ちょっとしたスペースを、撮影場所にしようと思いつめると、ぼくは那津子を促して、窓辺に立った。五階の高みから見下ろすぼくらの目にキラキラ輝く宝石の様な灯で装われた、出で湯の町の全景が飛びこんでくる。千曲川はもう



闇の底に沈み、ひと際黒々と闇が濃く見えるあたり、ああ、あそこが川だなと辛うじてうなずかれる。しばし、湯の町の夜景を楽しんだのち、ぼくらは身づくろいを整えて下の食堂に降りて行った——。

食後、更に下へ降りて、幾つか並んでいる家族風呂の一つに入った。ぼくらの部屋にもバス・ルームがついているのだが、いかにも





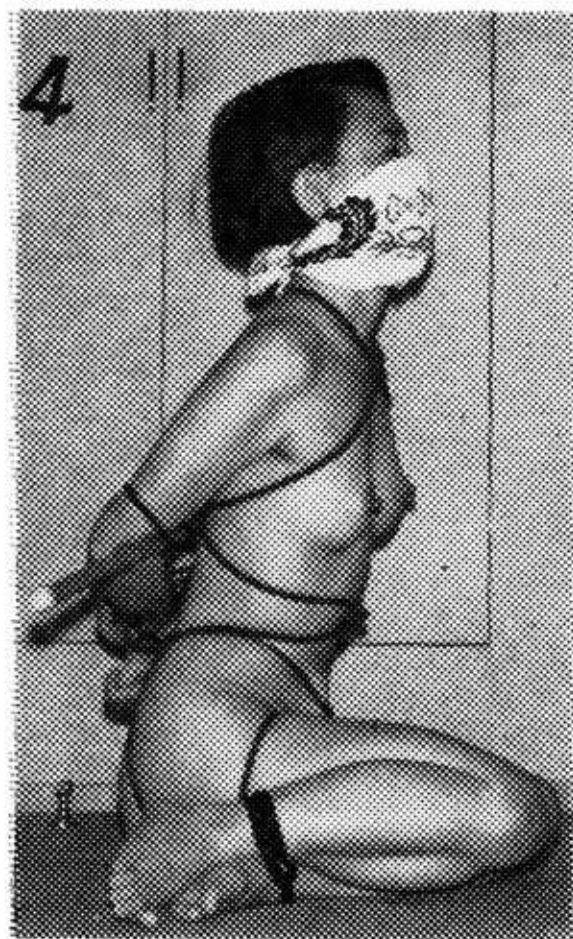
だの中を駆けめぐり、豊かに激しく溢れ  
でる。

「ノズル」の先を、ちょっと動かすと、  
シャワーは那津子のあごの下、ちょうど  
首の真ん中あたりにぶつかり、ひと筋の  
滝となって胸の谷間を流れおちる。目を  
閉じたまま那津子が言う。「あたたかく  
って、気持ちがいいわ」

だが、ぼくのシャワーは無尽蔵という  
わけには行かないのだ。たちまちチョロ  
チョロとなり、やがてピタッと止まって  
しまう。

部屋にもどってドアに鍵をかけると、  
もうここは、ぼくら二人だけの国だ。誰  
も入ってこない、誰にもわずらわされない、  
二人っきりの小天地である。

湯上がりの肌にスチームの暖  
房が熱すぎるくらいなので、ス  
チームの栓をしばらく閉めてお  
くことにする。身につけている  
物をみんな脱ぎ捨ててしまうと  
ぼくは染めたばかりの黒々とし  
た縄を持って那津子の背後に立  
つ。黙っていても、那津子はお  
う心得顔に両手をうしろに回し



て待っている。その手首に黒い縄が、からみ  
つく。この一瞬——。縛りあげて行くときよ  
りも、縛り終わってしまった時よりも、この  
一瞬にこそ、ぼくは心臓を、きゅっと掴まれ  
でもしたような刺戟と興奮とを覚えるのだ。  
二の腕に巻きつき、胸にまわり、腰のくび  
れを締めあげ、黒い縄は那津子の白い肌の上  
に妖しくも美しい線を描きだして行く。

一方、首にからまった別の縄は、胸の谷間  
をくぐり抜け、広々とした腹の平野を横切る  
と、黒い杜に溶け（ここだけは、やはり白い  
縄のほうが視覚効果の点で、優れているよう  
だ）込む。

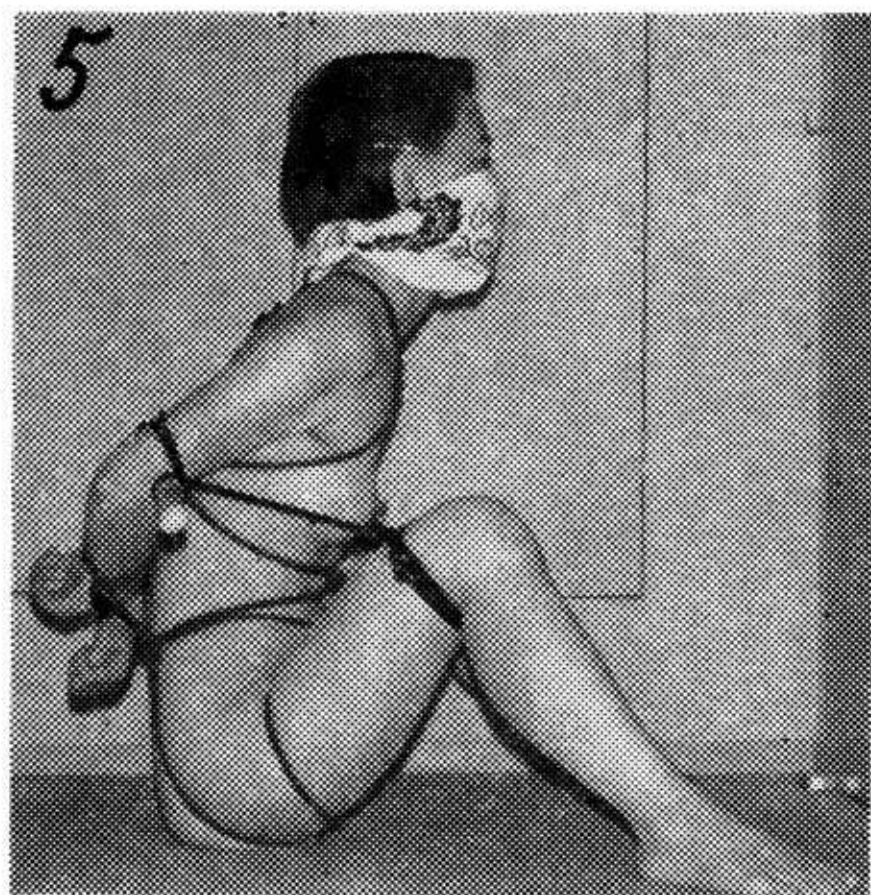
こうして、ぎゅちりと黒い縄で縛りあげら  
れた那津子を部屋の隅に立たせると、ぼく

小さいし、プラスチックの浴槽では、どうに  
も気分が出ないからだ。

家族風呂は、ちょうど二人が並んで入れる  
くらいの手頃の大きさだ。「那津子、そこに  
坐れ」と、あとから入ってきた那津子にタイ  
ルの流し場の一角を指さす。那津子が言われ  
た通りキチンと正座すると、ぼくはその前に  
足を拡げて立つ。軽く目を閉じた那津子の左  
肩のあたりに、ぼくのシャワーがほとぼしり  
かかった。

食事のときに飲んだビールが、ぼくのから





はその足元に、しゃがみこむ。そして那津子の足を十五糎くらいの間隔で開かせ、両足首を縄で連結。余った縄は上に引きあげて、手首を縛った縄に結びつける。これで那津子はもうヨチヨチとしか歩けなくなる。

ぼくは、そのまま、そこにあぐらをかいて坐りこみ、那津子に命令する。

「さあ、手拭とハンカチを持ってくるんだ」

部屋の反対側の隅に前もって置いておいた手拭とハンカチのほうを指さすと、後ろ手に

縛られ、足首を十五糎幅に結びつけられた那津子は尻をふりふり、不自由そうに、すり足でそっちへ歩いて行く。ようやく部屋の隅に達すると、那津子は苦勞しながら跪き、手拭を口にくわえ上げる。それから、やつこらさと立ちあがり、ヨチヨチと、ぼくの前まで歩いてきて、またゴコチなさそうに身を動かしながら膝を揃えて正座する。そして、ぼくの手の上に手拭を落とす。

この動作の一部始終を、もう一度くり返して、やっとのことでハンカチも持ってくる。ぼくは那津子の口を開けさせ、ハンカチを丸めて中に押しこむ。その上を手拭で鼻まで覆い、首のうしろでギュッと結ぶと、これだ。ようやく猿轡が完成する——読者にはもうお判りだろう、なぜ、こんな手間ひまをかけて猿轡をかませるかは……は。

自分の口につめこまれ、自分の口を覆い、物言う自由を奪われるハンカチや手拭を、厳しく縛りあげられた身で、われとわれから運ばなければならぬとき、那津子の心に激しい被虐の歓びがわきあがるのだ。縄の

管理をすべて、那津子にさせるのと同じ計算が、こんな煩わしいプロセスを踏ませるのである。

ところで、那津子の口につめこむハンカチだが、これはもちろん、洗いたてのゴミひとつない清潔なハンカチを使う。本誌上でも、うすよごれた靴下や下着などを相手の口に押しこむ描写を、時折、目にするけれども、ぼくには、そんな真似はできない。なぜなら、緊縛プレイのさなかに、固く結んだ猿轡を外してやって、那津子の口を吸うのは外ならぬぼくの口だからだ。ぼくが吸ってやる那津子の口に、どうしてそんな汚ないものを、つめこめるだろう。

——さて、ここまでは、ぼくらが二人で過ごす夜の、いわば開幕の儀式のようなものだ。これからは、いよいよ本番の撮影である。

例によって、あらかじめ入念に作っておい

たコンテに従って、撮影を開始する。

まず、手始めは、胡座・海老責めのポーズだ。足首の縄を解くと、さっき決めておいた撮影位置まで那津子を歩かせ、そこにあぐらをかいて坐らせる。交叉した足首を縛り合わせ、余った縄を首にかけて引き絞ると、那津子の上半体はグッと前屈みになる。いつも本格



的な海老縛りをやってやろうと計画しながらいざその場にのぞむと、つい可哀そうだといいう惻隠の情が先に立って、いい加減のところ

で妥協してしまう。(写真1)

ついで、那津子のからだを仰向けにひっくり返す。だが、海老縛りのまま仰向けにすると、背中が交叉して縛られている手首に体重が全部かかり、とても痛がるのである。そこで、ここでもまた妥協して、ベッドから持ってきた枕を背中の下にあてがってしまう。迫力のない写真しか出来ないのも当然である。

しかし、ぼくらの字義どおりプレイ——遊び——なのだから、この程度の妥協は止むを得まい。それでも結構苦しいらしく、那津子は眉をひそめて耐えている。(写真2)

海老縛りは早々に打ち切って、次は棒を背負わせた縛りに移る。用意してきた竹の棒を後ろ手に縛った両腕と背中にあいだに水平に通すと、腕がかなり後ろにひかれて、これだけでも緊縛感が強まる。それから猿轡をやり直す。さっきは鼻の下までしか覆わなかったが、こんどは口も鼻もすっぽり覆うきびしい猿轡だ。

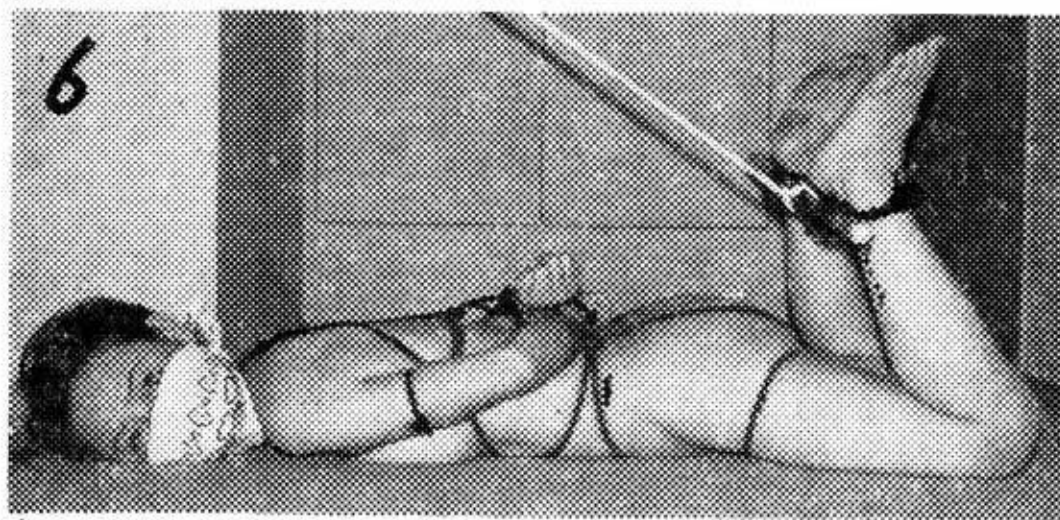
横坐りにすわらせ、足首を揃えて縛り、ぼくは床に腹ばいになってカメラを構える。黒

い縄が白い肌の上に、くっきりと浮きあがり、なかなか魅力的だ。が、乳房を中心に菱形になるように縄をかけたつもりだったのに、あとからさしこんだ棒に縄をからげたため、菱形というには、あまりに締まりのない形になってしまった。とはいっても、今さら縛り直すのも面倒なので、そのまま正面からストロボの閃光を浴びせかける。

(写真3)

ついで、カメラを床に置き、那津子を抱きかかえるようにして向きを変えさせる。背中にしよわせた棒がかなり左右につきでている(どうやら、棒が長すぎたようだ)ので、こんな狭い場所でも向きを変えさせるのは、ひと苦労だ。やっと横向きにさせてシャッターを切る。棒のために腕が後ろに引かれ、腋毛が男ごころを妖しく、そそのる。(写真4)

足首の縄を解き、こんどは両脚をおもいきり拉扯させる。解いたばかりの縄でそれぞれの膝がしらを縛り、さらに背中にしよわせた



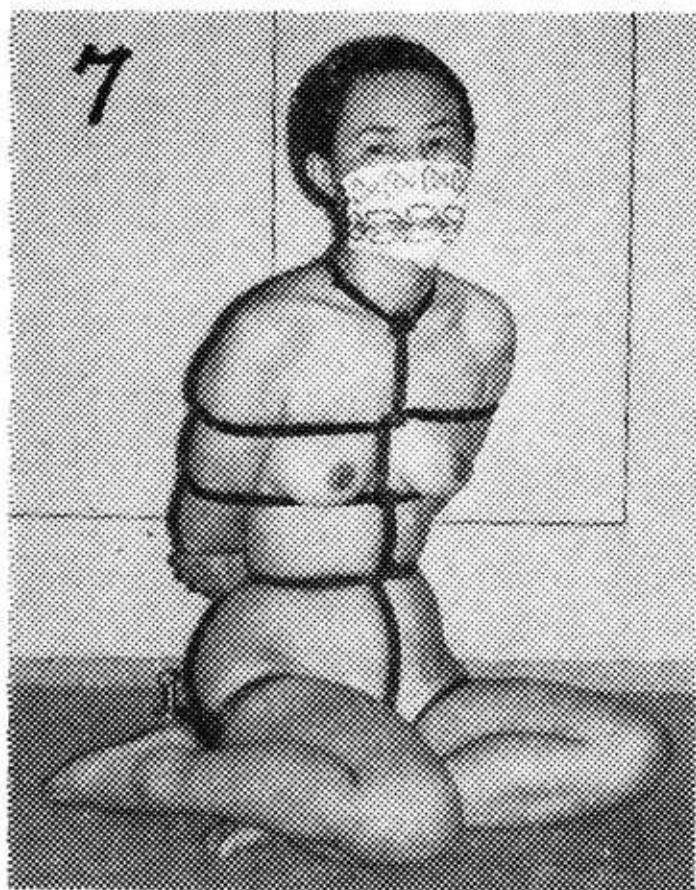
棒に結びつけると、もう那津子は脚をすばめようとしてもすばめることができなくなる。脚をひろげたまま坐らされている哀れな那津子の姿態をカメラの非情なレンズは前から横から後ろからと、さまざまな角度から捕えてゆく。(写真5)

撮影を始めてから、すでにかなりの時間がたった。

湯上がりのほてりもさめて肌が少しばかりひんやりとする。窓ぎわのスチームの栓をあけに行ったりついでにカーテンを押し開いて外の様子をうかがうと、灯火に照らしだされてチラチラ粉雪が舞っている。いつのまに降りだしたのやら、道理であたりが、ひっそりと静まり返っている筈だ。

スチームが、快い音をたて、部屋の温度はたちまち上昇する。那津子のところへ歩みよって背中にしよわせた竹棒を抜きとり、からだをうつむけに寝かせる。思いきり両脚を開





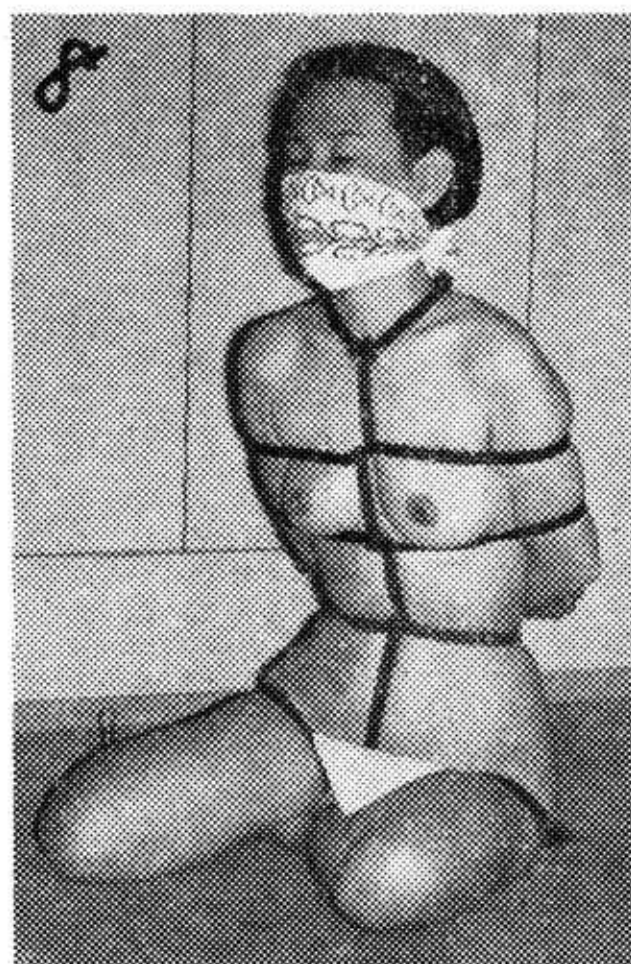
かせ、足首に棒を縛りつけて足枷とする。その足首をもちあげて膝から下を垂直に立て、棒のまんなかに結びつけた縄（ただし、これは白い縄だ）を、ちょうど程よいところにある浴室へのドアの把手に縛りつける。むりやりこちらへねじまげられた那津子の髪はやや乱れ、鼻まですっぽり覆う、きびしい猿轡の上から、いっばいに見開かれた目が、怨ずるようにこちらを見つめている。（写真6）

に押しこんだハンカチをひっぱりだしてやると、那津子の唾でグッショリ濡れている。「口のなかカラカラになっちゃったわ」と、那津子は冷えたお茶をおいしそうに飲みほした。ぼくはひと口ひと口ゆっくりと飲みながら、つめたい液体がのどを通りすぎる感触をたのしむ。

ふっと思いだして、「雪はつもったかな」と窓のところへ行ってみる。カーテンをちょっと押しあけて外をのぞくと、

もう雪は降り止んで、黒い闇空のあちこちにネオンが美しくまたたいている。さっき外をのぞいてみた丁度その時だけ、風に乗って雪がちらついたものと見える。謂うところの風花であろう。

ひと息いれついでに、サッとお湯を浴びてきた那津子は、うす桃いろに上気した湯あがりの肌を光らせながら、両手を背中になわして立っている。その手首に、ぼくは黒い縄をからませて行く。



手首を縛り合わせた縄はそのまま背骨に沿って上へ伸びる。一〇糎ほどのところで左右にわかれて前にまわり、乳房のしたをふた巻きしてまた背中にもどる。再び上に一〇糎くらい伸びてまた左右にわかれ、前にまわってこんどは乳房の上を縛る。別の縄で腰のくびれた部分をふた巻きすると、乳房の上下、そして腹部と、三筋の黒い縄が那津子からだを横に走る。三本目の縄を二つ折りにして首に掛け、その三筋の横縄を縦に縫って股間をくぐり抜ける。そのまま上へのぼって腰の横縄に連結し、それでもまだ余っている縄を左右にふりわけて尻の双丘を斜めに渡り、腿のつけ根を二た巻ほど締めあげる。



それから猿轡。鼻から下を覆うもの、口を割って手拭を噛ませるもの、手拭のかわりに縄を噛ませるもの——いろいろな猿轡のかけ方をやってみるが、結局、最後に落着いたのは、鼻まですっぽり覆うやりかただ。実際上からいっても、これがいちばん外れにくいし見た目にも最も美しく情趣が深い。こういう猿轡をはめられると、女の眼はひととき生き生きとして、そこに縛られた女の悲しさ、哀れさが、にじみでる。だから、こんどの撮影行では猿轡は、だいたいこれ一本槍で行くつもりだったのだ。

こうして縛りあげた那津子を横坐りにさせて、まず左斜め前方から観察し、カメラを構

える。(写真7)

ついで右斜め前からも……。シッターを押すときには無論そんなところまで気が回らなかったのだが、写真ができてみると、那津子は顔をやや上向き加減にして目を閉じ、諦めきったような表情を見せている。いかにも、それらしい雰囲気かにじみでいて、仲々いい写真だ、などといえ、自画自讃のたぐいだと、わらわれるだろうか。(写真8)

つづいて背面から。(写真9)

……ここで、ぜひ触れておきたい

のは、手の表情のことだ。

手首を交叉させて縛った場合、手をすっかり開いている写真がたまにある。時には化粧品の宣伝ポスターのモデルよろしく、指にしなをつけてそらせてみたり何かしているものさえある。また、手首をX字形に交叉させず、両腕が水平になるくらいに上へ吊り上げて縛った場合、片方の手で、もう一方の腕を握っている(これは、その昔、大塚啓子嬢の写真によく見られた形であ

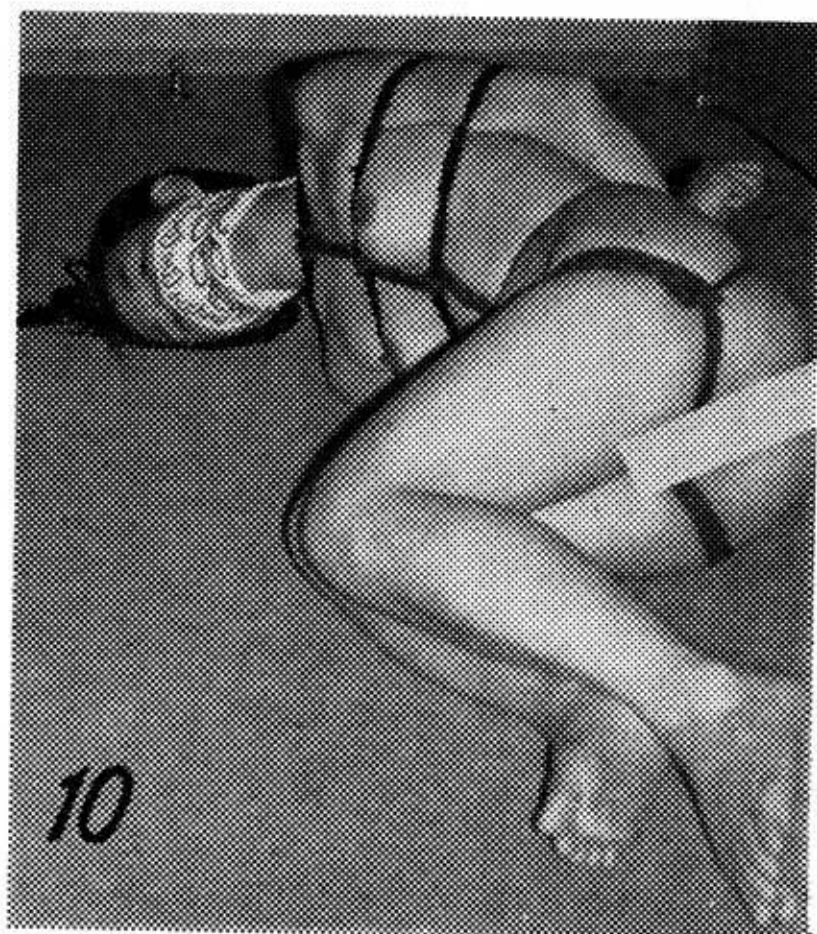
る)こともある。

ぼくには、どちらのポーズも、ただけな。ここは、やはり両手を、しっかり握りしめてもらわなくてはならない。

考えてもみるがいい。「その女」は裸に剥かれ、ヒシヒシと縄で縛りあげられた女なのだ。次には何をされるだろうか。彼女は不安と怖れにおののいているのだ。「手に汗を握る」というが、彼女はまさしく手を握りしめて、自分の爪が、掌に喰いこむくらい固く握りしめて、つぎに襲いかかってくる運命を待



9



10

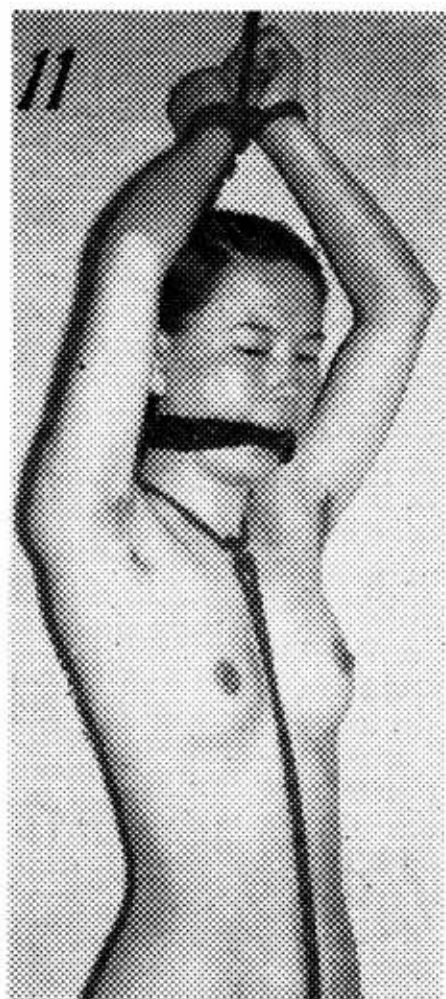


ち構えている——のだから、手を開いているのは不自然だと思う。ぼくは写真をとる時、いつも手を握りしめるように、那津子に注文をつけておくのである。

そのまま那津子のからだを押し倒して、床にころがされた姿態に、頭のほうから、足のほうからと様々な角度からストロボの閃光を浴びせかける。(写真10)

夢中になって写真をとっていると、時のたつのを、いつか忘れてしまう。ふと気がつくと、もう大分夜もふけたようだし、フィルム枚数も残り少なくなってきていた。

最後のシーケンスは両手吊りだ。那津子のからだから、いったん縄をすっかり解き放し、猿轡もはずしてやる。あらためて両手を前に揃えさせて手首を縛り、その縄を、壁額の留金を利用してもらって引絞ると、那津



子は両手を高々と、吊り上げられてそこに立つ。

ついで別の縄を二つ折りにして首にかけ、それをそのまま下に引きおろす。

黒い縄が胸の谷間を走り降り、小さく凹んだ臍の上を通り、股間をくぐって背後にまわる。そして上へ、まっすぐのぼって首縄に連結すると、那津子のからだは文字通り縦に縛られてしまう。

那津子の唾をたっぷり吸いこんで濡れに濡れたハンカチを口にぎゅうぎゅう押しこみ、その上を余った縄でグルグルと巻く。(あとで写真を見ると、この猿轡は縄の本数が多すぎて却って迫力にかけたようだ。こんなふうには四回も巻かず、精々二た巻で止めたほうがよかったと思う)

みじめに両手を吊られ、からだを縦ひとすじに縛り上げられて、そこに立つ那津子の哀れな姿態を、真正面から、斜めから、そしてクローズアップと、残ったフィルムをフルに使うべく、ストロボの閃光が、あわただしく明滅する。(写真11)

ぼくらの、三度目の撮影行

は、こうして終わった。

そのあと、ぼくらを待っていたのは、疲労と陶酔が、快く入り混じった、長い果てしない冬の夜であった……。

○

ところで、黒い縄と白い縄と、いったい、どちらが、いいだろうか。

できあがった写真を、以前の白い縄の写真とくらべてみて、じつはぼく自身、いまだに結論が出せないでいる。むしろ、どっちが決定的に、いいと言い切れないのが真実ではなからうか。

黒い縄、白い縄。あれは、あれ。これはまた、これ。

今回のルポの冒頭に白秋の歌を引用させてもらったついでに、しめくりにもまた、ぼくの愛唱する歌のひとつを披露させてもらおうなら——

とりどりに 美しければ

捨てがたし

春のおんなよ

秋の女よ

(吉井 勇)

——(完)——



## 懸賞入選創作

輪

りんね

廻

黄

好

夫

△▽

歩くたびに、腹の中で水が音をたてた。

無理もない。昨日来、二升にもなろうとする水を飲み、自らの体内で、じっくり時間をかけて醸造してきたのだから。

かっきり五分毎におとずれる激しい尿意が安雄の顔を青ざめさせた。初めは錐で突いたような痛みが局部に集中し、やがて下腹全体に鈍い重みが、ある種の疼痛を伴って滲透してゆくのである。

堪えきれずに、その一雫がブリーフを濡らした。あまりの苦痛に、立ち止まらねばならないほどであった。

「俊子も今ごろ苦しんでいることだろう。なにしろ五日間も排便させてないのだから」顔を真青にさせて堪えているであろう俊子の姿を想像すると、その分だけ自分の苦しみが和らいでいくような気がした。

山手の閑静な住宅街に着いたのは、夜も十時をまわっていた。仕事の手につかず、課長



伊達 忍・画

に白い目を向けられたことも、いらいらしながら残業の二時間を過ごしたことも、これから始まる俊子との素晴らしい共同作業を思えば嘘のように心が晴れてゆくのであった。

マンションの五階の部屋に、俊子は住んでいた。インターホンを押す手が微かに震えた。

俊子の声が聞こえるまでの僅か数秒を、彼は数分にも数時間にも感じた。

「どなた？」

「おれだよ。開けてくれ」



寝<sup>やす</sup>んでいたのであろう、薄いネグリジェをまとった俊子の顔はさすがに青く、生気が無いようである。

二人のプレイのために改造した広いトイレには、すでに主を待ちわびるかのように、煌々と照明が輝いていた。

「もうだめよ。早くして。漏れちゃいそうなのよ。ねえ、お願い！」

「バタバタするなよ。慌てる乞食はもらいが少ないって言うぜ。これでも大急ぎでやって来たんだ。一服、吸わせてくれよ」

彼がタバコを吸っている間にも、俊子は眉間に皺をよせ、身をくねらせる。

用意してきた、もう一升の利尿剤を、安雄は更に飲みほした。体内水分の激増のために胸がムカムカした。

「さあ始めるか！」

はやる心を抑えるかのように、ゆっくりと俊子のネグリジェを剥ぎ取った。ブラジャーもパンティも……。

ドアに鍵をかけ、トイレ以外の全ての灯りを消し、彼は衣服を脱ぎすてた。

一糸もまとわぬ俊子を抱きあげると、トイレに運び込み、内側からドアをロックした。防音装置が働いて、どんな物音も外部に漏れ

ないはずであった。

俊子を仰臥させると、ぷっくりとふくらんだ便秘腹が切なげであった。彼女の両足を持ちあげて体を二つ折りにする。開き気味になった両膝を、顔の所で折りたたみ、彼女に脛を抱かせた。

この一瞬々々を待ちわびていたのだ。

彼の膝は、ガクガク震えた。それは無謀な量の利尿剤に助長された、前代未聞の激しい尿意が迫りつつあるためでもあった。

彼の目の前で、丸くなって強い照明を浴び羞恥のポーズを晒した女の姿に、彼の血は激しく波打ち出した。

彼は自分の状態を確認してから身構え、足を伸ばしたまま、彼女を抱き込むように両手を床についた。次にその両手で女の足首をガッチリと掴んだ。満身の力をこめて体を叩きつける。

丸く突き出していた女の双臀が、ぐっと苦痛を表現した。

待ちに待ったこの一瞬、堪えに堪えた三升の、丹念に醸造された熱い精妙な溶液が、凄まじい勢いで居所を変え始めた。

俊子の体は、ぶるぶる震え始めた。胸の双丘は、真赤に膨張して固くなり、子

供を産んだことのない薄桃色の乳首が、ポコンと飛出し、血の気のうせた額にべっとりと脂汗を浮かべ、ぎりぎり歯を喰いしばって俊子は堪えていた。

「あああ！だめよ！許して」

「我慢するんだ。もう少し」

「ああああ！」

めくれあがった女の唇は、この世のものとも思えぬほどの妖しい嬌声を掻き出した。

排尿によって、一旦は堪える苦痛から解放されたものの、安雄は直ちに、俊子の便意を阻止するための恐ろしいばかりの力に呻くことになった。

凄まじい争いにも似た数分間であった。

無意識に、握り潰さんばかりに俊子の円球を掴んでいた安雄の掌が、ガクリと力の衰えを感じとった。と、同時に彼もまた五体からすっと力が抜けるのを感じた。

俊子の敗北は、安雄の敗北であった。

安雄の踏んばっていた両足がガクリと折れ、よろめくように尻もちをついた。

「ああー！」

絶叫をあげて、丸くなっていた俊子の白い体が伸縮を始めると同時に、おびただしい量の汚物が飛沫をあげて飛び散り、それはビニ



ール張の床を一面に浸していった。

目くるめく数分間に疲れきった思いだが、よろよろしながら、それでも安雄は立ちあがり、壁にもたれて、ようやく体を支えた。

俊子は夢みるような表情で、横たわっていた。口から涎が一筋、糸を引いていた。

「俊子、俊子！」

ぼんやりと目を開いたけれど、視点の定まらない目であった。

安雄は再び尿意を感じた。俊子のだらしく伸びきっている体を目標にして彼は飛ばした。ブルツと身震いをひとつして、俊子は我にかえた。

ゆっくり身を起こすと俊子は安雄にむしゃぶりついていった。自分とともに汚れ、自らの体を汚して、このいいようのない二人だけの世界を創り出してくれた安雄の姿は、俊子にとってはまぎれもなく、きらきら光る天使であった。

## △二△

その日は、朝から頭痛が激しかった。

昨夜、湯上がりで独りプレイをした後、不覚にも裸で寝てしまったのだ。どうやら風邪

をひいたらしい。

電話で欠勤する理由を届けると、厚着をして、卯酒を飲んで、昼過ぎまで前後不覚の眠りにおちた。

久しぶりに浴びる真昼の太陽は、気持が良かった。これといったあてもなく、しかし、明確な潜在意識の作用によって、安雄の足は浅草を、めざしていた。

ウィーク・デーの昼下がりという事もあって映画街は閑散としていた。客引きの親爺の声がガランとした通りに虚ろに響いた。活動写真が渡来して以来、客引きは今も昔も枯れた口調で繰り返してきたのであろう。

ふと安雄は、明治の昔に生きているような錯覚に陥った。

画面は退屈であった。何の工夫もない、相かわらずの成人映画であった。

男は女のブラウスを脱がせ、ブラジャーをはずし、首筋から乳房へ、乳房から腋へと唇を寄せてゆく。スカートを剥ぎ、パンティに手をかける。カメラはそこで急に女の顔のクローズアップに切り換えられる。男はシャツを脱ぎズボンを脱ぐが、ブリーフを着けたま

まで女に覆いかぶさる。女の足指からふくらはぎへ、さらに太腿へと接吻を繰り返し、もつともらしい女の喘ぎと表情が挿入され、首を左右に動かし、何やら叫ぶ……。

延々と飽きもせず繰り返される田舎芝居に、白々しさを感じて、安雄は顔をそらせてオヤツと思った。気付かなかったのだが、安雄のすぐ近くに、若い女が坐っている。

最近では、この種の映画館にも若い女性の姿が目立つようになったが、それでもやはり相当、勇気の要ることだろう。

女はトイレに立つようである。安雄は少し間をおいて、彼女の後をつけた。

女は三つあるトイレの真中に入った。

カチリと、鍵をかける音がする。彼は、そおっと後のトイレに入った。

さいわいなことに、小さな穴がある。例によって例の如き、下手な絵が描いてあって、『入ってごらん』などと添え書きしてある。

女はハンドバッグの中からビニールの風呂敷を取り出した。中央にちょうど便器と同じ形の穴が切りとられてある。女は靴を脱いでビニールの上に立った。スカートをたくしあげ、パンティを脱いで仰臥し、両足を高く上



げて、それを壁に、もたれかからせた。声を防ぐためであろう、脱ぎ捨てたパンティを丸めて口に入れた。

ハンドバッグから三つのいちじく浣腸と、赤ゴム製らしい太く短い円筒型のものを取り出した。

慣れているらしい手付きで、三つのいちじく浣腸器は、たちまち、空になった。次に太い円筒で栓をした。女は一人で浣腸プレイを楽しんでいるのだ。

女の口から、くぐもった悲鳴が聞こえ始めた。眉間に深い縦の皺を刻み、女の手はゴム栓を必死に押えている。

三分、

四分、

五分。

「アウッ！」

押し潰したような悲鳴と共に、女はとび起きた。

ザーという激しい音がした。

安雄はブリーフを濡らした。

女は、ゆっくりと後始末にかかった。なにやら、つぶやいているが、はっきりとは聞きとれない。

「……どうして縛りばかり……エネマプレイ

を……くればいいのに……だれか……いなかかな」

女は、壁に書きなぐられた落書の上に、何か書き始めたようだが、意余って筆足らずというところであろうか、気に入らなかったと見えて、塗りつぶした様子だった。

ハンドバッグから幾枚かのフォトを取り出した。どうも浣腸プレイフォトらしい。写っている女が本人なのか他人なのかはよく判らないが、くいているように見つめながら、片手は尻を這い始めた。

コンコンとノックの音がした。

女はハッとしたように、写真をしまうと身繕いを直してノックを返した。

一番前のトイレがあいていたようである。

ボタンとドアの閉まる音を確認めて、女は細く戸をあけて外を窺っていたが、サッと飛び出した。

安雄の、背後から追う視線に気付かぬ様子で、女は大急ぎで映画館を出ていった。

もうかなり歩いた。錦糸町をすぎて、まだ女は歩き続けている。

「ひょっとすると、何処かへ出かけるのかもしれない。だとすると、この追跡は失敗に終

わるのだが、困ったぞ」

安雄の顔に困惑の表情が浮かび、舌打ちをした。

商店街がきれて、閑静な住宅街に出た。とあるマンションへ女は入って五階の部屋に消えた。

安雄は、とぶように下宿へもどった。

俊子。それがあの女の名前であった。安雄と同じ苗字にも、何か因縁みたいなものを彼は感じた。

品よく整った横顔は、良家のお嬢さんという感じだが、どこか崩れた感じもする。水商売の女かな、学生かな。……だが学生にしては、マンシヨンの独り住まいは似つかわしくない。

あれこれ想像をめぐらしながら安雄は、長年の願望が充たされそうな期待で、子供のように、はしゃいでいた。

拝啓。突然お手紙をさしあげます、ご無礼をお許し下さい。

私は、当年とって三十二才になる会社員ですが口外を憚る羞かしい趣味を持っております。エネマプレイ。私はエネマプレイ以外では心の満足を得ることが出来ないのです。



これまで数年間、一人でエネマプレイに、いそしんでまいりましたが、どうもマンネリに陥りがちで、かといって趣味を同じくする人も、おいそれとは見つかりませず、悶々の毎日を送っております。

ふとしたことから、あなた様のことを知りました。どうかエネマ・メイトになっていただけませんか。あなた様と二人でエネマ・プレイを楽しみたいのです。秘密は守ります。あなた様がお望みでしたら、どんなことでも致します。新しい境地を、あなた様のお力で開きたいのです。

一生一代の決心でこの手紙を書いております。是非ともお返事をいただけますように。

吉報をお待ち申しております。 草々

最初の一週間を心おどらせて彼は待った。そして、次の一週間を、いらいらしながら待った。だが、返事はこなかった。いいかげん諦めかけた、一カ月ほどもたつてから、俊子からの手紙が届いた。

拝復。お返事が遅れまして申し訳ございません。見も知らぬ方から見当違いのお手紙をいただき狼狽してしまいました。エネマって

何のことでございましょうか。どうやら、お人違いをなさっていらっしゃるようですね。私には、そのような趣味はございません。

今後、このようなおまちがいをなさいますように。しつこくお出しになるようですと警察の力を借りることになりますので、念のため。

かしこ

「あそこが、あの女の家ではなかったというのか。そんな筈はない。この目で確かめたのだから。ちくしょうめ」

彼は、今まさに掴みかけた宝の山が、ガラガラと音をたてて、崩れてゆくような気が持がした。

今日も又、残業に疲れて安雄は下宿へ辿り着いた。

ここ三カ月ほど、大きなプロジェクトの推進責任者として、独りプレイも出来ないほどの重労働を課せられていたのであった。このプロジェクトが完了すれば、課長の座が約束されていたのだ。彼は、全てを忘れて、一心不乱に仕事と、とりくんできた。競争各社との神経戦に、彼の体も心もまいっていた。刺激が必要であった。

部屋のドアをあけると、ドアの隙間から何かが落ちた。電気をつけた。手紙だ！ 差出人は俊子！ 封を切る手ももどかしかった。

拝啓。先日は失礼致しました。恐かったのです。見も知らぬ方からエネマ・メイトの申し込みを受け、気が動転してしまいました。随分迷いました。だって私が捜し求めていた人が現われたのですから。でも、いざそういう人が現われてみると、相手がどこの馬の骨

(ごめんなさい) か判らないだけに不安が先にたってあんなお返事をしてしまいました。

失礼とは存じましたが、あなたのことを、調べさせていただきしました。ある有名会社の技術者でいらっしゃることも、真面目な人柄でいらっしゃることも知りました。

私は、二十才になる女ですが、目下、父母の元を離れて服飾デザイナーをしています。御存知のように私にはエネマによる自瀆という辱かしい趣味がございます。なにぶんにも安マンションのかなしさで隣家へ物音が聞こえるのを恐れ、もっぱら、公衆便所か映画館のトイレでこっそりプレイを楽しんでまいりましたが、心おきなくプレイを楽しみたいというのが、長年の願望でございました。さま



さまの浣腸器なども雑誌でみますが、女一人  
どうにも羞かしくて、買いにゆくこともでき  
ませず、くやしい思いをしております。

こんな私でよろしければ、どうかメイトに  
して下さいませ。おわび旁、よろしく御指導  
のほどお願い申しあげます。なお仕事の都合  
上、月曜日なら一日中、家におりますのでそ  
の節は、お電話下さいませ。

くりかえし、おわび旁、御返事申し上げま  
す。かしこ

彼が俊子を訪問したのは、それから三日後  
の、プロジェクト完了祝いの日であった。

### △三△

俊子を知って、三カ月が過ぎた。今までは  
長年の欲望に任せて集めたフォトや各種の浣  
腸器を見せてやったり、その使用法を説明し  
たりで、なかなか安雄の思うようには進展し  
なかった。

現代っ子らしく脱ぎっぷりはよかったが、  
パンティだけは、どうしても、はずさなかつ  
た。安雄を完全に信用するまでに至っていな  
いのだろう。気長に待とうと彼は思った。

二人のプレイのために、トイレをすっかり

改造した。押入れを取り壊して三畳敷とし、  
全面に部厚い吸音板を使い、その上に、ポリ  
ウレタンを敷きつめ、更にその上に硬質ビニ  
ールを内装するという念の入れ方であった。  
ガス湯沸器を取りつけ、いつでも熱湯を利用  
できるようにしたし、二千CCのイルリガー  
トルもセットした。あとは、プレイあるのみ  
であった。

百CCのガラス製シリンダは、生き物のよ  
うに、甘い透明なグリセリンを吸いあげてゆ  
く。浣腸ポーズをとって待ちわびる俊子の顔  
の上に、安雄は尻をおろした。安雄の両足は  
顔の両側でおりたたまれた俊子の両足を、更  
に上から抑さえつける格好になった。安雄は  
屹立した俊子の双臀と向かいあった。

今日も俊子はエネマ用の生ゴム製パンティ  
を着けていた。興奮めな気分がしたが、気を  
とり直して、浣腸用にあけられた生ゴムパン  
ティの穴を捜した。

「いいかい。いくよ」

「いいわ」

嘴管を走り抜けた溶液が、すっかり注入さ  
れると、かなり太めのゴム栓を施し、上から  
梱包用のガムテープをはりつけた。

安雄は立ちあがると俊子の両足首を掴んで  
高くもちあげ二、三度、上下させた。これで  
グリセリンは、腸内深く落下する筈である。

「ああ！ もう」

「まだ二分だよ。我慢するんだ」

俊子の反応は、しだいに激しさを増し始め  
た。柔らかかった胸の双丘はピンと突き出し  
腰をふり出した。

「よしよし、いい子だ。もう少し我慢するん  
だよ」

安雄の掌は、激しい蠕動を止めない俊子の  
腹を、ある時は強く、ある時は弱く、まるで  
蠕動を助長するかのように、押した。

「ああ！ やめて！ 許して」

狂気のように頭を振り、転々と俊子はころ  
げまわった。

「ねえ、もうだめ！ ああ」

自分でテープを剥がしにかかろうとする俊  
子の両手首を、ロープで縛りつけた。

涎をたらし、髪の毛をふり乱して、芋虫の  
ように床をころげまわる俊子を、安雄は冷や  
かに見下ろした。

「パンティを脱ぐか！」

「いやよ。それだけはいや！」

「それじゃ、いつまでもそうしていな」



「ああ！ やめて！ お願い、やめて！」

「パンティを脱ぐか！」

「脱ぐわ。脱ぐから……。あああ！」

俊子のパンティに手をかけると一気にひき下ろした。一瞬、かばうように膝を折りまげたが、その姿勢は却って腹を圧迫する結果になった。慌てて、また両足を伸ばす。

「ようし、許してやろう」

ガムテープを剥がすと同時に、凄まじい勢いで俊子は破裂した。

今日は、どんな方法でゆこうか。

グリセリン浣腸も飽きたし、二千CCの石鹼浣腸もやってみた。より強い刺激を生むためには、とっておきのあれしかないだろう。

プレイの効果を想像すると自然に顔が綻<sup>はころ</sup>んだ。途中の食料品店で一キロ五十円也の食塩を買い求めると、安雄は俊子のマンションへ急いだ。

「今日は、うんと楽しませてあげるよ」

「何なの？ もっと強い浣腸液でも見つかったの」

「まあ、楽しみに待ってなよ」

安雄は二百グラムの食塩を、千CCの熱湯に溶かした。

火傷をしない程度に冷めるのを待つ間、彼は

イルリガートルを準備し、白濁の食塩水を

イルリガートルに移した。まだ相当に熱い。

浣腸ポーズをとった全裸の俊子。

イルリガートルのコックを開けた。

「うっ！」

俊子は悲鳴をあげた。かなり熱い千CCの

食塩水が、俊子の腸内に奔流していった。

二十パーセントの食塩水を堪えられる筈がない。たちまち悲鳴が挙った。

だが、そこが安雄のとおきだった所以<sup>ゆえん</sup>である。アヌスは熱さに敏感である。けれど

腸には温度を感じる神経はない。熱湯に驚いた括約筋は阻止活動を始める。

襲いくる激しい便意。排泄しようとする意識と本能的に閉じようとする作用。

その作用を停止させるには腸内で食塩水の冷めるのを待つ他はない。だが二十パーセントの食塩水によって引き起こされた便意は、

一秒たりとも堪えられるものではない。自律神経と反射神経の壮烈な戦いである。

俊子は、まんまと安雄の計略に引っ掛かったのである。

排便の許可願いは、安雄ではなく、俊子自身に発せられたのである。

激しい便意に屈服しようとなると、アヌスが悲鳴をあげた。

「熱っ！ 熱っ！」

液が迸る度に激痛が襲い、それを柔らげようとすると、怒濤のような便意が迫った。

激しい便意と、激痛の板挟みが、繰り返され、俊子の、たおやかな肉体は、うねりにうねった。

ねった。

一時間ほどもかけて、やっとのことで排泄

を終わると俊子は、ぐったりとなった。

この一時間は、俊子の汗と脂と理性とを、根こそぎ奪いさったのである。

喉がカラカラであった。無性に水が、ほしいかった。ただ微動だに出来ないほどに、疲れ

きっていた。

「お水を、お水を下さい！」

「待ってな、すぐやるよ」

安雄はコップに放尿した。異臭に顔を顰<sup>しか</sup>めながら俊子はコップを空にした。

「おいしい。もっと、もっと下さい」

もっと強い刺激を、より大きな快楽をと、

求めつづける二人のゆきつく先は、互いの体を浣腸器とし互いの体液を浣腸液とするエネ



マプレイであった。人間浣腸器・ネクタール浣腸の構想は、このようにして生まれたのであった。

俊子と安雄のプレイが頻繁になるにつれて安雄がマンションに泊ることも多くなった。

マンションの住人たちはともかく、クリーニング屋の小僧が疑わしげな目を向け始めたのである。この小僧は、俊子とは同郷の幼なじみだそうで、ある日、俊子のいない朝に安雄が応待に出た事から話は大きくなった。てっきり俊子に男が出来たと思い込んだその小僧が、郷里の俊子の両親に密告したから、たまらない。俊子は一週間もたたないうちに連れもどされ、二人のプレイは、いとも簡単に終わりをつげたのであった。

プレイ・メイトになるにあたって、二人はお互いの過去を探らないことを条件にしていたので、俊子の郷里が何処なのか、両親が、だれであるのかさえ、安雄は知らなかった。手紙を交わすことすら不可能であった。

安雄の、独りで浣腸プレイに耽らざるをえない状態が再び戻った。理想のメイト、俊子との楽しかった日々を思いうかべながら。

#### 〈四〉

「ただいま。母さん、ただいま」

だが、いつものように優しい母は出迎えてはくれなかった。クラブ活動がとりやめになったことを母は知らないのだろうか。

いくぶん腹立たしいような、それでいて悲しい様なそんな気分では彼は二階へ上がった。ランドセルを放り出すと畳の上に寝転がった。隣の部屋で物音がする。

「なんだ、母さん、いるんじゃないか」

ほっとして彼は部屋を出た。

暗い廊下に、母の部屋から明りが洩れている。

「外は、こんなに良いお天気なのに」子供心にも、昼間の電灯の明りを、いぶかしく思った。

「母さん」

小さな声で呼んでみたが返事がない。

ドアには鍵がかかっていなかった。彼は、そおっとドアを細目にあけた。

彼は、息をのんだ！

いつも見る、暖かそうで大きくて、それでいて妙にとり澄ました装いの母の部屋は、様相を一変していた。

外は明るいのにも雨戸が閉められ、家具は片隅に押しやられていた。畳の上には、広いビニールの風呂敷が敷かれ、荷造り用の太い縄や、長いゴム管が乱雑に散らばっていて、天井の太い梁には滑車を取りつけられ、鉄の鎖が垂れていた。

薬局で見ると、赤いラベルを貼りつけた薬瓶や、奇怪な形のガラス器具の乱立する中に、母はいた。両足首を鎖につながれ、滑車で高く引きあげられていた。両手は、大きく左右に広げられ、各々ベッドの脚に縛りつけられて、ちょうど肩で逆立ちをしているような無惨な姿であった。しかも全裸だ！

驚いたことに、こんな時間に父がいた。いつも「へそを出していると雷様にとられてしまうぞ」なんて言いながら、彼も又、素裸であった。

見てはならないものを見てしまったように思っ、彼は急いで子供部屋にもどった。胸が激しく動悸を打っていた。顔は真赤に火照っていた。じっとしてはいられなかった。何かに憑かれたように、彼の足は再び母の部屋へ向かった。

父は太い長い注射器のようなものを取りあげ、薬瓶の中にその先を入れた。透明な液が



ガラスの中を上がってゆくのが見える。

父は、その注射器を持って、逆さに立った母の背後にまわった。張り伸ばされている母の体がビクンと小さく動いた。母の顔は鬼のように真赤であった。ぎりぎり歯をくいしばり、そう、まさしくそれは鬼の形相であった。

「ウウウ！ アアア！」

母の口から、聞いたこともない恐ろしい悲鳴があがった。

「辛抱するんだぞ！」

父は空になった注射器を置くと、そう言いながら鎖をおろした。

顔を左右に激しく振り、バタバタと足をならし母は苦しんでいた。

一体、母がどんな悪いことをしたというのだろうか。なぜこんなお仕置を受けなければならないのだろう。優しい母の苦悶の姿に涙がポロポロ流れた。めっちゃめっちゃに父が憎かった。出来ることなら擲りつけてやりたかった。

突然、仰臥した母の腹を、父は踏みつけはじめたのだ。

「止めて！ 止めてよ！」

泣きながら彼は、父に武者振りついてい

た。子供心にも、その行為の意味するところは、臍ろに判ったのだ。

それから数回、母の部屋からあの恐ろしい悲鳴を聞いた。ある時は、見知らぬ若い男たちが数人がかりで母をいじめた。

近所の人々の噂も耳に入った。だが何よりも辛かったのは、同じ年代の子供たちの、呵責のない罵りであった。

子供というものは、人の心を推量できる程には人生経験を積んでいない。さして意味のない揶揄のつもりであるだけに、その罵りは容赦がなかった。

「やあい、やあい。変態の子、やあい」

「おまえの母さん、変態だろう」

「おまえの父さん、変態だろう」

「やあい、やあい。変態の子、やあい」

彼が家を出したのは、まだ小学生の頃であった。その足どりは、警察にすら掴めなかった。

久し振りの休日安雄は過ごしていた。パレストーリーナを聞いて、ワインをなめて。暖かい日であった。

あれから二十年、新聞配達もやった。子守りもやった。よくまあ生きてこれたものだと思う。周囲の目を逃れるようにして郷里を飛び出した彼は、ドン底の生活を味わってきた。生きるためには、どんなことでもした。学問だけが彼の心を支えた。夜も眠らずに、働きながら彼は大学を出た。

あれほど忌み嫌っていたことなのに、だが間違いなく彼の体にも、父と母のドス黒い血が流れていたのだった。

受験勉強と過酷な労働とは、某有名大学へ入学した時に終わりをつけた。ふっと覗いた心の隙間に、まるで吸気紙に吸いとられる水のように黒い欲望が侵入していった。

憑かれたように成人映画を求め、エロ本を漁った。SM、とりわけエネマプレイには、体がゾクゾクするほどの興奮をおぼえた。

幼い頃に垣間見た父と母とのプレイを、その一挙手一投足をも再現しようとするかのよう、その種の雑誌を探してきては読み耽りフォトを集めた。彼は若くして、一端のエネマ・マニヤに成長していたのである。

横浜の黄金町に彼は、いた。そろそろ街娼の立つ時間である。なけなしの一万円を懐中



に今夜こそ童貞を捨てようと思っていた。

もう何回、こうやって来たことだろう。その度に罪悪感が先にたって、逃げるように下宿へ帰っていったのだ。女に声でもかけられようものなら、もう無我夢中で走り去ったものだ。だが今夜こそ……。

暗い街灯の下や、建物の陰に、ほの白い女の顔が、うかんでいる。

「泊りで、いくら」

「一万円」

「僕、学生なんだ。まけといてよ」

「じゃ、九千円」

「初めてなんだ。教えてくれる？」

「童貞かい。うれしいね」

女は、彼の手をとって、薄汚い連れ込み宿へ連れてゆく。

「先に泊り賃だけ払ってよ。八百円さ。」

まあ、いいや。あたしが出しとくよ」

三十ワットの電灯の下で、女は手早く衣服を脱いだ。商売がら、ブラジャーもパンティも着けてはいない。

「さあ、脱ぐんだよ。おや震えているじゃないか。優しくしてあげるよ。さあ、おいで」

女は、彼のズボンを脱がせ、ブリーフを剥ぎとると、しみだらけの煎餅蒲団へ引きずり

込むようにした。

彼は、初めての女の肌に翻弄された。

何回目かの交渉が終わった時に、彼は大胆になつていた。

この女なら、彼の希望も満たしてくれそうに思えたのであった。一度、女の小水を飲んでみたいと思つていたのである。

下宿で、はじめて自分のを飲んだ時は、その独特の臭気と味に、胸がムカムカしたが、何度か繰りかえすうちに馴れてしまった。

おそろおそろ、彼はいった。

「喉が乾いちゃったよ」

「水道なら廊下のつきあたりよ」

「ううん。おばさんに飲ませてほしいんだ」

「疲れちゃったわ。自分で、行きなさいよ。」

ね、いい子だから」

「おばさんは動かなくてもいいんだ」

「じゃ、どうしろというのよ」

「僕がこうするから。ね、お願い」

彼は、女の太腿を抱えるようにして口を寄せた。女は驚いたように起き上がったが、まじまじと彼を見つめて言った。

「なかなか、やるわね。でも、いいわ。童貞をもらったんだから。零さないでね」

温い奔流が、彼の宿願を果たしてくれた。

東の空が白んでいた。

彼は始めて大学をサボった。

## △五△

単調な毎日であった。

課長という職務も大したものじゃないな、と彼は思った。思いつき暴れてやろうと思つていたのに、肝心の仕事は部長に取られてしまふし、かといって第一線に出てゆける筈もない、中途半端なポストであった。チーフとして若い連中を引張つていた頃の方が、ずっと生きがいがあった。まるで雑用係さながらの仕事に安雄は、うんざりし始めていた。

「お客様ですよ」

下宿へ帰りつくと、小母さんが告げた。

「お客さん？ 僕に？」

「女の方ですよ、若い綺麗な。……隅におけませんね。ホホホ」

下卑た笑いを聞きながら安雄は首を傾げ、二階へ急いだ。

「俊子！ 俊子じゃないか！」

「お待ちしておりました」

唇をキッとひきしめ、いくぶん青ざめた顔色の俊子が坐っていた。



「どうしたの。帰ってきたのかい」

あまりの驚きと嬉しさに抱きつきたくなるのを抑えるために、安雄はいそいそと茶を沸かした。

俊子は、いぜんとして唇を結んだまま、下をむいている。何だかべそをかいているような顔つきであったが、何か決意したように畳をいじる手を止めて、彼女はキッと顔をあげた。

「兄さん！」

意外な言葉を吐いて、俊子は絶句した。頬を涙が、つたっている。

「なんだって？」

安雄は思わずコップをおとした。

ガチャンと音がしてガラスが砕けた。

「兄さん！ あなたは私の、私のほんとうの兄さんのよ。母からは、小さい時に死んでしまったって言われてきた兄さんのよ！」  
安雄にすがりついて、俊子は泣きじゃくった。

俊子の話を要約すると次のようになる。

両親に引取られて田舎へ帰った俊子は、相手の男はだれかと強く迫られた。そんな仲じゃないと、いくら言い張っても聞き入れてはもらえなかった。遂に俊子は安雄の名前と、

その容貌、それに聞き齧った安雄の過去を話した。両親の顔色はサッと変わった。その夜俊子は両親の話を盗み聞いた。小さいころに死んだと聞かされてきた兄が、実は行方不明だった事、その名前が安雄であった事を俊子は知った。安雄からポツリポツリと聞き出した彼の過去と、それは見事に一致した。

彼が家出をした時、両親は狂ったように、捜し歩いた。新聞広告も出してみた。しかし安雄のゆくえは判らなかった。その時すでに身籠っていた母は、失意の中で俊子を生んだということである。

泣き疲れて眠り込んだ俊子の寝顔を見つめながら、安雄は深い感慨に浸っていた。

なんとということだ。父と母とのあの忌わしい交渉に、矢も楯もたまらなくなつて郷里を捨てたおれが、実の妹とその忌わしい関係に陥ったなんて。

彼は自らの業の深さに恐れおののいた。

輪廻の不思議さが、心の奥深く滲透していった。無性に寂しかった。泣きたかった。俺の人生もこれで終わるのだなと、本能的に彼は知った。

瀬戸内海の夕焼けは美しかった。

きらきらと波間に砕ける太陽は、まるで金の鱗をした魚の大群が、天と海との境目へ、やがて果てしない大空へと舞い上がってゆくような、童話の世界を彷彿させた。

この海には、いまなお旧日本海軍の爪痕を体一杯にせおった無数の小島があるという。その中で作戦会議が開かれたのであろう。広い地下壕の入り口には、多くの戦死者の霊を慰めようとするかのように、真赤な彼岸花が咲くそうである。

この一週間。二人は、最後のプレイのために、そして、永遠の眠りにつく日のために、よく食べ、よく飲んだ。そしてそれらは、決して排泄されることはなかったのである。

会社へは、船中から辞表を郵送した。二人の永遠のベッドも見つけておいた。もうだれも邪魔者は、いないのである。

夜陰に乗じて安雄は小舟を漕ぎ出した。小豆島から約二キロ、名もない島であった。うつそうと茂る灌木を抜けると岩山に出た。岩を下ると、草木に隠れて見えないが地下壕への入り口がある。例によって彼岸花が咲いていた。俊子の手をしっかりと握ると、懐中電灯



を頼りに石の階段をおりてゆく。

「きゃっ！」と叫んで俊子がしがみついた。蝙蝠が耳をかすめたのである。

数十段もの石段をおりきると奥につながる狭い通路がある。奥へゆくほど通路は、せばまって、ようやく大人が通れる程度である。昔の人は、軍人といえども現代の人間ほどには体格がよくなかったものと思われる。

十数メートルもの長い通路を抜けると、広々とした岩室に出た。おそらく、ここが將軍達の仕事場となつたのであろう。

部屋の隅には、すすけた古いランプが下がっていた。ライターで火をつけると結構、明るく使えるようである。

安雄は、持ってきたイルリガートルに二千CCのグリセリンを満たすと、天井から吊り下げた。太いゴム管の始動弁に嘴管をセットした。これで始動弁を開けば、ゴム管を通して液が流出する筈であつた。

「死ぬんだね」

「兄さんにあげた体だもの。兄さんに抱かれて死ぬるのなら本望よ」

俊子は衣服を脱いだ。ワンピースを、ブラジャーをパンティを取り去った。ガスと大量

のネクターと糞便とで、二人の腹は異様なまでに膨張していた。安雄が裸になるのを手伝った。

俊子を優しく仰臥させると、安雄はシャボンを用意し、剃刀を取り出した。

ゆっくりゆっくりと若草は刈りとられていった。そして、次に安雄が仰臥した。俊子の剃刀を運ぶ手つきは真剣であつた。

用意は終わった。二人は長く太いゴム管をお互いのアヌスに、固定具でガッチリと固定した。

安雄は、苦しげに仰臥した。俊子は頭と足を逆にして並び、打ち合わせ通りの準備をした。

「いくよ」

安雄は囁いた。

俊子は肯いた。

安雄の手が始動弁へ走った。あつと思うまでもなく、二千CCのグリセリンが奔流となつて安雄の腸内に流れこんでいった。

「あッ、ああ！」

安雄は呻いた。極度の緊張感が押し出すように、溜めに溜めたネクターが、水勢激しく俊子を襲った。俊子は予定通りにノドを鳴らせた。

安雄の忍耐には、やがて限度がきた。

二千CCのグリセリンに溶解された噴射物は、ゴム管を通して俊子の腸内に移動する。

「あッ！」

俊子は呻いた。

極度の緊張感がまき起こす現象が、俊子と安雄の立場を逆にして起こった。安雄もまた予想通りの奔流にノドを鳴らせた。

俊子の忍耐には、やがて限度がきた。

ゴム管を通して俊子に送りこんだものが、更に大量となって送り返されてきて、安雄は呻いた。先程と同じ現象が起こった。

俊子が呻いた。そしてまた、安雄が、呻いた。

二人の腸内を交互に責めつける溶液は、少しの減量もないのである。

もう何日たったのだろうか。いや、何カ月たったのだろうか。

二人の意志に関係なく、怒濤のような溶液の群れは、安雄から俊子へ、俊子から安雄へと、流れ続けていたのである。

朦朧としてゆく意識の中で、二人は紛れもなく神をみた。

ああ！ 永久浣腸！

——(完)——





## 告白——奴隷の法悦

## 御神水拝受

中田裕史

~~~~ カット・春川ナミオ ~~~~

マゾヒストの私としては、何が光栄かといってお仕えする女王様の足下に跪き、その聖なる御神水を戴くときほど、光栄におののき夢心地に浸れる瞬間はございません。

もっとも、御神水というものは、私をして酔わしめてくれる甘露な魅力を持っではいるのですが、しかしながら、そのもの自体は、ただならぬ味わいのものであり、しかも少なからぬ分量を頂戴させられる関係上、何回、繰り返しても、私は『慣れる』ということが出来ません。

しかし、それであればこそ、その都度、いかにいわれぬ被虐のよろこびが、奴隷としての私の心をしめつけてくれるのであろうと思っていますと、ノドを灼くようなあの塩辛さや、激しく鼻を衝くあの刺激臭も、神が、わざわざ私の為に用意して下さった特別の恩寵でも

あるかのように感じられ、つくづく有難く思う次第です。

私は、その恩寵に浸るとき、折角の神のおぼしめしを無にすることなく、常に「直接拝受」を心掛けております。尤も、最初の頃には、女王様に対する気兼ねからお願いを口に出し得ず、間接的な方法で頂戴してみたのですが、一旦玉体を離れたものは、御神水に違いはなくとも何か貴さが感じられず、そのせいか、やたらと戴き難く、無理して拝飲したあとの胃具合は極めて変調をきたしたものでありました。

「直接拝受」を心掛けるようになったのも、そうした私自身の経験が大きく作用していることは事実であります。女王様としても御不満の御様子であることが、より大きな理由でありました。それはそうでしょう。一旦容

器に移すということは、例え、それを私の手でやらせるとしても、女王様としてはムードが損われ、有難さに緊張する手の慄えに依って、捧げ持つ容器から御神水を洩らすことしばしばとなれば、女王様が要らざる羞恥感をお抱きになるのも御無理のないことです。同じ洩れ落ちるにしても、奴隷の口からと容器からとでは雲泥の差と申せましょう。

かくて、私の勇を鼓しての「直接拝受」の懇願は、思いのほか容易にお聞き入れ下さる結果となったわけでありました。

さて、その最初の拝受となって迷ったのはどういう姿勢で戴くか、ということでした。基本的には、女王様のご意向のまま従うのが当然で、奴隷の方からあれこれ注文を出来る筋合いのものではありませんが、何分にも、私にはまだ、一滴残らず戴ききれるといふ自



信がありません。貴い御神水とはいえ、ベッドとか絨毯とかを濡らせば元の尿に還って、単なる汚れということになり、好ましいことではないのです。

そういうことを勘案した上で進言し、女王様のご理解を得て行なった拝受姿勢は、その昔、ローマの貴婦人達が奴隷に命じたという跪坐の姿勢でありました。そして、それが最適の姿勢であると確信出来、未だに引続いて行なっているのです。

私の想念では、御神水拝受はあくまで、それまでに課せられたさまざまな苦役の果ての褒美として頂戴出来るものなのであります。従って拝受の前には必ずプレイがあり、女王様の玉肌も汗ばまれるのが常で、いつもバスルームへ立たれますので、その機会に拝受するわけであります。

女王様の「バス」と仰せられるお声と同時に、私はバスルームへ、すつとび、間合いを目測しタイルに跪坐して、女王様のお越しをお待ちするのです。やがておいでになった女王様は、入口に立たれて、片方のおみあしを開いたままのドアのハンドルにおかけ下さいます。それで、跪坐した私が顔を仰向けると丁度、つり合いがとれることになるのです。私が、この拝受姿勢が最適だと確信出来たのは、背中を伸ばして戴ける関係上、相当な量でも、さして粗相なしに拝受出来るからであ

ります。バスルームをその場所としたのは、いわずとも、お分かり願えるでしょう。

さして粗相なしに……と書きましたが、もちろんそれは、戴き方に相当慣れた最近のこととして、最初からそうであったわけではありません。御神水の直接拝受というものが、その進り始めの意外な熱っぽさや予想外の塩辛さにたじろかされるものであるということは、体験者以外には分からないことだと思います。

御下賜の光栄に浴する身として、絶対に口を離すまいと決意していた私も、当初はよく戸惑ったり慌てたりして粗相してしまいました。何分にも、女王様の方は、奴隷がどんな状態にあるかなどお構い下さるわけはありませんから、いったん御下賜が始まると、その猛烈ともいふべき奔流は、とてもぐすぐすしていられるものではなく、よほどタイミングを合わせた嚙下作業をしなければ、たちまち口中に溢れきってしまうことを、いやというほど知らしめられたのであります。

窒息しそうになってむせかえり、灼けつくようなノドをゼイゼイいわせて、折角御下賜下さった女王様に不愉快な思いをおさせしてしまったことも一再ならずありました。

最近になってようやく、粗相によって女王様のお怒りを買うことは、めったになくなりました。しかし最初に書きましたように、そ

のものの自体の、ただならぬ味わいには、私は慣れることは出来ないで居るのです。にもかかわらず、尚、それを願うのは、お仕置であれ、ご褒美であれ、女王様の玉体にとりすがって戴ける御神水の尊さに歓喜出来るからであり、そのマゾヒストとしての恍惚感が乞わしめるのだらうと思っています。

事実私は、御神水によって一杯になった胃袋を感じるとき、心の底から奴隷になりきった悦びで、おののくほどの感激に浸りきることが出来、またそれが、何ものにも勝る好ましい状態なのであります。

女王様に、奴隷として使って頂き始めてから既に数年。その間に私の拝受した御神水の量は、どのくらいになったことでしょうか。今では私はもう、女王様専用の完全な便器になれたと確信出来ます。しかも女王様に対する恭順心は、日に月につのるばかりです。

医学的なことは分かりませんが、若く、しかも健康に成熟している女王様の御神水には沢山の女性ホルモンが含まれていることでしょうし、それが永年作用し続けて、奴隷たる私の体を、生理的にも女性化してしまったのかも知れませんが、ともかく、その云うに云われぬ魅力が、私をこの異常な世界から脱し得なくしていることだけは確かな事実です。そういう意味では、御神水もまた『魔の水』と云ってもいいのであります。



## ~~~~~ 女責め図絵の系譜 ~~~~~

# 坂田山心中事件

—— 隠 亡、橋 本 長 吉 の こ と ——

## ~~~~~ 南 彦 造 (カ ッ ト も) ~~~~~

昭和七年（一九三二年）と云えば例の五・一五事件で、犬養首相が暗殺され、中国大陆では上海事変が勃発し、ようやく国内が、暗い戦争の谷間に突入しようとしていた頃、私は小学校の二年生だった。住居は神奈川県の大磯だった。父は官吏だったので、東京から転任させられ、そのため私も転校せねばならなかったが、大磯町と云う処は、土地柄で、よそ者には大変、親切な地元民が多いので、私は助かった。陽気の寒い季節だけ都会からやって来る別荘の虚弱児童が、突然転入学して来たり、山手側や海岸寄りの住宅地区に、大邸宅を構える財閥の御曹子などは常時、在学していて、校内は、まさに玉石混淆と云うか、顔色の良い漁師の倅も居れば、女の子のような肌をした都会生まれの好男子も居た。そんな連中が、割に仲良く勉強している姿がこの町の小学校の特色であった。

こうした、静かな別荘地の町に、突如として奇怪な猟奇事件が起こり、眠ったように温和しかった人々の心を異様に揺り動かした。題して——「悲恋！ 天国に結ぶ恋」坂田山心中。

当時のラジオや新聞は、いち早く、この事件を取り上げ、全国的なセンセーションを、巻き起こした。男は——東京市芝区白金三光町52番地、調所定の長男で慶応大学経済学部3年生の調所五郎24才。女は、静岡県駿東郡富岡村御宿15番地の湯山昭作の長女で湯山八重子21才——であった。

二人は裕福な上流階級に育ち、クリスチャンだったから、日曜日ごとに、三光町の「教会」で会っている裡に親しくなり、愛し合うようになった。だが、五郎の父親はよいとして二人の仲を認めたが、八重子の家庭は、富士の裾野地方切つての素封家だったから、古い格式を誇り、現代の若者など想像もつかぬようなタブラが厳存し「恋愛結婚」など許される筈が無かった。二人は思い余った末——あの世で結ばれようと、死の道を選んだ——と云うのであった。

○

処が……である。情死後すぐに二人の身元が割れ、遺体の引取りも終われば——この心中事件も、ありきたりの一情死事件として、すぐに人々の記憶から忘れ去られて終まったであろうが、事件は誰もが夢想だにしなかった、変な方向へと進展したのだ。

二人の棺が、身元の分からぬ俚に、暫くの間、海辺近くの法善寺内——無縁墓地に埋葬





された。と……翌朝、無惨にも掘り返されていた。発見者は、同寺の墓守りで平野サヨと云う四十四才の女性だが、彼女は昨夕、埋葬された二ツの新しい土饅頭に、お線香を捧げようと近づいて驚いた。そこが、無惨にも暴かれ、僅かに女体の着ていた錦紗の長襦袢とか、帯、上品なフェルトの草履などが散乱して居るだけ。掘り返されたのは、女の方の土饅頭だ——と云うことは一目瞭然であった。

急報で、警察署員が駆けつけ、隠亡が棺の蓋を開くと、案の定、女体だけが、跡形もなく、消えていた。

「死体の搜索」が始まりその夜遅く——女体は、法善寺から百メートルほど離れた相模漁業会社の船小屋の砂の中から発見されたのだ。しかも一糸纏わぬ姿で、漁船と生けす簗との間の、狭い砂地に仰臥の姿勢で埋められていたのだった。

物盗りの犯行ではない——第三者の、女恋しさの、死体盗みか？ はたまた変態性慾者の仕業か？ 邪宗迷信による死体損壊か？ とにかく、女体だけを掘り出し、秘密の場所に隠匿？ した——と云う痕跡があった。

捜査陣は色めきたちあらゆる角度から推理した結果——無縁墓地に忍び込み、女体を掘り出し、しかも担いで船小屋まで運んで行くとなると、普通人の心理では、到底、不可能と断定。犯人は、おそらく『人間の屍体を平然と扱い得る職業人』と云う結論に達し、火葬人夫二名を有力な容疑者として残した。

その二名は共に、地元の隠亡で、古参頭の

橋本長吉老人の手下の者たちであった。ところが——犯人として逮捕された——のは、長吉老人だったのだ。

この長吉老人は隠亡仲間の長老とでも云うべき存在で、何しろ、これまでに、どれくらいの死体を処理して来たか分からないほど、仏様の扱いも堂に入ったものだった。

○  
ちょうどその年の一月に、私の生まれたばかりの妹が急性肺炎で僅か七十日間の短い生涯を終えたのだが、その時、偶然にも、妹は棺に納められ、国鉄線を距てた裏山の火葬場で荼毘に附された。

私は、当日、家から火葬場までの野辺送りを長吉老人と行を共にした。その時の印象では、多少、鼻筋の曲った、あの種の職業特有のシヨボたれた顔と、線香の匂いの沁みついた爺さん、と云った記憶だけしか残っていないのだが、そう云えば、長吉老人には、何処となく変態魔じみた言動があった。

例えば、妹の体を始末するにしても、生後七十日間と云う嬰兒なのに△可哀想にのう、可哀想にのう。いま、ええべべ着せてやるけのう。可愛い子じゃ、可愛い子じゃ。年頃がきたら、さぞかし、別嬪さんになるじゃろう

にのう。ヒッヒッヒッ——Vと肌を愛撫し乍ら、棺の始末を続けた。その手馴れた指先の動きを、眺めていると、有難いと思うより、何となく不潔感が湧いた。

○

葬儀屋の仕事は、なくてはならない大切な職業だが、私の中学時代——同級生に、この屋の息子がいた。

彼はその頃、既に家業のアルバイトをして居り、校庭などで、その体験談を語った。好奇心の強い年頃だったし、隠亡の仕事は怪談めいて居り、気味の悪さが先にたったけれど反面、興味も湧いて、休憩の五分間を、なんと短く思ったことか。

彼は大学進学希望者だったので、商売の手伝いをする事で学費の積立をしていたそうだが、電話が掛かると、必要な消毒器具や薬品などを持って、親父と一緒に、死者の家を訪問し、処理に掛かるのだが、最初のうちはとても正視できなかったのが次第に馴れて、硬直した死体の関節など、平気でポキポキと折り曲げては、棺に納めることも出来たし、排泄物などの処理も手際よくできるようになっていた。

しかし、彼も思春期であった。老人や男の

死体に興味はないのだ。やはり若くて美しい人妻や、娘の処理を好んだようだ。男なら、誰しも美しい女体に、異常な関心を持つものだ。彼の場合だって、死者が処女であったり美しい女性の場合には、率先して始末に出掛けたようだった。

しかし、悲惨なのは「肺結核」による死者だそうで、そんな場合には、意識不明ともなれば、まだ脈のあるのに、口や鼻、それから秘部、肛穴に至る、人体の五臓六腑に通ずる道は、どんな部分にも棉をつめ、閉塞して終まうのだ？ そうだ。

と云うのは、死の直前に内臓から多量の結核菌が体外に逃げ出すから？ だそうで、彼は、そんな場合——しみじみ人生の悲哀を覚えた——そうだ。

彼は、肺死者特有の肌の抜けるような白さと、まだ生温たかい不完全な死体に直面すると、なんとか生かしたい——衝動に駆られ、死者と云う認識には、なかなか到達出来ない——とも述懐した。まして、処女の場合——その女性にとって、肌を許すのは初めて？ と思われる不明瞭な愛着を覚え、その瞬間に起こる不思議な陶醉と愉悦の幸福感は、女性に関することだけに、印象深く、忘却し去れ

るものではない——と云う。

「坂田山心中」の場合、女体は評判の美形であった。隠亡関係者と云わず、男だったら、愛着心の湧かぬ道理がない。だが、普通人だったら、一眼見るなり「ヒヤッ」と、叫んで逃げ出したくなるような死体である。普通の神経の持主では、どうにもなるまい。とすれば、やはり長吉老人は、ただ者ではなかった。しかし、女体は、かなり大柄で、重量もあったから、果して、長吉老人だけで、掘り起こし、肩に担ぐか、抱いて、船小屋まで運べたか？ どうか？

○

長吉が、どんな性格の男だったか？ 警察の調べでは、一応「異常性欲者」と判定したようだったが、実際にそうであったのか？

当時の新聞の報道から想像してみると、次のようになる。

——長吉は急用で、横須賀へ行って居たが、その夜帰宅して、家族から、坂田山の心中を聴かされた。二人の遺体は、既に手下の子分どもが始末して居り、男はともかく、女の方は大層な美人の娘さんだったので、町中の評判になっていたと知り、留守にしたことが、残念で残念で仕方がなかった。彼は、かれこ



れ四十年以上も埋葬の仕事が続けて来たが、そんなに評判になるような娘さんを扱わなかったのが、心残りで、何とかして、骨にならぬ裡に一度、確かめて置きたかったのであった。こんな機会を逃がしたら、生涯、もうお目に掛かれまいと長歎息した。すると、居ても立っても居られぬ想いで――。

「おい、急に用事が出来たから出掛けるよ」と、家族に告げて外に出た。ふと見上げる夜空に十三夜の月が明るかった。

「うん、いい塩梅だ。此奴は、うまい！」

長吉老人は北叟笑んだ。△闇夜だったら、綺麗な仏様の顔も拝めまい▽

彼は若者のように弾む胸を押え、無縁墓地の、真新しい二ツの土饅頭の前に立つと、男の方は見むきもせず、女の土饅頭に△ザクリ▽とスコップの齒をたてた。手馴れた手つきで、ザクザクと砂地を掘ると、浅く埋められた墓穴から、まだ夜眼にも鮮かな、白木の棺が見え始めた。

△しめたッ▽

一瞬、彼の老眼が、変質的に輝いた。そして、すっかり全貌を見せた棺の上蓋に両手を当てがい、心得顔で開いた。

派手なお召の柄模様が見え、丁寧に包まれ

た女体の香りが、まだ命のあるかのようにだった。彼はするすると死体を引き摺り出し、まづ堅い帯を解いた。着物は簡単に脱げた。長襦袢も、その下の肌着も。それから、腰部にまつわりつく最後のものまで、果物の皮を剥ぐように引き寄せると、やがて彼が幻にまで描き続けた素晴らしい女の肢体が月光を浴びて蒼白く横たわっていた。長吉は、思わず臉を細め、ショボショボした眼尻を一層、落として、溜息をついた。

△ふむン。こいつは、気の毒、目の毒、腹の毒！▽

などと、いい加減な痴言を吐かし乍ら、彼はふと、考えた。

△待てよ！ 此処はお寺様の無縁墓地だ！明日の朝にも、引取り人が現われぬとも限るまい。そうじゃな？ 何処ぞ、よい隠し場所はないものか？▽

と思索したが、△このままでは、まずい▽と女体を担ぎあげた。△人の目につかぬ方向なら砂浜に限るわい▽と、海鳴りだけが激しい相模灘の方へと女体を担いで歩き出した。

△早ようせんにゃ、見つかるばい――▽

とか何とか、九州弁の、卑猥な民謡を口走り乍ら、ずっしりと肥えた肉むらの重さに、

彼は独占欲に駆りたてられた。

△渡すものか！ 誰にも、このお宝様を！▽

そう想えば女体も頷くのか、長い髪の毛までも彼の頬に寄り添うように触れた。

△うん、ええ髪油を使っとるわい！▽

彼は一息入れると、すぐに足早に歩く。ふわりと一枚だけのせた肌着が、吊り紐のように落ち掛かる。慌てて女体を押し包むように被せながら行く前方に、黒く沈む小屋の影。

△あった。あれだ！ あれにしよう――ブリ小屋だ！▽（ブリとは魚類の鰯のことだ）

漁期以外は、無人も同様の「船小屋」であった。漁師の子供なら、誰でも知っている格好の遊び場で、溜り小屋にもなり、小人閑居して不善をなす？ には絶妙の館だった。

長吉老人と云えど、例外ではない。

大型の木造漁船が眠っている以外に、もう誰の目もはばかることはない。彼は安心して担いだ女体を砂地に下ろした。見れば見るほど美しい、透けるような美貌であった。

映画女優に例えれば、当時のスター、栗島すみ子に似ていたが、彼は新派の水谷八重子に、そっくりだと思った――。

○

私は、この心中のヒロインとは一面識もな

いから、当時の顔写真で、連想するより方法がないのだが——瓜実顔の富士額で、束髪に髪を結った、瞳の大きな上品な面立ち——はむしろ川崎弘子さん（往年の松竹スター）にそっくりだったと思う。

後日譚だが——松竹映画『天国に結ぶ恋』でのヒロインは、五月信子であった。そのロケーションが、想い出の坂田山から大磯周辺の名所旧蹟で行なわれた際、私も、悪童連と見学し、最初のうちは、ロケーションとも知らず、細面の、黒子一ツない色白のスナリとした美人を、死んだ八重子さんのお姉さんが坂田山の心中の場所に、花束や、お線香をあげに訪れたもの、とばかり決めて掛かっていたし、見物人も、まさか映画撮影だとは思ってもいなかった？ らしい。

その時の私の印象では、やっぱり、写真で眺める湯山八重子さんは、もう少し肉感的で円くニコやかなタイプの美人だったから、五月信子のイメージではなかったように思う。

長吉老人も、死体となって、一層、凄艶味を増したであろう？ と想われる女体を眺めては、見たいと思っていただけに興奮さめやらず、その「女体美」に魅入られたであろうと想像する。

彼が心理学的に云う「屍姦症」であったかどうか。詳細は分からないが、一説に、彼は不能者だったので——夜通し、愛撫の手を休めず舐めるように賞玩した——とも伝えられた。それは、暗に女体の処女性を強調するようにも思えた。警察としては、故人の人権を守り、その詳細について、決して発表はしないのだから、恐らく憶測に過ぎまい。

知っているのは、歌で唄われた通り、神様だけであり、あとは担当の検屍医、法務官、少数の警察官だけで、死人に口なしなのだから、想像は、自由である。

また別説に——大変な猥々親爺で、性に強く、女体に飽くなき恥辱を与え、死屍姦を好み、終夜、添い寝を遂げ続けた——とも伝えられる。

だがそれは、飽くまで犯人が単独犯の場合であって、二人説、三人説の説まであり、未解決の俤である以上——橋本長吉の恋態異常性格者扱い——は、本人を侮辱するものだと云えよう。

その後、彼が、臨終に臨んで——「違うんだ！ 違うんだ！ 俺じゃないんだ！」と犯行を否定しつつ、黄泉の道へ発った——のは事実で、私の母も、長吉老人とは知人だった

ので、夫が官吏であった関係上、相当、関係の方からも事情を聴いて居り（あれば、若い二人の子分の身代りになったんでしょね）と云っていた。

当時の国情から若い二人を名誉ある兵隊として入隊をさせるのがよいのか？ 刑務所へ送るべきか？ と考えれば、出来ることなら兵役のない老人が代わって刑務所へ行った方が、国家的に忠義と考えたのでしよう。あの頃の国民的感情からすれば、年寄りが後者の道を選ぶのも当然です。それに、あの重い死体を老人が一人ではねえ、とても運べまい／＼とのことだった。

だから二人説、三人説の共犯容疑も出て来よう云うもの。——それを長吉老人が一人で責任をとった——と云うのだ。

更に加えれば、当時の政治のあり方であって——政権が変わるたびに、地方の警察署長までが交替させられ、まして大磯のある湘南地方は、昔から特に政争激烈の選挙区でもあった——ことだ。この頃は「民政党」と「政友会」の二大保守政党の対立時代であり、民政党から政友会へと、政権が移った時で、勿論、大磯警察署長の椅子も交替の危うきにた



れ、その頃の地方政界の重鎮であった某県議に、仕事の助命を願ひ出たのだが、その努力も空しく、彼は、冷たく解職させられた——のであった。それ以来、元署長は某県議を酷く憎み、——秘かに長吉老人に依頼して女体を発掘し、某県議の経営する漁業会社の船小屋へと埋葬させた——のだとする説もあったようだ。

と云うのも、当時、漁師仲間に不思議な縁起担ぎがあり、海上で溺死体を発見すれば、これをマクロと称し「豊漁」の前兆と喜び、手厚く埋葬するのだが、反対に、陸で発見すれば「不漁」の前ぶれと、非常に忌み嫌うのであった。つまり——長吉老人の事件は、縁起を担ぐ漁師たちの心理を、巧みに利用し、某県議に対する意趣返しをした、元署長の計略によるものだ——と云う推理であった。

真実か嘘か。長吉老人が死んで、もう40年にもなろうとしている現在では、その真相も明かに出来まいが、あの事件の夜——数回にわたって、長吉老人を訪ねた男がいて、この謎の人物が、元署長なのだった——と云う説が残っているだけで、いっさいは謎の尽だ。

○

やがて長吉の身柄は、小田原の検事局へ送

られ『坂田山心中』は、意外な猟奇事件まで生んで、一応は解決がついたかのように見えた。が、そのため、大磯の名は、全国的に広まり、坂田山は自殺者のメッカとなり、へどうせ死ぬなら、大磯へ行こうと、死の讚美者が集まり、警察も町役場も、悲鳴をあげる始末であった。

当時——流行った「連鎖劇」で、私たち子供は、余計な知識まで得たし「坂田山饅頭」なる名物も出来たので、あまり美味くもない小粒な饅頭を頬ばり、俄名物を塩辛い想いで味わったものであった。

「連鎖劇」と云うのは、舞台上役者が芝居をし、ロケーションでなくては、見せられない場面をスクリーンで繋ぐ劇展開の方法で、例えば、五郎さんと八重子さんが、舞台上アベックのラブシーン。終わると舞台上スクリーンが下りて、映写機が回転すると「大磯の風景」になり、二人が手に手を取り合い再び舞台上に現われると云った、映画的效果も加えた芝居で、「金色夜叉」とか「不如帰」とか、その殆どが「新派悲劇」であったから、当然のように「坂田山心中」も取りあげられ、若い男女の紅涙を絞ったのだ。

その他、講談、落語、漫才、声帯模写に到

るまで取りあげられ、否応なしに、子供の耳にまで入って終まうのであった。

とまれ、『坂田山心中』は、情死した男女の涙の物語よりも、長吉事件による、推理的な面白さと、それに絡まる湯山八重子さんの秀れた美貌が話題となり、異常に騒ぎたてられた「心中事件」であった。

加えて、女体の処女性、大いに問題とされ、とにかく「清純な尽の天国行」だと言っているので、二人の関係を、神様扱いにまでしたものであった。

一般に「情死」の場合には、その殆どが死の直前に、この世での最後の想い出を、女体内に残しているのが多く、検屍すれば否応なしに知られて終まうものだが——二人の場合には、それが無かった——と云うのだ。

では——長吉事件の場合には、どうだったのか?——と誰しも、余計な心配はつきものだが、この場合も八重子は、既に硬直して居り、役にたたなかったと云うのだ。最後まで『純潔』は守られたのである。

ここに到って、宗教的な嘆声と憧憬の渦は全国を支配し、ますます坂田山の声価を昂めたのであったが、その点について、二人の検屍を担当した、大磯署の嘱託医は八例外では

あり得なかったVと、精子の存在を認めたのだが、そこは人情で△純潔の俤であったVと公表したのだ——と識者は云う。

船小屋で発見された時の某裁判医も△汚されてはいませんでしたVと検視結果を、報道陣に述べた——と伝えられる。

検視の書類を読んだわけではないから、真実は分からない。これも謎に包まれた俤だ。

しかし、最近になって、私は、もう一つの疑問が湧くのを、どうすることも出来ないのだった。

と云うのは——二人が死んだのは、五月に近い、四月下旬——だった。死後、何時間を経過して発見されたのかは知らないが、その頃の季節からみて、死体の腐り方は相当に早いものと推定されるのだ。某鑑識課員の話では——△美しい白蛾のような死体であったVとか△生前、その俤で、美貌は失われずVと云った、美辞麗句などでは、到底、表現出来ない程の△醜くさVに変わっていた筈だ——と云う。

まして、橋本長吉が担<sup>かつ</sup>ぎ出す頃には△美貌の面影など消え失せ、悪臭が漂い、愛撫どころか、流れ出る腐敗液もあり、幻滅の悲哀を感じるばかりなのでは、なかったか？Vと云

うのであった。

だから死体の硬直は、ともかく△役にたたなかったVと告白したと云う長吉老人と△汚されてはいませんでしたVと述べた某裁判医の発表は、合致するのではないだろうか、と頷けるのだ。

世に「屍姦」など云う、変態異常者の行為を耳にするが、それは、かなり動物的神経の持主の仕業であろうし、封建時代の昔だったら、例えば、女性の斬首後、まだ体温の消え去らぬ間に、素早く遂情するのは、可能であつたろうし——刑死人の処理を委された非人どもが女死刑囚を利用した——と云う隠された噂話は、よく伝え聴く衆知の事実だが、一般的には不可能だ、と云えよう。

西欧諸国でも——屠畜場の人夫が、殺した牝豚を解体直前に利用したり、ギロチン直後の女スパイを犯した——兵士の昔話は、よく耳にしたものだ。しかし、そうした男たちの場合には、彼等を取り巻く圀りの環境とか、生活層のあり方が問題になってくると思う。

「死屍姦」などは、古い昔の話になりつつある。新鮮な文化を吸収出来得る現代では、それが如何に非衛生的であり△正常な人間のなし得る行為に非ずVと認知しているからでも

あろう。

○

最後に——長吉老人は「死体遺棄罪」と云う罪名で起訴され、服役は禁錮八月——だった。彼は——素直に刑務所に入り、出所後は自宅であらうしていたが、間もなく老衰で死んだ——と云う。

私は、少年時代に入ると日華事変が起こり続いて太平洋戦争に突入と云った、暗い谷間の青春を体験せざるを得なかったのだが——草柳大蔵（評論家）氏は、後に新聞で『坂田山心中』を、次のように解釈していた。

『二人が会う時は、何時も大磯駅前「つたや旅館」だったが、遂に死の瞬間に到るまで、関係はしなかった事だ。新聞が、これを「美談」として扱った裏には、昭和初期の恋愛や貞操観念が、如何に刹那的であり、頹廢的であつたかを物語るものだろう。』

今日でも、若い男女の性関係は「自由」の概念の中に入って終まい、現象的には「昭和初期」と、何ら変わってはいないのだ』

また——『昭和初期の性風俗は、不景気と軍部の台頭と云う、重苦しい時代からの逃避であり、社会への不参加を表現したものになっていた。つまり、厨川白村が震災（大正十



二年の頃、<sup>とな</sup>唱えた「変愛至上主義」を主軸とした、社会への「後ろ向き」の姿勢にあったのだ（戦後の姿勢は、家への反抗と社会へのバイタリテイで、前向きだ）と云う。

二人は、坂田山の雑木林で「昇永水」<sup>しょうようすい</sup>を飲んで死んだ。遺書は一通——生前の不幸を詫びて、亡き母の許へ行く——と云うだけ。遺品は——慶応大学の制帽、赤色のハンドバッグ。北原白秋の詩集。ヘリオロープの可憐な花（羽仁もと子著）——それだけだ。

情死の強力な原因について——男が、大学で、ファッショ教授、蓑田胸喜の叱責を受けたからだ——と云う。蓑田教授は、当時、有名なファシズム論者で、軍人には、その心酔者が多かった。

四月の或日——いきなり「何故、軍事教練を怠るのか」と、教授に叱られた。その上、「お前のような軟派学生が、ある女性に入れ知恵するから、立派な青年の結婚申込みが、うまくいかないのだ」と追及され、教授と三光町教会の牧師との間に何らかの関係のあったのを知った。——この牧師は湯山八重子に結婚申込みをして居り調所五郎とは「恋仇」の立場にあったのだ。つまり「坂田山心中」は「一人の気弱な大学生が、ファシズムの

波を、まともに受けていた」と云う事実だ。

だから、この一件は、昭和初期に於ける中流階級の感情生活が「エロ・グロ・ナンセンス」に流れていった理由を、事実として物語っている。

ちなみに「坂田山心中」は、映画と同じ題名のレコードが売り出されて大当たりしたが「天国に結ぶ恋」の題名は、当時の東京日日新聞社整理部員、岩佐直喜氏の発想で——さんざん苦吟したあげく、<sup>トイレ</sup>便所で、ポンと湧いた——と伝えられる。

昭和の女性は、明治の志を実験した大正時代の跡を継ぎ、それを定着し、教養化して行った傾向がある。が、一方では「自由への開花」が国家主義により、押しつぶされ、その一つのドラマが「坂田山心中」であった——とも云うが、こうしたグロテスクな物語の世相は、やがて『精神作興』『国家総動員』へと進み、第二次大戦の渦の中へ、人々を引き摺り込んで行くのであった。

○

私は毎年、夏が近づくと、活気づく湘南地方を想い出す。

と同時に——「天国に結ぶ恋」坂田山心中——を想い出す。すると、何時も臉に浮かぶ

のは、あのショボショボした<sup>おちめ</sup>落眼のチャーチルに非ず、隠亡・橋本長吉老人の小柄な猫背を想い出す。まさか、あの善良そうな、老爺の肩に——全裸をくの字に曲げ、担がれて行く、美しい肌の八重子さん——を想像しようとは？

しかし、そうしたセンセイショナルな情死事件も、いまはもう語る人々も少ない四十年前の想い出でしかない。

「昔は、よかったねエ。地曳網を手伝えば、簗に一杯は、魚が貰えたし、浜辺には獲れた鰯が足の踏み場もないほど、干してあったもんだよ」と、友人たちは懐かしがる。

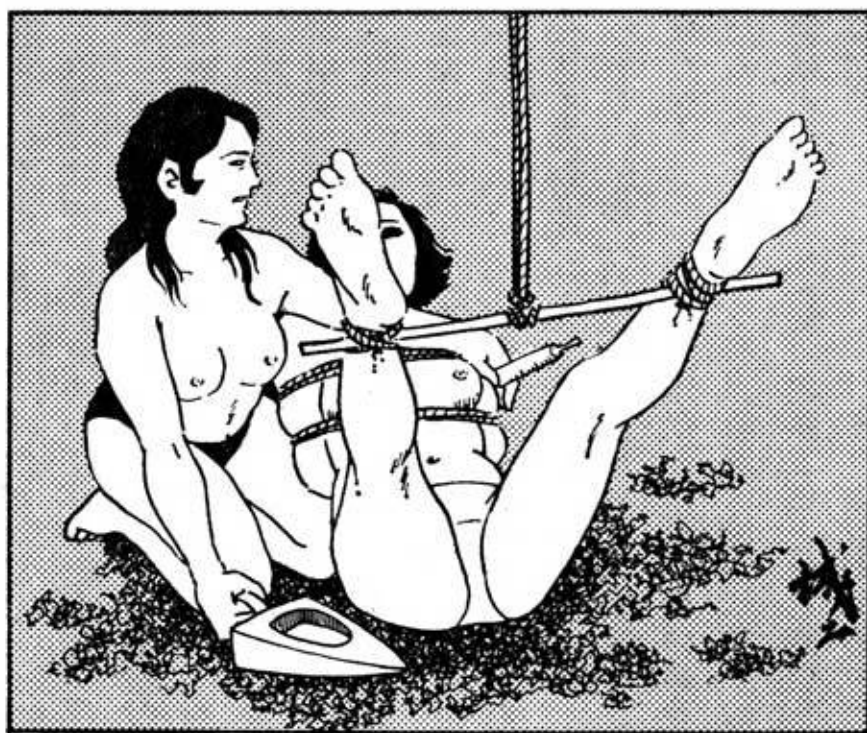
その裏の意味は淋しい——今日では、地曳網を引いて手伝っても、魚一匹くれないし、浜辺に干してある鰯は、盗まれて終まう——と云うことだ。「セチ辛い世の中になったねエ。油断も隙もねエたア、そんなことさ！」と口を揃えて、漁師たちは口惜しがる。

戦後の変化は、戦前の良いものまで、すっかり綺麗に洗い流し去って終まったようだ。

だから、いまでも変わらぬものと云えば、五月になれば、青々と萌え出る、あの坂田山の、懐かしい樹々の、若葉の水々しさだけなのかも知れない。

(終)

豪城二・画



創作／＼花と蛇／＼パロディ／＼

# あたしは静子

— 拾ったテープから —

山 光 純

言句が入っており、首尾も一貫しないのだがヒロインのあわれさが、よくでている。いづれ売れない声優のアルバイトだろう▽

○

△——はじめは、ぼそぼそ、いう男の、ききとれない声。まもなく女の声▽

……ええ、静子、だいじょうぶですわ。これまでだって、いろんな方々から、いろいろ、おいたをされてきましたもの……でも羞かしくて、もう死にそうなくらい羞かしくて。だって、たくさんの人たちのごらんになってるなかで、二人の殿方のお相手をしなくちゃな

らないなんて……その上、ほんとうに体がとけてしまいそうな気持ちになって、あんなはしたない声をあげてしまって……静子の軀は、もうこんなふうになってしまいましたのね。さげすんでくださいましな。

静子、このお邸にくる前までは、女のもっているいちばん大せつなものは、おんなの貞節だと、思っておりましたわ。でも、何人ものちがった殿方、それに千代さんや、和枝さんたちにもオモチャにされてしまって、もうすっかりだめ。着るものを取りあげられてしまっただけから、どのくらいいたつのかしら？ そ

△私はこの春、ふとしたことから一本のテープを手に入れた。行きつけのスナックバーのカウンターに置き忘れてあった紙袋を、バーのマスターが、私のものと感じがいたしたためだ。私も酔っていたからアパートに持ちかえり、結局その夜は眠ることもできず、翌日は寝不足で、ひどい目にあった。

問題のテープは、まるでラジオ・ドラマのようであるが、ところどころに、けしからぬ



れも忘れてしまいそう。千代さんが、静子をおからかいになる時に、よくおっしゃいますわ。「このハダカ・メス！」って。

……でも、千代さんご自身が、静子のカラダでお遊びになるときは、うれしいわ。いろいろのお稽古や無理な注文ばかりで、とってもつらいけれど、千代さんが直接手をおかけになるときは、ごきげんのよろしいときですもの。静子は、ただただあの方のお気に召すようにおつかえますのよ。おっぱいもお尻もみんな千代さんのもの。死ぬほど羞かしいポーズで写真をとられるのも、お尻をつきだして這ってメス犬になるのも、ただ千代さんのごきげんを、そこねたくないからですわ。

それなのに千代さんは、まったく静子の気持をわかってくださらない。あの方の一挙手一投足に全身をうちこんでいる静子の心根をわかってくださらない。たえず、あたしくしを責めよう責めようと考えていらっしやるだけ。二人つきりになってご気嫌のよいとき、千代さんは静子の弱いところに塗りグスリをつかわれながら、きまってお邸にくる前のお話をされますわ。昔の静子のことを面白そうに、あれやこれやと。あたくしのカラダと、あたくしの心の、もっとも弱いところをねらって大笑いされますのよ。

「ねえ、静子奥さま——それにしても、ご大家の令夫人が、まる裸で女中風情に好きな様にされるなんて。あなた、それでよく恥かしくないことね。男どもが、いっぱいいるこの邸の中で、ヌードのままにいるなんて、まったくあきれかえってしまうよ。そんなきれいな虫も殺さぬ顔をしているくせに、お前、裸でいるのが好きなのかい！ お尻をふってあ

るくのが、そんなに得意なのかい？」  
「だって千代奥さまは、静子がかうしているのがお好きなのでしょう？ あたくしは奥さまの奴隷ですもの、ご主人さまのおいつけの通りのことをいたしますの。よろしかったら、もっと静子を淫らな目にあわせて下さいまし」

クスリがきいてきますと、静子はもう、何もいえなくなるの。体中をピンクの嵐がふきまくり、じっとしておれなくなりますわ。すると「まあ、静子。お前なんでもんなにお尻をもじもじさせてるんだい？」って、千代さんのごきげんはガラリとかわります。そのあとは、どんなにおわびしても許していただけませんの。きまって、春太郎さんたちなんか

しかも、そうしている最中にも、お話相手をしなければならぬことがありますの。

「静子、お前にはまったくあきれるわよ。どんな気持なの？ 誰かれなしに肌を弄らせるなんて、まったく女同志として恥かしいよ。あんた、肉体の意味をしってるの？ 女にあっていちばん大切なのは、肌じゃないか。貞操観念なんか、静子にはないのかい。おやおや、いっぱい汗をかいたりして、どうなの。ええ？」

「だって、だって千代さん。静子は……」  
あたくしは、煌々としたスポットランプのもとで春太郎さんたちのオモチャにされながら、しどろもどろで千代さんにうけ答えいたします。何とこたえれば、いいのでしょうか。教えて下さいましな。

静子の顔が、のぞきこんでいらっしやる千代さんの視線から、ちよつとでもそれると、その夜は折檻で、ひとときのまどろみも許されなくなりますの。ふくみ笑いをしながら、あたくしのカラダを自由にしている春太郎さんと、夏次郎さんのコンビ。

「みているあたいのほうが、よっぽどはずかしいよ。静子さんね、女というものは一生に一人の男だけに操をつくすものなのよ。それ

なのに、お前はたった今でも二人の男と深い仲になっているじゃないの……おやおや、もうみちゃおれないわ。ホホ……春太郎さん、奥さまの柔肌はいかが？ そのスタイル、ちよつとかわっているわね。いま写真にとるわよ。夏次郎さん、もっとゆっくりと責めなくちゃだめ。追いかんでゆくのに時間をかけなくちゃ……おやおや静子奥さまったら、もっとお尻を大きく、おまわし遊ばせ」

「……ええ……こうですの、千代さん……」  
「そう、そうするのよ、もっと情熱的にね。さて、どこまで話したっけ？ そう、女の操のお話……」

——もうこのくらいで、かんべんして下さいまし。あたくしがすこしでも反抗の気配をみせると、責めは一晚中でもつづきますの。朝になると、又、鬼源さんたちの調教がはじまりますわね。千代奥さまはそれから寢室におはいりになって、夕方まで、おやすみになる事もあります。静子は、そんな時、どこまでもつづくお稽古の中で、ふつと千代さんがなつかしくなったりさえますの。ふしぎでしょう、女心って。それはあるとき、千代さんが、こうおっしゃったからですわ。  
「ねえ、静子奥さま。わたしが奥さまを憎む

のも奥さまが特にわたしをこわがるのも、どちらも、わたしたちがお互いに女だからですわね。男たちには決して、わからない女の心を、二人とももっているからですわね。ひとりの女は、もうひとりいる女を、徹底的に愛するか、徹底的に憎むのか、どちらかだと、わたしは思うの。おたがいを憎むのがほんとうの女なのか、心から愛しみあうのが、ほんとうの女なのか、わたしは無学だからわからないけれど、奥さまとわたしは、おたがいに女だから、このところはわかってちょうだいね……」

——といって、ながい接吻をしてくださいましたわ。あとにも先にも、あんなことをおっしゃったのは、たった一どきり。お酒にも酔ってらしたし、ごきげんもよかったですけれど、あたくしはあのとときの千代さんを忘れませんの。この女のためなら、とあたくしは丸ハダカでいる自分も忘れて泣きましたのよ。  
……／＼ながい啜り泣き——だけど、いや、もうこんな生活はいや！ 八次第に激してくる——静子は、静子はなぜこんなところでいぬのようにお乳をゆすって這いまわらなくちゃならないの？ こんな毎日を送らなければならぬどんなことをいたしましたの？

つぎつぎとちがった殿方をおなぐさめして、そしてもらえるごほうびが、さげすみきった高笑い……どうか、静子をかわいそうだと思つて下さいまし。／＼しだいに、口ぶりが静まってくる／＼

もう、静子はこのお邸の中で、一生飼われてゆくほかはないのですわね。いいえ、それさえもかなわぬことかも知れせんわ。だって、これだけはげしく、休むひまもないくらいつぎつぎと殿方のオモチャになり、千代さんにはちだんとはげしく責めさいなまれる毎日を送っておりますと、静子のカラダだってやがて、めちゃくちゃになってしまいますもの。

とくに、皆さまがたは、あたくしのオッパイをとくべつお好みになるようです。どんなお遊びをされるにしても、必ずはじめはオッパイから……静子も生身の女ですもの、しだいに妖しいわななく気持に追いこまれてゆきます。どんな抵抗もゆるされないのだと思うと、あたくしはお尻を……ああ羞かしいこと……お尻をくねらせて、そのお方がお騷りになりやすいようにしてしまいますの。

神さま。神さまがもし本当においでななら、静子が、大きな罪をおかしたこともない



静子が、なぜこんな目にあわなくてはならぬ  
いかを、教えてくださいますし、嘸り泣き▽

ええ？ 殿方たちとのことを、お話するの  
ですか？ もうこれくらいでかんべんしてく  
ださいましな。あなたがくださろうとしてい  
るバスタオルが、静子は本当に欲しい。あな  
たは、おやさしい方なのね……バスタオルを  
もってきてくださったりして。でも始めのお  
約束どおり、けっしてお邸のどなたにも、い  
ま静子がお話していることなど、おもしろに  
はなりませんようにね。あなたとはまだ深い  
仲になったことはありませんけれど、仲よし  
になって、おたがいに清いプラトニックな関  
係でいましょうね。この泥沼のなかに水蓮が  
咲いたような、あたくしたちのプラトニック  
な気持が、どうかいつまでもつづきますよう  
に……

ええ？ まだタオルはいただけませんか？  
殿方とのことを、もっと生々しくお話しと  
おっしゃいますの？ ではお話をいたします。  
そのかわり、そのやわらかそうなバスタオル  
を静子にお貸し下さいまし。あなたの前で、  
こうして丸裸のままいるのが、静子とても  
つらいの。せめてタオルでもまとして、それ  
から、お話したいの。やっぱりだめですか？

へぼそぼという男の声。ききとれない。ちょ  
っと押し問答。あきらめた静子のため息▽

どこまで、お話をしましたかしら？ そう、  
静子がこのお邸で一生飼われてゆくというお  
話でしたわね。静子、このあいだ、あたくし  
が主演している8ミリ映画をみせられました  
のよ。あたくしのカラダがクローズアップさ  
れ、やがて男の人の手がそこを這いまわ  
り、やがて責具がとりだされるといった順番  
だったように思います。ライトが煌々ととも  
っている下で、静子は思うさま弄ばれるので  
す……

ふしぎなことに気づきましたの。女優が静  
子であることはまちがいようもなくはっきり  
とわかりますのに、相手の男優の顔がよく  
わからないのです。あたくしにはそれが捨太  
郎さんであることはすぐにわかりましたが、  
映画をごらんの方に、捨太郎さんの顔はほと  
んどみえませんの。しかも、それがまったく  
不自然ではなく、責められている静子の顔と  
軀がくまなく撮されているのです。おそろし  
いほどの撮影技術……静子は、あの最初のシ  
ーンを一目みただけで、もうこのお邸をはな  
れて静子はどこへもゆけないのだということ  
がわかりましたわ。……あの8ミリ一本をみ

せられただけで、もうたくさん……。

あたくしが、このお邸につれてまわっていら  
い、何百枚の写真と、何十本の映画がうつさ  
れましたことやら——それが何枚も何枚も焼  
増しをされ、闇から闇へと地下水のつたわっ  
てゆくように世間にながれていつているので  
すわね。死んでしまいたい、ほんとうに……  
でも、いつもこうやって後ろ手にしぼられた  
まま、コンクリートの牢屋におしこめられて  
いる静子には、死ぬ手だてさえも許されてお  
りませんわ。へいへい嘸り泣き▽

へふたたび、よくききとれない男の声。だが  
はじめとちがって、荒々しい叱りつけるよう  
なひびきがある。指向性のいいマイクをつか  
っているらしい▽

……かんにんして、下さいまし。泣いちゃっ  
たりして。殿方とのことを、お話するのです  
ね。静子、死ぬ気で、ありのままをお話しま  
すわ。でも、お願いですから、いままでの様  
な目つきで静子のハダカをみつめないで下さ  
いまし。羞かしい、ほんとに羞かしい……。

——あたくし、鬼源さんがほんとうに、おそ  
ろしいのです。鬼源さんは、ほかの殿方とは  
ちがいます。あの人の目は、ぜったいに、ご  
まかす事はできなくてよ。静子の……し……

のカラダのぐあいは、むしろあたくしよりもよくぞんじなの——何人もの殿方にオモチャにされて、静子がすっかり疲れきってしまったときでも、あの方は、お許しになりません。演技の悶えなのか、ほんとうに精根つきはてているのか、あの方にはお見とおしなのですわ。

鬼源さんは、静子の身体をお調べになりながら、よくおっしゃいますの。

「奥さん、おめえのカラダのぐあいは、はばかりながら、おれにゃ、みんな、わかるんだぜ。瞳のうるみぐあいや乳首のしこり、尻のふりかたなんかから、ちゃんとう当たりはつくんだ。おめえが、男や女たちの弄りものになるのを一刻も早く終わらせようとして、どんな名演技をやったってだめさね。おめえにもわかってるだろうが、おれさまはこれまで何十人もの女を扱ってきた。最下等のやつばかりだったが、それなりに仕込んだものだけ。……さあ、もっと足をひらくんだ！　もっとだ。それから、ヘソから下だけを左へ左へとまわすんだ。何をやってる、ヘソから下だけで「の」の字をかくんだよ……。その最下等の淫売どもでさえできなかった芸当を奥さんに仕込もうというわけさ。ヘッヘッヘ

ッ……うれいだろう、おめえ。脳のいかれちまってるスケや、すれからしもないとこの中年女や、ポン中のパン助、アル中の女どもでさえ、いやがったことを、お前にさせようというのさ。その綺麗な顔と、はりきったカラダの全部でな。おめえのまっ白い軀のどこにも使用法は書いてないが、つかいかたによつて、どんなことができるか、おめえも楽しみにしてるこった。奥さん、おれはプロなんだけ。おめえは随分、仕込まれてきたつもりでいるが、調教はまだはじまったばかりだ」

△この鬼源の口まねは、むろん、この通りに語られているのではない。捕われている佳人的かきくどくような悲しみの口吻から、これを文字に写すときに直した。鬼源という男のいやらしさが消えた気がするが、是非は読者にまかせる▽

……静子、すっかり、つかれてしまったことよ。もうこのくらいでお許し下さいました。もっと、お話しろですって？　つらいわ、静子。とっても、つらいの……あなたのようにいいお方の前で、すっ裸を晒しているなんてほんとうに消え入りたいくらいですわよ……ええ、お話を、つづけますわ。ごめんなさいね。あなた。

鬼源さんは、静子を完全な奴隷あつかいになさるわ。千代さんと二人で笑いあっていらつしゃると、きまってあたくしのこと。静子のお尻の振りぐあいがどうだとか、駆けさせて、おっぱいのユサユサするのがおかしいとか、何人の殿方と同時に相手できるか世界記録をつくらせようだとかおっしゃって。鬼源さんはプロの調教師、あたくしはその弟子。だから、完全にお稽古に徹されるのかと思うと、そうでもありませんのよ。

いままで、オンナとしてお相手をしたなかでは、鬼源さんがいちばん多いのです。お稽古とか、役得とかおっしゃいますが、あの方とは、いちばん深い仲になっていますのよ。

千代さんは、それをよくご存知なので、

「鬼源さん、セックス奴隷に惚れたんじゃないの。ホホ……。どう静子、お前も、まんざらじゃないんじゃないの？　でも一人じめはだめよ。静子の軀はこのお邸の男どもみんなのもの。そして、あたくしのものよ」

なんて、おっしゃいます。鬼源さんは、もちろん、かんしゃくを起こされて、お稽古はいちだんと、きびしい羞恥の地獄をさまようことになるのですわ。

人間ならたれでもおなじでしょうが、一つ



## 読者ギャラリー 『ショーの開幕』 須坂 旭



の刺戟に慣れてまいりますと、つぎのもっとつよい刺戟をもとめるものですわね。鬼源さんは、ふつうのやりかたで静子を這いまわらせることにすっかりおあきになって、あたく

しを凌辱するもっとおもしろい方法はないかと、いつも、くふうされている、ご様子。ことに、お酒をめしあがったあとなど、すさんだ一座によびだされるおそろしさったら……

お邸の若い人たちが車座になり、まんなか  
に白いシーツのかかったおふとん。野卑な冗  
談がながれて、アルコールの匂いと煙草のけ  
むりでむせかえるなかで、美津子さんと小夜  
子さん、ことによったら桂子さんたちのレス  
ビアンショー……もうすっかり飼い馴らされ  
てしまつて、組の若いひとなんかに必死で媚  
を売りながら、恥ずかしいショーを演じるお  
嬢さんたちの心根を、どうかすこしでもわか  
つてあげて下さいまし……あのお嬢さんたち  
が若々しいカラダをくねらせて、卑しい卑し  
い仕草で、車座になつてお酒をのんでいる人  
たちを楽しませる……なぜ、そんなことをし  
なくちゃいけないのかしら？ この世で、こ  
れほどおそろしい背徳があつていいものかし  
ら？ お嬢さんたちは、どんな罪をおかした  
というの？ 女のいちばん美しい、いちばん  
貴重な青春時代を、地獄のなかで過ごさねば  
ならない、どんな理由があるというの？  
△女は必死になつてかきくどく、細々と。し  
かし、声はたまらない蠱惑にあふれている▽  
……そう、鬼源さんでしたわね。仲間うちど  
おしという気やすさから、お客さまのいらっ  
しゃらないときに羽根をのばそうとするよう  
に、鬼源さんは、ぶるぶる慄えている静子の

肩をだきよせ、宣言するように大声で、

「さあ、これからのレスビアンショーの演出は、大ベテランの、この静子令夫人にお願いするぜ。なにしろご自分の経験を生かして、うんと色っぽいスタイルを演じさせて下さるとのことだ。いいかい、みんな！」

一座は哄笑と、すさんだ欲望と期待で、熱っぽくふくれあがっておりますの……お邸の若い人たちというと、岩崎大親分や、いりんなお客さまのまえでは、いつも小さくなっている静子たちのショーの下準備ばかりさせられてゐる若い衆たちのこと。静子の裸をいつも目の前にみながら、森田親分や千代さんのご気嫌をそこねまいとして、手もだせない下っ端の人たちです。でも、何といつても若さにあふれているお方ばかりですから、屠所にひかれてゆく静子の軀を扱われるときの粘りついてくるような掌や、ギラギラ光った眼などから、静子たちのような奴隷をどうしたのか、ありのままにわかりましてよ。……で、竹田さんなどをはじめとする若い衆たちの欲求不満をなだめるように、鬼源さんが、こっそりと、こんなパーティを開かれるわけ——どうかあなた、静子をかあいそうだと思つてくださいます。お相手がかわつても、慰

みものになるのは、やっぱり、静子の心とカラダ……。

もっともつとつらいのは、鬼源さんたちに教えこまれた通りのスタイルで、美津子さんと小夜子さんを組ませること。静子は血をはくようなつらさにさいなまれながらお嬢さんたちがお互いに弄び合うショーの指導をするのですわ。ああ、もう死んでしまいたい。大ぜいの男の前で、そんなことをさせる静子を睨む、ふたりのお嬢さんの心の底からの憎しみのこもった目つきだったら……静子のほんとうの心を、すこしでもわかって下さったら、どんなにうれしいことかしら。静子のいう通り、できるかぎり羞かしいエロチックな仕草で、一座の若い衆を満足させることが、この場を一刻もはやくおわらせることなのに……その場限りのごまかしのショーを、みぬけない人たちではないことなのに……。

お酒はますますまわり、座はすさむ一方。たえまない鬼源さんの叱りと、若い衆の淫らな静子へのからかい。主演のお嬢さんの憎しみの瞳……あたくしは、どうすればいいのでしょうか。どうかお教えくださいましな。静子は、どうすればいいの……／＼啜り泣き／＼けれども、結局は鬼源さんの鶴の一声。お

嬢さんたちに、あたくしが塗り薬をつかい、美しいカップルのショー開始を皮切りに、静子は、くらくらする目まいにおそわれるのです。……静子のお仕事はこれから。又しても鬼源さんの一と声。

「さあ、おめえたち、ゆつくりと楽しみな。レスショウに旨い酒。美津子と小夜子のスタイルを、いろいろ考えて注文しな。なにしろ大ベテランの静子奥さんがコーチなんだ。どんな、とっぴなことでもやって下さるとき。そうだろう？ 静子？」

「ええ、鬼源さん。このお嬢さんたちを一人前のスターにするために、これからも皆さんたち、若い方のお力をお借りしないと……」  
罪ぶかい静子。地獄におちたあたくしは、ふたりの屈辱の介添えとして、白いシーツをお尻でよじらせながら美津子さんと小夜子さんのレスビアンショーを指導するのよ。おクスリのききめで、やがてすべてを忘れさって羞恥の演技におぼれこんでゆく二人の若い軀の美しさ、淫らさはどうでしょう。泰西名画にでてくる、襲われる妖精ニンフそのまま。

小夜子さんは、村瀬宝石店のお嬢さま。美津子さんは、ついこのあいだまでセーラーのほんとによくにあう高校生でしたのね。どち



らも、青春の日を誇らかに胸をはって楽しんで  
 いるはずでしたのに……このお邸に誘拐さ  
 れ、ただの気まぐれな殿方たちに潔い軀を奪  
 われ、あげくのはてに卑しい見せ物に追いた  
 てられねばならないなんて……美津子さんの  
 まだ固かったオッパイは、もう、十八才には  
 とってもみえない。小夜子さんのみずみずし  
 いお尻は、いったい、何人の殿方にきたえら  
 れたのかしら。ミニスカートの、よく似合う  
 すらりとした両肢は、とりまきの青年たちを  
 ドギマギさせるばかりでしたのに。

そのお嬢さんたちを、静子は死ぬ思いでコ  
 ーチいたしますの……「美津ちゃん、もっと  
 見物の皆さまに、よくみえるようにしなきゃ  
 ダメ。小夜ちゃんはどうしろから美津ちゃんの  
 オッパイを責めるのよ。もっとゆるうく、ゆ  
 るうく……」

夜はゆっくりと更けてゆきますわ。お酒と  
 ショー。若い軀をした全裸のお嬢さんたちの  
 痴戯。日頃から押えに押えられている若い衆  
 たちの血走った目。ショーがしだいに佳境に  
 はいって、美津子さんのやるせない吐息がも  
 れてまいりますと、もう異様な一座の空気は  
 爆発するかと思われるばかり。……青年紳士  
 たちのあそこがれのアイドルだった小夜子さん

は、ムッチリともりあがったお尻を天井につ  
 きだして、美津子さんの……ああ、こんな、  
 こんなことがこの世のなかにあっていいこと  
 かしら――。

「ふたりは充分、楽しんでやがる。じゃ、こ  
 んどは静子が俺さまたちを慰める番だな」  
 又しても鬼源さんの声。はじめからわかっ  
 ていたことなのですわ。静子が、どのように  
 ふるまってみせても、結局は静子の軀が、う  
 けとめなければならぬことは。

若い人たちを異様なまでの興奮においこん  
 で、けっきょくは肉の奴隷になってしまった  
 あたくしのカラダで慰もうというわけ。おふ  
 とんの上のお嬢さんたちの吸りなきが高けれ  
 ば高いほど、グミのような乳首がゆればゆ  
 れるほど、静子に加えられる若い衆たちの凌  
 辱は、はげしくなっていくわ……。

死ぬこともできずに、殿方たちのたんなる  
 一刻の慰みに投げ出される静子。オッパイ  
 への責めからはじまるフルコースを、たけり  
 たった若い人たちから、くわえられる、あた  
 くし。

この世に神さまはいらっしゃいません。イ  
 エスさまもいらっしゃいません。ただ一糸も  
 まとうことをゆるさず、殿方の颯り責めに

耐えることだけが仕事の静子、ハダカメス  
 の静子。みなさまのごきげんを軀だけでしか  
 とれないあたくしを、どうかあわれだとおも  
 って下さいまし……長い長いすすり泣き▽  
 ……お嬢さんたちのレスビアン・ショウで、  
 ぎらぎらと目を光らせている組の若い人たち  
 の一人一人のお相手をするのが、どんなにひ  
 どいものなのか、あなたには、けっしてわか  
 っていないだけのことよ。静子は組の人たち  
 のいう△廻し▽にかけられ、徹底的に凌辱さ  
 れるわけ――若衆頭格の竹田さんの前に正座  
 して、静子は、こう申さねばなりませんの。

「竹田さん、静子を、あなたのお好きな様に  
 してくださいまし。ええ、あなたが女のカラ  
 ダにしたいと思ってる、どんなことをなさっ  
 てもいいのよ。静子は、あなたたちのおかげ  
 で、毎日どうやらショーをつとめさせていた  
 だいているのですから、そのお礼に……。静  
 子は、あなたと他人でなくなるのがほんとに  
 うれしいわ……。静子は四六時中、素っ裸です  
 し、いろいろな殿方のお相手をいたしますけ  
 れど、ほんとうの静子はそんな尻軽女ではな  
 くてよ。ただ皆さまに可愛がっていただきた  
 いだけ……。あたくしは、皆さまのオモチャな  
 の。お尻はこんなに大きいし、オッパイもゆ

さゆさしているけれど、もし、おきらいでなければ、お相手させていただくことよ……」

△長い長い囁り泣き……▽

……もうこれくらいで、お許し下さいまし。

静子、もうフラフラ。今夜は、すっかり、くたびれましたわ。さあ、お約束のバスタオルを下下さいまし。このお邸にまいってから、ずっとハダカですもの。静子、軀にまとえるものがたまらなく欲しいのよ。さあ、お願い。△ハスキーな、哀れさの、にじみでた声。大きな肉感的な吐息。男のボソボソいう声は、やっぱり、ききとれない▽

……もうすこし、お話ししないと、ダメですね？……若い人たちとの、こと？ ええ、もうすっかりお話しますわ。……竹田さんはニキビのいっぱい、うきでた顔を得意そうにゆがめて「おいみんな、女の扱い方を教えてやらあ……」なんて、おっしゃいますの……。車座になった若衆たちは、お嬢さんたちの実演と、あたくしが竹田さんに弄ばれるのを半々にみながら、みなさん、顔に脂をいっぱいうかばせて有頂天ですわ。

竹田さんは、あたくしより三つも四つも年下。育ちも教養もなにもかも、まったく違った環境でしたのに、何の罪もない静子が、

ただの一刻の慰みの、お相手として、淫らな責め苦をうけなくちゃならない……こんなことがあっていいのかしら？ ねえ、あなた。静子の「こころ」なんか、ほんの、ちよっぴりも考えにいれていただけない。ただ自分たちの思うままに、おもしろさだけから、気まぐれだけから、静子の「からだ」はメチャクチャに弄ばれるの。女の体を遊び道具にして考えられるかぎりの悪ふざけ。色責め。人間のメス。セックス奴隷にされてしまっているあたくし。静子がいったいどんな悪いことをしたのでしょうか。教えて……あたくしがこんな毎日をおくらなくちゃならないどんな理由がありますの？……ええ、わかったことよ。お話をつづけるのね。

あたくしは、四つも年下のヤクザの肩に右足をかけさせられます。ギラギラした竹田さんの視線、それはムチのようにはげしく、あたくしの心をさいなみ、ただ消えてしまいたいと思うだけの羞かしさが、全身をかけまわります。でも、静子は媚なければならぬのです。

「ねえ、あなた。静子の体、お気に召しませんこと？ さあ、あなたの好きなようにしてください……」

……

それからあとは、もうめちゃくちゃ。竹田さんの、ながいながい色責めに、くたくたになっただけなのに、周囲でしきりに奇声をあげていた他の若い人たちがとびかかってきてうしろから、はがいににやにやされました。

「奥さんのバスト、九〇センチはあるな。畜生、たまらねえや」

前にいた人は、何というお名前だったかしら？ 静子、もう思いだせなくてよ。

「この女、いい軀してやがる、ヒップは一メートルとくらあ……」

あたくしは、若い方たちをできるだけ魅惑するために、首筋をのけぞらせたわ。その唇に、三人目のお酒くさい唇がおおいかがさってまいります……。それはながいながいキス。あたくし、こらえようとしてこらえきれないうめきが、ふさがれている唇からもれてしまいました。それというのも、両脚をうけもっておられる方が、とってもお上手なんですもの……。

静子ってもうダメ。くる日もくる日も、このお邸で、殿方のお相手ばかりしていて、どこかカラダの一部でも触れられると、まるで条件反射みたいに、相手のお方をお慰めしな



くては——とおもってしまふようになっていきます。相手のお方をお喜ばせることは、まず静子がさきに、責められる欲びに浸ってゆかなくてはだめ。あたくしの体が酔いしれてこそ、相手の方のお楽しみがふえるということなの。たとえ、粗野なふるまいをなさっても、それに従順にひれふしてゆく調教を鬼源さんと千代さんはあたくしにほどこしてくださいましたわ。……三人の若い人に体中を責めまくられる。静子は、もう何人の方の相手をしているのか、三人なのか五人なのかよくわかりませんでしたわ……。ただ夢中でこれまで受けてきた調教のすべてを実習しながら、静子はこの世でもっともかあいそうだと

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いません。致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

った女の人でも、きつとこんなことはなかったと思えるような羞かしめの淵に沈んでゆきましたの。……ただあふれつくして半狂乱のようになっていく、あたくしを冷ややかに見下ろしながら、又しても鬼源さんの声。

「さあ、お前たち。用意ドンで、ぶちかませ……ウハハハ……」

そのせつなでした、まことの瞬間、あたくしが粉々にされる寸前のまぶたをとじるときみてしまったのでございます、美津ちゃん小夜ちゃんの姿を……。

二人のお嬢さんに加えられる毒牙をあたくしのカラダで、うけとめることができるかもしれない。そう考えたのは、まったくあさはかなことでしたのね。あたさまぎるような号泣。△きれぎれに、殆どききとれないくらいに△小夜ちゃんに二人の男が。……そして、後手にしぼりあげられた美津ちゃんにも……。

△精も根もつきはてた口ぶりで……△

やがて、あたくしはなんにもわからなくなってしまうしたわ。もうお嬢さんたちのことも忘れて……

△すすり泣きがあまりに長いので、テープが終わりそうになる。陰々とした心からの悲しみをあらわす泣き方とは、こういう泣きかた

をいうのだろう△

——もう、このくらいで、お許しくださいませ。どうか、どうか……。静子、もうすっかりくたびれましたわ。あすも早くからお稽古がございますし、そのためのスタイルやお尻のまわしかただってお休み前にじゅうぶん練習しておくようにって、鬼源先生からいいつけられておりますの。どうぞ、あなた、お願い。静子、あなたがとってもいい人だということがわかりましてよ。あなたを好きになっ

てしまったら……。あたくしどうしよう……。△ハスキーな、哀れさのにじみでた声。ため息。男のボソボソいう声が、かぶさる△

——ええ？……そうなの!! やっぱ静子の体が、おのぞみですのね! あなただけは、そんなことをなさらないと思っておりましたのに……。いう通りにしないと、いままで喋ったことを、みんな千代さんに話すって? いやいやそんなの! おねがい、それだけは、かんべんしてちょうだい。え! 録音していらっしやるんですって? ひ、ひどい方! △たえかねたような涕泣がオーバーラップ。ずい分、ながい。やがて、すっかり、あきらめたらしい女の声は、つかえ、つかえ、甘い甘い睦言の声となる△ ——了——

連載・青春の陥穽 ⑬

# 実験報告

芳 野 眉 美

A

△ローソク・ベッド・ショーというからローソクの炎だけで、全ストをするのかと思ったら、そうではなかった。

ベッド・ショーといっても、ステージに薄い敷布団を一枚だけ敷いたもので、しわくちゃのシーツが、かえってワイセツに見えるから不思議である。

洋式のトイレと和式のトイレ、洋式のベッ

ドと和式の布団を考えると、洋式のは、どう

しても明かるく、和式のは、なんとなくワイセツに思えるから、日本の方が生活様式が、より人間的でワイセツなのかもしれない。

……てなことを書いている本人が、一番ワイセツで、ほかに趣味がないから、全ストばかり見ることになる。

ただ、なんとなく踊って、なんとなく見せるだけでは進歩がない。マンネリになれば客も来ないから、あの手この手と考える。



カット・春 川 ナミオ

ベッド・ショーも、その一つに違いない。

金髪ベッド、芸者ベッド、花嫁ベッドといろいろ名前をつけるけれど、ようするに、ステージに敷かれた布団の上で、オナニーのまねをするわけである。

人気は、その露出度に比例する。

ところが、そのベッドも、そろそろマンネリになった気配がする。一人では売れないから、二人組み合わせてレスビアン・ショーになる。女二人のベッド・ショーへと変化した



わけである。

ここでも、人気は、よりレスビアンに近い露骨度に比例する。

まねではなく、本気になってレスビアンにふけるカップルも、かくして出現する。

が、そうそうレスビアン組をつくるわけにもいかない。そこで、夜光ベッド、手品ベッドと、夜光塗料をぬったり、手品を見せたりする器用なのが出てくる。

その変形組の一つが、ローソク・ベッド。小柄な身体は、数多くの肉体関係をわからせてしまうほど男の体臭が、しみついているように感じる。ただ踊って、なにやらを見せるだけなら、自然に消えてしまう女に違いはない。客に見せる乳房ではなく、あさ黒い裸体は不潔にさえ見える。

若くて綺麗で美しい女体が、古い女たちを舞台から消していくのは自然のことである。金髪をなびかせ、産毛のような体毛さえ金色に染めて、豪華な衣裳で踊る若手に、古い女たちは、ますます色あせていく。

その女の肌に、火傷のような跡をみたときこれから始まるローソク・ベッド・ショーが何か残酷に思えた。

男に責められ、タバコの火や、ライターの

火を押しつけられたときに、ローソク・ベッドが生まれたのかもしれないと、勝手なことを考える。

後手に縛った女の髪を、わしづかみにし、ひきずりまわしたり、足で踏んづけたり、けとばしたり、あげくのはてに髪を切られて、スカーフを頭にかぶって店に出て来たという女に出合ったことがある。

かせぎが少ないからという理由で、同棲している男に責められ、それでも逃げることもせず、客をとり店にくる。

古い話だともうかもしれないが、どこにでもある話である。夫婦のSMプレイなどという、優雅なものではない。

ローソク・ベッドも発端は、そのへんにあるのではないかと、モウソウは、ますますエスカレートする。そう思って見ていた方が男のSを、くすぐるものである。

百目ローソクを五、六本、たばねたのに火がつけられた。蠟涙が、こびりついて、残酷ムードを盛り上がらせていく。

女は全裸になる。

犬のような露骨な恰好になり、それらしい音楽に合わせて腰を動かす。片手は下から、のびて股の間にある。指の一本、二本が隠れ

てしまっている。

犬の恰好は、ベッド・ショーの方程式でもある。彼女らは、男たちが一番、好む恰好をよく知っている。四つ這いになることは、女の受身と被虐性を現わしているが、また、能動的であり、加虐的な男を表現していることにもなる。

ステージで、彼女たちは男を演じながら、同時に、女を演じているのである。

SEXに対する奇妙な錯覚がそこにある。裸の尻が高く突き出され、男の視線が集中する。

女が仰向けになり、百目ローソクの束を両手に一組ずつ、つかんだ。

捧げるようにしていたのを倒すと、すすつと蠟が彼女の胸に垂れた。

「ああっ」

という絶叫。

芝居がかっているが、場内は、しんと静まりかえってしまう。

「ああっ」

絶叫は続く。

二つの乳房が蠟涙で埋まっていく。太く突起した乳首に、ぽとぽとと蠟涙が、したたつていく。

夫婦のSMプレイとしてクリップ・プレイを発表した人を思い出した。

クリップで乳房をはさむのは、それほどでもないが、乳首となると、激痛が頭のとっぺんまで走るといふ記事である。

乳首は、ほかの肌の部分と違うのである。

女は、ローソクの束を、肌から遠ざけたり火傷するくらいに近づけたりした。またたくまに、女の裸の胸が蠟で厚く、おおわれた。両足を大きくひらき、男の代役を、彼女の指が、はたしていた。

露出度は、えげつないほど高すぎた。

「熱くないのかな」

と、誰かがいった。

ろうそく責めにあったことがないので、よくわからない。友達のYからは、熱くない距離をきいたことはある。

しかし、ローソクベッドの女のは、あまりにも接近しすぎている。ほどよい熱さが、女体を興奮させるのかもしれない。

夫婦のSMプレイにも、女体にローソクを立てることが、よくでてくる。小さな細いローソクと、長い太いローソクを立てるローソク立てを女体は、ちゃんと持っている。

ある誌友の自宅に招待されたとき、全裸の

奥様の人間燭台で、酒をくみかわしたことがある。両足をくくって、上に持ちあげ床柱に縛りつけて、お尻をまっすぐ上に向けるという、ちょっとショックな女体燭台であった。御主人は小さな細いローソクを立て、残酷にも火をつけたのである。

奥様に浣腸し、蠟涙で密閉することを考えたのも彼であった。

アヌスは乳首と同じに、ものすごく敏感なのである。ローソクのアヌス責めの併用である。

長い太いローソクを奥様のどこに立てたかは、ここでくわしく書くことはできないが、二本は、たてられたのである。

そのうち、ローソク・ベッドも、ここまでエスカレートするかもしれない。

## B

「青春の陥穽」のカット、春川画伯の絵はすばらしく、また、実用的で非常に助けられるのである。

いきつけの飲み屋の若い奥さんが、私（芳野）の珍小説を一度みせてくれという。そのときは、別に下心があったわけではなかったが、春川画伯のカットを見ていたら一計を思

いついた。

若奥さんは私好みのタイプなのだが、御主人をよく知っていて、いくら密室的な小料理屋の座敷でも、若奥さんをどうすることもできないのである。

客商売だし、かなり色っぽくしないと客は集まらない。だから、かなり露骨なことをする飲み屋という話は聞いていたが、あまり親しいと、意外に、まじめなつきあいになるのである。

それでは、つまらない。

二人でいけば、座敷を一つ、占領できる。私の珍小説の読者でもある悪友に援軍をたのんで、でかけた。

「持って来たよ」

と本誌を、だした。

「あら、この雑誌なら、見たことがあるわ」

「それは有難う」

「お客さんが持ってくるわよ」

下心がある、客にちがいない。

「どれなのよ」

と若奥さんが私に、いった。

悪友が「青春の陥穽」を開いてみせた。

「あとで読めよ」

と私がいった。



「カットだけ、さっと見てよ」

「カット？」

と若奥さんが、いった。

私は『二匹の雄犬』のところを見せた。男の顔に背を向けて、男の胸にまたがった女が銚子を男の口に突っ込んで、酒を飲ませている図である。

「なあに、これ」

と若奥さんが、いった。

「ねえ、こんな風にして酒を飲ませてよ」

と私は、ささやいた。

「なんだって？」

「この小料理屋に、ぴったりじゃない」

「馬鹿」

「これは、どう」

と『新妻の秘密』のカットを見せた。着物の裾をひろげ、両足を開いた女のうしろで、男がビールのジョッキを持っているものである。

「何をしているところなの」

と若奥さんが、いった。

「見れば、わかるでしょう」

「わからないわ」

「ビールをジョッキで受けている図なんですよ」

と私は説明した。

「ビールを受けるって？」

「だからさ、つまり、若奥さんがビールを飲むでしょう」

「ええ」

「若奥さんの体内で、ほどよく暖められたビールを、今度は、ぼくが頂くということよ」

「どういうこと？」

「早い話がね、若奥さんのオシッコを、ビールのジョッキで受けるってこと」

「きたない」

「きたないですよ」

「それで、どうするのよ」

「どうするって、飲むのにきまっているでしょ」

「きたない、きたない」

「きたないよ」

「H、スケベ、ヘンタイ」

「わかりましたよ。次にいきましょう」

『女郎蜘蛛』の春川画伯のカットは本当にすばらしい。

「これは、わかるでしょう」

と若奥さんに、いった。

「いやあねえ、犬の首輪なんか、つけたりして」

「あれ、知っているね」

と私はニヤニヤした。

生埋めにされ、首だけだした男の口に、女王様が放尿している図である。（そこまで、はつきりとは描いてはいないけれど）

「女王様がね、男奴隷の口に、オシッコをしているところ」

「いやらしい」

「女王様が若奥さんで、生埋めにされている雄犬が、ぼく」

「H、スケベ、ヘンタイ」

「次にいきましょう」

「もう、いいわ」

と若奥さんが、いった。

「おかしくなっちゃう」

「そこが、つけめ」

「なあに」

「いや、こっちの話」

「おビールを、お持ちするわね」

と若奥さんが立ち上がった。

「大きなジョッキもね」

「馬鹿」

ビールを持って来た若奥さんが、ちょっと驚いたらしい。畳に寝た悪友の胸に店の女が裾をまくって、またがっていたからである。

「どうしたの、いったい」

「だって、しようしようって、きかないのですもの」

と店の女が若奥さんに、いった。

若奥さんのいないときに、この女に千円札をにぎらせただけの話なのである。

この小料理屋の女は、みんな着物だったし着物の下にパシテイを穿いているような無粋なのは誰一人としていないのである。

「く、くるしい」

と悪友が叫んだ。中年女の、どっしりと重い尻が、『二匹の雄犬』のカットのよう、悪友の首をしめつけていたのである。

「何よ、意気地なし」

「重いよ」

「そのほうが、いいでしょう」

女は、銚子をとると、酒が入っているのをたしかめ、いきなり悪友の口に突っ込んだ。

「あふ」

奇妙な声が出たかと思うと、悪友の口から酒があふれて、鼻に入った。

「ううう」

涙を流して悪友は顔を振った。

「およしよ」

と若奥さんが、いった。

「いいんだよ」

と私は、いった。

どかっと、またがった女が、悪友の、そこだけがテントみたいになっているのに注目した。

「こんなことされて、本当に気持が良いのかねえ」

と不思議そうに女が、いった。

女の手が、悪友のズボンにのびた。

「助けてくれ」

と悪友は叫んだ。

「うるさいわねえ」

銚子をつかみ、また悪友の口に突っ込むと上からおさえて、吐き出せないようにした。

悪友の顔が、また酒びたしになった。

「若奥さん、お酒がないわ」

と女がいった。

かたはしから悪友の顔にこぼしているのだから銚子が空になるのはあたりまえである。

銚子を運んできた別の女が、あきれたように悪友の顔を見下ろしていた。

「若奥さん」

と私は、いった。

「だめ？」

「だめ」

と若奥さんが、いった。

「ビールを、どうぞ」

と、私はビールを若奥さんのコップに、ついだ。

「どんどん、飲んでもらわないと、ぼくがビールを飲めない」

「どういふこと？」

と若奥さんが、いった。

「若奥さんの体内を通過したビールでなければ、飲みたくないんだ」

「だめです」

と若奥さんは私を、にらんだ。

大きな尻で、悪友の首をしめつけていた店の女が、方向をかえて、悪友の顔を股で挟んだ。着物の裾は、すっかり、はだけていた。

女は、銚子をかたむけて、自分の樹海に、しめりをあたえているのである。

「フフ」

と女が笑った。

「こういう飲ませ方だって、あるわよ」あふれた酒が悪友の口に流れ込んでいた。

「はい、ビール」

コップが空になると、私は若奥さんにビールをついだ。

「早く酔って下さいよ」



「酔わないわ」

とろりとした若奥さんの流し目に、ぞっとした。若奥さんには弱いのである。

若奥さんが立ち上がった。

「トイレですか」

と私は、きいた。

若奥さんは、うなずいた。

「もったいない」

と私は、いった。

「ああ、もったいない」

「何が、もったいないのよ」

「わざわざビールを捨ててしまうなんて」

「しょうがないでしょう」

「ああ、飲みたい」

「――」

「若奥さんのビールが飲みたい」

「しょうがない、ひとね」

悪友の顔は、店の女の着物の裾にかくれて見えなくなっていた。

「あれ」

と女が叫んだ。

「本当だわ」

と、いった。

「どうしたの」

と若奥さんが店の女にきいた。

「本当に飲んでいるのよ」

「何を飲んでいるの」

「オシッコ」

「えっ」

私は若奥さんの顔を見上げニヤリとした。

悪友ののだが、ごくごく鳴っていた。

「ねえ、おいしいの」

と女が私にきいた。

「おいしい、おいしい」

と私は、いった。

「いいわ」

と若奥さんが、いった。

立ったまま、着物の裾をつまみ、足をひろげた。

「少しよ」

と若奥さんは熱っばいまなざしでいった。

「少しって、とまるものなの」

「そんなこと、知らないわ」

私は空のコップを差し出した。

「そんなの小さいわ」

「ほかにないよ」

「早くして」

と若奥さんが、いった。

私は、あわてて若奥さんの腰に、しがみついた。

「いいこと？」

と若奥さんが、いった。私は、口に流れこんできたビールを、畳にこぼしては、いけない。ただ、それだけが、頭の中にあった。

若奥さんのあたたかいビールは、少しずつ勢いを増し、量を増した。

息をしている、ひまもなかった。しかし、絶対こぼしては、いけないのだ。ここが浴室なら、半分は口から外に流してしまうところだった。

私は夢中だった。死にそうであった。

いつかは、『客ならぬ客』のカットを、若奥さんと実験してみようと空想する。

女王様のお尻の下で口を開けている男のカットを見た若奥さんは、ただ首を横に振っただけであった。

「そんなことしたら病気になってしまうわ」

と若奥さんは、いった。

## C

閑話休題――まったく、よく脱線する。

不意に、とび出してきたところの本妻の訪問を受けたあとの三田のことを、少し書く。

本妻が去ったあと三田は、しばらく呆然自失といった状態で、ぼんやり夜を眺めていた。

「どうかしたのですか、三田さん」

声をかけられて三田は、びっくりした。隣の大崎であった。

「奥さんは、お留守ですか」

三田は、うなずいた。

「それは、めずらしいですね」

大崎は、じろじろと三田の家の中を見た。

「ほほう、勇君もいませんね」

「二人で、でかけたらしい」

と三田は力なく答えた。

本妻の出現が、かなりこたえている様子であった。

「元気がありませんね」

と大崎は三田に、いった。

「実は私も今夜は一人なんですよ」

「奥様は、まだお帰りにならない」

と、三田は驚いて大崎に、きいた。

商売とはいえ、大崎は、自分の妻を、相手の

バイヤーにあずけてきているのである。

自分の妻が、商取引きの相手の男と寝てい

る。それなのに、この男はうれしそうに一人

の夜を楽しんでいる。

三田は大崎の顔を、まじまじと見た。大崎

のことが、よくわからない。

「面白い遊びをしましょう」

と大崎は三田に、いった。

大崎は、自分の家から、ステレオの大きなダンボール箱を、かかえてきた。箱のフタには穴が、あけられていた。

「待っていて下さいよ」

ダンボールを三田の家に置くと、大崎は嬉し

しそうに三田に、いった。

大崎の家から、二つの陰が飛び出て、三田

の家に向かってきた。

「びっし」

と皮鞭の音が空を切り、三田を、はっとさせた。

「びっし！ びっし！」

鞭を持つ大崎に追われている黒い影は、歩

けないのか、よろよると、よろめき、よちよ

ち、歩いていった。

屋外プレイにしては余りにも大胆すぎた。

三田の家に鞭で追われた黒い影が、ようや

くだどりつき、車のかげから姿を見せたとき

「あっ」

三田は驚いて立ち上がった。

後手、股間縛りにされた、全裸の女であっ

た。

「妻にないしょの、私の女ですよ」

と鞭を持った大崎が笑った。

「この女も飼育しがいがありますよ」

大崎は、むきだしにされた女の尻に、

「ばっし！」

と鞭を振り下ろした。

女の口には、がっちりとセロテープがはら

れて、女の悲鳴は体内に逆もどりしていた。

女が背中を丸めて、よちよち歩くのは、股

間縛りのせいだけではなかった。体内深く、

つめものが、されていたのである。

「女奴隷のためのマスコットです」

と大崎は三田に説明した。

「女奴隷は、私の代用として、いつもマスコ

ットと一緒になければなりません」

これでは歩けないわけであった。

三田は唸った。

若い大崎が、てつて的に女を飼育し、商

売の道具にも使い、また、日々のSMプレイ

を充実させて、SEXを満喫しているのに、

あきれたのである。

三田のM的生活と違って、大崎のS的生活

は、大崎の思い通りに動いているのである。

能動と受動の差であった。

大崎はマスコットの頭をつかんで、動かし

た。女は顔をしかめて悶えていた。

「さあ、歩け」



大崎は女を三田の家に追い上げた。

「この中に入るんだ」

ダンボールのフタをあけ、全裸の女をかかえると、中に押し込んだ大崎は、女のまわりにぎゅちりと詰めものをしてから首だけだしで、すっぽりフタをした。

セロテープで口を閉じられた女の首が、ダンボールから、まるで、さし首のように突き出ている。

大崎が猿ぐつわのセロテープを、はいだ。

女が荒い息を吐いた。

「三田さん」

と大崎は、いった。

「奥さんに責められてばかりいないで、たま

には女を責めてみませんか」

大崎は箱にとび上がると、女の生首に、またがって、ズボンの前をはだけた。

「さあ、三田さん」

さっと箱からはなれると、大崎は三田を、けしかけた。

「奥さんから、放尿されてばかりしていないで、一度、ご自分が、この女に放尿してごらんなさい」

大崎は残酷なことを平気でいった。

「まさか」

「大丈夫ですよ」

と大崎はニヤニヤした。

「私は、この女のアパートにいくと、いつも

### 【伝言板】

○分譲品総目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依ってのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号晩出版株式会社へ願います。

便器がわりに、この女の口を使っているのですから」

「――」

「気がむけば、大きいほうだってしますよ」

「そんなこと……」

「三田さんだって、奥様から、大きいほうをされたでしょう」

「それは……」

「同じことですよ」

大崎は、大きいほうをしたあと、セロテープでがゅちりと女の口を閉じてしまい、鞭で女を打つということであった。

鞭の痛さと、ちっ息してしまうかもしれないという恐怖で、女は死にものぐるいになるらしい。

三田は、大崎に追い上げられるように、おそるおそる箱の上に乗った。

大崎のいいなりにする気はないが、ダンボールから生首をだしている女には、男としての興味があつた。

女の唇が、やさしく三田を迎えた。

三田は、信じられない気持だった。

遊びつかれた二人の男が寝息をたてはじめたとき、三田の家の庭に女を完全に梱包したダンボールが残されていた。

（続く）

カット・黒田 縛



## 鼻責めに

つかれて

中村 葉奈男

告

白

私はどちらかというとMの方ですが、中でも鼻責めが大好きです。鼻を洗濯ばさみではさんだ写真などをみると、小さいときから、一人で興奮したのを覚えています。奇クにもっと鼻責めに関する記事が載るといいと思っていますが、ほとんど出ていないといつてよいくらいではないでしょうか。

私は、SMに関しては全くの素人ですが、一人で出来る鼻責めを、これまでいろいろと工夫してきました。それを、ここで御報告したいと思います。

私が一番はじめに試みたのは、鼻に麻ひもを通すことでした。鼻の孔が口とつながっているということは、食時中にくしゃみをしたときなど、御飯粒が鼻から飛び出すことから明白で、鼻の孔へ入れたひもは、うまくすれば口から出てくる筈だと考えました。

体には体液が一番と思ひ、細い麻ひもを口に含んで唾液をつけ、この麻ひもの端を片方の鼻孔へ一杯につめ込み、反対側の鼻孔を指で押えて思いきり、すすり込むつもりでしたが、麻ひもの詰め方が難しくて、なかなか思

うようにはゆきませんでした。

何度かつめ直して、ようやく成功しましたが、ずるずると、ひもが鼻の底に滑り込む時の快感は何ともいえませんでした。つんと頭にひびくような刺激と、かゆい所をかくような感触で、予想以上に私を夢中にさせてくれました。

刺激を受けて水鼻が口へ出て来ましたが、これは丁度よい潤滑剤だと思ひ、手で鼻孔へ移して、ひもと一緒にすすり込むと、思い通り痛みもなく、やすやすと麻ひもが鼻孔へ吸い込まれるので、むしろびっくりしました。

そうしているうちに、鼻の奥で一瞬、ある快感を感じると同時に、ひもの先端が口へ出て来ました。とうとうやった！ という気持ちも手伝って、ゾクゾクする様な快さでした。

しかも、口から出たひもを引っ張ってみるとさほど痛みもなく、ずるずると、ひもが動いてくれたのでした。

はじめは一方の鼻孔へ通すだけでしたが、そのうちに、面白いことを考えつきました。一方の鼻孔から口へ麻ひもの一端を通し、その麻ひもの他端を別の鼻孔からすすり込んでそれも口へ通してみようということでした。

もちろん、早速やってみました。

口の外でひもの両端を結ぶと、鼻の中柱を中心にループ状のひもが出来たことになり、この思いつきに満足しました、ひもの片方を



引っ張って、その結び目を一方の鼻孔から、鼻の奥を通して、他方の鼻孔へ引き出せた時には、有頂天になりました。

そこで、また思いつき、先程の結び目を、一度ほどき、今度は鼻の中柱をしめつけるようにぎゅっと結び直して、長いひもの一端を柱へしぱりつけました。ついに、鼻の中柱をしっかり、くくったひもで、柱につながれた「家畜人間」が出来上がり、そんな姿で、はだかになり「モウ、モウ」と牛の鳴き声を立てたりすることが、私にすばらしい陶醉を感じさせてくれるのでした。

現在、私の鼻の中柱には左右の孔を結ぶ直径5ミリ程の穴があいています。これは牛の鼻輪を真似したかったのであけたのですが、今では、この穴を使って実にいろいろな鼻責めを楽しんでいます。鼻の中にあいた穴ですのて普段は誰にも判りませんが、あける前には、アフリカの人喰人種が鼻に穴をあけ骨などを横に差し込んでいる絵などを見るにつけてまた、牛の鼻輪を見るにつけて、私にもあんな穴があったらなあと思つたものでした。

針を鼻の中柱へつき通すことは比較的容易でしたが、抜けばすぐに穴はふさがってしまいます。私は永久にふさがらない、何でも通せる穴がほしいと真剣に考えるようになりました。ある時、私は近くのスーパーで洗濯ばさみにナイロンの白いひものついたものを見

つけました。糸を撚ったものでなく、円形断面の一本の太いナイロン線で、直径が二、三ミリ程のものでした。私は「これだ」と思いました。ナイロンならば体液に侵されることもなく、化膿したりはしないだろうと思つたからです。

早速に太い針を使用して、いつものように鼻の中柱（五、十ミリ奥にある軟骨のすぐ手前）へ通しました。針の先端を通すときの、何とも云えない痛みと快感が私には好ましいのですが、血はほとんど出ず、この針を通したあとへ、買ってきた例のナイロン線を短かく切つて通しておいたのでした。

しかし、人体には異物を巧妙に排出する作用があります。はじめは、あまりきつちに切つたため、すぐにはじき出されしうのでした。何度もやりなおした結果、ナイロン線を両鼻孔の中一杯になる程度に長くして、はじめで一晩安心して、眠れるようになりました。そして、このナイロン線を一カ月間ほど入れたままにしておいたのでした。

はじめ、ある人から「鼻のまん中あたりがふくれているようですが、どうかなさったのですか」と聞かれて赤面したことがあります。だが、一週間もたつとほとんどふくれが目立たなくなり、一カ月後には穴の周囲に新しい皮が出来、ナイロン線を入れたり出したり自由出来るようになりました。この時は嬉し

くて、胸がワクワクするのを抑え切れませんでした。人の体はうまく出来ているもので私の予想は違わなかったのです。

人間の慾望には、きりがありません。もっと穴を太くしたい、私はそう思う様になり、ナイロン線のまわりにセロテープを貼り、やや太くして通してみました。穴の周りに感じる緊張感が、また別種の楽しみでした。セロテープの厚さはいくらあるか知りませんが、何重にも巻くと確実に太くなっていきます。〇、三ミリ太くしては一週間、更に〇、三ミリ太くしては一週間と次第に鼻の穴を大きくしていき、さしたる無理もなく、誰にも気付かれず、直径五ミリ位になりました。

今はもう、皮がすっかりしていますから鼻の栓（私はナイロン線をセロテープで太くしたものをこう呼びます）は、穴にきつちりのものでも問題ありません。しかし、これ以上太くすると、一寸あおむいただけで、すぐ外から見えてしまいます。秘密を守るため、これ以上は太くしないことにしました。

今、この穴を使って、いろいろな遊びを工夫しています。例えば、鼻に花の枝を通して生花を楽しむことも出来ます。鏡でみると鼻のまわりが美しい花で飾られ、しかもふくやかな匂いが何ともいえない陶醉境にさそってくれます。もちろん、鼻責め遊びにはフル活用ですが……。

——（おわり）——

連載——時代S小説

紫

蘭

の

門

2

男は心を開き

—女は股を開きてのち—

—始めて親密なるを得む。

風 流 極 道 軒

~~~~~ カット・岡 たかし ~~~~~

蘭 らん麿 じゃ

「穴沢流柔踊とは、まったく、よく名付けたものよ。柔らかな女の肉を、やさしく撫でて

のような裸身を、ぴく、ぴくと慄わせている。菊亭貴子の太腿を撫でながら満悦している。このやくざの親分にとって、蘭麿の香りの匂う女体を自由自在に翻ることが、どんなことにもまさる快楽のように思われてきたのに

やることによって、踊

らせるって趣向か」

鞭兵衛は、右足をたかだかと吊られ、左足ひとつで身を支えながら、白く匂う蘭の花弁

違うない。

つやつやと、乳色に輝く太腿から、内股、さらには、触れた指先が、つるりと滑るほどなめらかな素肌をまさぐり、まるで、こどもが玩具に熱中しているように、（こうかな、それとも、こうか……）など、ひとり言をいしながら、時々、顔を上げて、貴子を眺めるのは、女の顔の反応を楽しむためのものであり、貴子が、依然として眸をしっかりと閉ざしたままの誇り高い顔をしているのを確かめると、



「それでも、駄目かな。これでは、どうじゃ今度こそ！」

と、意地になったように、手首を上下左右にふりうごかす。

普通、掌の長さは、中指のさきまで、六寸くらいのものであらう。鞭兵衛は、それが八寸近く、まるで相撲取りのように、長くて太い掌であった。と、云うことは、巨大な十匹なめくじの蛞蝓が所きらわず這いまわっていることになり、どんな女でも叫喚し悲鳴をあげるものと思われるのに、貴子は、まだ、じいっと歯を喰いしばって、呻きひとつ洩らさない。

いまの時間にして十分、いや二十分近く鞭兵衛は、その動作をつづけたが、到頭、業を煮やしたように、両手は、そのまま、上体をのばすと、がっぷりと、右乳房に歯をたてて、揉みしだき始めたのであった。

前号梗概——前右大臣正二位菊亭政房の息女・貴子と、その侍女久我雅子は、「豊太閤五夜のロザリオ」をめぐる女性として、御公儀金銀為替御用元禄屋重右衛門の陥穽に落ち、江戸は日本橋四丁目土蔵造りの本宅で、羅卒の鞭兵衛とその乾分青縄の青蛇以上五人の穴沢流捕縄術の達者に責め苛まれる。

いままで、じいっと親分の動作をみまもっていた青蛇であったが、貴子が、あまりに表情を変えないのに、我慢できなくなったらしく、その背中に回り、

「親分、手伝いますぜ！」

と、「く」の字に曲がっている貴子の臀に両手をかけると、むっくりと盛り上がった双つの丘をひろげようと、し始める。

「ムウッ！ ムウ！」

耐えに耐えていた貴子が、はじめて洩らした呻きであった。

よくとおった、鼻筋の左側を、すうーと一滴の汗が走り、上唇の端でとまったが、乾ききった朱い唇のなかに、やがて吸い込まれるのを眺めていた昭吉が「私も、私も加えて下さいよ」と、その乾いた唇に、分厚く醜くい唇を寄せて行くのを、白豚とて、見すぐすわけはなく「親分、あっしは、こちらを！」と左乳房に、黒く歯石のたまった歯並みでかみたてていく。

女一人——それも後手に縛り上げられた裸身で、片足を天井から吊られ、四人の男に、前後左右から責めたてられ、弄ばれては、たまったものではない。

「うっ！ ウ…… ウ…… ウー！ ウーン」

貴子の呻きが、次第に甲高いものになり、「ヒイ！ ヒイッ！ ヒャア……」

やがて、魂ぎるような悲鳴にかわった。

喜んだのは、男たちであった。あまりの反応のなさに、この女、ひよっとすると不感症なのでは、と考え始めていたときだけに鞭兵衛などは、喜びの色をかくそうともしないでさらに、荒々しい攻撃の手を、急速度で加えて行く。むろん他の男たちも、負けじとばかりに責めたてたのは、いうまでもないこと。

それからさらに十分も経ったころであろうか、昭吉の唇が、首筋のあたりを這っているとき、貴子が、

「お、お、おやめになってー！」

大きく口を開いて、咽喉の奥で、押しこらすように叫んだ、

「おやめになってくださいまし。わ、わ、わたくし、もう、もうこれ以上は、アア！ アッ！ キャアッ！ やめて、やめてく、くださいませったら！ キャウウ！」

激しく打つ胸の鼓動に、ときどき途切れ、低く、高く、断続して、貴子は、遂に、許しを請うたのである。

「フッフッフ……姫君。その言葉がおそすぎたようでござりまするな。男たちは、いま

幸福の絶頂にいる。もう少し、お相手をつとめて貰わなくては、いけません」

四人の男に翻られる貴子の汚辱の姿を、くるくると廻りながら、自らは手をくたさず眺めていた元禄屋が、からかうように云う。

「お、お願いでござりまする。もう、キャアッ！ おやめくださりませうたら！」

荒波に翻弄される笹舟のように、全身をうごめかせながら貴子は、切長な眼をうっすらと開いて、元禄屋に訴える。

「キィッ！ どうか、どうか！ わたし、もう、これ以上は、これ以上は！ ほんとうにもう！ た、た、たかあきさま！」

貴子は、到々、別れた夫である押小路中納言高明の名を我知らず口走り、青い縄もきれよとばかり、右足を振り、腰をふるわせる。

「やめるなよ。鞭兵衛、やめるでないぞ！ 儂が、やめると云うまで、つづけるのじゃ」

元禄屋は、なおもくるくると、周囲をまわっていたが、

突如――

「やめろ！」

と大きな声で命令した。その声にびっくりして四人が、思わず貴子の裸身からいっせいに手をはなしてたち上がると、

「近よるなよ、触るでないぞ。儂の真実、知りたいのは、これからじゃ」

と、四人の男たちを二歩三步、後退させ、自分は貴子の三尺前に床几をすすめて、どっかりと腰をおろし、射るような目で、見つめはじめたのである。

「旦那様。こ、これからじやと申されますとこれから何か旦那さまが、この女に」

元禄屋は、答えなかった。ただ、黙って、貴子を凝視する。

昭吉たちの目も、自然に、貴子の裸身に注がれた。

と、五人の男たちの見守るなかで、面白い光景が展開され始めた。

貴子が、あれほど、無表情に、淫らな攻撃を受けとめつづけてきた貴子の裸体が、その攻撃が、いっせいにやまった途端、微妙な律動を、しめし始めたのである。

せつなそうに、白い頸をゆりうごかし、悩ましげに豊かな臀をふり、乳房から下腹への肌を大きく波打たせながら、全身を、白い大きな蛇のようにくねらせ、ときおり、

「あ、あーあ、う……」

やるせなさそうな喘ぎを洩らす。

「どうしたい、姫君！」

白豚が声をかけると、うっすらと瞳をひらいて、そちらの方を眺めたが、その顔には、えんぜん 艶然とした風情すら、泛かべられていた。

「こいつは、驚いたぜ。姫君、まだ翻られ足りねえと見える」

青蛇の声にも、嫌悪の情ひとつうかべず、むしろ、媚態とさえ見えるように、吊られた右足の指が微妙にうごめく。

「ウーン……い、いやです……いやですわ、このようなこと……」

甘い、鼻にかかった声をだし、なおも、乳房を、ぶるん々と震わせ、幻にでも訴える如く、宙空に向けて囁きかけるのだ。

「いやですったら、このようなこと！ 妾、ほんとうに、いやですったら、ねえ……」

垂髪が、右、左と、肩から、胸元のあたりで揺れ、貴子は、なおも悩ましげな柔らかな踊りに似た、蠢きをつづけ、それにつれて、男たちの唾液や、汗に、かきけされていた蘭麝の香りが、再び漂い始めたのであった。

「どうじゃい。女というものはな、せっかちに責めあげるばかりが能じゃあない。追いつめて、すうーっと、離れる。女は、肩すかしを喰った気持になる。つまり、もっと責められたくなるのじゃ。なまじの拷問より、はる



かに効きめのある女の操りかたよ」

元禄屋は、ゆっくりと立ち上がり、貴子の広い額にかかる垂髪をわけながら、

「貴子姫。さあ、可愛がってやるから云いなさい。どこにある、ロザリオは」

元禄屋が、やさしく、貴子の顔を抱きかかえながら、自信をもって訊ねる。

（男は、心を開いて仲良くなり、女は、股を開かせて始めて親密な仲となる）と云う持論を、ためすには、絶好の機会であった。

やさしく、やさしく、顔を撫で、胸の辺りを愛撫していったが、貴子の唇は、ただ喘ぐだけで、肝心のロザリオについては、何ひとつ、告白しようとはしない。

（こんなはずは、ないのだが……）

元禄屋は、軽い焦立ちを覚えながらも、いっしか我知らず、貴子の白蘭の花びらに似た裸身の魅力に、知らず知らずに捕えられて、謎をとくことよりも、貴子を悦ばせることに熱中しはじめていった。

正二位前右大臣菊亭政房の息女・貴子姫、その二十五才の皎々として輝く裸身は、江戸の男たちにとって、まさしく天女かと思われる魅力を溢れさせていたのである。

「旦那様！ 旦那さま！」

昭吉の声に、ハッとした顔で元禄屋は、

「フッフッフ……我にもないこと。しかし眺めてよし、触れてよし。この女、もう離しとうのうなったわ。フッフッフ」

てれかくしのように笑うと、自らの手で貴子の吊られていた右足をおろして縄を外してやり、後手首の縄も解く。だが許すつもりはないらしい。

さすがに、くたくたと床板にうつぶせて、大きく呼吸する白い背を見おろした元禄屋。

「儂が、縛り直してやろう」

と、豊かな垂髪をふたつに分けると、その一方を手にして、

「昭吉、おこしてさしあげな。両手は、もう一度、後に組ませて」

昭吉が、前から肩に手をあげて、貴子の上半身をもたげさせる。

ふと、開いた貴子の瞳が、昭吉の目と、ばったりと合ったとき、ドキッと、胸を高鳴らせたのは、昭吉の方であり、貴子は、静かに両手を自ら後背に回すと、ふかぶかと交差させるのだった。

その両手首に、黒髪が、三巻、される。

「丈<sup>た</sup>けのながい黒髪の女を、その黒髪で縛りあげてみたいと思っていたが、やっと念願が

かなったというわけよ」

元禄屋は、三巻して、なお余った髪的一端を縄尻のようにして持ち、貴子を立ち上げらせると、壁の吊輪に結びつけ、自分は前に回ると、ふたつにわけたもう一方の垂髪を、前に回して、左頬から、両乳房の谷をくぐらせて腹へ垂らし、前半身をかくしてやったが、ゆったりと床几にもどってから尚飽きもせず、掛燭や裸蝋燭の光のなかに、眩いばかりに、てり映える貴子姫の後手姿を、じいっと眺めるのであった。

夏、五月。雨がしとしとと降り始め、物音ひとつ、しない夜である。

いままで、<sup>よど</sup>澱んでいた、あぶらぎった男たちの体臭は、いっしか消え去り、菊亭貴子の裸身から滲みでた蘭麝の香りが、座敷牢のすみずみにまで、香り高く、たちこめていた。

## 白木の弓

貴子の受難を知るはずのない雅子は、ゆっくりと入浴して、十日余りの旅塵を洗いおとすと離れ座敷にもどり、念入りに化粧をすませて夕餉を終えた。

（もしかすると今夜は、夫となられる元禄屋

さんと、しみじみとお話し合いをなされて、おもどりは遅うなれるかも……)

など考えながら文机によつていたが、いつしか寝込んでしまったらしく、不図、気がついたのは、ボーン、ボーンと、南蛮時計が二つ鳴った、夜も八つを告げる頃合——。

(おそすぎやあしないか知ら……まさか、婚儀の前に……)

あらぬことを考えた自分が恥かしく、思わず、手鏡に顔をうつしたものの、ほてっているのが、はっきりとわかり、

(いけないわよ、雅子姫。そのようなことは！)

自分を叱りつけたものの、三十歳の女盛りの彼女である。ますます、熱してくる頭を冷やそうと、水瓶から水を注いだ湯呑みを、ひと思いに干して、ともかくも褥に入った。

侍女とは云え、雅子とても従三位民部大録久我親元の娘、大蔵大輔柳原宗忠の妻として十年近い月日をすごし、子なきがゆえに離縁となった、云わば、貴子と同じ境遇の女であり、貴子の東下りに自ら希望して、侍女となり、連れ添ってきたのである。

帰ってこない貴子を案じつつも、この邸は貴子の興入れ先の元禄屋、案ずることもある

まいと、別れた夫のことなどを、思いうかべている内に熟睡してしまい、眼がさめた時には五つを過ぎていた。

昨夜来の雨がまだ降りつづいているのを眺めながら、手水をつかい朝の化粧をすませ、

「姫様は、いかがなされましたか」

と、朝餉を運んできた女中頭のお松に訊ねてみたが、知らぬと云う返事。

女中風情では、この大家のなかのこと無理もないと思いつき、番頭に來てくれるようといひきとせしたが、その番頭がなかなか姿を見せず、思いきって、こちらから出向いてみようと思ひ上がったものの、それでは、あまりに、はしたないと、いらいらしているうちにいつしか、南蛮時計が十二も鳴った。

(もう待つてはおられないわ……姫さまの身に万一のことがあつては……)

と、緋袴の腰に手をやってたち上がった時である。廊下を、こちらへ急ぐ足音がして、入ってきたのは、二番番頭の和吉であった。「お待ちせいたしました。さあ、どうぞ、こちらへ。姫さまもおまちかね」

と笑顔で云われて、ほっとすると、和吉のあとに従つて、一町もあろう長い渡廊を小走りについて行く。

つきあたりの桧の板戸を開いた和吉は、「一寸、暗うございますが」

と、昼だというのに、雨戸をしめきっている廊下を、大広間へと案内されたのである。

チラッと不審に思ったものの、姫さまがお待ちかねと云う一言を疑う筋合いもなく、高麗縁の畳縁りを踏まぬよう気をつけて、真新しい備後畳が四十枚くらい敷き詰められた部屋の中まで、歩いてきた。

その時——、

左の高灯台のかげから、ひとつの影がツツ——とすすみでると、さっと雅子の左手首を捉え、同時に、右手首が、強い力で握りしめられていた。

「キヤァッ！」

思わず悲鳴をあげる雅子の背後では、「フッフッフ……」

不気味な笑いがおこる。振り返った雅子はそれが、和吉であることを知ると、

「こ、これは、一体、どうしたこと！ おはなしなさい、手を！ 妾を、いったいどうしよう云うのです！ 姫、姫さまは、どこにおられますのか」

必死で両手をふりほどこうとしたが、万力のようにしぼりあげられて、どうにもならな



い上に、左の男、それは思いがけず、一番番頭の昭吉であったが、六尺棒をとり出すと、その端に左の手首をそえて縄を巻きつけ、ぎりぎりとしめあげ始めたのだ。右手首は、右側の男が同じように、縛りあげてしまう。

「いったい、どうして！ どうして、このようなことを！ ご無体なされますと容赦いたしませぬぞ。姫さまに申し上げて、きついお叱りをうけまするぞ」

雅子の叱りも、どうやら何の役にも立たないらしく、和吉は、次々と手燭の火を、掛燭や菊灯台に移して、部屋中を、真昼のように明るくしたのち、

「為永先生、利倉屋さん、どうもお待たせを……。さあ、どうぞ。この女に、ゆっくりとお顔を見せてやって下さい」

と、闇のなかに声をかけ、自分は、いそいそと襖のそとへ出て行ってしまった。

「これが、久我雅子……まさしく、公卿の息女。第一、この頸の匂うばかりの美しさは、江戸の女にはない」

右手首を握っていた男が、感歎したように云うと、雅子の正面に立った。

「あなたは、誰なのです。どうして妾をこのよう……貴子姫は！ 姫はどこに」

激しく悶える雅子の肩の六尺棒が、がっちりと何かに固定され、同時に、腰を抱えられて、畳とは違った感触の上に足が乗る。

「じたばた騒ぐなっでこと。すぐ、素っ裸にひんむいてやるからさ」

為永とよばれた五十がらみの男は、白小袖の襟もとから手をさし入れようとする。

「キャアッ！」

雅子が悲鳴をあげると殆ど同時に、襖が再び開いて、昭吉が、ひとりの巨漢をつれて入ってきた。

元禄屋である。

貴子を、昨夜あれほど責め抜いた上で、今日はまた、かねて、女が他人の前で素裸になる所がみたいと云っていた戯作者の為永種彦と、知人の利倉屋庄右衛門を招いて、この得難い、公家衆の女を犠牲にするつもりであった。

貴子は、貴子。……もし、豊太閤五夜のロザリオの謎を、万一、云わないことがあっても、貴子の女を、売ることができよう、それは、またそのとき。今日は、その侍女と云うふれこみの久我雅子とか云う大年増を、勘定抜きで、楽しんでやることにしようと、同好の友である利倉屋と為永をわざわざ招い

て、昭吉、和吉の二人に、その助手役を命じたのである。

いま、元禄屋の目の前にその女がいた。

白小袖に緋袴という、公卿女性の略装で、「十」の字に縛られ、十字架台の上で悶えている。

「久我雅子とか云うらしいが、何才かの」

精悍な鬚面を近々と寄せる元禄屋に、「そなた、元禄屋とみた。姫さまは、貴子姫は、どこにおじゃる！」

雅子は、火を吐くような声で叫ぶ。まさしく貴子の安危は、雅子にとって、生命と同じように大切なことなのだ。

「貴子姫か、安心せい。儂の妻に貰うけた高貴な女性、粗略なく扱っておるわ」

「さすれば、なぜ、妾をこのように」

「フッフッ！ ご覧じろ、あの千鳥棚を」

元禄屋が顎をしゃくった正面の棚の上に、白磁の女人裸像が十体、高さ三尺、さながら生きているかのように、鬱金色の肌を輝かせて、海老、逆海老、吊り、胡座と、女としてもっとも恥かしい姿態を曝し、その上に、それぞれの姿態に応わしい縄掛けをされ、掛燭の光に照らし出されているではないか。

「これが、儂等の趣味での。吉原、辰巳は申

すに及ばず、素人衆の女まで、金にあかして縛ってみたがの。フッフッフ……そなたのように琥珀色に輝く肌を持っている女はいなかったわ」

元禄屋は、そう云うと、

「利倉屋さん、種彦先生。お身体改めを早速はじめましょう。それにしても……」

と、つくづく雅子を眺めて、

「白小袖に緋袴か……その下に、作法どおりの下袴と、千剣菱白綾の単ひとえを着ているものかどうか。どうやら聞くところでは、京都公卿の女の間には江戸風の肌着が流行していると噂されておるが、しかも、色好みの女に限って、小浜縮緬の湯文字や、すけて見える肌着を着込むとか……」

瞬間、雅子の蒼白な顔に、ぱあっと朱しゆがさした。(この元禄屋と云う男、どこまで、好色な男なのか……)

しかし、元禄屋の指摘したとおりの下着を着ている雅子である。(しまった!)と思っただが、もう、遅い。

和吉の手が、綾の白小袖の紐にかかると、無造作に結び目を解いていく。

「い、いや! や、やめてください! な、なんで妾が、このような目に逢わねば」

「フッフッフ……江戸までのこの下ってきたからよ。三十にもなって、侍女だど? きいてあきれらあ。じたばたするなって!」

和吉が、白小袖の紐をとくと、利倉屋と昭吉が、いったん、六尺棒を雅子の手首から外す。途端、自由になった身体で、襖の外へととび出そうとする緋袴のはしを、種彦がむんずと踏みつけた。

「逃げようたって、そうは行くめえ!」

まるで、大根役者のように云い放って、肩から覆いかぶさるようにしながら生絹の白小袖を、右、左、すいすいと腕から脱がせる。

現われた単ひとえは、千剣菱の紋様をあしらった正常のものであった。

「この女、まっとうなようだぜ」

「まてまて。まずは、これをひきずりおろしてからよ。ほらさ!」

かけ声とともに、利倉屋と昭吉が、緋袴の裾に手をかけて、ずり下げようとしたが、どっこい、そうはいかない。

平安朝のむかし、清少納言とか云う、キザなことこの上ない女が「枕草子」のなかで、

紅のこまやかなる生の袴の腰いとながく、衣の上より引かれたるもまだとけなからなり。

と、自分が、男にもてなかったものだから嫉妬なかばに書いたように、袴の腰——つまり長紐が、二重に、雅子の腰に巻きついていたのであった。

「面倒だぜ。切っちゃいなよ」

和吉の言葉に、昭吉が、力まかせにその紐をひっぱると、プツツと音を立てて、縫いつけの糸がきれる。

それっ! とばかり、三人がかりで、緋袴の裾をひいたものだから、すぽっと抜けて、三人は備後畳の上に、尻もちをついた。一方四つ這いで逃げようとする、雅子の白絹のよな足首を、種彦が、まるでバツタでも、つかまえるように捕えると、

「フッフッフ……この女、沈丁花の匂いをだしてやがる……」

緋袴をとられた瞬間、漂いはじめた雅子の体臭であった。

「どれ、どれ……」

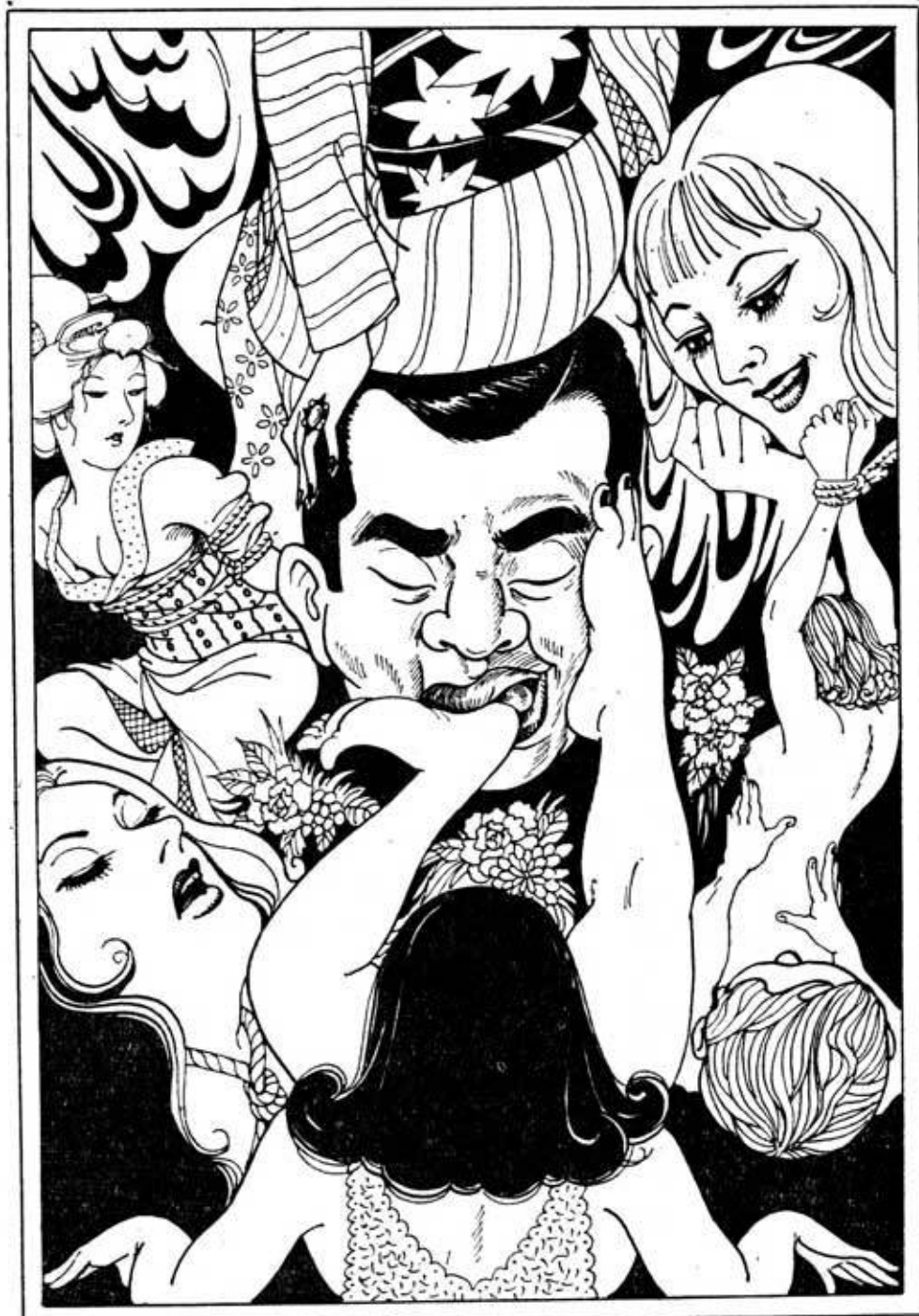
利倉屋たちも寄ってくると、両手を後に廻されて、必死で抵抗している雅子の全身からほんのりと漂ってくる香りを嗅ぎまわった。

「まったくだぜ、この女。沈丁花の匂いをしている……」

まさしくこれは、平安朝以来の香合わせに



## 読者ギャラリー『SM交響楽』 岡 たかし



ない、花そのものの香りであり、雅子自身がひそかに、誇りに思っている馥郁とした匂いであった。

「こりゃあ、あとからつけた香りじゃあなさそうだ。公卿の女というやつは、底知れぬ魅力をもってるらしいや」

感謝しながら種彦の手は休みなく動いて千剣菱の単を剥ぎとる。現われたのは元禄屋の

言葉どおり、うす紫一色に染めあげられた小浜縮緬の長襦袢だったのである。

「フッフッフ、やっぱりそうだったか。第一、緋袴の下に、下袴をつけてねえんで、もしかと思っていたのだが、フッフッフ、これですます面白くなったぜ。おい、みんな、この女、色気を出しやがるに違いねえ。貴子より反応するぜ、きつと」

元禄屋は、予想が的中した喜びをかくそうともせず、はしゃぎながら、長襦袢の白い田之助襟に手をかけて云うのだった。

「三十になってて、ひとり暮しじゃあ、さぞかし男に飢えてなさったろうに。なあに、もう、ご心配はいりません。毎晩でもさし上げますからな」

小浜縮緬を脱がせるのに手間はいらなかった。はらりと、真新しい畳の上に散ったその長襦袢を眺めるひまもなく、雅子は、すけて見える紹の肌着を剥ぎとられ、紫色の湯文字ひとつの裸身を、高麗縁りの備後畳の上に、うつぶせてしまったのである。

「恥かしがることあねえやな」

隅から、脂と汗でてかてか光っている頑丈な十字架を運んできた種彦は、

「さあ、お身体改めだ。もうこうなりやあ、いさぎよく磔柱にのって貰いましょう」

がっきと右肩をつかんだ利倉屋が、雅子を抱くようにして立柱の下まではこぶと、右、左と、腕をとった昭吉と和吉が、ずるずると豊満な女体をひきずり上げ、横木にしっかりと縛りあげ、足を、台板の鉄輪に三尺もはなして固定してしまう。

久我雅子——大蔵大輔柳原宗忠の妻であっ

た身が、いま、何のなす所もなく、珊瑚樹の  
実のような両乳首を、五人の見知らぬ男たち  
の眼前に曝して、女の身をまもる最後の布を  
剥がれるのを、ただ、待つばかりは、ないので  
あった。

冷たい、淫らな空気が、湯文字のすけ目か  
ら舞い上がってくるのを感じて、雅子は、ぞ  
くくとする。

(もう、どうにも、ほんとうに、ならないも  
のなのだろうか……)

御所風の五尺ちかい黒髪が、心もなく、肩  
から腰のあたりにまで、ゆれていた。

そんな雅子のそばに、まず近づいた利倉屋  
は舌なめずりしながら、

「さて、見せて貰いましょう、一糸まとわぬ  
裸身をな」

(た、たれが、こんな男たちに。非道な!)

肩をふり、手足の指を、必死でうごかして  
みるものの、足の金輪も、横木に緊縛されて  
いる双つの腕も、自由にはならなかった。

「フッフッフ。観念しなよ、な」

利倉屋の手が、湯文字の紐にかかる。

ピクッ! と、久我雅子の腰のあたりが痙  
攣する。

「じたばたするなって……」

利倉屋は、紐を解き終わると、かわりに、  
その湯文字の合わせ目を、左手の親指と人さ  
し指で掴みながら、なぶるように云う。

「雅子姫、儂がこの指を離したらどうなるか  
ええっ、わかるだろう……フッフッフ。あか  
くなってやがらあ」

種彦も負けじと、

「そら、そら、眼をあけて、よく見なよ。こ  
の顔を、ほらほら」

と、和鏡とは較べものにならないほどよく  
映る、南蛮渡来のぴかぴかひかる手鏡を雅子  
にちかよせて、無理矢理に、羞恥の極みにあ  
る自分自身の顔を見せようとする。

「イヤ! イヤですったら!」

絶叫したものの、雅子の思わず開かれた丸  
く大きな瞳は、その鏡のなかの自分の、羞恥  
に悶える顔を眺めてしまったことであった。

「キヤァ! イヤ、イヤ! イヤだったら。

や、や、やめてくださいよう!」

激しく顔を左右にふる。羞恥に歪む自分の  
顔を見せつけられる——これ以上の屈辱はな  
かった。と、思いがけず、

「よしよし、判ったよ。鏡は、よすよ」

種彦の言葉に、ほっとして、雅子が、うっ  
すらと、その美しい眸を開いた時……。

待ってました! とばかり、利倉屋が湯文  
字を支えていた指を離す。

不意打ちであった。

ほっとした刹那であった。下半身に、空虚  
しいものが走るのを覚えて、ハッとして下を  
見ると、我ながらあさましく、三尺も開かれ  
ている両脚が、ありあろうつる。

(ま、まさか、このようなことが。男たちの  
前で、妾がこのような恥態を見せるはずがな  
い。夢だわ、これは夢よ。悪夢なのだわ)

なにか信じられぬ思いで、一瞬、雅子は、  
正面の種彦を眺め、元禄屋を見た。

「ハッハッハ……何をぼんやりしている。夢  
じゃあねえよ。ほれ、みてみな」

一歩進みでた元禄屋が、大きな掌を、のば  
して、雅子のむきだしの腹の辺りに這いまわ  
らせ始めたのであった。

ツウーンとする衝撃が、雅子の頭のでっぺ  
んまで、かけ抜け、

「キ、キヤァッ!」

狂ったような絶叫があがった。

「キヤァッ! やめてえ! やめて、やめて  
やめてよう! ヒイッ! ヒイ、ヒッ」

手をひっこめた元禄屋を始め五人の男たち  
は、悶える雅子に、じいっと淫らな視線をお



くりつづける。

美しい琥珀色に近い肌であった。貴子の肌の白さに較べ、こちらは健康で、はちきれそうな極上の美酒にも似て、まろぶようにはりのある豊満な肉体――。

「口のなかに入れてしまって、舌のさきでころりころりと、味わってみてえような肌色でげすな」

種彦は、手燭をちかづけて、前から、後から、肌の艶を調べていたが、

「撓む――たゆむ、撓性とうせいのある肌と申しましようか。そう、何度つかっても、またもとにもどる白木の弓にも似た、弾力性のある肉しむらのようですぜ。見なせえ、このはりを」

しろく、むっちりと盛りあがった乳房の付根あたりを指先で押したが、その指を離すやいなや、まったく痕跡もなく、たちどころにもとの艶めく肌に、もどってしまう。

「得難い女のようなだ、この女も……」

元禄屋は、満足そうに云うと、

「少し可愛がってみな」

と、昭吉、和吉の方に、顎あごをしゃくった。

合点！ とばかりに昭吉が、

「和吉さん、手はじめに、あれをつかってみないこと」

と、突如、例の女言葉をつかい始めたのである。昭吉と和吉。どちらも色の白い華奢きゃしゃな女形にでもしたいような色男であったが、

「あれって」

「あれよ、あれ！」

昭吉が、正面、床の通り棚の上の文箱から異様なものを取り出してくる。

長さは七、八寸もあろうか、径一寸ぐらいの棒状のものである。何か、ふわふわとした海綿でもできているらしい代物であった。

「フッフッフ、いいわよ。わたし、水を」

和吉は、水瓶の水を、蒔絵の施された角盥に注ぎ、それを水漬けにすると、

「用意させておいて頂戴よ」

「ええっ。わかってるわよ」

と、畳の上に、膝を崩した女坐りですわりこむと、不安におののく雅子を見上げ、

「ほればれする肌だわねえ。憎らしいったらありゃしない」

堂に入った、女言葉を呟きながら、そおと、

左手を伸ばし、次に蛇が獲物に襲いかかるように……。

途端――、

「いや！ いやだったら！ ヒィッ」

鋭い悲鳴があがる。

「まあ、憎らしい！ なにさ、ちょっと腿に触れただけで、そんな大声あげるものじゃあなくてよ」

いったん離れた指先を、再び太腿に寄せようとすると、

「キャアッ！ さ、さわらないで、お願い。

お願いだから、ねえ！ ヒィッ！ 許して！ 許してください！」

またもや、甲高い絶叫があがる。

「フッフッフ……この女、どうやら貴子姫とは正反対。肌に触っただけで、敏感に反応するらしいぜ。こいつは、面白え」

昭吉ひとりにまかせちゃあおけぬとばかりに種彦が凝脂ののった乳房の上の珊瑚樹の実のような乳首に触れると、途端！

「ウー……ム」

白木の弓のように身を反らせて、雅子が激しく喘ぐ。

「こいつは面白え。やってみなよ、利倉屋の旦那。この女、どこを触られても、すぐヒィッヒィ、哭いてくれそうだぜ」

事実――、

利倉屋がへそに触っただけで躍りあがり、種彦が、むっくりとした臀部を軽く叩いただけで、腰を一尺も、左右に振ってわめきつづ

ける久我雅子であった。

その広い富士額からは玉のような汗がながれ、頬から、唇の端、そして、のけぞっている咽喉をとおって、豊かな胸におち、深い双つの乳房の谷を幾筋も流れて行く。

だから、昭吉が水漬けにした異様な物で責め始めたときの雅子の絶叫は、すさまじいものがあつた。

日頃のつつしみも、公卿の女であるという誇りも、一切をかなぐり捨てたように狂い泣いた。執念深く女の壺を心得た昭吉たちの、鎌首をもたげて何度も攻撃を繰り返す数匹の蛇のような攻撃に、翻弄され、のたうったのである。

油がきれたのであろう、菊灯台のひとつが消えたとき、淫らな宴を、じいっと見守っていた元禄屋が、

「もう、よかろうぜ。初手からあまり強く責めるのは、よくねえことだ。こういう女は余計にゆっくりと、飼いならしていかなくちやあ。やめなよ」

昭吉と和吉がはなれ、種彦がこれにつづいて、やっと責め手をおさめたが、利倉屋の手が離れたのは、そのあと、一寸、間を置いてからであつた。

死んだように、ぐったりと、十字架の台座の上で雅子は、喘いでいた。

五年ぶりの翻弄であつた。孤園を守りつけていた五年間——。いま、五人の男の暴虐をまともに受けて、女の本能をひきだされ、けだるい陶酔の中に陥っていた。

「菊亭貴子には貴子の味。この久我雅子には雅子の味。こりゃあ、二人とも稀代の上玉。この二人を利用すりゃあ、目付はおろか、老中さまにだって、なれますぜ」

種彦の声に、ふと開いた雅子の目に、折上格天井が見え、高肉彫りの竜虎で飾られた欄間がうつり、男たちの向こうに四君子の花を極彩色で描いた襖が映つた。

そして、千鳥棚には、これからの雅子の行方を示すように海老、逆海老、胡座と、あられもない姿態で縛りあげられている女人裸像が、白磁の肌を妖しげに、高灯台の光のなかで、漂わせている。

漂うと云えば、雅子の誇る沈丁花の花の香りも、この書院に、そこはかとなく、漂っていたことであつた。

## 羅卒の鞭兵衛

菊亭貴子と久我雅子の主従がひきあわされたのは、それから五日たった、夜も五つすぎのことであつた。

その五日間というものの、貴子は座敷牢でロザリオの行方をめぐって訊問を重ねられ、書院から離れ座敷に移された雅子は、お松達の監視のなかで暮してきた。

「姫は、いったい、どうなされてか」

自分があのような目に逢わされた以上、貴子姫には、それ以上の責め折檻が加えられていることを想像して、お松の顔を見るごとに「姫さまは」

と訴えつづけてきたのであつたが、食事時以外は、嚴重に縄掛けされた身の上では、どうしようもなく、ただ、冷たい嘲りの視線を浴びるだけであつた。

それが、先程——

「貴子姫に、逢わせてあげよう」

と、お松が、猫撫声で云い、

「だからさ、ほれ、これに着換えて、少しは化粧でもしておくことさね」

と、取りあげられたままであつた長襦袢と

湯文字を、投げてよこしたのである。

千剣菱の単一枚を許されていただけの雅子は、縄をとかれると、飛びつくように、それ





たのである。

いくら責めてもロザリオについて口を噤んでいる貴子に、雅子をあわせてみて、何かその心のすきにつけ込もうと策略をめぐらした元禄屋は、その第一歩として貴子の羞恥心を責めようと考えた。

(女は、肌着を男たちの前ではぎとられるのもいやなものだが、逆に、男たちに、湯文字をつけて貰うのも恥かしがる。フッフッ)

その元禄屋のそばに居るのは、御用絵師の鳥尾芳年である。この絵師、山水は一切描かない、女ばかりを描く。その上、ここ数年、版元のたのみにまかせて、いわゆる無惨絵と云われるものに手をつけてから、すっかり面白くなったらしく、緊縛女体が見られると云えば、千金を費して必ず見に行く。勿論、元禄屋とは旧知の間柄――

いまでも、恍惚とした表情で、さかんに、絵絹の上に、貴子の裸身をうつしている。

「早く云いな。湯文字をつけてくださいます……と。もう、恥かしがる仲じゃあないぜ。まだ、儂等のおんなにしたといわねえが、お前さんのすべては先刻、御承知の仲じゃあねえか。さあ、云ってみなよ、姫君」  
為永種彦、例によって軽口をたたきながら

貴子の肩をつついたが、かたくななばかりに貴子は、沈黙を守り、片手で乳房を、片手で前をおおった姿態を崩そうとはしない。

「強情な阿魔だぜ、まったく。オイ白豚」「ハイッ」

と目配せをうけた白豚が、乳房をおおっている貴子の左手の肘をとり、同時に青蛇が、右手をつかんで、ひきずりあげる。

「アッ！」

それでも貴子は、一言呻きを洩らしたきりであった。

「なにも今日は、お前さんをいじめようと云うんじゃあねえ。湯文字をやるうとしてるんだぜ。ほれ、ほれ」

鞭兵衛は、白豚と青蛇に、はさまれている貴子の正面にかがみ込むと、白綸子の湯文字を、ふっくらとした腰のあたりに回し、三人がかりで、つけさせていく。

この高慢ちきな女に(お湯文字をつけて下さいましな)と云わせてやろうと思っていた元禄屋の目論見は、はずれたが、

「親分、腋曝といきやしよう。きっと芳年先生の絵筆にのると思いやすぜ」

白豚がいい、上に反った半円形の棒を持ち出してきた。

「よかろうぜ! さあ、両手を上に、この曲った棒に沿わせて!」

鞭兵衛自身が、右手をとると、万才の型にそれをあげ、左手を青蛇が同じように棒に固定する。

「足は、ほれ、ほれ。八の字に開いて」

一間四方ほどの台座に立柱が一本ついた器具を持ち出した和吉は、貴子が三、四人に抱きあげられて台座に尻をつけるや否や、左足を大きく開かせ、「八」の字と云うより、殆ど、一直線になるほどに引き絞り、種彦たちと、都々逸を口ずさみながら縛っていく。

貴子は、ただ、耐えていた。

このような屈辱に抵抗する方法は、ただひとつ。無関心をよそおって相手の術中に陥らないことだと考え始めていたのである。舌を噛んで死のうと思ひ抜き、結局、今、自分が死ねば、どのような無理難題を、父を始め京都の公卿衆にかけるかも知れぬと、ただそれだけを案じて、一身を犠牲にして、耐えつけているのである。

生身なまみの女である限り、男たちのおもちゃにされて、絶望しないはずはなく、男たちの淫らな責めに屈辱を感じない、はずもない。

(ただ、沈黙して、耐えるのよ。貴子、今の



## 読者ギャラリー『いたぶり開始』 志羽 利也



貴子には、それしか与えられた方法はないのよ。貴子、頑張るのよ

が、この忍耐には限度があり、この五日間で、すでに三度にわたり、失心させられた身であった。

いま、雅子が、この座敷牢にくるという。多分、雅子にも同じような魔手がのびているであろう。

（逢いたい！ いや、このような恥かしい姿を見られたくない！ 逢いたい！ いや……恥かしい、死ぬほど恥かしい！）

そんな貴子の心の動きには関係なく、穴沢流腋曝の姿態が、できあがり、種彦たちがたち上がったとき、重々しく扉の開く音がして「親分！ 連れてきやしたぜ」と、斑猿の張りきった声がとんできた。

「ひ、ひ、姫さまあ！」

雅子は、番棒に縛られた痛みも忘れて走り寄った。そこには、あまりにも無残な貴子の裸身が、男たちの手燭のなかに曝けだされていたのである。

「姫！ 貴子さまあ！」

もう一度、大きな瞳を見開く雅子の縄尻を「おっと、待ちねえ！」

昭吉がぐっと引くと、よろよろと後退って、赤狐の開いた双腕に抱えこまれる。

「雅子姫。よくみることよ。これが、お前さんのご主人、貴子のなれのはての姿よ」

鞭兵衛が、毛むくじらの掌で、ぐぐっと貴子の右乳房を鷲づかみにして拗じあげる。

「う……っ！ ううっ！」

白い咽喉を反らせて悶える貴子の垂髪が、白綸子の湯文字にまとわりついて揺れる。

「雅子さまあ！」

万感を一言にこめた貴子の絶叫があがる。「フッフッフ。何が、雅子さまあだ。ほれ、見な、見なってことよ」

鞭兵衛は、右手で貴子の顔を前に傾けさせて、左手で、乳房に爪をくいこませる。

「ほれ、ほれさ。このさまだぜ、雅子姫。あんたの大切な姫さまが、このさまよ。それで

な、あんたを呼んだのは、外でもない。あんたの目の前で、このやんごとなき姫さまの最後の一枚の布きれを、ひん剝いてやろうと」

「ま、まってください！」

思わず、雅子は、叫んでいた。

「や、やめてさしあげて！ 姫さまを、そんな目にあわせることだけは、やめてさし上げてくださいますし！」

よろよろと雅子は、その場にすわりこもうとした。いや、坐り込んだのであるが、

「ゴッソ！」

と鈍い音とともに、番棒の三角棒が、床板にぶつつかり、

「い、痛ッ！」

悲鳴をあげて、たち上がろうとしたのであるが、激しい痛みには耐えがたく、雅子は、そのまま、小浜縮緬の長襦袢の裾を大きく拡げて、床の上に、ぶざまにも横転する。

「ゴッ！ ゴチッ！」

三角棒が、二度、三度、床板をうち、必死で、苦痛からのがれようとする雅子の両膝が二尺も離れ、内腿があらわに、男たちの眼にさらけだされる。

「ハッハッハッ、この姫様は、待ちかねるんだとよ」

横ねじりの惨めな恰好で転がりながら、

「姫君さまは、姫君は許してさしあげて！

お、お願いです！ おたのみします！」

「ほう、すると何かね、お前さんが、姫様の身代わりになるというのかね」

白豚が、からかう。

「ええ！ 妾ですむことなら何でも！ だから、貴子姫だけは！」

「よかろう！ こちらはそれでもよいが、姫はどうだね、ええ、貴子姫！」

元禄屋の問いに、一瞬、貴子の端麗な顔にぞおっとするほど凄愴な、憎しみの翳が泛んだ。貴子が始めて見せる表情であった。

「卑……卑怯でしょう！」

烈帛の叫びであったが、

「何が卑怯なんだい、姫様」

抑揚するような元禄屋の答。

「雅子さまをお責めになるくらいなら、妾をお責めになればよいのです。雅子さまと豊太閣殿下五夜のロザリオとは、何の関わりあいもありませぬ」

「何と！ 豊太閣殿下五夜の、ロザリオだと……フッフッ貴子。お前さん、知ってるな。

知ってるはずだ……豊臣秀吉のことを殿下などと、耳慣れぬ言葉を使った所をみると知っ

ての上で、よくも、これまで、知らぬ存ぜぬと白をきりおったな！」

元禄屋にとっては、大きなもうけものであった。なぜなら、今のひとことは、貴子がロザリオの秘密を知っていることを告白したに外ならないからであった。

「よし、白豚。姫様に猿ぐつわと、耳にせんをはめろ！」

と命じ、

「姫、よいな、白状したくなれば、首をたてに振れ。首を縦にふれば、この雅子姫への拷問を許してやろう。よいな！」

白豚が、貴子に、うす汚れた手拭いで猿ぐつわをはめ、耳に、同じような布きれでせんをする。耳と口を封じて、目だけで雅子の責苦を眺めさせ、その効果を倍加させようというのと、今ひとつは、貴子にことよせて、雅子の口から、責められますと、云わせてみたい、高貴の姫を跪かせて、みたいと云う欲望——。貴子は、あわれみを遂に請わなかった。が、この雅子なら、姫のために、自ら進んで、拷問されると云うに相違ない。  
(妾を責めて下さいませ——と女自身の口から云わせること。フッフッフ、これほど、ぞくぞくとするものではないものさ)



元禄屋は、貴子がいらざることを云い出して、雅子責めの邪魔になることをも考慮して猿ぐつわをはめさせたのでもある。

「さあ、雅子姫。この貴子の湯文字をひん剝くぜ！早く、何とか云いなよ。おい」

以心伝心——元禄屋の心が手にとるようにわかる鞭兵衛は、雅子を締め上げていた三角棒を取り外した。

そして、その三角棒を、刀の鑑定でもするかのように、上から下へ、下から上へと眺め廻したうえ、ニンマリと笑った。それは「やっぱり」とでもいいそうな、会心の笑みだった。

「これは、これは、姫様。まことに御殊勝なことだ」

と、必死で膝を合わせて坐っている雅子の鼻さきに、わざわざ持って行った。

「な、なにをなされます！」

羞恥にほてった顔を、そむける雅子に、

「上品ぶるなってこと。いたぶられるのが好きなら好きと云ったらどうだ。さあ、この六尺棒の中程を見な。この艶は、いったい何のせいなのだ。ええ、云ってみなよ。どうだい姫様よう」

一同が高笑いをするなかで、青蛇が、

「いいかね、雅子姫、よく見るこったな」

と、鈍い声でいい、正面、貴子の湯文字を剝ぎとる素振りを示す。

猿ぐつわの下で、貴子が（ム、ムッ！）と悲し気な呻きを洩らす。

「待ってえ！」

一瞬早く叫んだ雅子は、きつとなって、大きな瞳で元禄屋を眺め、つづいてまわりをとりかこんだ男たち一人一人を見つめながら「お約束はお守りなさって下さいませよ。妾が確かに仰言るとおりになりますゆえ、貴子姫だけは、姫にだけは指一本、触れないと」

男たちは意味ありげな含み笑いを泛かべて軽くうなずいた。貴子が、すでに素裸にされ小用まで、この男たちの前でさせられたことを雅子は知らない。

（フッフッフ、面白え。女を囁る楽しさとはこんなことをいうのだろうよ）

みなが一様に生唾をのみこみ、雅子の次の言葉を待った。その視線の中で、

「妾、久我雅子、姫様の身代りとして、どんなことでもさせて頂きます」

「どんなこととは、どんなことだ！」

「それは、それは、あなたさま方がおきめになること……」

「フッフッフ、じゃあ、素裸になることさ」

青蛇は、一歩すすみでて、雅子の縄を解いた。とかれた縄が、バサツと音を立てて床におち、その空気の動きが、正面の貴子の太腿のあたりに置かれてある裸蠟燭の焰を、ゆらりと揺りうごかした。

「云いな。その長襦袢をとって欲しいと。お願いしてみるこったな」

ぐいっと下唇を噛みしめていた雅子は、

「お約束、必ずまもってくださいまし」再び念を押したのち、よろよろ、立ち上がり、

「どうか、妾の長襦袢をとって下さいな」

「湯文字をも、だぜ。一糸まとわぬ裸にされたいと、その口で云うのだ」

「教えてやらあな」

種彦が、何か雅子の桜貝のような耳朶にささやき、雅子の顔に、ぽおっと朱がさす。

「早く言うのだ、姫さま、久我雅子姫！」

鞭兵衛が、田之助襟を押しひろげると、みずみずしい乳首を、こともなげに、爪先で弾く。

雅子は、うらめしそうにその顔を眺めて、

「妾……正三位大蔵大輔柳原宗忠のもと妻、久我雅子……元禄屋さまの手によって捕えら

れ……かくなりましたうえは、な、なが襦袢をはぎとって頂き、こ、こ、こ……しのものを鞭兵衛さまに！」

雅子の大きな瞳に、きらりと大滴の涙が閃き、すうーと、ゆたかな頬へと、伝わるのを種彦が、唇をつけて吸いとった。

「こしのを、鞭兵衛さまに、ぬがして頂きまして、一糸まとわぬ、ス、スッ、素裸の肌身に、穴沢流女責めの拷問のすべてを、この身に、身にしみるまで、お、お受けいたします」

云い終わると雅子は、両手で顔をおおい、よろよろ、その場に崩折れてしまった。

「よし、よし。その覚悟だ。姫君のため十分に、忠節を尽すこと！」

まるで剝玉子というのであろう、五、六本の腕が同時に伸びると、長襦袢も紫色の湯文

——ご投稿下さる方へお願い——  
各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメージ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

字もアツと云う間にむしり取られてしまい、雅子が、琥珀色の宝石のように蹲る。

その時——突然、入ってきたのは、神宝方

探祕職棟梁折戸小左衛門であった。この七十才近い老人は、貴子や雅子には目もくれず、何事か元禄屋に耳打ちをする。

「な、なんですって、折戸様。丁夜のロザリオが、あの春田和泉の家に！」

「シッ！ 声が高いぞ！ 間違いはない」

「春田和泉とは旧知の間柄、それに」

と元禄屋が云うのを聞きとがめたのは、浮世絵師の芳年であった。

「春田和泉というのは、日本橋は上横町三丁目の櫛師春田のことかな、元禄屋さん」

たてに首が振られるのをみて、

「ほう、たしか女房は豊香、絶世の美女」

「ご存知かな、鳥尾さん」

「ハッハッハ、むかしむかし。儂が若かった頃、美事に振られ申した！ 可愛さ余って憎

さが百倍、いまは確か三十五、六才」

「左様、千登世と云う娘が十七才」

今度は、昭吉と和吉が、思わず

「千登世とは旦那様、あの日本橋小町の千登世さんのことで」

元禄屋は、軽く両手を挙げると、一同を制

して、

「ハッハッハ……こいつは、面白いことになりそうですね。折戸様。豊太閤五夜のロザリオをめぐって、あの春田和泉が、あの春田が現われてくるとはのう、鞭兵衛！」

元禄屋の視線を受けた鞭兵衛の顔が、憎悪にゆがんだ。

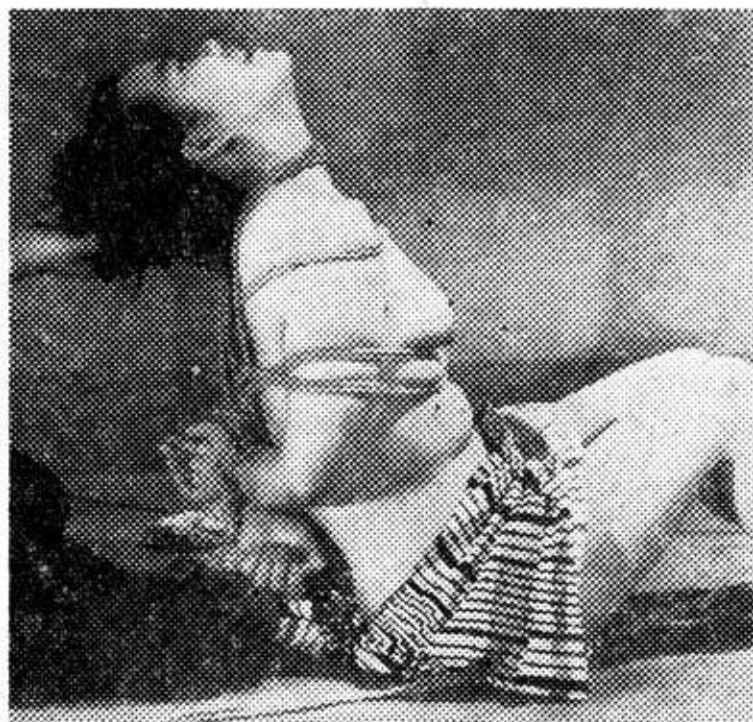
鞭兵衛にとっても、春田和泉の妻豊香は、惚れて惚れて、結局は、振り抜かれた女であり、昭吉、和吉にしてみれば、その娘の千登世、日本橋小町とうたわれた彼女に何度か懸想文を出しては、その都度体よくあしらわれた挙句、これまた拒絶されたと云う間柄である。それを知っている元禄屋が、

「フッフッフ……丁夜のロザリオよりも、女を責める方が、面白くなりそうですね。まずは、ここにいる姫君たちをたっぷりと料理する。そのあとで、豊香と千登世をどうすりゃあ陥（わな）弁にぶちこむことができるかを、とっくりに考えましょうぜ」

目配せをうけた黒馬が立ち上がり、観念しきったように正座している雅子の背後に、縄をしごいて近寄って行った。

——（つづく）——





私が「SM愛好者」の一人として、辻村隆氏のカメラ・ハントに魅せられるのは当然かも知れない。その精力的な活躍は、充分に羨望と畏敬に値いするからだ。そこで、ハント記事の中から私の印象深い「ことば」を抜き出してみた。全て辻村氏の体験が産み出した味わい深い「名言」だと思う。いうなれば、『辻村隆語録』であろう。

### SMプレイの心構え

○SといいMという心理作用は真性のものではなく、いう迄もなくプレイというルールの上に立っての行為で、それによってSの人

## 辻村隆語録

# SMプレイ・ルール

## 画竜点睛

間も歓喜しMの人間も快虐を覚えねばSMプレイは成立しない。  
(七〇・三月)

○所詮、プレイはプレイと、判っきり割り切っているところに、私の人間的な救いがある。  
(七〇・四月)

○SMのプレイは凡そ犯罪とは縁のないものでなければならぬ。プレイを行なう男も女も、ともすれば踏み外しそうになる理性の一端をしっかりと画して、行動しなければならぬ。  
(七〇・四月)

○プレイだけで、綺麗に別れなければならぬ。  
(七〇・八月)

○縛らずに、その尽素肌を抱けば、それは最

早、単なる情事のセックスプレイと何ら変わらぬ。  
(七〇・十月)

○家庭は家庭、プレイはプレイとして割り切るべきである。  
(七一・二月)

○所詮プレイは、SとM、MとSの陰陽で成り立つものである。  
(七一・四月)

○SMプレイが如何に困難なものであるかは風流な遊戯に円熟した人程、理解出来る行為である。  
(七一・六月)

○肉体の交渉にくらべれば、着衣の尽の簡単な後手縛りなどものの数でもなさそうに見える、それはSMプレイの遊びを知らな

い人の言である。

(七一・六月)

### プレイを楽しくやるために

○プレイに導入する手段としてカメラが使われ、一旦その世界に没入したとなると、もうカメラは不要の、むしろ邪魔になる小道具に過ぎない。

(六九・五月)

○全ては理窟抜きで、ひとときのS Mプレイに耽溺すればいい。

(六九・五月)

○喜怒哀楽を示してこそ、フォトに表情があって、ハントする方にとっても愉しいのである。

(六九・五月)

○肉と肉のつながりは余りにも退屈であり、平凡である。女体開眼のプレイの手段は未開拓に等しい。

(六九・十月)

○その場において、その現物が役に立っても立たなくても、あれこれとプレイの充実を考えて準備するのが、同好者の共通の理念である。

(七〇・四月)

○ペンですら書けないところに、実際のプレ

イの妙味がある。

(七〇・六月)

○カメラに心を走らせている時、少なくともプレイへの情感は乏しい。

(七〇・七月)

○プレイしようとする一対一の男女には、そのなりわいなど関係ない。

(七〇・八月)

○心を燃焼させる激しいプレイは精々五時間ぐらいで、あとはだらだらとマンネリズムに陥るだけである。

(七〇・八月)

○プレイに没入したら、徒らに遠慮したり気兼ねすることが、折角燃え上がった愉悦に水をさすことになる。

(七〇・十一月)

○この刹那的なひとときをイイイヤ過ごすのも、与えられた快楽の一刻として過ごすのも、全ては本人の心次第。

(七一・三月)

### 緊縛プレイのために

○縛るばかりがプレイではない。ことばの嗜虐のあることを知るべき。

(六九・四月)

○どんなに縛り方を変えようとしても、人み

んなそれぞれの好みがあって、私の緊縛にも亦私独特のものがある。

(六九・八月)

○無理矢理、自由を奪われたという諦観の被虐が、一層に悦虐心をかり立てる結果となる。

(六九・十月)

○縛ることのみがハントのプレイではない、女同志の赤裸々なシーンの中に異常なプレイがひそんでいる。

(七〇・一月)

○S Mプレイの真髄、縛り方は強く激しくしてもいいが、優しくいたわりの心がなくてはならない。

(七〇・四月)

○女悦を求めるプレイには、縛目は簡素で緊縛に伴う苦痛を与えぬ。

(七〇・十月)

○或る程度は体に自由を与え、緊縛による苦痛を感じさせず、巧みに被虐のツボを攻めてこそ、プレイの真髄である。

(七〇・十二月)

○プレイの緊縛は所詮、そんな古式にのっとった窮屈なものでなく、自在潤達に好きな



様にやればいい。

(七一・二月)

○緊縛をプレイとして駆使した時、その一つ一つの縛り方は各人各様の自由奔放な想像の産物である筈である。

(七一・二月)

### 悦虐のプレイのために

○嗜虐の果ての快楽、被虐の前戯のあとにくる悦楽がプレイの真髓。

(六九・十月)

○徒らに虐めることにのみ終始するのが、真のSの姿ではない。SMのプレイは、女も歓喜し、男も悦虐に喜悅してこそ、真のプレイの成果がある。

(六九・十月)

○責め、痛めつける前に、苦痛が快楽に変化しなければ、プレイの醍醐味はないといっても過言ではない。

(六九・十月)

○悦虐を覚え、愉悅に五体をしびれさせた上叩け。これは悦虐のプレイのルールかもしれない。

(六九・十一月)

○女体を喜悅させることは、それはもうプレイではなく、ひたすらにせつせと奉仕をくり返しているに過ぎない。

(七〇・一月)

○愛咬も、甘い鞭も、エクスタシーの状態に於いてのみ昂進を助長させる手段となるのであって、それが伴わない時は単なる苦痛にすぎない。

(七〇・二月)

○心の熟さぬ時、鞭打ちという加虐プレイの手段を用いても、それは女体を悦ばせる何ら手段とはならない。

(七〇・十月)

○快感につながる同様の行為が、快楽にもなれば苦痛にもなる。

(七一・一月)

○真性のマゾヒストであっても、快楽の伴わぬ責めの行為には、痛いものは痛いのである。

(七一・二月)

### 夫婦プレイのルール

○夫婦プレイで肉体への凡ゆる狼藉は寛容し許諾しても、心の不貞は許していない。それは愛情のバロメーター。

(六九・五月)

○倦怠期に於ける夫婦プレイは、愛情復活の最短コースである。

(七〇・三月)

○プレイが円満を維持する。

(七〇・六月)

○夫婦プレイといっても、SMのプレイといっても、所詮帰する処はセックスの満足に逢着する。

(七〇・十二月)

○夫婦プレイは、夫婦がそれに徹し切らなければウソである。

(七〇・十二月)

○所詮SMの夫婦プレイなんてものは、気分的にリラックスしないとその気にならないものだ。

(七一・五月)

私の印象から五項目に分けてみたが、あくまで便宜的に分類したまでのことで、無理な分類もある。

SMプレイが所詮、この世の中でアブノーマルな行為としてみられているからには、ルールを守らなければ身の破滅につながる恐れもあるだろう。日陰に咲く隠花植物の宿命みたいなものであろう。プレイには、相手がいる、その相手の気持を考え、共に燃えることが楽しくプレイするルールみたいなものだと辻村氏は、いおうとしているのだと思う。

## 懸賞応募セミ告白

## わが妻は最良の協力者

縄 木 縛 太 郎



カット・伊達 忍

私たち、夫婦が、緊縛プレイに興味を持ち、お互いにプレイするようになったのは、五年程前からです。

結婚して一年ばかり過ぎたある日、所用で街に出た私は、内心の欲求を妻に知らず、いとぐちとして、奇巧を利用することを思いつき、本屋に立ち寄って一冊を手に入れて帰宅しますと、案の定、妻が、めざとく見つけてくれました。

「貴方、これ、何の本なの？」

私は、しめたと思いが、とぼけました。

「ああ、それね。つまらんもんだよ」「ちよっと、見せて」

「うん、いいよ。だけど、君の趣味にあうかな」

「あら。この本と同じようなの、私、以前に見たことがあるわ」

「へえ、どこで見たの」

「あのね、二、三年前、友達の家に遊びに行った時に」

「君の友達には、こんな趣味のある人がいるのかい？」

「いいえ。その友達の兄さんが、読んでいらっしやったのよ。何かの時にふざけて見せて下さったのよ」

私は、既に妻が知っていたことに、ちよつと拍子抜けしながらも、ワクワクする気持ちになりました。

「その時、君は、どう思った？」

「別に、とりたてて何も感じなかったわ」

「今ね、ぼくが、その友達の兄さんと同じ趣味の持ち主だといったら、どうする？」

妻は黙って私の顔を見詰めたが、しばらくして答えました。

「少々、びっくりね」

「少々くらいかい？」

「だって、人の趣味を、横から口出しするとても出来ないでしょう」



「だったら、若し君に、ぼくの趣味に対して協力して欲しいと頼んだら、協力してくれるかい」

又、一瞬、妻の返事は途切れましたが、やがて小さく、いいました。

「いやだといっても、駄目でしょうね」

私は、妻が、予想していたほどのショックも受けない様子に、内心「あれっ」と思う気持ちと、反面、私の趣味として理解しようとしているらしい妻の態度を見て、私の理想とする家庭は近くにあると感じました。

それから数日、過ぎた夕食後、私は妻に、そつと問いかけてみたのです。

「今夜ちょっとぼくに協力してくれないか」

「いよいよ、きたわね。私、縛られるって、いやだけど、仕方ないわね。でも、あまり、きつくすると、協力しないわよ」

私は、妻の、その覚悟して心待ちしていたような返事に、面喰らうと共に、又、勇気が湧いて来ました。

秘かに買い求めておいたロープを用意し妻のそばに行くと、

「いいわね、あまりきつくしないでよ」

「ハイ。わかっております、奥さん」

と茶目っ気を出してやりますと、

「ちゃかさないでよ」と、反発してきます。

「今日は始めてだから、ごく、かんたんな縛り方で、君になれてもらおうよ」

といいながら、私は妻に衣類をとるように命じました。

「裸になるなんて、はずかしいわ」

「だって、ただ、縛るだけじゃあ意味がないだろう。君の身体を、より美しく観賞するためには、絶対に生まれたままの姿が……」

「だって、裸で縛られたら、跡がつくでしょう。それが、いやなんですもの」

「解いたら、僕がマッサージしてやるよ」

「だったら」

ようやく妻は、衣類を脱ぎはじめました。私は、自分の永い間の念願だったプレイがいよいよ実行出来ると思うとワクワクし、少々、緊張して参りました。

「痛かったらすぐに、いうんだよ」

「だったら、最初からゆるくしてよ」

「では、ソロソロはじめようか」

私は、緊張で少し慄える手で用意したロープをしごいて、最初に乳房の上下を縛り、両手を後手に縛ってみました。そして、前から見たら、後ろから見たらして見ますと、

「余り、じろじろ見ないでよ」

「いいじゃないか。そのうちに見られても、あまりはずかしいことはなくなるよ」

「ねえ、こんなことして、面白い？」

「面白いんじゃないくて、これも、ぼくの愛情の表現の一つなんだよ」

「あらッ、相手にこんな、きゅうくつな思いをさせておいて、愛情の表現だなんて」

「あのね、人間は、だれだって心の中には、やさしく相手をいじめたい。又、相手から、いじめられたいという気持は、あるものなんだよ。ただ、それを口に出さないだけのこと……」

「そうかしら」

「そのうちに、はっきりと分かってくるよ。きつと分かせてみせるよ」

といいながら、今度は妻に、あぐらを組むようにいいました。

「いや。そんな、かっこうは、いやよ」

「いやだったって、駄目だ。するのだッ！」

「……」

「だったら、無理にさせるよ」

正座している足を前に引っぱってやると、身体を跳かせるようにして抗がおうとしましたが、上体が縛られているため不安定で、横

に倒れてしまいました。

私は、あわてて起こしてやりましたが、足の方は許さず無理に、あぐらを組ませると、両の足首を交差させて縛ってしまいました。

「ひざが痛いわ」

「もうちょっと辛抱するんだ」

「だって痛いんですもの。あなた、痛ければ言えって、いったでしょう」

「よし。じゃあ仕方がない。今夜は、このくらいにしておこうか」

といった状態で、私達のプレイともいえないような夫婦プレイは出発したのでした。

その後は十日に一回、週に一回というように徐々に日数を縮めてゆき、妻の肌がロープになじむにつれて、縛り方やプレイの方法を夫婦で、色々工夫するようになって参りました。

しかし、その場次第の思いつきのプレイで時には、妻が、不意に気を失って、びっくりしたり、縛った縄が、なかなか解けなかったり、縛ったと思ったのが、いつの間にか解けていたり、失敗は重なるばかりでした。

でも、最近になって、ようやく、どうにかスムーズにプレイ出来るようになり、妻も又プレイ最中にハッスルすることも度々あるよ

うになりました。

例えば、最近のことですが、妻の方から私に、

「今日は一度、思いきり責めて欲しいの」

と、訴えて参りました。

私は、妻のマゾが成長してきたのが分かるだけに、今まで、その訴えを、待っておりました。

「よし、望み通り精一ぱい、責めてやろう」

と、私がプレイに必要な道具を揃えはじめかけると、妻は、奥の間で衣類を脱ぎ始めました。

「今日の責めは、ちょっと苦しいかも知れんが、お望みだから、がんばれよ」

「責めては欲しいけど、ちょっと怖いわね」

「さあ、では始めようか」

まず割りばしを用意し、それで精一杯に出させた舌をはさみこんで、両端を紙ひもで結び、頭の後部で、ゆわえました。

次に、はしの間から出ている舌の先端に、洗たくばさを二個、はさみつけてやりました。妻は、早くも、苦しくなってきたのか、唇の端からよだれが流れはじめ、

「ウウッ——」

と、うめいております。

何か訴えようとしているのを、かまわず、両手を上に挙げるように命じ、肘から上を、ぐるぐる巻きに手首まで縛り上げてしまいました。

続いて坐っている足を前に投げ出して開くように命令すると、妻は素直に従います。そこで用意したホーキの両端に両足首を固定してやりました。

ここまで作業が進むと、もう妻は完全な捕われの姿となって、どうされようと拒否できない、情けない囚女になってしまいました。

それを更に、乳房が浮き出るように菱形に縛り、のど元の結び目から、ホーキの柄の中央に縄をかけて引き絞ってやりますと、妻の身体はホーキの柄に首をのせるように、前に二つ折りになってしまいました。

さすがに相当、苦しいらしく、

「ウウッ——」

と、うめくばかりで、腹部は大きく波うっております。私は、しばらく眺めておりましたが、これだけでは余り芸がないので、絵筆と、木綿針と、バイブレーターを用意して、妻に見えるように並べました。

「苦しいかい？」

返事のしようがないといった態度で、目を



絵筆で、伸びきった肌を、くすぐって、やりますと、

同じことを、パイプと交互に十分程、続けると、妻の身体は桜色にほてり、明らかにマゾの悦びを、あらわに見せ始め、呻き声の方も、苦しみの呻きから、歓喜の呻きに変わって参りました。

たちまち、呻き声の質が変わり、針からのがれようと、尻を思いきり、動かし始めますのを構わず、三種類の責具で交互に責めたててやりますと、いろんな表情を不自由な体と臀部とで表現したのち、ついに一際、大きく呻いて、ぐったりと、気を失ってしまったのでした。

ともあれ、現在の私にとって、妻の協力は最大の喜びです。人生の荒波に立ち向かう最大の武器だと思っています。今宵も又、私のよき協力者である妻に愛情深い縄のプレゼントを……。

—(おわり)—

柱縛り稼働め、両手挙げ  
などで痛めつけた大厚し。

## 連載・アブ紳士行状記

## M 派 交 友 録

(20)

— 馬場庄平の巻 (1) —

## 鬼 山 絢 策

## ルミというモデル

馬場氏とも古い、つき合いである。

最初は二人でヌードモデルを使ってヌードを撮っているうちに、彼がMであることが分かった。それも犬派と豚派を兼ねているタイプである。

彼は、ある鉱山会社の技士であるが、彼の弟がカメラ屋をやっているというので、カメラを安く買おうべく、紹介してもらった。

彼もカメラに興味があるので、それでは、

ひとつヌードでも撮ろうかということになったのである。

もちろん彼も私も、普通のヌードは既に何回も撮っているの、単にヌードを撮るのは面白くない。そこで私は、撮影者の一人がモデルに加わって、M的な写真を撮りたいという意欲を示した。

「いや、実は私も、そういう写真は是非、撮ってみたいと、かねがね思っていたんですがね。しかし、実際にできるでしょうか」

「そりや、分かりません。まあ当たって砕けるですね」



カット・岡 たかし

いまなら、どうということはない。簡単に撮れるが、この当時は昭和二十八年、十八年も前のことである。当時は、いまほどハレンチではなかった時代だから、M派の人間も非常に臆病で、秘密主義であった。

しかし、私は前にも書いたが、花村崇をモデルに使って、池袋のヌード・スタジオで、既にMの写真の初歩的なものを撮って、経験済みである。モデルを、その方向に誘導するコツも分かりかけてきていたから、多少の自信はあった。

馬場氏は私の計画をきいただけで、年甲斐



もなく頬を紅潮させて、

「モデルが、いやがりませんかね」

と真剣になって心配している。

「いやがるかもしれませんがね。やってみないことには分かりませんよ」

前の池袋のモデルなら、一も二もなく、OKであることは分かっている。しかし、あのモデルは、あまり綺麗でなかったし、新しいモデルをハントしたいのはカメラ・マニアの通例であろう。

前に二、三度、普通の写真を撮りに行ったことのある淀橋スタジオへ、馬場氏と二人で出かけて行った。

ここは、まん前に淀橋警察署があつて、至極良心的？ なヌード・スタジオである。モデルも粒が撮っていて、顔も身体も、いいのが何人かいた。私は手帳を繰って、その中から優秀なモデルの妙子とルミという子を指名した。

当時は私も熱心だったから、ピンのスタジオには何という名の子が優秀だと、みなメモしておいたのである。

一人一時間ずつ二時間の予定である。マスターも私の顔を覚えていてくれて、ルミは未だ来ていないが、電話で呼び出してみましょ

うということ、最初は妙子というモデルを撮った。

この子は、まだ十八、九の若い子で、非常にまじめそうな、それに顔立ちも美人だが、なよなよしたところがあつて、どうしても気分が出ない。何となしに二人で一時間、普通のヌードを撮ってしまった。

途中でルミがカーテンからヒョコリと顔を出し私を見てニッコリ笑った。わざわざ指名してくれたのが、うれしかったのだろう。

私はルミに狙いをつけた。ルミならできそうな気がしたからである。

で、妙子の方を早々に切りあげて、ルミと替わってもらった。

ルミというモデルは、前髪を垂らして、丸顔の可愛らしい顔立ちで、一見、十七、八の少女のように見えるが、実際は二十四、五ぐらいになっているのだろう。このスタジオでは古株の方である。

最初は、かたくなっていた馬場氏も、このルミが出てきた頃は、だいぶ、かたさが、とれていた。

ひとつはルミがベテランで、愛想がよく、こっちの注文をのみこんで、ピッタリのポーズをとってくれたせいであるかもしれない。

ルミは可愛らしい顔をしているにも拘らず裸になると意外に豊かなボリュームであり、おっぱいの形もピンと上向きで恰好がよく、妙子よりも、すべての点で格が上である。

手や足の位置をきめる時「ここは、こういう風に——」と私が手どり足どり、時には、おなかのあたりに、さわったりしても、

「ウフ、くすぐったい。さわらないでえ」

とは言うものの、前の妙子と違って、身体を固くするような様子は見せない。

もっとも私は彼女にとって初めての客ではないから、安心感があるのかもしれない。

「君は、ほんとに綺麗だな。この前より、また綺麗になったじゃない」

私は一生懸命、おだてあげた。

「いつも同じポーズの撮っても、しょうがないな。何かアクセサリーが欲しいな」

「そこに、いろんなものが、あるわよ」

スタジオにはパラソルだとか、浮輪だとか造花など、一応の小道具は揃っている。

「ここにあるものは、みんな、もう使っちゃったよ。もっと奇抜なアクセサリーがないかな。今日は、少し変わった写真を撮ってみたんだ。見れば見るほど、あんたは綺麗だなあ。気だかさを備えてきたよ。今日は生きた

アクセサリーを使って、あんたを美の女王として、たたえるためのアクセサリーが欲しいな。そうだ、ぼくが、そのアクセサリーを、つとめよう」

「フフ、何だか、へんだわ」

「ぼくが馬になるからね、ぼくの背中へ跨がってみてくれないか。馬場さん、うまく撮って下さいよ」

私は上衣を脱ぎ、三方からライトを浴びたスジタオのじゅうたんの上に四つん這いになった。なにか舞台にでも出ているような感じで、自分の浅ましい恰好がテレくさくもあつたが、「ここが勝負だ」と思っていた。ルミが、のってくれば、あとは、うまく行くと考えた。

「何だか、へんねえ」

ルミはモジモジしていた。それでも口もとから微笑は消えていない。存外、度胸のある子で、ことによると、このくらいのことは既に経験しているのかもしれない。

「いいの？ 乗っても……」

初対面だったら、断わられたかもしれないが、おなじみさんなので、彼女も断わりきれなかったのだろう。ルミは加減して私の背中に跨がった。綿のように軽い。

「もっと上の方へ跨がって、もっと上の方、もっと」

私は馬になったままで言った。ルミは素直に足をずらせて、肩の処にまで尻を移動させてきた。

「もっと前へ、首を両股に、はさむように」

ルミの、あたたかい太股が、やんわりと両頬にさわった。マシユマロのようにフワフワと弾力のある、きめのこまかい肌の感触は、ジーンと私を、しびれさせた。

「もっと奥の方で、きつく、はさんで」

ルミは、かなり遠慮している。私の頭にかけた両手の方が太股より力が入っている。

馬場氏は、盛んにシャッターの音をさせている。

私は、仰向けに寝た。

「サ、この胸のあたりに足をのせて——どうですか、馬場さん。ポーズのわるいところはどんどん言って下さいよ」

「ハァー」

馬場氏はファインダーから目を離さない。

「靴のままで、いいの？」

ルミはヒールの高い靴の足を私の胸にのせた。さすがにプロのモデルだけあって、ポーズには絶えず気を使っている。両手を腰にあ

ててみたり、片手だけをダラリと垂らしてみたり、首を、ちょっと、かしげて笑ってみたり、工夫している。何しろ、肝心のカメラマンが、ひと言も注文をつけないのだから、セルフサービスでやるより、しょうがない。

下から見上げると、細っそりと見えた足が意外に太く見える。太股の、すれ合った辺りには逞しささえ、感ずる。殊にデルタは、こんなにも巨大なものかと思わせるほど、その全貌を、さらけ出しているだけに、そこに女性の恐ろしさを見出した。猫の爪は、ふだんはかくれているが、それが獲物を襲う時に、一ぱいに剥き出した時の兇暴さ。そんなようにも感じられる。

しかし、下から見上げるルミの顔は、あごが少し二重のように、くびれて見え、小首をかしげて紅唇から白い歯がこぼれて、いかにも愛くるしい。

スツと視線をおとすと、デルタの辺りは、うすぐろく「さび」を見せている。それは、かなり経験をもっている色である。

顔を見ると、まるで十八、九の少女のように、あどけなく可愛らしいのだが、目をおとせば、そこに成熟した女を見出せる。

最初の勘で二十四、五にはなっていると、ふ



んだ私の目に狂いは、ないと思う。

腿の、すれ合ったところの肉が、ふてぶてしいという表現で言っただけでよいと思うくらい、肉がついている。

私は、その肉で思いきり顔を押し潰してもらいたい欲望に、かられたが、私の臆病さが口に出せずにしまった。

もっとも、この時は昭和二十八年、いまから十八年前のことである。ヌード・スタジオが、できてから何年も経っていないし、当時は警察の取締りもきびしく、客が、わいせつなポーズを要求した時は、モデルは拒否しなければならぬ。もしも客の要求のままに応ずると、営業停止、時には罰金まで取られるほどまじめな営業だった。

だから、モデルにお客が、からむなどというのは、違法なのである。それをやってくれたのは、モデルの好意といわねばならない。

いつも、こううまく行くとは限らないのである。この時から、五、六年、経った三十二年頃、池袋のトキツ・スタジオという、これは客と、わいせつ行為のかどで、三回も検挙された、札つきのスタジオで、かなり、すれてるモデルを使って、春木君と一緒に撮った時、春木君を、からませようと思った

「だめ、だめっ。そんなこと、ダメよう」

と、にべもなく、はねつけられてしまったことがある。大して顔も身体も、いい子ではないので、こっちも乗り気にならなかったから、やめてしまった。そういう失敗は、ちょくちょくある。

もっとも強いて撮ろうと思えば、いくらか余計につかませれば、やらないこともないだろう。その子は客から金を絞り取る、ひとつのテクニクとして断わったのだ。

それは分かっていたが、それほどまでにしつこく撮るほどのモデルでもないから、やめたのだが、もし気に入ったモデルなら、絞り取れるのも満更、悪い気持ではない。

### 気の弱い紳士

そういう意味では、ルミは特別大サービスしてくれているわけである。

ヌード・モデルになる女の子は、もちろんその九十パーセントまでが金のために、やっているのであるが、あとの十パーセントは、自分の肉体に自信があり異性の前に、それをさらしてみたい露出症が入っていることは疑いのない事実である。

ひとによっては、その残りの十パーセントが三十パーセントあるいは五十パーセントの割合に変わる場合だって、あるだろう。

このルミという子は、丸ぼちゃの、かわいらしい顔をしていて、ヌードになってライトの下に立つ時は、何となく、はじらいのポーズを見せるのであるが、これは職業的なテクニクであろう。

「何か面白いポーズはありませんかね。気がついたら、ドンドン言っただけいいよ。何でも御注文に応じますから」

私は仰向けに寝たまま馬場氏に言ったが、馬場氏は、さっきからカメラで顔を、かくすようにファインダーを覗き放しである。

「ハア……」

と上の空で、なま返事をしている。

「そうだ、その絵日傘を、とってくれない」ルミは立ち上がって、小さな日傘をとってパチンとひらいた。

そして再び私の胸の上に跨がり、日傘を前に置いて、私の姿を隠した。ルミの上半身が日傘の上から出ていて、その下は日傘にかくされている。

私はルミのお尻に両手をあてがって、グイと前の方へ押し出した。

私の腕の力では、到底ルミの身体を前に押し出す力はない。にも関わらず、ルミの身体は前に、せり出て、私の喉のあたりまで移動した。あごのあたりが、むずがゆくなった。

このときルミは上から私の顔を見下ろしていた視線を離して、カメラの方へ向き、ニッと笑った。これは私に対して、わざと、つくってくれた隙だと思った。

私は素早くルミの太股に口づけした。

私の唇が触れた時、ルミの内股がブルブルとふるえたように見え、グイと首を両股で締めてきた。それでもルミは私の方を見ず、カメラの方を見て笑っている。

この女は、かなりカマトトのようである。

もっとも、傘にかくされているという安心感が、大胆にさせたのだろう。それが私の計算でもあったのだが……

私も大胆になって、思うところへキスの雨をふらせた。

このとき、馬場氏が始めてカメラから顔を離して、

「あ、フィルムが、きれちゃった」

と私達の方を見ないようにして、カメラをいじくり廻している。

「フィルム、ありますわよ」

ルミは、サッと立ち上がった。

「いいえ、持ってきてます」

「では、このへんで交替しましょうか。今度は、馬場さん、あなたがモデルになりませんか、私が撮ってあげますよ」

「ハァ……」

馬場氏は、すっかり昂奮して、酔っぱらったような顔をしている。

「こまるわ……」

ルミが明らかに拒否の、いろを見せた。

「こんなの、見つかったら、大変なのよ。ここは警察の前でしょ」

「分かってるよ。誰にも見せやしないから、安心したまえ。いくら、警察の前だからってここでやってるの、警察から見えるわけじゃないだろう」

「アハハハ、そりゃそうだけど……」

ルミは、身をくねらせて笑った。

私は自分のカメラを持って、

「サア、馬場さん、どうぞ」

だがルミは困ったような顔で馬場氏を観察するように見すえている。

「……ばく、いいです」

馬場氏は案外、気が弱い。決して、いやで言っているのではない。それどころか、やり

たくて、うずうずしている気配が見えているのだが、まだ、こういう複数の場に馴れていないのだろう。また、いやがる相手に対して強引に行動するという図々しさが、馬場氏にはない。このへんがM紳士の、よいところでもある。欠点でもある。私は押しの強い人も好きだが、四十近くなって、女性の前でオドオドしているような馬場氏に対しても好感が持てた。

私は、一人だと押しが弱く気も弱いのだが仲間が居ると、ちっとばかり図太くなる。ひとつの見栄なのだろうか。そうは言っても、わる押しは、しない。ルミは困ってるし、馬場氏も遠慮するとあっては、これ以上、押しすすめるのも、どうかと思い、あとはルミに適当なポーズをとらせて時間まで過ごした。

スタジオを出ると外は暗かった。

馬場氏が夕食に誘うので、新宿西口の菊正という料理屋で、蟹を肴に一ぱい、やった。

「今日は、ほんとに有難うございました。得難い写真が撮れました」

フィルムは私がD・P・Eして、焼き増しを馬場氏にあげることにしたので、二人で写したフィルムは一緒にして私が預かった。

酒が入ってくると、馬場氏は自分がモデル



にならなかったことを悔んだ。

「千歳一遇のチャンスだったのに、全く惜しかったなあ」

「だから、あの時、すなおに出て行って、馬になるなり、何なりポーズをとってしまえばよかったんですよ」

「ええ、よっぽど、そうしようと思ったんですがね。何しろ彼女が、どうも気が、すまないような顔をしてるものだから」

「そこを強引に押してしまえば、いいんですよ」

「そうでしたね。どうも、ぼくは女性に対しては気が弱いもんだから……惜しいことをしました」

「まあ、あなたの場合は、初対面でしたからね。今度、行けば、恐らく彼女も、やってくれますよ」

「そうでしょうか。じゃあ、是非もう一度、連れてって下さい」

「そうですね。今度は私も、もっと押してやってみますよ」

酒が入った故か、慎み深い馬場氏も、本心を、あらわにしてきた。私とのMを媒体としてのつながりが、この日一日でグッと親密度を増したのだった。

馬場氏としては、明日にでも、また淀橋のスタジオに行きたかったのだろう。だが、私の方が仕事が忙しくて行けなかった。

それと当時は私も秘密主義の方で、私の本名も職業も、具体的には馬場氏に知らせてなかった。住所も会社の電話番号も教えてないので、彼の方からは、私に連絡の方法がないのだった。

それから一カ月以上、経て、あの時の写真がで上がったので、馬場氏にあげるべく、電話した。

「どうされたのですか。御病気にでもなったのかと思いましたよ」

馬場氏としては精一ぱいのイヤ味を言ったつもりだったろう。だが、写真ができたことと、二回目の撮影の日取りを打ち合わせる段になると、いきいきとした声になってきた。

そして次の日、また淀橋のスタジオへ出かけて行ったのだが、何と、お目当てのルミは一週間ほど前に、やめてしまっていた。

馬場氏の落胆ぶりは、平素、表情を、あまり顔に出さぬ人だけに、顔が青ざめるほど、ショックだったようだ。

とりあえず居合わせたモデルで撮ったが、私が複数撮影を申し出ると、にべもなく断わ

られてしまった。やはり、初めて使うモデルでは誰も彼もO・Kするというわけには行かない。

その日もまた、新宿の菊正で飲んだ。この間の、お返しを私がしたのである。

ルミという子は確かに優秀だった。馬場氏は私の引き伸ばした写真を、また秘かに眺めて、いかにも残念そうだった。

だが、私の方は、それほど、残念ではなかった。

と言うのは、当時、既に倉田由紀さんと、花村崇のコンビで、Mの写真撮っていたからだ。それから比べれば、ルミの写真などは子供だましみたいなので、私が写真のD・P・Eを急がなかったのも、仕事が忙しいせいばかりではなかったのである。

馬場氏の落胆振りが、ひどいし、私が一カ月以上、放っぱらかしたために、ルミを逃がしてしまったことが、責任でもあるように感じたので、私は馬場氏を由紀さんに紹介しようかと思った。

サドでないS

しかし、これは相当、慎重を要する。

今度はビジネスでやるのではなく、純粋な趣味の上に立ってやるのだから、モデルとなる男性と女性の双方どちらかにでも、相手が気に入らなければ中止しなければならぬ。

それも二人をつき会わせて、イザという時に、どちらかに不満が出たのでは、双方に対して失礼になる。だから慎重に運ばなければならぬのである。

私は、それとなく馬場氏の好みの女性のタイプを聞いて見た。

「そうですねえ、やっぱりグラマーな、ひとが、いいですねえ」

「いくつぐらいのひとが、いいですか」

「そう、べつに特に考えたことはありませんねえ。十五、六のこどもでも、いいような気がするし、四十すぎても美人が居ますからねえ」

「それじゃ美人でも瘠せた人はだめですか」

「イヤ、そんなことはないですよ。ケースバイケースですね。グラマーで、若くて美人でも、何となく気分の、のらない人も居ますからねえ」

「そりゃそうですね」

私は少し神経質になりすぎたのかもしれない。というのは、私自身に当てはめて考えた

からである。私は写真のモデルとしては、グラマーで、顔立ちも一般的な標準の美人というのではなくて（実際は、もうそんな標準なんて現代ではないのかもしれないが）あくまでも自分自身の好みのタイプでないと、意欲が起きないからである。いわゆる寛容度が、せまいのである。しかし私のこれまで、つき合ってきたMの友人達は、割合に広い寛容度を持っているようだ。

「これなら、由起さんは大体、馬場氏の気に入るタイプだろう」

そう思ったので私はポケットから由起さんの写真を見せた。もちろん普通のポートレートである。

「このかたを、どう思われますか」

馬場氏は写真を受け取って見ているうちに目が光ってきた。

「……どう言われますと？」

馬場氏も慎重である。

「いや実はね、この方は、ある役所の相当な地位のある人の奥さんなんですがね。Sの気のある女性なのですよ」

馬場氏がゴクリと生唾を呑みこむ喉ぼとけの上下するのが見えた。

「ほんとにSの女のひとというのは居るんで

すかねえ」

「いやSと言っても、殴ったり傷つけたりするような危険性はありませんよ。やはり男性に屈辱を与えることを好むタイプですね。実は私に、もう一人Mの友人が居ましてね。既にこの奥さんとMの写真を撮ったんですよ」

「ホウ、それは是非、拝見させて下さい」

「イヤ、お見せすることはできないんです。誰にも見せないと約束してありますからね。」

ところでルミの代わりに、この方と写真を撮ってみませんか。いまも申し上げたように、写真は、たとえ同好の士といえども、絶対に人には見せない約束をします」

「結構ですが、ぼくのような者を相手にして下さるでしょうか」

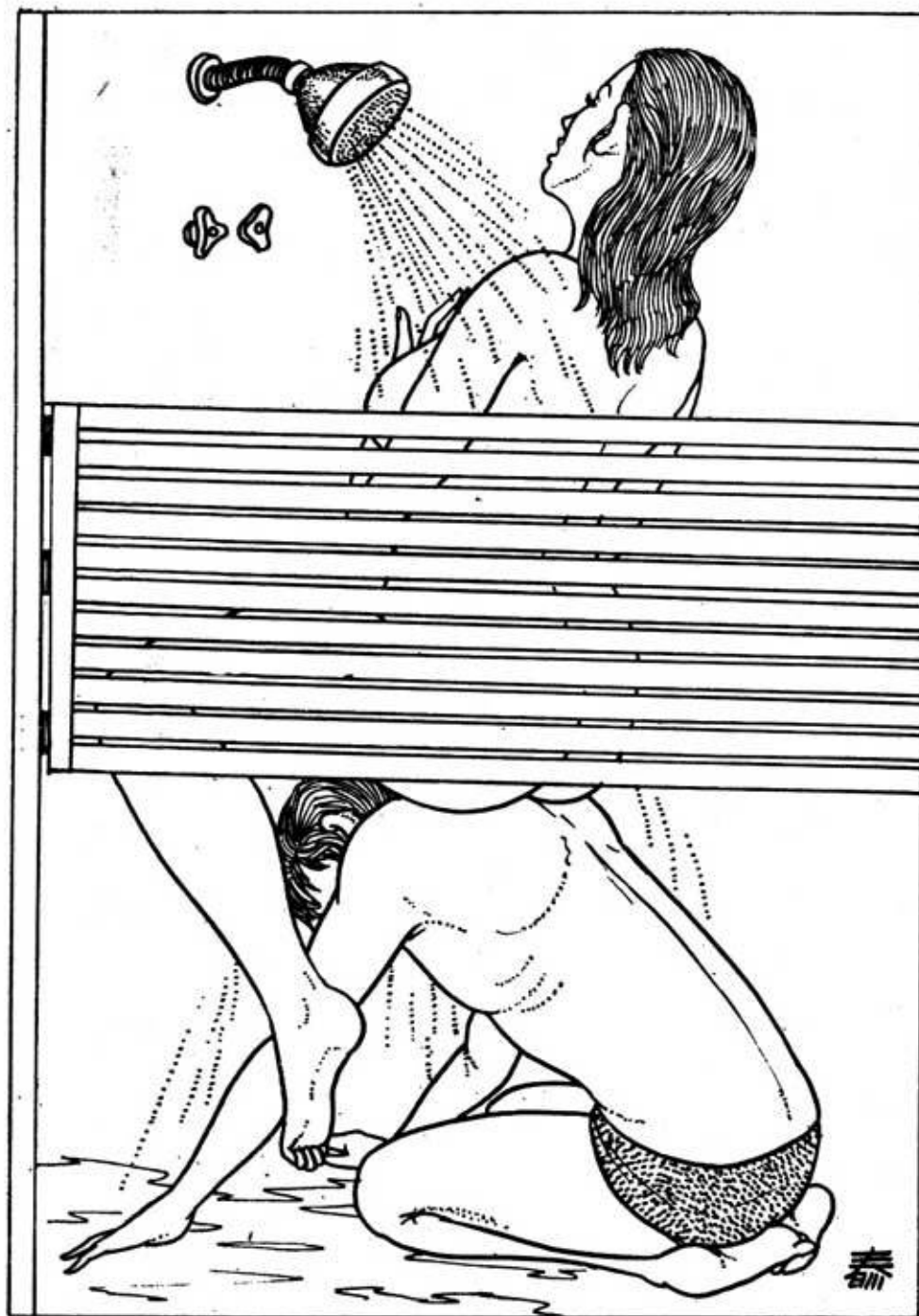
「それは、これから聞いてみます。あなたのことは、ある会社の技士ということだけしか知らせません。この方は由起さんというのですか、先方も先ほど申し上げた以上には、お聞きにならないで下さい。あくまでも、その場限りのものですから」

「わかりました。ぼくのようなものでもければ是非、お願いします」

馬場氏とは、すでに何回もMについて語り合っている。そして彼が犬派であり、豚派と



## ナミオM画廊 『倅せな日課』 春川ナミオ



兼ねているタイプであることが分かった。私の手帳にはM派交遊関係の友人のメモがある。古い手帳だが、今、引っぱり出してみると、住所や電話番号のほかに、私だけ分かる心覚えの記号が、ふってある。それは、その人のMの性向を分類したもののだが、馬場氏のところには、

馬場庄平 (m・d・p・s) と記してある。

mは説明の要はない。dは(dog)であり、pは(porn)であるが、sというのは——もちろんサドのSではない。この説明は、これから馬場氏との交遊を述べるにあたって、自然に、あらわれてくる。

## 初心のM

倉田由起さんは、この頃、花村君や、春木君などと、すでに数回のプレイを経験し、少なからず、興味を覚えていた。ひとつは御主人がアメリカに長期出張して空閑の淋しさと無聊の故もあったかもしれない。馬場氏の件を持ち出すと、気軽にO・Kしてくれた。

渋谷の「山のホテル」という、旅館を選んだ。

由起さんが、例によって三人で旅館へ入るのが嫌で、何とかならないかというので、私と由起さんの二人で先に入ることにして、あとから馬場氏が、訪ねてくるという方法をとった。

土曜日の午後二時五分前に私達が行き、馬場氏が二時に訪ねてくるということにした。通された室は洋間だったが、かなり広い野屋で、これなら、あまり不自由を感じなく撮影できる。

「あら、鏡がついてるわ」

ベッドの横に鏡がついていて紗のカーテンで隠してあった。今は、どこでもやっているが当時としては、まだ珍しい方だった。

私は、どこどこにポジジョンを定めようかと考えた。鏡も、むろん使おうと思った。

電話で馬場氏が来たことを知らせてきて、間もなく扉を小さくノックする音がした。

私が扉を開けると、馬場氏が別人のように固い表情をして立っていた。馬場氏が、こんな表情を見せたのは始めてである。それは何とも困ったような、これから悪事にとりかかる時のような重苦しい顔だった。

私は、その固さを、ほぐそうと、つとめて陽気にふるまって、由起さんに紹介した。

馬場氏は身体が二つに折れるくらい、丁寧に頭を下げた。

由起さんは馬場氏を、ひと目、見て軽蔑の色を見せ、半ば失望したような顔だった。

馬場氏は当時三十五、六才だったと思うがMの実践的な経験はないらしく、まるで初夜を迎えた処女の花嫁のように神妙だった。

女中が来て注文した料理をおいて行くと、

例によって由起さんは、ジョニ黒を出してきて、私たちにすすめ、自分も飲んだ。私は余り飲めない方だが、馬場氏は、いける口である。にも関わらず、ジョニ黒のビンを見ただけで、なかなか口をつけようとしなない。

気分をほぐすために雑談を始めたが、馬場氏が固いので、どうも乗って来ない。そろそろ始めようかと、由起さんにはバスに入っ

もらった。

私はすぐ電球のセットに取りかかった。馬場氏は、ようやくウイスキーに口をつけた。

「少し油を入れたい方が、いいでしょう」

由起さんが、バス・タオルを巻きつけてバス・ルームから出て来た。三面鏡の前で、ちよつと化粧を直している。ムツとする女の体臭が部屋に、たちこめた。

今日は由起さんは赤いガウンを持ってきた。

「これ、どうかしら」

「結構ですね。それで行きましょう」

馬場氏は背広のままだった。いままでの写真とは存外、背広のままのが少なかったし、馬場氏のようにコチコチになっていたのでは最初から裸になるのは、かなり抵抗を感じると思ったからだった。

「今日は奥さんが旦那さんを折檻するという設定で行きましょう。旦那さんの浮気がバレて、奥さんにとっちめられるというケース。いいですね」

「このひと浮気なんかする柄じゃないわね」

由起さんは頭から馬場氏を、ばかにした。最初は足で踏みつけたり、馬にして背中へ乗るような、毎度、撮ってるポーズから入っ

たが、今日の取組では女性と男性のキャリアに差がありすぎた。

馬場氏は、こういうプレーは始めてと見えて、この程度で顔を赤くして、昂奮しているが、由起さんの方は何回もやっているし、奴隷の方も旦那さんを含めて、私の知る限りで四人は征服しているので、足踏みや馬乗りぐらいでは物足りない。

もちろん私だって、こういう写真は早く切り上げて先へ進みたいのだが、馬場氏が、あまり固くなっているの、しこりを、ほぐして徐々に行こうと思ったのである。

だが、馬場氏の昂奮度は、私や由起さんの思ったより、はるかに激しく、馬になって極めてスロモで座敷を小回りに一周しただけでハアハアと息を、きらしている。

由起さんは、かなりグラマーだから、重いことも相当だが、馬場氏も六十五キロぐらいはある。大柄な男だから、このくらいのこと、へたばる、はずはない。だから、これは馬場氏が一人で昂奮してしまったのである。

もっとも淀橋のスタジオよりは、こっちの方が多分に淫蕩的である。あのルミというモデルは可憐な感じだが、由起さんは妖艶である。スタジオの方は、いつ誰かに覗かれやし



ないかという不安があつて落ちつかないが、こっちは密室である。しかも湯上がりの由起さんが悩ましい女の体臭を、むんむんさせている。

私達は馴れてしまったが、始めて経験する人にとっては、相当ショックなかもしれない。

由起さんは、そんな馬場氏を憐れむように微笑を浮かべて見下ろしながら適当に、あしらっている。余裕たっぷりである。

だが、少々面倒くさくなつたのか、馬を乗り潰した場面に入つて私が「首へ跨がつて下さい」と言つたとき、ひと腰ずらせて顔へ跨がつてしまった。

その時、馬場氏は「ウッ……」と、かすかな呻き声をあげた。

由起さんは置き物の位置でも直すように、馬場氏の頭を掴んでグイと上向けにした。馬場氏は眉をしかめ、苦しそうな表情をした。まだそこへ行くのは、ちょっと早いな、と私は思ったのだが、由起さんは委細構わず進行を早めてしまった。

馬場氏は目を、かたくつぶり、顔を歪めてひどく苦しうである。顔を曲げて、上から押しつぶさってくるものから逃がれようとし

ている素振りが見える。

だが、由起さんの豊かな太股が厚い壁となつて右にも左にも動きをとれなくしている。

ここまでできてしまつては、もはや由起さんは許容の域を越えてしまつてゐる。

由起さんは苦しむ馬場氏の顔を見下ろしながら、自分のペースに、まきこんで行つた。

次第に由起さんの目がサジスチックな光を帯び、笑いは消えて、馬場氏を息詰まる苦悶の世界へ強引に落としこんだのである。

「ちょっと、由起さん。向きを少し変えてみて下さい。カメラの方へ向くように」

カメラの位置からは、ちょうど真横に位置していた。私が声をかけても、由起さんは、しばらくの間、同じ位置で、ますます馬場氏を圧迫し、苦しめた。

その場面は、すでに三回もシャッターをきつたので、次のポーズに移るべく、それと馬場氏が如何にも苦しうなので、彼を助けてやろうという意味もあつて声をかけたのだが、由起さんも、かなり昂奮してゐて、ひと区切りすまぬ中は腰を上げ様としなかつた。

「由起さん。ちょっと位置を変えて下さい」再び声をかけた時、由起さんはこっちを見てニッコリ笑い、ようやくみこしを上げた。

その途端、

「す、すみません。少し休ませて頃けませんか——」

ホーッと息をついた馬場氏が力のない声をあげた。

「どうかされたのですか」

「ええ、ちょっと、おなかが痛くなつたもんですから——」

由起さんは、ようやく馬場氏の上から退いた。

馬場氏は起き上がるとトイレへかけこんで行つた。

モデルのどちらかに故障がおきると、仕事に穴があいてしまつて、盛り上がった空気がしらけてしまうものである。

「どうしたのかしら？」

「別に——おなかなんか痛くないですよ」

すでに私は馬場氏の心情を察していた。

私が苦笑しながら言つたので、由起さんもようやく気がついたらしい。

「何だか知らないけれど、ばかに純情なひとを連れてきたもんね」

「イヤ、始めてだね、刺戟が強いもんですよ。由起さんはベテランだから、むしろ、これからというところでしょうがね」

「だって十七、八の少年じゃあるまいし、もう三十も相当、越しているんでしょ。ほんとに初心<sup>うぶ</sup>だわ」

由起さんは煙草に火をつけながら、興奮め顔だった。フと立ち上がって湯上がりタオルをとると、ガウンの帯を解いて腰の回りを拭いた。

「あの人、汗びっしょり、かいてたわよ。そんなに、きつくやったつもりはなかったんだけどねえ」

向こうを向いて拭きながら、首だけ、こっちを向いてニッと笑った。

そこへ馬場氏がトイレから出てきた。

「どうも、すみません。もう大丈夫です」

「もう治りましたか」

「ええ、すっかり、よくなりました」

私は由起さんの顔色を、うかがった。由起さんは何か拍子抜けした様な顔をしていた。

「今日は、このくらいに、しておきましょうか。お疲れになったようだから——」

「いや、僕は、もう大丈夫ですが」

由起さんは、つと横を向いてしまった。

「また、おなかが痛くなると困るから——」

「いや、ほんとに失礼をしました。もう、あんなことはありません」

馬場氏は、まだ続けたかった様子だが、時計を見ると六時近くになっていて、意外に時間をくっている。

「ま、今日は、こんなところで。また、日を改めてやりましょう。由起さん、夕食でも如何ですか」

「いいえ、あたし、ちょっと用があるから」宿に車を頼んで由起さんだけ先に帰った。「いや、驚いた。今日は失敗しちゃって、すみませんでした」

馬場氏は由起さんが居なくなると、頭をかいた。それから渋谷で一ぱい飲んだ。

「奥さんは、ほんとにすばらしい方ですね。あんなに堂々と積極的にやられる方なんて滅多にいないでしょう。もう一回、是非やらせて下さい」

「何だか気の毒がってましたよ。見かけによらず、ひよわな方じゃないのかしらってね」

「いや、そんなことはないですよ。ぼくは、この前、淀橋で、あなたがやられたでしょう。

あの程度のことかと思っていたんですよ。初対面で、いきなり、あそこまで行くとは思ってなかったもんだから」

「始めての人は誰でもそうですよ。でも、また腹痛をおこすと困りますからね。ハハ」

「イヤ、こんどは大丈夫です」

「誰でも必ず腹痛はおこすけど、あなたの場合、今日は早すぎましたよ。アハハハ」

私は酔いにまかせて、すっぱ抜いた。

「イヤ、どうも……」

馬場氏は酒に強い方だから、顔には余り出ないが、この時はパッと、あかくなった。

「奥さんも、それ御存知でしたか」

と、恥かしそうに聞いた。

「そりゃ知ってますよ。何度も手がけてますからね。それに誰でもあることだから」

「ほんとに、だらしなかったなあ。今日は心の準備ができてなかったもんだから。よし、この次は名誉挽回だ。頑張りますよ。いや、今日だって、あれからやれば調子が出たと思うんですけどね。残念だったなあ。奥さんによろしく言うておいて下さい」

どうも、さっきから話の様子では、馬場氏は倉田由起さんが、私の女房であるような口振りである。

「ハア、まあそうお伝えしておきましょう」

「ぜひ、もう一度、御願います」

「サア、由起さんは何か気乗りしないような感じだったなあ」

「そこは、ひとつ鬼山さんから説き伏せて下



さい。ぼくも今日のような、だらしない男だと奥さんに思われるのは残念ですから」  
 「ハハ、まあ、そうお伝えしておきますよ」  
 「奥さんは最初から、ああいう風なS的というか、男性の上に君臨するタイプだったんですか」

「ちょっと断わつときますけどね、由起さんは私の家内じゃありませんよ。前に申し上げた通り、あるお役人の奥さんなんですよ」  
 「ああ、そうでしたね。いや、しかし、ほんとに、すばらしい方ですなあ。女性にも、ああいう方が居るかと思うと、ぼくは目の前がパツとひらけた感じですよ」

話はそれから又、いろいろと、はずんだ。

## ニセモノ……

### 「毛皮のヴィナス」

「毛皮のヴィナス」が、ドイツとイタリアの合作でつくられたと聞いて、封切られる二カ月前から、胸をワクワクさせて期待していた。

親友の春木君と共に、六月十九日の封切日には万障くり合わせて観に行こうと、はりきっていたのだが、何とも情けない愚作

Mについての見解や、分析についても話し合った。だが話が元に戻って由起さんのことに触れると、いつの間にか馬場氏は、由起さんを私の女房のようなつもりで話して来られるのである。

由起さんのことを今まで他の人達は、私と同じように「由起さん」と言っていたが、馬場氏は「奥さん」と言う。奥さんには違いないのだから、それを訂正させるわけには行かないが、話の節々にどうも私の「奥さん」であるように思いこんでいるところが見える。

馬場氏は、もう一度、是非と切望したが、こればかりは由起さんがO・Kしてくれないことには、どうにもならないことである。そ

## を斬る

鬼山

絢策

も愚作、ひどいものを見せつけられて、がっかりした。

およそM文字において「毛皮のヴィナス」こそ、最高至上の作品である。

後代に至って谷崎潤一郎や、宇能鴻一郎、沼正三、レナート・ギョットなどの作品は、「毛皮のヴィナス」よりも進歩した作品かも

れを言うと、馬場氏は、私さえ口説きおとせば、由起さんも自動的にO・Kすると思いでいる。そういうところが、どうも私と夫婦だと勘違いしているようである。

そう思うのも無理はないかもしれない。他人の女房に、あれだけのことをやらせることは常識上、あり得ないと馬場氏は思っているようだ。

私は、馬場氏のひととなりにより好感をもっていたので、できれば彼の希望を叶えてやりたいと思った。

そして、それが実現するのであるが、あれほど「初心<sup>うぶ</sup>」だった馬場氏が、二回目からはガラリと変貌するのである。(続く)

しれないが、マゾヒズムの元祖であるレオポルト・フォン・ザッヘル・マゾッホのイズムに教化されたものであり、その意味で後輩が、先輩より進歩した作品をつくるのは当然である。

マゾの原典、とも言える「毛皮のヴィナス」を、かくも無惨な、稚拙なストーリーで演出されては、我々M派としては大いに憤りを感じずには、いられない。

私は「毛皮のヴィナス」こそ、M文学世界至上の作品として畏敬している。

ところが、あの映画の製作スタッフには作品に対する尊敬の念が、皆無である。皆無どころか、この作品を侮辱することも甚だしい。

では、私の怒りの数々を、ここにぶちまけてみよう。

第一に、この映画をポルノ映画と銘打っている。

これからして、すでにニセモノなのである。

現在の日本に、ポルノ映画の公開は、あり得ない。

法律でポルノを禁止しているのだから、上映できる、はずがないのである。

「私は好奇心の強い女」など、ややポルノ映画の、はんちゅうに入るかもしれない。

そして、ボカシのテクニクという新戦法を用いて、ポルノ禁止国に登場した、そのアイデアとファイトは賞讃されてよい。

ところが「毛皮のヴィナス」では「私は好奇心……」に見られるような場面は、わずかに終わりに近づいた頃に二、三秒あるのみである。

これあるがために、皆無という言葉が使えないのは残念であるが、普通の恋愛映画だって、近頃のは、SEXの場面で、ポルノと同様な場面は、いくらでも見出せる。二、三秒くらいならザラにある。

従って、正しくはピンク映画というべきである。

まあ、これからのピンク映画は、売り込み政策上、すべてポルノ映画と銘打って宣伝されるかもしれない。それは商売の上で、やむを得ないかもしれない。

第二に、この「毛皮のヴィナス」をピンク映画として製作されたことに大いに憤りを感じる。

「毛皮のヴィナス」は、単なるSEX小説ではないのだ。マゾヒズムを透徹した小説なのである。

マゾの文学に性交場面など必要ない。

強いて、とり入れるとすれば、マゾの情熱をたかめるための、材料として副産物的にとり入れれば効果的である。

だが、残念なことに、この映画では、最終のもしあげに、それを取り入れているのである。

「だから立派なマゾ映画じゃないか」と言う人があるかもしれない。

だが全体の二十分の十九を、くだらないことばかり見せつけられて、最後に来て、あんなことやったって「証文の出しおくれ」である。今更、何だ！ と言いたくなる。

確かに「毛皮のヴィナス」は、最愛の妻に姦通させるというところが、主要なテーマの一つになっている。

そして製作者は、これを「最後のもりあげ」に使った意図は分かるが、その演出法たるや、マゾの観念から、ほど遠いデタラメな演出である。

ある主人公の目の前で犯す場面では、主役が、犯す男に置き換えられている。だから、あれはマゾではなく、サドの場面である。あの場面では、ヒロインがイニシアティブをとらなければ、マゾのムードは出てこないのである。

だからサド派の人々が見たら、さぞ昂奮する場面であろう。

第三に、キスシーンが不愉快である。

マゾッホの描く主人公が、ヒロインのワンドと、対等のキスをする場面が何回となく出てくるが、こんなマゾヒストは、あり得ない。

わずかにヨットから上がったところで、カニリングスを想像させる場面が、ほんのちよいとだけあるが、これとても、女性が受動的な体位をとっているの、Mのカニリングスとは受け取れない。単なる男性の愛撫行為でしかないのである。

第四に、鞭打のシーンについて――

一カ所、ワンドが怒って鞭を振る場面がある。ここだけは迫力がある。だが、肝心の鞭打たれる男の姿が画面にない。

これは、善意に解釈すれば――あの場面



は映画の主人全を殴っているのではなく、観客自身を殴っているのだ、と思わせるための演出である——と言いつけるかもしれない。

それはそれでよいのだが、ストーリーの上では、あくまでも主人公のフィリップを殴っているのだから、殴られたフィリップの苦悩の姿を、とらえないというのは、どうにも首肯できない。

第五に、屈辱のシーンが殆ど、ない。

確か、馬にして這わせる場面が一カ所だけあったと思うが、全然、印象が薄い。しかも、馬になった男も、上の女を笑っていたと思う。

こんなバカげたニセモノは、話にならない。

ほんとうのSとMなら、馬も騎手も真剣である。

そこへ行くと「痴人の愛」の三回目の作品である、安田道代と小沢昭一の馬乗りシーンに迫力があつた。「ハッハッ、ウウッ」と、馬の苦しい息使いがボリュームを高めて、ひびき、馬は何も考えず、ただ、ひたすらに走る。騎手も、叱咤激励して懸命に追いまくる。あれが、ほんものなのである。

第六に、場違いの作品である。

独伊合作などというが、実際には主力がイタリアにある。脚本がファビオ・マッシーモ監督がマッシーモ・ダラマーノと、肝心かなめが皆、イタリア人である。もしドイツで作られたとしたら、こんなお粗末な、というよりも誤った、作品を冒瀆した映画は作らなかったらと思う。

最後に、もっとも遺憾な、重要な点をあげる。

それは「毛皮のヴィナス」と、うたった、この作品は、極くわずかなMが含まれているが、それが、にせものであり、マゾの心理もイズムも誤っているために、一般の人が、これを見て「マゾとは、こんなものか」と誤解される点が非常に残念である。

M派の、もっとも嫌悪する場面が、いくつかあつた。

覆面をした男がワンダを縛って殴る。これが覆面をとるとSの男である。そこまでは、まだよいとして、また覆面をして女を殴り、次に覆面をとると、フィリップに替わっている。

最後にフィリップが、売春婦になった女を殴り倒す場面。

これなどはM派が見れば、興ざめ、あるいは嫌悪を感じるが、SもMも、よく知らぬ人が見れば、

「Mと言ひ、Sと言ひ、所詮は同質のものでいゆるヘンタイと称される人種は一人でもSもMも、ホモも、レズも、すべて含まれているんだな！」

と思われることである。

心理学者の中には、MはSの変型であつて本質的には同一であるなどと言う者もいるが、これは大きな誤りである。

中には稀に、本来Sであつた人が、途中からMに変貌する——といった例がないではない。だが、その事のみを捉えて、SもMも同質だなどと論じられるのは、心外なのである。

ともかく、この映画、ひどい落胆と同時に、おさえきれない憤りを感じた。

製作者の良心をチラッと覗かせたものに「毛皮のヴィナス」の主題の下に「女芯のいとなみ」なんて、ヘンてこなサブタイトルをつけたことである。

名作「毛皮のヴィナス」をつくるのに、どうして、こんな副題を必要とするのであろうか。

この副題を見ただけで「ハハア、この映画はニセモノだな」と見破る目があれば、私もこうまで腹を立てずに、苦笑しながら見ていられたであらう。

~~~~~告白~~~~~手~~~~~記~~~~~

## 好美夫人を縛る

木 山 春 夫



## (一) 渡部氏との出会い

この体験談をお話する前に、私が、どうして渡部氏と知り合ったのか、まず、そのことから、お話を進めたいと思います。

私が、奇ク誌を読み始めましたのは、今か

ら三年ほど前からですが、その動機は肉体的な欠陥から失恋をしてしまった時、奇ク誌を知り、心の安らぎを感じたのです。その日から今日まで、毎月二十五日になりますと、何となく落ち着かず、自然と、いつもの本屋に足が向かってしまっています。その日も例によって本屋の棚の前で、新しい号を手にとってパラパラやっておりますと、男の人が入ってきて「ちょっと失礼しますよ」と、私の前の棚から、奇クを一冊とって、店のおばさんに渡し、気軽に話し始めたのでした。

三年もの間、この店で奇クを求めておりま

す私は、時々、奇クを求める人と顔を合わせることもありますが、だれも、急いで買い求めさっさと出て行くようですのに、その人は、ちょっと様子が違うようなので、私は、つい聞き耳を立ててしまいました。

「おばさん、今月号は多いようやね」

「そうなんです、思い切って、増したんですよ」

「ところでおっさんの糖尿病、どうかいな。

ぼくも苦労してるんや」

「そうですか。病院から電話して来て、はよう帰りたい、帰りたい、いうてます」

京都弁丸出しで話しているその人に注意し



ているうち、私は「オヤッ」と思いました。

少し高い声、早口でしゃべる人、時々眼鏡を指で上げるクセ……確か、新年号カメラ・ハントの中で、辻村氏が、渡部氏を評して、そんなことを書いていられたようですがその人は、まったく、似ているのです。私はとたんに『あるいは、この人が、渡部光雄氏ではないだろうか』という気がしました。

『まさか』と打ち消す気持もありましたが、とにかく、奇クファンには違いなく、何とかして、あの人に近づきになりたいと思いました。

やがて、その人が出て行こうとしましたので、私は声をかけようとしたのですが、それより早く、先方から「いやー君も、奇ク誌のファンですか」と話しかけられたのでした。私は出鼻をくじかれた思いで、「アノウー大変、失礼ですが……」といいかけた時、数人の高校生らしい女性が入って来ましたので、あとを続けることも出来ず、口ごもっておりますと、その人が「そこまで、ご一緒に行きましょうか」と云い出してくれました。

肩を並べて歩きながら、私は思いついて云ってみました。「失礼ですが、ワタベ……ワタベミツオさんでは御座居ませんか」と。す

ると、その人は、とっても驚いた顔付きで、立ち止まりました。そして「どうして、わかりましたか」と云うではありませんか。私はやはりそうであったのかと安心し、とたんに嬉しくなりました。

私の勤が働いたことを聞いた渡部氏は、愉快そうに笑いだされて、「正体がバレては、君をこのまま帰せませんね。今日は、ゆっくり話をしましょう」と、肩を叩いて誘ってくださったのでした。

## (二) 夫婦SMプレー見学

奇跡的な偶然から知り合った私と渡部氏との交友は、それから始まったのですが、私自身の素性も悩みも、すべて聞いてもらい、逢う度に親しく、深くなって行きました。それでも、家の方にも度々招かれて、渡部氏御夫婦のプレーの歴史ともいえる、数々のフォトを見せてもらったり、色々な手製の責具を見たり、SM体験談を聞かせて頂けたのは、四カ月ほどの月日が経ってからでした。

気軽にお家に寄せて頂けるようになって、いつも思うことは、渡部氏の家庭はどうしてこんなに明るいのだろうということです。サド、マゾという言葉から受けるイメージは、

何となく、うす暗く、じめじめした感じを受けるのですが、夫婦SMプレーとは、また別のムードを持っているのでしょうか。とにかく氏の家庭は底ぬけに明るく、子供さん達も人なつこくて、私が始めてたずねた時、持参したビールのカートンが、印象的だったらしく、今でも「ビールの、おっちゃん」と呼んでくれるのです。

夫人は、余程の時でない私達の話には口を出されず、ただ傍で、にこにこして聞いておられるだけで、渡部氏がフォトを持ち出してこられると「恥かしいわね」といって座を立たれます。この、もの静かな夫人のどこにあの名人、辻村氏を感嘆せしめた強烈なマゾ性が、ひそんでいるのだろうかという思いで、私は理解出来ませんでした。確かに夫人は奇ク誌のモデルとして何度となく登場されていますし、渡部氏のアルバムには夫人の強烈なフォトが、ぎっしり貼り込まれていますから、信じないわけにはゆきません。しかし、そんな私の、ちぐはぐな感じが、一挙に解決する機会が、やがてやって来ました。

その日、私は渡部夫妻の結婚記念日だからという招待を受けました。ご家族以外には私だけの、ささやかな、お祝いの食事が済み、

子供さん達が眠ってしまってから、私は渡部氏に意外なことを聞かされたのです。

「木山君、今日は僕たち夫婦の記念すべき日だ。この心祝いの日に君を招待したのは外でもない。君が、家族同様に交際出来る真面目な青年だということも解ったし、私達夫婦にとって安心してプレー出来る人であると、確信できるようになったからなんだ。どう？君さえよかったら、今日は、ゆっくりプレーを楽しもうじゃないか」

私はドキドキしてしまって、ちょっと返事につまりましたが「それは有難いんですが、しかし奥さんは、よいのでしょうか」と、しどろもどろで答えましたら、夫人は、にっこりとして云って下さいました。

「とても恥かしいことですけど、私、主人にすべてまかせております。今までも主人の云う通りにして来ましたし、決してそれが、まちがっていたとは思っておりません。これからも主人の云いつけを守っていくだけです。木山さんさえよかったら、よろこんで」

何と云う、うれしい言葉でしょう。正直なところ、夢想したことは何度もあります、まさか実際に夫人とプレー出来るとは考えたことがありませんでしたので、本当にびっく

りしたり、うれしくなったりで、全身が興奮と動揺に、カッカと燃え上がってしまいました。

それにしても私には、ためらいがありました。新年号カメラ・ハントの中で辻村氏が渡部氏を評して「大海原の様な心の持主……」と書かれているのですが、いかに開放的で大胆な渡部氏であっても、ただ感情の高鳴りの中で、ことを決されるのでは、ないはずで、未だ誰もなし得なかった「妻を一夜、他人のもとに送りプレーをさせる」ということを決行された渡部氏の、その判断の依りどころはどこにあったろう？ 私は、それが知りたいと前々から考えていましたので、思いきってたずねました。

「私は、人を見、理解する人見の術を持ってゐるつもりです。その可否は静かに、心をしずめて判断します。常識的にみて考えられないようなことでも、心配無用です」

渡部氏は、こともなげに、きっぱりと云いきり、私のためらいを、ふきとばして下さいました。

「木山君、今日はいろいろアイデアを用意しているのだけど、まず君の手で好美を丸裸にしてくれないか。君の好きなように、好美に

命じてくれたまえ。それが今日のプレーのファンファーレだからね」

渡部氏が、ごく普通のことのようにいわれ、横に坐っていられた夫人が、少し顔を赤らめながら、

「木山さん、お願いします」

と、にじりよって来られるのでした。

私は、思い切って夫人を抱きよせ、服を通して感じる豊かな柔らかさに戸迷いながら、半ば夢中でワンピースのファスナーを引き下ろし、スリッパを剥ぎ、パンティを脱して行きました。

私に裸にされた夫人は、右手で前をおさえ左手で乳房をかくすようにしていましたが、渡部氏に強い口調で、

「横になって木山君に身体検査を、お願いしなさい」

と命じられると、直ちに明るい電気の下にごろりと、転がり、

「木山さん。好美の体を、よく見て下さい」

と、大の字に手足を拡げてみせ、「静子夫人」と命じられると、尻を持ち上げ、顔を畳にすりつけるようにして、腰を左右に激しく動かしてみせたのでした。

やがて、渡部氏によって後手高手小手に縛



り上げられた夫人は、足首を繋がれて、少ししかない歩巾で、部屋の中を廻ること命じられ、よちよちと歩き出しました。

「もっと早く歩け。その歩き方は何だ。もっと尻を振って歩け」

きびしい口調の渡部氏の命令です。夫人は左右に尻を振って、不自由な、よちよち歩きを続け、やっと渡部氏のもとへ帰ってくると針責めが待っていました。

足首の縛りだけが解かれ、高く突き出した白い双丘を、三本の注射針が、くまなく、ちくちくと、ついてゆきます。たちまち白い丘に、小さな赤い花を散らしたように、ポツリポツリと赤い斑点が現われてきます。

低く押し殺したように、呻きを洩らしていた夫人が、やがて「もっと、もっと、強くて！」と、自ら責めを求め、渡部氏に身をあずけてゆきます。

次には、太いローソクに点火され、黒いビニールの上に、ころがされた夫人に向かって熱い、したたりが降り始めました。ある時はお尻へ、また乳首へと注ぎかけられた蠟涙は夫人の肌に白い塊りとなって、こびりつきましたが、パイプがびびき始めると、ポロポロ剥げ落ち、悶える夫人は紅潮した頬に涙を流

し、身をよじり、被虐の欲びを全身で表現していました。

「さあ、木山君。次は、君が責めるのだよ」

と、渡部氏に肩を叩かれた私は、あまり大きくない乳房に、恐る恐る蠟涙を流してみましたが、夫人はピクツとしただけでした。

「君、もっと低いところから早く落として」

と渡部氏に云われ、思い切って、二十センチばかりのところへ近づけてローソクを横にしました。とたんに夫人の身悶えが激しくなり、悲鳴が挙がり始めたのでした。

「木山さん、かんにんして。あついわ」

泣き声を出して叫びつづける夫人を、渡部氏のカメラが追い、捕えていました。

全身ローソクの斑点がついた夫人は、緊しい縛りを解かれるや否や、渡部氏に抱きつきそこに私が見ていることさえ忘れたかのように、狂おしいばかりにキスを求め合うお二人でした。

生まれて始めて私が目の辺りに見た夫婦SMプレーの一幕は、こうしてフィナーレを迎えました。

日頃、心の中にえがき、想像していた情景より、それは、はるかに激しく、妖艶な、なまなましきで、強烈な印象となって、私の心

の奥深く灼きついたのです。

### (三) 好美夫人を縛る

その日、以来、私の渡部家訪問は、ぐっと回数も増し、夫人とも、より以上に親密になりました。なんの気がねもなく話をしたり、食事をしたりというのは、少しも珍しくなくなり、夫人から「ヤモメ暮しにウジがわく、なんてことにならないように、洗たく物でも持っていっちゃいよ」などといれわると、ついその気になって、日曜日など朝から一日中、渡部家にいることもあったりで、家族同然のふるまいに、いつの間にか深入りし過ぎて迷惑をかけているのでは？……と、時々ハツとする時があるほど、親しくなっていきました。

そればかりではなく、始めて見た夫婦プレーの強烈な印象は、いつしか私の心に、自分のこの手で好美夫人を縛ってみたい願望となって、ふくらんで来ました。

しかし、いくら親しくして貰えるからといって、こればかりは何といって話をすればよいのか、もし、そんなことを話せば、せっかく結ばれた糸が切れはしないかとの心配もありました。

それでも益々ふくれ上がる願望に耐えきれぬようになり、ついに渡部氏に打ち開けてみたのです。

私の必死に似た願いを聞いて、しばらく黙っておられた渡部氏は「これは大変なことになった」と笑いながら

「また新しい、試みが始まるわけだが、一度やってみたい気持ちもするね。あの日も、予想以上にエキサイトして、かなり強烈なプレーになってしまった。さぞ君も、びっくりしたと思うよ。あとで好美が、云っていたよ。木山さんって、始めてプレーをした人とは思えないほど、積極的に強く責める人だ、って。……しかし、この新しい試みは、私は、たのしいと思うが、本人の好美が、いつものように命令に従うかどうか。今のところ、少々自信が持てないんだ。好美と相談して君の期待に応えられるように努力してみるが、しばらく時間が欲しいね」と云って下さいました。

その後、私は判決を待つ被告のような気持ちで、わざと訪問を控えて待ちましたが、渡部氏から連絡がなく、『やはり、夫人がゆるして下さらなかったのか』と悶々としながら、諦めようと自分に、いい聞かして数日を送っ

た時、思いがけなく好美夫人自らの電話を受けたのでした。

「木山さんですか？　しばらく。好美です。主人からお話、聞きました。この電話も主人のいいつけなんですけど、次の日曜日、貴方のアパートへ伺います。一時頃になると思いますが、ご都合、いかがですか？」

どぎまぎしながら、簡単な会話で電話を切った私は、じっとして居られないほど興奮していました。

あの日、以来。きっと渡部夫婦の間で、私の、好意に甘えすぎた申し出について色々と話し合われ、夫人が私のアパートをたずねるといった演出が行なわれたに違いない。あるいは、夫婦プレーの中で「木山君に責めてもらって来い。御主人様の命令だ」「はい。好美は、木山さんに責められて来ます」などという言葉のプレーが交わされたのではないかと……と想像して、私はますます激しい興奮に体をふるわせていました。

長い間の夫婦プレーも、いつしかマンネリ化して行き、より新鮮な刺激を求め、第三者を夫婦の中に招き入れ、その願望を満たして来られたらしいことは、何回か、氏が発表された手記で知っていましたし、実際に渡部夫

婦と交際することで、それが渡部氏の方針らしいと、よく解っていました。その意味でなら、私という人間の出現によって、渡部夫婦の求める新しい試行は一段と高くなったと思っただけです。

未だかつて、心の中では考えながらも、同好者のだれもが実行されたことのない試み。愛妻を一夜、辻村氏にゆだねてSMプレーのあくなき責めを甘受させるということを敢行され、自らは好美夫人が受けた数々の飼育の様子を報告させ、激しく揺れるシットに肉体の歓びを知るといった行為は、ノーマルな感覚の人間、否、SM同好者ですら理解に苦しむほどのことだと思います。その深い次元で夫婦愛の絆を結ぶ試みを実行された渡部氏。

今また、私の申し出にたいして、一つの謎を投げかけながら、夫婦の間に私を介在させ新しい興奮の泉を求め、熱く燃えたぎっているにちがいないと、思いました。

私の住むH荘は一人暮らしのサラリーマンが多く、夫人を迎えるその日も、ひっそりしていました。

約束通りの一時過ぎ、いよいよ夫人がみえました。

「木山さんのアパート、とても明るい感じで



## 『不安と期待』志野春秋



すのね。男の人の一人暮しだから、私、きつと、うすぎたない所だと思って覚悟して来ましたのよ。これ、私の手製のお寿司なの。貴方と一緒に戴こうと思って……」

「そうですか。それは、ありがたい。朝、パンを喰っただけです。今、お茶を入れますから」

「いいの、私がしてあげます。今日は貴方は御主人様ですもの」

ニコリ笑った夫人の横顔に、今日これらの時間が、きつと素晴らしいものになると思いました。

夫人手造りの寿司を、ぱくつきながら、先

だつて見学した夫婦プレーに強く刺激されたこと。一度は是非、こうした二人だけの時間が、持ちたかったことなどを、打ち開けました。そうして快く引き受けて下さった夫人に心からの感謝の気持を知ってもらいたいと思いました。

だが、話しているうちに、何をいつてるのか我ながら怪しくなるほどの激情に襲われてきて、思わず夫人を抱きよせていました。それでも「奥さん、いいんですね」と耳許で、ささやくように念は押しました。それまで絶えなかった微笑が消え、夫人は黙って首を縦に振り、胸に顔をうずめるように私に体を、あずけて来たのです。

思い切つて全裸にした夫人を、もう一度、引き寄せ、乳房をわし掴みにして、激しく唇を奪いました。夫人は身をくねらせて応じ「私、うれしい」と、ささやきました。

これも、渡部氏に命じられた演出なのか、夫人自身の燃え上がって来るマゾ願望の現われなのかは私には分かりませんが、ともかく私の腕の中で、夫人は自ら被虐を

求めて、Mの世界に転がり込んで行こうとする様子だけは感じとれました。

この夫人をこれから、どんなにしようとする勝手なのかと思うと、私のS性は、むらむらと頭を持ち上げてきました。今日はオレが主人なんだ、と自分に言い聞かせて、冷たく夫人に命じました。

「さあ、好美。四つ這いになるんだ。犬になって、この部屋中を歩き回れ」

そういうのと同時に、平手で尻をピシリーと打ってやりました。

「ハイ、わかりました。好美は、よろこんで犬になります」

と、答えるなり、のそりのそりと、四つ這いになって歩き出す夫人。

「そら、もっと尻を振って早く歩け。お前は今日のことを、残らず主人に報告するのだらう。だから、もっともっと犬らしく、しろ。さあ、チンチンをするんだ。片足を上げて、オシッコをしろ」

次から次へと命じましたが、夫人は素直にそれに従い、部屋中を這い回りながら、いろいろな屈辱的なポーズを見せてくれます。私は、そこで五〇CC入りのガラス浣腸器とエネマを床に投げ出し「それを口にくわえて歩

け」と命じました。すると、はじめて夫人はためらいを見せました。

「どうした？」

「こんな、いくらなんでも、こんな浅間しい……」

「ここに来た以上は、私の命令に従うのだ。ぐずぐず言わず、しっかり、口にくわえて歩け。さあ、早くしろ」

私は、ここを押し切るべきだと思い、平手で尻をピシリピシリと、打ってやりました。

夫人は、しばらく、せつなそうな眼差しを私に向けておりましたが、思いつめたようにエネマをくわえ、チンチンをくり返し、やがてマゾ願望を全身で現わして行きました。

「これから、それで、たっぷり浣腸してやるから、エネマに頼ずりをしろ」

「ハイ。好美、浣腸が、とても好き。早く縛って、うんと、いじめて」

甘えるように責めを求めて来るのです。経験のない私に対する挑戦のようにも思われました。

いつもエプロン姿で、まめまめしく働く物静かで優しい好美夫人が、一度、M性の扉を開けば、変貌いちじるしい一匹のメス犬となつて、ひたすら被虐を求め、責められて歓喜

し、羞かしい言葉を口走り、悦楽のハーモニ―を奏でるのです。それは、この目で信じられないほどの変わりようなのです。

渡部光雄という一人の男を知った平凡な女性性が、いつしか飼育されて、心の底にねむるM性を引き出され、マゾ願望の強い女となりそのあられもない姿を私の前に、さらけ出している。果たして、実際にはSMプレイの経験を持たない私如きの責めで、夫人は満足するだろうかという不安にかられながら、綿縄で夫人を後手高手小手に縛り上げ、椅子に坐らせて、その両足を椅子の左右の足に固定しました。

私は、この日のために、新しい西洋カミソリを用意していました。渡部氏に叱られるかも知れない、という気持はありましたが、剃毛してみたい誘惑が強かったのです。そして遂に、そのチャンスが来たのです。私の手に光るカミソリを見た夫人は、すぐ察したらしく、さっと頬を紅潮させて顔をそらしましたが、逃げようもなく縛られていたせいか、拒否する様子はありませんでした。私は、ともすれば、ぶるぶる慄え出すカミソリに気をつけながら、願望していた剃毛の儀式を了えた時、正直いってホッとした、気持になりました。

た。

私にとっては、思いのほかの難作業であった、はらいせに、新しく顔を見せた素肌をクリップで挟んでやりました。夫人の反応は、すぐ現われました。

「アッ！ イタイ。痛いわ、木山さん。許して。おねがい」

黙ってカミソリを甘受した夫人も、このクリップ責めは、かなり、こたえたようで、激しく身をよじって許しを求めて来ました。

その苦しさに、ゆがんだ顔や姿を何枚もカメラに納めてからクリップをはずして、一旦縛りを解いてやりますと、どっと私の腕の中に倒れ込むように抱きついてきました。

私は夫人を、そのまま横に転がし、バイブ責めに移りました。

「木山さん、私、とてもうれしい。もっといじめて」

と、くり返す夫人のM性は、メラメラと燃えさかってくる感じがした。私は、赤裸々に被虐の欲びを見せ始めた夫人を大の字縛りにして、ローソクに火をつけ、渡部氏に教えてもらった蠟責めを始めました。

乳首、腹、剃毛の部分と休むことなく、低い所から、あるいは高い所から、ゆっくりと



また急に早く、ポタリポタリと滴る蠟涙が、夫人の全身をよごして行きました。

「あっ、あついわ」

「お前はこれが、うれしいのだろう。もっと

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

|     |     |            |
|-----|-----|------------|
| 一月分 | 1冊  | 三五〇円(送32円) |
| 三月分 | 3冊  | 一一〇〇円(送共)  |
| 半年分 | 6冊  | 二二〇〇円(送共)  |
| 一年分 | 12冊 | 四二〇〇円(送共)  |
|     |     | 郵便番号 558   |

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、「現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

してほしいと言え」

「ウ……あつい、あつい。木山さんお願い、あつい。もっと責めて……好美は……あつい

……この責めが大好き……あつい」

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三八二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上へ本号にて前金切りの判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

狭い六帖の責め部屋には、夫人の悦楽の声が高く低くひびき、ローソクの臭気に、むんむんと、むせかえっておりました。

今しがた、刺ったばかりの素肌を狙って、一段と低いところから蠟涙を落とし、白い流れが固まった時、一きわ高く声を上げた夫人は、全身の力がぬけたように、ただ、はあ、はあ、と大きな息遣いをしてるばかりでした。

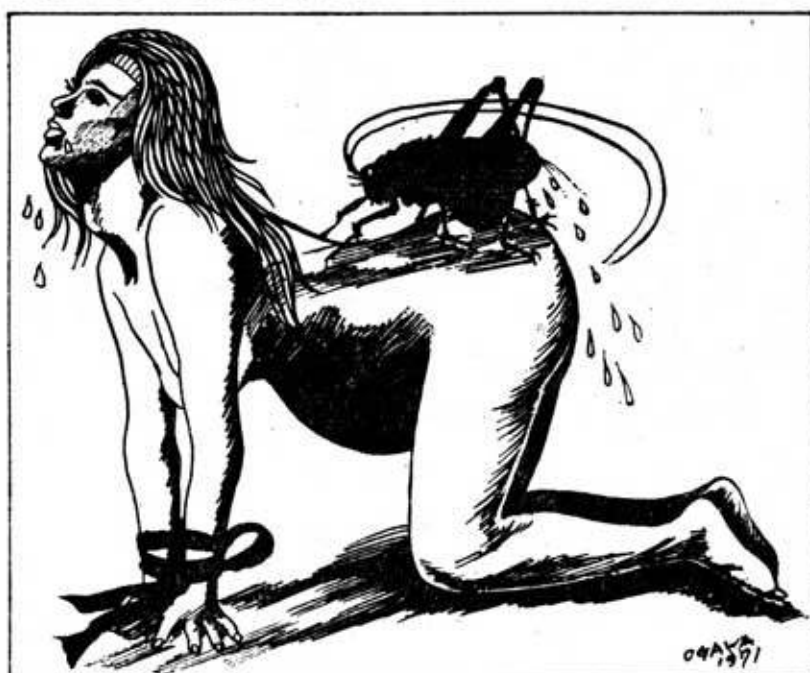
そこには、もうなんの羞らいも捨てた女が一人、私のなすがままに身をまかせているのです。縛りを解かれても、ウツロな眼差しを天井に向け、汗ばんだ全裸身を長々と横たえているばかりです。私はポロリ、ポロリとローソクの塊りを取って行きました。

やがて、夫人の白い腕が、私の首に巻きつき、言葉もなく唇を求めて来ました。全身、蠟のシミによごれた、夫人の肌は、かっかと熱く、唇もまた、火のように燃えておりました。私は、その熱い柔肌に溶かされる想いでした。

気がつくと、早春の空は、いつしか、とっぷりと暮れていました。

(完)

カット・小川 茂正



連 載 創 作

幻

想

帝

国

(六)

花

影

叢

ヤポンスキーは「神州清潔の民」で、血のけがれを忌むのが、はなはだしい、という。

体臭なども好まれない、らしい。

その癖、人を殺すのは何とと思っているのだろうか？ たぶん矮小な自分のからだに根強いコンプレックスをいだいていて、逆上すると恐怖にかられて銃剣や、あの見るからに野蛮な不吉な光彩を放つ人きり包丁、刀をふりまわすのかもしれない。

しかし、けがれたものを神経質にはらいのけながら、一面、猿の様に好奇心を露骨にかべた眼をむきだして、女のもっとも汚穢な変化をのぞきこみたがるのだから、うす気味のわるい人種だ。日本の言葉で「でばかめ」

というのだ、と世話係の老婆にネーラは教えられた。

血で汚れた四日間、ネーラは檻の寝床と便所の往復であけくれた。

外へ出れば逃走の機会もあるだろう、と樂觀したりしたが、とても逃げだすところではない。だいたい、町のどこに今いるのかさえ見当がつかない。

肉体を機能的に半分に分けられ、同時に二人の男のオモチャにされ、婆アの消毒をうけるとまた交替の男が入ってくる。そのうちには男のかわりめすら、わからなくなってしまった。はじめは、顔はそむけられないまでも、目を固くとじ神経をこわばらせて耐えていたのだったが、忍耐も限度をこすと、あとは無感覚な世界へおちこんだ。屍臭のような匂いが鼻腔にかたまりつき、自分はすでに死に、墓場の重い石に押しひしがれて後は腐って行くだけという気持ちだった。いや、気持ちとか感覚などという事では、もはや、ないかもしれない、死の世界そのものがあった。

引き裂かれて存在する下半身にも、ひどい裂痛や、灼けつく感じはあまりなかったが、どこか一点から火がつきだし、地獄の業火が燃えひろがる思いはする。本能的に逃げる。



青め手はすぐに追ってくる、斗いであつた。斗いの切れ目が、やがて灰色の墓場に同化しはじめて、救いがやってきた。

死ぬことは、ある時にはただの安息だ、と考えるのは不遜であろうか？ 死から逃げようともがくのは、その人間がまだ生きているからに過ぎない。

斗いは、必ずネーラの敗北で終わる。しかし終わった事を実感する屈辱の中で、ネーラはまた、なまぐさい生の側によりみかえるのであつた。

やわらかいものが、唇を這い、鼻をふさいでくる。自分の口は器具でひらかれていることにかわりはないが、いまは喉をふさいでこないで息がつける。鼻をこじってくる重いものがわずらわしい。たまらなくむず痒く、時に痛い。

それが何物だか、しばらくは何もわからなかった。胸から首へかけても重い圧迫感があつて、こちらは喉を、せいっぱいに、あえがさないと息ぐるしい。

肉塊が少しずれて、それが男の尻であることをネーラはみとめた。いや応なく視界のすべてをおおい、のしかかり、多彩な変化をみせる。胸の悪くなる色と線の幻覚的な転回で

あつたが、ネーラは不思議に胸の圧迫感もあり覚え、ほとんど見とれるようにその世界にひきこまれた。幻覚の変転が激しさを増して行き、変化も目にいちいち捕えられないくらいのめまぐるしさで、よじれ、まくれ、離れ、迫り、ねじれ、ひしゃげ、拡大し、収斂し、伏せ、飛び、落ち、濡れ、流れ、時間が物にかわり、物が幻像化し、像がとけて、いっさいが流転した。

それがその日のしまいであつたらしい。いつの間にか夜になっていた。

老婆の名は「マリヤ」というらしい。およそ考える限りのグロテスクなユーモアが名前にこめられている。そういえば、あの人間ばなれした悪徳の権化のような女主人が、かれんにも「カチューシャ」であつた。そしてネーラは「デラ」と呼ばれるらしい。

ネーラを、その「マリヤ」が、温湯で洗い軟膏を塗ってくれた。それから、体を二つに仕切っていた壁を、どういう仕かけか上にたたみこみ、入口の鉄の柵をしめられると、そのままそこが檻になった。床はわら。これは新しいわらを入れてくれ、毛布をほうりこんでくれた。

むかいの女もネーラと同じようにさせられていた、だれた脂肪ぶとりの中年女が、これはネーラのような世話をうけないで、手錠、足錠の、丸裸のまま老婆に追いたてられ、どこかへ行ってしまった。

鉄柵のなる音がビーンとこだました。外は戸外だと、人たちの喧噪をきいて、早合点していたのだったが、どうやら建物のなからしい。鉄柵は少なくとも二重の構造になっているらしいと思つたが、見えないからよくわからない。壁は、三方、レンガのようだが、さわってみると肌目のあらひコンクリートの手ざわりだ。押してもビクともしない。たたくと、こちらのこぶしが痛いだけ。

一方の、老婆と女が出ていった方から薄い光が、とどく。光を、すいといっているのは土間だ。

ネーラは、前手錠と、片足の錠からのびた鎖で、鉄柵につながれている。

音がきこえてくる。かわいた賑やかな人の集まりののだすあたたかい音だ。男がだみ声でどなる。酒に酔っている集団が、建物のどこかに屯しているらしい。女の嬌声はきこえない。時折きこえる言葉も何をいつているのか、いいまわしで日本人のものと少し違ふと

思えるだけで、それだけのことだが、人の氣配が妙になつかしい。ネーラは毛布のなかで丸くなり、膝を抱き、涙を流した。

ああいう人の生活のなかには、もはや二度ともどれまい。そんな確信的な予感がネーラの五感をとらえたのだ。自分がこれから人と結ばれあうのは、乱暴に弄ばれる時だけなのではないか。

いわば、海の底に置き去られた貝だ。仲間の貝は、あの肥った女のような者がいるが、貝どうし、かわせる言葉もたないのだ。刃物を噛まされ、錐でこじられ、砂を吐かされ最後には、むき身で煮られる貝であろう。

貝であるかぎり抵抗も何も出来ない。相手に拾いあげられるままだ。

考えることは、そこで行きづまった。ざらざらしたウニのように、暗闇にただ眼を光らせようとしている神経に疲れて、涙でいやすように目をつぶり、無理やり泣き寝いった。

翌日、目がさめてからも長い間、ほっておかれた。

夜の灯と反対の方角から、昼の外光が入ってくる。ひどく明るい。そんなことで昨日、檻の外が戸外だと思ってしまったのだが、や

はり、天井があるのがわかる。

それにしても、大きな窓があるらしい。窓はガラスであろう。柵があるかどうか？ たしかめてみたい。陽がさしこめば影でわかるのだが。柵がなければ脱走も可能に思える。老婆が柵をあけ、壁のしきりをしたりする合間に、掛けられている手錠でなぐりつけ、倒して、窓から逃げる。いや老婆さえ倒せば鍵をもっているのだし表からでも逃げられるのではないかと？ 服は老婆の着ているセーターやスカートを借用すればいい、などと空想が飛躍してくると、寝不足気味の頭が熱くなってきた。

早く老婆があらわれないか、と、じりじりしてくる。おとなしくいいなりになるふりで相手に、まず油断させることだ。とにかく今までは、ずっとうしろ手錠だったのに、前手錠というのは、またとない好機だ。

足錠の鎖をはずさせてからの方がいいか？ いや、どうせ鍵を奪えば足錠もはずせるのだから、それにこだわって、壁をつけられてしまったらしたら万事終わり……でもないだろう。日本人は血を忌むとかいっていたから、この状態が期間の終わるまでつづく可能性がある。それまで老婆のやり方をよく観察し、

万全を期すべきか？ それとも明日を考えず先手必勝で行くべきか？ 考えだすと迷う。

そんなことで三、四時間、時間をもてあそば、退屈せずにすんだ。ここも決まった。光のぐあいを見ると、午後に入りかけているようだ。陽はささない。曇っているのではなく、むきが陽にむかわないらしい。ここがスボドヌイの街中としたら、逃走は夜の方がこのましい気がするが、贅沢はいってられない。

待ちに待った音がした。鉄柵の鍵がなり、ビーンとひびいて柵がひらいた。柵をとじ、また鍵をかける。かなり用心深い。

老婆が檻の柵の前へやってきた。鍵をあけるかなとみていると、突ったまま、「おいで」と手まねきする。

ここはおとなしく愚鈍なふりをしていなければと、わざと大儀そうにごろりと体をおとし、のそのそ這って柵の前へ行く。と、柵の間から何かチラリ光る針金のような物がさしこまれた、とみると、それが不覚で、はっと思ふ間もなく、首に針金がからまり、ひとめぐりし、ぐいと引かれると首に喰いこみ、つと柵に顔をぶつけるよう引かれ、押しつけられ、くくられてしまった。



床に近いところで、首が固定され、どうにも動きがとれなくなった。

そうしておき、老婆は柵の鍵をあけ、外びらきの柵をひらいた。ひらかれるにつれて、首をひかれ、いや応なくネーラは土間に這い進んだ。

いろいろ想像したが、こんな情けない経由は計算外だった。針金が肌に喰いこみ、ひかれるのには抵抗できない。

それに足も柵につながれているので、ちょこちょこ進ませなければならぬ。

老婆が、ネーラの胸の下から手首を片側にぐいと引いた。首がねじれかけて、激痛が走り、ネーラは歯をくいしばった。手錠の鍵をはずしてくるが、手を動かす細工もきかないうちに、ぐいと手首をかえされ、背中に背負わされ、片手をまた下からとられ、背でパチンと、とめられてしまった。

「お前、赤だつてじゃないか。可愛い顔してるけど赤じや油断がならないね」

昨夜、最後の世話をしてくれる手つきに、優しさのようなものが多少感じられて、この老婆も虐げられている側の人間で、仲間なのだ、とふっと感じた。そこに老婆を甘くみる隙が生じた。今朝からの思考のなかで、老婆

を倒し服をはぐ事が、うしろめたい気がしたのも、かすかにあった同階級意識のせいだったのだが……。

たぶん、自分が襲われて逃げられる可能性ぐらい、老婆の経験からきた勘定のなかに、ちゃんと入っていたのだろう。

目のまえがかげり、ネーラは、ひときわ、首の針金の鋭い桎梏を、ここに痛く、身にしみて感じた。

「カチューシャにおこられたよ。あの人は苦勞人だからね、人の心はお見とおしさ。後ろ手錠にしないと、お前がよくない考えをおこす、とね。どうだい。図星だろ。逃げだす算段でもしていたところじゃないかい。まったくお気の毒さま、だね」

ケラケラと笑いだすような声だった。

「さて、その恰好で始末してやるかね」

何をされるのか、ネーラには見えない。

老婆は大きな、多分、動物用のものである浣腸器を用意していた。石鹼液をシリンドーに吸いあげる。

「ハフ、ヒー」

とネーラが悲鳴をあげるのもかまわず、

「それ、気持ちがいいだろ」

調子にのったようなケラケラした調子をか

えず、老婆はかけ声をかけた。

声をかけないと実際に老婆の手ではおぼつかないほどシリンドーは太い。一リットルはたっぷり入りそうな代物で、シリンドーを押すのも、かなり力がいり、老婆の枯枝に似た手がブルブル震え、みにくい血管をあらわして力む。体ごと使って押しにかかり、とうとう液を、ぜんぶ、入れてしまった。

「ごち走はおさまったと。出す分のごちそうは、まだ、だめだ」

浣腸はイワノフにもされた。石鹼液、ただの水、で何度も洗われ、すっかり、あくの抜けるまで繰りかえされたものだ。

水道管から直接に水を送り込まれながら、尻をびしびししたたかれるのは、単に鞭うたれるのとは比較にならない屈辱だ。苦痛だけなら、憲兵隊の拷問とひとしく、それは変形的だが一種の斗争だ。その気持ちになって、耐えることができる。しかし、しっぽをつけて這わせられたり、犬にされ、豚にされ、虫けら以下にされ、からかわれるように罵られるのは、なんとしても、気持ちのもちようでなく、ただみじめで情けない。

この老婆も、そんな、おんなの、ひ弱なところを知っていて、颯りにかかってくる。

「それ、ええぞ。ひりだせ。といってもひり出ねえか。吹きだすか。それでも、ええぞ」  
 嘴管と交替に、詰められていた栓をとられると、つうう、と、こそばゆい感じが五体を走りぬけ、思わず噴きだしかけるのを、かううじて辛抱する。耐えても無駄なことはわかつているが、また、だれにみられるといって老婆ひとりがいるだけのことだが、やはり、平気には、なれない。

からだは紅潮する。首の針金のしめつけがせつない。膝をよじりあわせ、膝頭をこねくらせていたが、衝動がたかまると眼のまへのまぶたの裏がスウーと赤くなった。  
 それからいっきに赤く、燃えた。

○

五日目に、経血がおさまると「カチューシヤの家」にもどされた。

満人のリンホワが世話をし、風呂へ入れ、肌にクリームを塗ってくれた。

部屋があたえられ、大きなベッドが専用になっていた。厚遇されるわけではなく、ベッドも部屋、バスなど営業用の道具だてなのだろう。そのくらいのこととは、ネーラにも分別がつく。前手だから楽だが、手錠と、よちよち歩きぐらいできそうな間隔で鎖がついてい

る足錠が、装身具のすべてで、あいかわらずネーラの私物は何ひとつない。

それでも、その夜は久し振りで、ほんとうに感触を忘れてしまいうくらい久し振りに、スプリングのきいたマットの上で、毛布にくるまって寝た。手錠が邪魔だが、檻のなかの眠りとくらべれば天国だった。

夢もみていない。

まっくら闇のなかの泥に沈んだ眠り。

カチューシヤが変に、ご気嫌がいい。

腰に手をあてて気どったふうにするその歩きっぷりにも、精気があった。しかしすることとはすることで、ビジネスライクで感情のつけない隙もなく、びしびしやる。

自分ではネーラのからだに手をかけない。命令をきき、ネーラが自分で姿勢をとるか、

リンホワが手をそえるかだけである。

リンホワという男も、ネーラにとっては不可解な存在だ。満州人というのも、印象だけのことで実際はわからない。

アムール河下流地方から北にかけて「ツングース」と呼ばれている人たちがいる。

師範学校の教科旅行でアムール河を下り、ニコラエフスク・ナ・アムール（尼港）で河

口に達し、タタールスキー（間宮）海峡を隔てて、かつては半島と信じられていた、サワリンの島影を、濃いガスのかなたに、みた。

ツングースの部落というのがあり、木の柵のなかにカマボコ小屋がならんでいた。部落といっても常住のものではなく、季節的な交易所であつたらしい。むろん今は無住で、博物館の保護下にある。

ツングース人はニコラエフスクの街中でみかけた。漁業省の船渠の労働者だった。

中国の清朝が、満州人のたてた国であることは知っている。おかげで「八旗」とかいわれて満州人は特権的な立場を得た。

骨格的にみても歴史的にみても、満州人とツングースは分かちがたい。女真（ジョルチン）と歴史はまとめて呼んでいる。どういうわけか蒙古人と日本人は、立居振舞いは別として人相はよく似ている。満州人は支那人の一派（華北人であろうが）と似ている。

背が高くスラリとし頬高で男性的に無口なのが後者で、少しズングリムックリ、柔らかい腰つきで猫のように忍び歩くのが前者だ。

リンホワはからだつきは明らかに女真系である。しかし猫族のようなところもある。犬でありながら猫になっている。そのところ

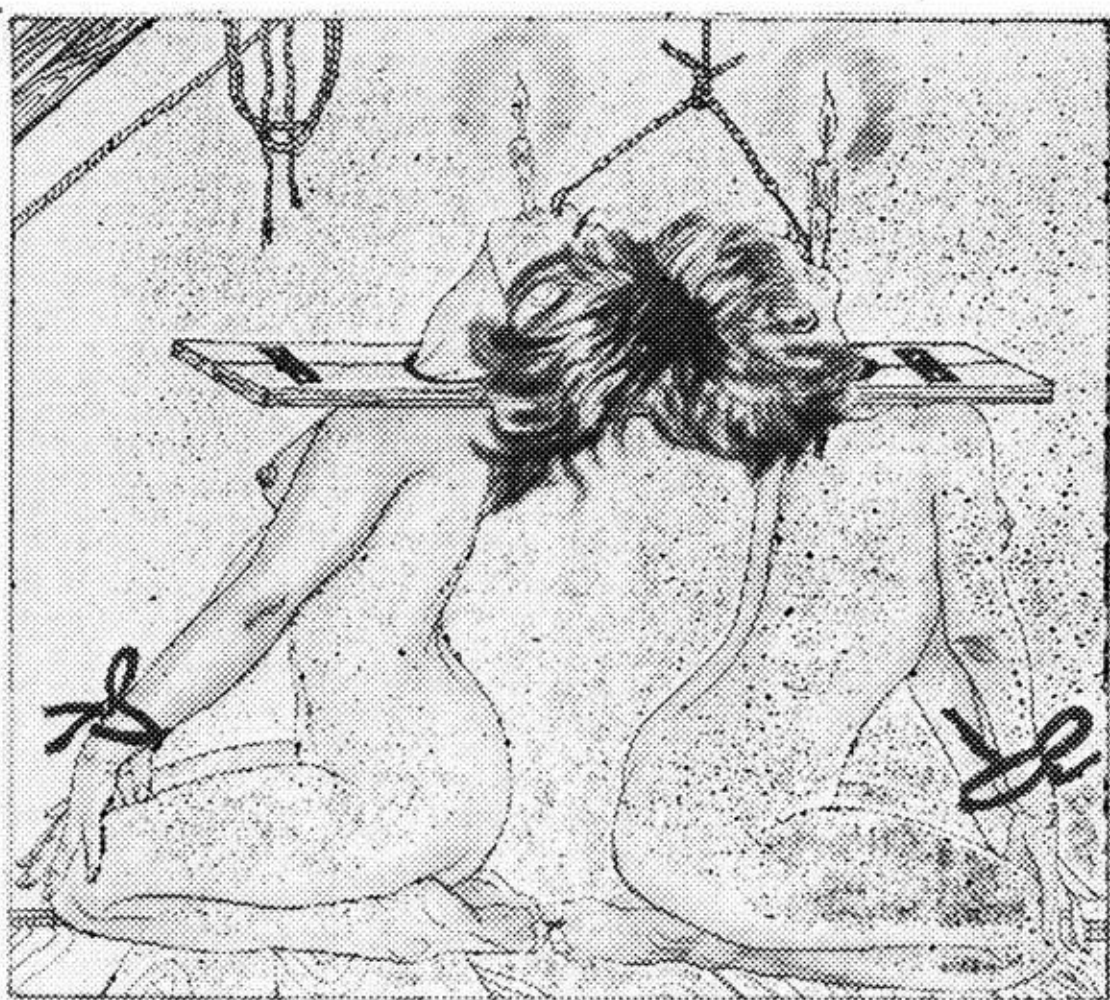


が、人には解きたいパズルになっているの  
だろうか？

清の滅亡が一九一一年。ポリシェヴィキの  
権力奪取が一九一六年。激動の時代。落ちこ

ぼれた人たちが略奪時代のジャングルにもど  
り、白系露人、満人といわれている。

ネーラなどには、まだよくわからない、深  
い意味での民族の「血」というものがやはり



読者ギャラリー

『燭

台』

小川

茂正

あるのかもしれない。現代は  
まだ傷口があいて血が流れて  
いる時代なのかもしれない。  
スターリンはグルジア人、つ  
まりアジア人であるという。  
血のつながり、からみあった  
現実認識が、あるのかもしれ  
ない。

リンホワの無表情な頬高の  
茶褐色の小さくこり固まった  
様な首から上の表情をみてい  
ると、どうにもやはり同じ人  
間という気がしなくなってく  
る。今は搾られている人間ど  
うしという連帯感をもとうと  
しても無理で、ひとつの檻の  
なかに入れられた狼と羊のよ  
うなもので、羊にはまったく  
そこにいるという事はどうし  
ようもない事なのだ。  
しかし、幸か不幸か、この

狼は獲物をとって喰う飢餓はせまっていな  
らしく、羊を注意し、その目つきで羊を規制  
するが、とりあえず番犬の役目をしている。

狼とか猫とかにたとえるのは違っている。

爬虫類、哺乳動物の形をした冷血類、という  
印象が正確だ。印象はまた、実際の性格行動  
をも、そのままうつしている形である。イワ  
ノフやカチューシャは、ひどい人非人たちが  
がこういう印象はない。日本人の憲兵曹長と  
かいった取調べ官に少し似ている。

いつもは冷静なようで、ふいに爆発的に粗  
暴になる。単純といえば単純で、日常は案外  
に軽い滑稽な人物なのかもしれないが、冷た  
い血が、ある一点で沸騰すると、前後もなく  
狂いまわるのかもしれない。

かわいているくせに、つるりぬるりとした  
感じのぬぐえない肌の下に薄気味わるいもの  
を隠して、リンホワは昨夜から馬鹿にしてい  
ない、細心、慇懃だった。大切な客についた、  
邸の召使いというのは、こういうものか？  
カチューシャに対する態度もかわりない。

「どれ、どれくらい柔らかくなった」

と部屋に入るなり言った声が弾んでいて、  
それが彼女の機嫌のよさをあらわしていると

みていいものか、どうかネーラは迷った。

が、いつの間にか人の機嫌をうかがう、カチューシャのような女の意をはかるようになっていて自分に気づくと、ネーラは心やまし、そのせいか赤くなった。赤くなったことが恥じらいにもなっていた。

リンホワが寄ってきて、ネーラをベッドからおろし、四ツ這いにさせる。床は厚い絨氈が敷かれているので、膝の皿は痛くない。

腕を折り敷き、頭をさげ、下肢をひろげるようにすると形ができた。ネーラはリンホワにされるままになっている。美容師の手で顔のむきをかえられる要領だ。

昨夜、そして今さっきリンホワの手できれいに洗われたところを見られていると感じると、さすがにむず痒いような、ひきつるような感じにとらわれる。しかし、姿勢を崩すまでの気持ちに高まるものがない。ここは、今は荒れているという波だちはなく、朝のはっきりしないガスに包まれて、頭が痺れ、少し耳鳴りがしてきそうなところなのだ。

カチューシャの検査が始まった。念いりな調べかただ。

くすぐったい。ネーラは身をすくめた。臀肉が、つかみ上げられる。ネーラの臀肉

は、鍛えられてぐりぐりもりあがったように張ってきている。火でやかれ、皮鞭をあてられ、脹れあがり、血にまみれ、それが栄養になったように、肌が回復すると前よりと一段とたくましくなるのだから、生命力というのは不死身だ。ここは、すり切れても体は、いっこうにへたばらない。

検査の手は、そのたくましさをもみくなくようにしてくる。

「あ！」

妙な、からだがうきあがるような感じを覚えた。ぐりぐりとしばらく意地のわるいマッサージがつづいた。

「洗ったのかい？」

リンホワに問いかける。

「はい。マダム。ゆンベ、洗腸しました」  
センチウ？ 何のことかわからなかった  
ネーラも、少しして思いあつた。

便所係りの老婆はネーラに浣腸をほどこした。やり方も雑で、乱暴にきたない消毒液で洗う。

デリカシーも何もなく、即物的なやり方。いつもネーラを傷つけた。

リンホワのやり方は極くいいねだった。嘴管の先で無理にこじめるようなこともせず、

優しいといっている、手応えだった。

が、優しいはずはない。これもまた、ひとつの即物的な、やり方なのだ、とネーラは、ともすると素直にうけいれてしまう自身に反発した。

反発も、しかし無駄である。とにかく人がやるにまかせて、ネーラは、やらせるほかはないのだ。

その間、不可能だとしても、石になったつもり、あるいは牛か馬にでもなったつもりになっていることだ。

家畜には家畜の感情がある。犬は色盲だというが、色盲の世界でみれば、人などもまた奇妙な恰好をした動物の一種だ。

自尊心も、日常感覚も捨てさった、全盲の世界なのだ。

ネーラは、西ヨーロッパの美術で、具象はすでに時代おくれで、こういうものが主流なのだ、という解説のもとに、見せられた絵画を思いだす。

どれもこれも生理的な不快感をとまなわずには見ておれない奇体な幻覚の世界だった。ソ連の芸術一般は社会主義リアリズムが基調で、画なども現実をあらわし、誰にでもわか



るものでなければ無意味だ、という事になっている。正直いうと、ネーラには画の価値はさっぱりわからない。現実そのままなら、写真でもっていいではないか、苦勞してカンバスに厚い油絵具をもりあげる必要がどこにあるのか、考えてみるとそんなところが正直な感想だから、これがアブストラクトで、西ヨーロッパ世界の崩壊を語っている、などと解説されてみても、実感はなかった。ただ、たしかに生理にうったえ、何かどろどろした世界にまきこもうとかかる画家の意識が、伝わってきたことだけを思い出す。

「馬」という題の作品だった。そう題がついているからそうも見える、褐色の丸っこい物が宙にうかんでいる。うかんでいるとしかいえない。普通の画ならかかれるであろう大地がない。空と思える部分が緑色の、べったりした、なまなましい色で、何か距離感があり無限を表現しているのかもしれないがやはり夢幻のなかの永遠みたいなもので、とらえようがない。

馬と思えるものの肉感だけが、不思議な量感をもっていて、やはり性的な何かを語っているそうだが、それ以上はネーラの理解をこえていた。

洗腸という、即物的にあざやかすぎる言葉も、それだけきいてみると、アブストラクトな効果をもっていた。

ネーラの肌の張りを、苛酷ともいえるくらいに験したあと、カチューシャは用意してきた筒状の器具をとりあげた。妊産婦用の子宮鏡である。

そんな器具の名もネーラは知らないが、何をされるのか、本能的に少し不安になり、覚悟したはずの尻を、もじもじさせた。

「リンホワ、腰が動かないように押さえな」

カチューシャは、かまえ直した。

本来の使用目的とはちがう使い方をするので、カチューシャとしては、ネーラが痛がることは承知の上らしい。

裂かれるような痛みに襲われたが、その激痛が通りすぎた後で、ネーラは息をつくことができた。が、冷たい金属は、やはりいやな気持ちをかきたてる。排泄感がふくらんで行き、どこかでつかえて、息ぐるしく出口をさがす。

カチューシャはネジをまわしはじめた。器具がひろがって行く。少しずつだが確実にひらいて行く。膨満感がまして行く。腸がよじ

れるほど、せつなく、なっていく。一点に達し、激痛がネーラを襲った。

とびあがった。が、とびあがれはしない。

逃げることもできない。リンホワが、うなじと足首をどういうふうにか、うまくひねりをきかして握っているのだ。

「あう」

手錠の手で床を搔いた。

「なんだい、このくらいのこと。まだ四〇ちよっとじゃないか」

と尻を平気で、たたいてくる。ぎりっと、もうひとつ巻いた。無我夢中で、ネーラは、もがきはじめた。

「大げさだね。このくらいのことですにやしないよ」

確かに死にはしないだろう。しかし、裂ける！ 布ならばビリッと、いやな音をたてたはずだった。

「しっかり押さえておいで」

リンホワにいて、カチューシャは膝をネーラの腹の下に、こじ入れてきた。それから小さなティール・スプーンをとりあげると、先に練り薬を塗りたくった。

作

創

昆絹子女王憧憬の記

拝

(はいえつ)

謁

庭 房 之



カット・岡 かし

スナック「家畜人ヤプーの館」の女主人として、夜毎、その美しい妖艶な肢体で、男共の上に君臨し、苛めまくっている昆絹子さんに、ようやく念願叶って拝謁出来た、マゾヒストと名乗る男。二人きりの夢の様な対談のひと時を過ごす。

午前一時。場所は、もう客も帰ってしーんと静まりかえった新宿「家畜人ヤプーの館」のフロアの片隅……

—あんなこと嘘っぱちよ—

昆 「私に会い度いと言うのはあなた？こんなこと、面倒くさくって嫌なんだけど、

今夜は割合気分がいい方だから、少しだけなら、お話してやってもいいわ」

男 「ハッ、有難う御座います。貴女様に是非、一度でもお会いし度いと、前々から思いつながら、私、酒も飲めない質たちなものですから、何度もこの前を行ったり来たり……」

昆 「フーン、そう。でも、一寸だけよ」

男 「こんな男の為に、お時間を頂きまして、恐縮です。この通りで御座います。誠に有難う御座います」

男、突然床に土下座する。絹子さん、一寸驚いた様子。

昆 「そんなこと止めてよ。話だけだと言

うから、お相手してやっているのよ。まあ、お掛けなさいな」

絹子さんは、形の良い顎をしゃくって、傍のストールを差し示し、自分はソファに深々と体を沈める。男は、ズボンの埃をはらい畏まって坐る。

男 「ところで、昆さん。最初から失礼ですが、お体のサイズをお教え願えないものでしょうか？」

昆 「そうね。今、バストト87、ウェスト55、ヒップ95ってところね。身長は170」

男 「素晴らしいプロポーションですね。そんな貴女様に、現実には、苛めてもらえる幸



な男もいるのかと思うと、私などは羨ましくて羨ましくて……。考えただけで、足がガクガクする程の興奮を覚えます。若し、お宜敷かったら私奴にも足の裏など舐めさせ……」

昆 「フッフッフ。マゾの男って、言うことは皆んな、同じなのね」

男 「それはそれとして、お話を続けさせて頂きます。昆さんは先日『週刊××』で偉いセンセイと対談されましたが、私など読ませて頂きますと、何か一寸遠慮をされているような感じで、本当の事は余りおっしゃっていないような感も、無きにしも非ずなんです。が、如何なもので御座いましょうか？」

昆 「それはそうよ。何しろ相手は一流週刊誌だし、あのセンセイだって、作品なんか読んでみると、ピーンとはくるけど一応、世間的に名の通った小説家だもの。あなたみたいな何処の馬の骨だか判らないような男と、こうして話をするのとは大分訳が違うわよ」

男 「それはそうですね」

昆さん、優雅な手付で、シガレットケースからタバコを取り出す。男、慌ててライターを恭しく差し出す。

男 「お陰様で忌憚無く、こうしてお話をお伺いする事が出来る訳でして……」

昆 「有難くお思い」

男 「それからあの対談では、苛めるのも好きだけど苛められるのも好き、とおっしゃっていますか？」

昆 「あんなの、全くの嘘っぱちよ。私が苛められるなんてこと、考えただけでも寒気がしてくるわ」

男 「いやあ、安心しました。それでこそ我等の女王様です」

昆 「いくらSMばやりの昨今でも、まだ世間ではS一本槍の女と言うと、一寸おかしく聞こえるんじゃないか？」

男 「そう言うことも、まだまだ無きにしても非ずですね」

男、頷く。

男 「ところで昆さんがサドに目覚めたといいますが、男を苛めることに興味をお持ちになられたのは、どのようなきっかけからでしょうか？」

昆 「確か中学三年生の時ね。小さい頃から男の子はよく泣かせていたけど、その頃、特にそれが激しかったのね。体も大きかったし、とっくみ合しても私に勝てる男の子なんか居なかったわ。何時もギューギュー言わせてやっていたの。けど、そんなのサドなんて

ものじゃないわね。成績の方もクラスで三番を下った事ないから、自然とクラスのボス的存在になってしまっ、何時も気に入った女の子を四、五人連れて、学校中、肩で風切っていたの。ところが下級生の男の子に、そんな私達の態度を見て反感、持っちゃって、石ぶついたり悪口言ったりするのがいたのね。私達、何時かそいつを思いきり、やっつけてやろうと、チャンスを狙っていたわけ……」

男 「やがて、その羨ましい犠牲者は貴女方の網に引っかった訳ですね！」

昆 「そいつが自転車で、通りかかるところを、四人で待ち伏せして引きずり下ろし、墓地の中に無理やり連れ込んだの。彼、最初は抵抗したけど、私一人でも十分な位なのに、四人もいるでしょ。簡単に地面に押えつけちゃったわ。そして私が胸に跨がり、顔をポカポカと殴りつけてやったの」

男 「ホー。そ、それは素晴らしい。で、それから、どうなりました？」

男、思わず体を前に乗り出す。

昆 「場所は人っ子一人、通らない、夕方の淋しい墓地の中だし、囲りにいるのは気の合った仲間だけだし、私、殴っているうちに段々、大胆な気持になってきたのね。それに

そいつが大声出すでしょ、うるさくてかなわないから思い切って、そいつの顔の上に跨がってやったの」

男 「羨ましい限りですね、出来ることなら私が、なり替わり度い位の気持です。で、どうでした？ 御気分は？」

昆 「勿論、最高よ。彼、マゾじゃないから猛然と暴れたわね。嫌？ がって死物狂いで暴れる顔を、しっかりお尻で押し潰しておいてから、この子の男の誇りも意地も総て私のお尻の下なんて考えた時、例えようも無い程の征服感と言うか、気持が良かったことを覚えてるわ。それにそんな精神的な優越感の他に、何て言うのかな、触感的に、暴れば暴れる程、感じちゃうのよ。それが何とも言えないの。ぐったりしだすと、つまんなくなっちゃうから、少しお尻を持ち上げるようにして弛めてやると、又、猛烈に暴れはじめるの。こんなことの繰り返しだけで三十分以上も、その子を徹底的に苛めてやったわね」

男 「その時、他の女の子達は、どうしていましたか？」

昆 「そいつの手足を押え付けていたわ。まあ、スゴイとか、私もやってみたいわとかもっとやっちゃえとか、言葉では、いろいろ

言ってたけれど、そこまでの勇氣は無かったようね。結局、やったのは、私一人だけ」

男 「もう既に、今日の貴女様の天分が、窺えるようなお話ですね」

昆 「もう終まいには泣き出してしまったその男の子を地面に両手をつかせて謝らせた上、皆んなの股の下をくぐらせて、やっと許してやったの。絹子、そいつにオシッコ飲ませてやったらって言った子もいたけど、まだ流石の私も、そこまでは、出来なかったわね。やってみたい気持はあったけど」

男 「その時の貴女様の服装は？」

昆 「Gパン穿いていたの。お尻んところがそいつの唾でグショグショだったわ。夜、薄団の中に入ってから、若し生まれたままの姿であんなこと出来たらなあとか、もっと面白い苛め方無いかなあとか、いろいろ考えるとものすごく興奮してきて、仲々、寝つかれなかったわ。その頃からね、こんなことに興味持ちだしたの。まあ、私のサド開眼ってところかな」

男 「それで、その男の子は、その後どうになりました？」

昆 「私も後になってみると、一寸恥かしい気持がしなくてもなかったけど、その子に

とっては、想像以上のショックだったらしかったわね。マゾでもない男の子にとっては、女の子に顔の上に跨がられるなんて、考えられる限りの最大の屈辱でしょ？ もう道で会ったって、前はあんなに威勢がよかったのが借りてきた猫の様におとなしくなっちゃって、真赤になってコソコソ逃げ出すだけ。可哀想な位」

男 「絹子女番長、恐れいりやしたってえところですね。十五の時の、その初体験？ 以来、泣かされた男は数知れず……」

昆 「まあね。でもそんなこと、いちいち話したってしょうが無いわ。そのうち、夜が明けてしまうわよ」

――舐めさせるのが一番好き――

男 「今、昆さんの一番お気に入りの方というのは、具体的にいつ、どんなものなんでしょう？」

昆 「これが、苛め方かどうか判らないけど、体を舐めさせることね」

男 「おや、そうですか。あの対談では、貴女様はたしか、舐めさせることはキライ、とおっしゃっておられたと思いますが？」

昆 「そんなこといった覚えは無いわよ。



舐めさせることキライな女の人って、いないんじゃない？」

男 「それを伺いまして、私奴、ますます安心、致しました。して、如何様に？」

昆 「その時の人数にもよるけど、四人いれば一応、理想的ね、先ず一人を仰向けに寝かせ、顔の上に跨がる。まあ、ここまでは、誰でもやっていることね。これから一寸、違うのよ。次にもう一人を前にまわらせて舌による奉仕を命ずるの。そしてあとの二人の顔の上に足を乗せて、足の裏を……」

男、感極まった様に真紅のジュータンの上に身を伏せる。絹子さんも、もう止めよとは言わない。男はソファに足を組んだ絹子さんを見上げて、最早、よだれを流さんばかりの風情。絹子さんの美しい瞳にも、そんな男の姿を見下ろしながら、猫がネズミを弄ぶ時にみせるような、残忍な色がただよいだす。

男 「お側に、はべりたい男共が貴女様をめぐって、いがみ合うようなことは御座いませんでしょうか？」

昆 「そんな事、私が許さないわ。どの男が、どうしてほしいとか、どこが好きだと思つたって、それは私が決める事なんだから、そいつらの口出しなんか許さないわ」

男 「結局、四人の男に同時に奉仕させる訳ですね。これはスゴイ！」

男、更に絹子さんの足の下に這い寄って、ブーツに顔が触れんばかり。

昆 「フッフッフ。あんたみたいな男には、そんな格好が似合いのとこね」  
絹子さん、男の顔をブーツの先で軽くこづく。

男 「ところで話は変わりますが、聞くところによりますと、絹子様は、女優の江波杏子さんとお親しい間柄でいられるそうですが、いかがでしょう、彼女もサドッ気がお有りなんでしょうか？」

昆 「フッフッフ。そんなこと知っていても、お前なんかには言わないわよ。まあ自分勝手に想像おしよ。でも今の日本の女優さんでは、彼女程のマゾ男好みの人はいないんじゃない？ お前みたいな男からの変な手紙も、随分、舞い込むらしいわね」

男 「そんな男達をふん縛って、お二人で跨がったり、舐めさせっこしたり……」

昆 「お黙り！ 調子に、乗るんじゃないよ」

男 「ハハー、どうかお許しを」  
ジュータンに額をくっつけて土下座する男

の頭を絹子さん、思いきり踏みつぶす。男のうめき声しきり。絹子さん、気持良さそうに目を細め仲々止めない。暫くして、やっと男の頭からブーツを上げる。

男 「どうも失礼致しました。ところで男中志願の男も多いとかで？」

昆 「どうでもいいけど、その男中って言葉、気に入らないわね。いい出したやつは、女中に対する男中っていうつもりだろうと思うけど、今の女中ったら昔の女中みたいに、こき使うって感じじゃないから、ピタリしないわ。言うのなら犬とか奴隷とか、下僕とか言ってもらいたいわね」

男 「又々、失礼致しました。では、犬は何匹、お飼いになっておられますか？」

昆 「朝から晩まで飼ひ殺しにしている犬ってのは一匹だけ。尤も電話一本すれば、尻尾を振ってとんでくるのが、五、六匹、いるには、いるけど」

男 「やはり家事万端から、身の回りの世話とかは一切……」

昆 「勿論、全部やらせているわ。でも、考えてみれば便利なもんよ。お陰で朝起きてから夜寝てまでも、指一本使わずに過ごすことだって出来るんだから。昔の王侯貴族の娘

だって、そこまではやれなかったと思うわ。私が自分から手を使うのは、何か楽しむ時だけね。例えば、鞭で思いきり打ちのめしてやるような場合とか……」

男 「すると、トイレの後始末なんかも、犬を使って……」

昆 「当たり前よ。そいつを飼い始めてから、家の中で、トイレトペーパーなんか使った事ないわ。気持もいいし、それにペーパーなんか使うのより、ずっと清潔ね。前みたいに、一日に、下着を何枚も取り替えるなんてこと、最近じゃ全然ないわね」

男 「たまには嫌がるような態度、見せること、御座いませんか？」

昆 「全然ないわね。朝なんてもう私が来るのを待ちかねて、中に入っちゃって、ハーハー、肩で息してるの。そんなの見てると本当に犬みたいに見えるわ。大学まで出たのに親には見せられないわね。前に何かで読んだんだけど、拭くのは生まれたばかりの雛鳥を使うのが、一番いいそうだけど、その人、人間トイレトペーパー使った事なかったんじゃない？一度やってみれば、きっと判ると思うわ、使い心地が……」

男 「拭き方、一つにしても、世の中には

いろいろ有るものですね」

昆 「けど、雛鳥を使うというのも、一寸面白そうね。今度、やってみようかしら」

男 「その雛鳥を捨てるのは、勿体ないから、生のまま食べたいなんて言うマゾ男も、続々出てくることでしょうね？」

昆 「かもね」

男 「夜中に、いろいろ変な電話もかかってくるとかで？」

昆 「そうなの。電話もそうだけど、手紙も、よくくるわね。それが皆んな、いい合わしたように、同じような内容なのよ。変わればえがしないのね。馬になりたいと言うのか、どこそこを舐めさせてもらいたいとか、オシッコをひっかけてくれとか、そんなの、いつもやっていることだから、ちっとも面白みが無いわよ。マゾの男って、少し創造力が足りないんじゃない？たまには私が、あつと驚く様なこと、考えつかないのかしら」

男 「ハッ、私奴、鋭意、研究させていただきますで御座います」

昆 「お前なんかだったら、どんなにされるのが、いいの？」

男 「イエ、私などそんな大それた望みなど、決して申し上げません。どのようなこと

どのような御命令でも、総て女王様の意のまま、お心のままに……」

昆 「フン、いい心掛けね」

男 「ここは、やはり場所柄、バーとか、キャバレーのホステスさんなんか、多いんで御座いましょう？」

昆 「そう、沢山いらして下さるわ。あの方達、客商売でしょ。お店で、嫌なこと有ったりしたのを、ここでヤブー相手に晴らすのね。そりゃあもう、ビシビシやってるわ。拝見していて、小気味良いくらい」

（ここでは店内の檻の中に、生きているヤブーを二匹、閉じこめてあって、客は自由に、そいつらを引きずり出して、苛める事が出来る様になっている）

男 「女性用トイレに、もう一匹、専用ヤブーがつかねがれているとかで？」

昆 「そんな噂が出まわったこともあったようだけど、全くのデマよ。まだ、一寸、そこまでは無理ね」

男 「しかし、そんなお考えも無い訳でも無いんでしょう？」

昆 「けど無理ね。私一人、プライベートで使っているのと違って、いろいろな点で、問題、有ると思うわ」



## 読者ギャラリー 『狂った果実』 岡 たかし



男 「成程、仲々、難かしいものですね」  
 昆 「ニューヨークなんかじゃ、そんなのが有るそうだけど、日本では、まだまだ先のことね。一寸、残念だけど」

—ピーターみたいのを

縛りあげて—

男 「ところで絹子様、貴女様のこれから

の抱負とか、試してみたいとお思いのこと、つまり苛め方みたいなことでもお話し願えると、大変有難いのですが……」

昆 「私、もう正直言ってマゾ相手の遊びには、いい加減あきあきしているのよ。そりゃあマゾの男ってのは、お舐めと命令すればどんなところでも平気で舐めるし、退屈しな

もあげるし、家事の方だって、パンティの洗濯から何でもするし、便利なことは便利なんだけど、最近じゃあ何だか物足り無いのね。ちようど普通の男が、ピチピチした歯ごたえ

の有る子に、魅かれるのと同じ心理ね。マゾじゃない可愛いらしい男の子、それもピーターみたいな細っそりとした子を、約束事じゃなくて、無理やりに縛りあげて、私好みの方法で苛めてみたいわね、たまには……私、忘れられないのね。中学三年のあん時のこと。お尻の下で懸命にもがく、何とも言えないあの感触。言葉ではよく言い表わせないけど……それに私、もう子供じゃあないから、今じゃあもっと、いろいろな事させられると思うわ」

男 「やはり、マゾ相手じゃあ、男の方も女王様に対する崇敬の念から、抵抗をさし控えるんでしょうね？」

昆 「そうなの。何時かなんか、乗っかってでもいつまでも動かないから、私、ずーとそのままでいたら、そいつ、窒息しちゃったのよ。あの時は、こっちも慌てたわね、水ぶっかけるやら、ひっぱたくやらで……」

男 「けれど、絹子様みたいな美しい女の方に、そんな方法で殺されるのは、マゾ男と

しては理想じゃあないでしょうか？」

昆 「それで、こっちが、刑務所行きじゃあ、たまらないわよ」

男 「昔、ナチスの収容所では、そんな方法で女看守達が、よく面白半分に、ユダヤ人の囚人を大勢、殺したそうです」

昆 「私の経験からすると、それは一寸、疑問ね。自分から殺されようとするんならともかく、死物狂いで暴れれば、いくら重いつて結構、息は出来るものよ。尤も他で半死半生の目に合わせておいて、止どめはお尻で言うのなら、話は判るけど」

男 「話は違いますが、流石のサドの女王様も、普通の男を相手にしたことは、あまりお有りにならないんで御座いますしょう？」

昆 「あまりないわね。まだほんの二、三回」

この時、土下座する男を冷たい視線で見下ろした絹子さんの瞳が、キラリと妖しく輝いたのを、男は知らない。

昆 「ちようど感じ易い年頃ってところの飛びきり可愛い男の子。そんな子を思いっきり恥かしい目に合わせてやりたいわね。そしてそいつをしまいは、私の命令ならどんなことにも、絶対服従って程に飼育するの。」

けど、そうなってしまったら、これも、もうつまらないわね」

男 「なる程」

昆 「それにそんな男の子、四人転がせておいてから、女だけでマージャンやってみたいわね」

男 「ほう、どういう風にです？」

昆 「座蒲団代わりよ。座蒲団代わりにして苛めながら、キャーキャー騒いでマージャンするのも、きっと面白いと思うわ」

男 「又、話は違いますが、絹子様は女サド帝国の建設を、御計画中とか、伺いましたか？」

昆 「計画どころか、もう、着々実行しつつあるの。私、以前は個人的な趣味だけの見地から、男共を苛めていたんだけど、これは一寸、違うの。私、女で男を苛めて楽しくないなんて人はいないと思うの。又、マゾの男達だって理想的な相手に恵まれなくて、悶々とした日を送っているのが大部分だと思うのね。私はこれを結合させてやりたいの。ホモやレズは今ももう、おおっぴらでやっているけど、SM、特に女サドと男のマゾが、結びついたSMと言うのはアブノーマル・セックスの中でも、まだまだ日陰の子って感じ

ね。尤も最近じゃあ、沼さんのあの本のお陰で、段々、陽が当たってきたと言う感もあるけど。男を苛めて楽しみたい女達とマゾの男達とが、そこでは誰に気兼ねなく自分達の欲望を満たし合うの。女サドの帝国ね。私は、その絶対的君臨者たる、女王様ってところね。尤も相手に恵まれない男達に、その機会を与えたという点では、随分、慈悲深い女王様だとは思うけど」

男 「絹子様、そのところを、もうちょっぴり詳しく御説明して……」

昆 「今のところはまあ、これ位までね。そのうち、総てのマゾの男達に、私の帝国の奴隷としての苦痛と快楽を、たっぷり味あわせてやれる日も、間近だと思うわ。このヤブーのお店だって、私の帝国の単なる入口みたいなものね、この入口の奥には、私の帝国の宮殿が、目もくらむばかりに、聳え立っているの。一步そこへ入ったら、もう決して二度と脱け出る事は出来ないわね。そこでは男達は、沼さんのあの小説そのままに、私達の家畜になり下がるの。人間家具としての男達の使い方も、私のスタッフが、いろいろ研究しているわ」

男 「私など、あの小説の世界は、まだま



だ夢物語位にしか、正直言って考えていなかったのですが、もう、そこまでおやりになられていて聞きますと、何ともはや、うれしい限りです」

昆 「私、実はもっと大きいことを考えているのよ。それはあまり大きくない島を一つ買って、そこに本当の女サドの国家を造るの。」

今言った女サドの帝国なんてのも、言葉だけはカッコいいけど、まだまだ幼稚で遊びの域を出てないわね、ところがこれは、本当の意味での女権専制国家なの。国としては小さな自給自足経済国家だけれど、政治から裁判から総ての国家権力を、私達女性が握ることにしちゃって、男達は奴隷として、昼間は国家を維持する為の労働に従事するの。勿論、鉄の足枷つけさせて、ちょっとでも怠ければ容赦無く鞭で打ちのめすわ。夜は夜で自分の生命を維持する為に、それぞれの女主人に自分の体のいろいろなところを使って真心こめて奉仕するの。少しでも女主人の気にそわないことしたら、自分の生命は保障されないというのを、身にしてみても知っているから、懸命にならざるを得ないと思うわ。まあ、夢みたいなことと思われるかも知れないけど、そんな国家を造るのも考えているのよ」

男 「まさに和製『イース社会』ですね。若し、そういう国家が建設されましたなら、私奴、いの一番に早速、駆せ参じさせていただきますで御座います。それでは絹子様、お忙しいところ、いろいろお話を伺わせていただきまして、大変有難御座いました。どうも……」

### ――見破られた正体――

男は、立ち上がった絹子さんの足の間に、足を差し入れんばかりに平伏する。

昆 「一寸、お待ち！」

絹子さん、突然、男の両の手をブーツで、思いきり踏みつぶす。男、ギャーと大声で叫んで立ち上がりとうとするが、もう頭はがっしりと、絹子さんの太股に押えこまれてしまっている。

昆 「上手く化けたと自分では思っているらしいが、この絹子様の目は、ごまかせないよ。お前、なんとかいう、週刊誌の記者だろう？ さっきから何処かで見たような男だと思っていたら、やっと思い出してきたわ。去年の春、銀座のナイトクラブで、『家畜人ヤプー』の出版記念パーティがあった時、鉛筆片手にウロウロしていたのは確かお前だよ」

男 「イイイイエ、私は唯の貴女様の崇拜者の一人です……」

絹子さんのスカートの下で、男の声はくぐもり勝ち。

昆 「嘘お言い！ 本当のマゾなら私の前に土下座しただけで、証拠は歴然とするはずよ。さっきから見ていると、お前のは、ちっとも反応なしじゃあないのさ。きっと有ること無いこといい加減に書きまくるつもりだったのね。そんな手には乗らないわよ。この絹子様をおなめじゃあないよ。舐められるのはマゾ男だけで沢山」

男 「イイイイエ……」

男、何か言おうとするが、絹子さん、ますます強く締め上げるので声にもならない。

昆 「フッフッフッ、ピーターには程遠いシンクシャの御面相だけれど、お前、マゾじゃあ無さそうだから、これからタツプリ音を上げさせてやるわ。芝居じゃあなく、女に苛められる気分がどんなものか、お前にも思い知らせてやるよ」

絹子さん、男の頭を太股で挟みつけたままの姿勢で、どっとジュータンの上に押しつぶす。今や正体見破られたニセマゾ男、死物狂いで暴れまくるが、何しろ160センチにも足り

ない、やせこけ男。絹子さんのポリニウムには全然、刃が立たない。

昆 「さあ、暴れられるだけ暴れてみるといいわ。私にとっては、そうしてくれるほうが、断然面白いんだから」

うつ伏せに組み敷いて、男の頭の上に逆さの格好で馬乗りになった絹子さん。とりあえず男のバンドを引き抜いて、もがく両手を後手に縛り上げる。

昆 「さあてと……足枷はどこだっけ」

店内を見まわす絹子さん。そのわずかの隙をついて、やっとの事ではね起きた男、だがそれも束の間、絹子さんの足払いをくらってまろくも倒れる。

昆 「フッフッフ、無駄な、ことするわね。悪あがきは、おやめ」

やがて足枷をはめられ、両手も紐でがっちり縛り直されて、芋虫のようにぶざまに転がされた男。そんな男を冷ややかに見下ろしながら絹子さん。ブーツもストッキングも下着も、総て脱ぎさる。そして生まれたままの姿で男の上に立ちはだかる。

昆 「さあ、これからお前に地獄の夢を見せてやる。これが絹子様の体よ。とっくりと、お拝み！」

男、あまりの急変した事態に、しばし、啞然。口をポカンとあけて、絹子さんをまぶし

そうに見上げる。その半開きになった口の中に、まだ脱いだばかりの暖いパンティを、裏返しにして押し込まれる。男、嫌がって口を閉じようとするのを、今度は絹子さん、足で先で無理やり押し込む。次はストッキングでがっちり猿轡。男は、グーの音も出ない。唯、フガフガと声ともいえない声をあげるだけ。そしてカウンターの奥から、包丁を取り出してきて、男の胸に跨がってピタピタと、その包丁で男のほほを不気味にたく絹子さん。

昆 「作家のセンセイとの、あの時の対談で、私は本気になる」と包丁を持つと言ったのを、お前知らないはずないわね。あれは本当の話なのよ。血を見るのが嫌だったら、私の言う事には何でも服従おし！」

やっとな、ことの重大さに気の付いた男、顔色は真青。恐怖にひきつった目で、力無くうなづく。

昆 「やっとな観念した様ね。さあ、そろそろ始めるか」

ストッキングの猿轡を外し、足の指で男の口の中から、パンティをつまみだした絹子さ

ん。今度は男の顔を素足で、遠慮会釈なくグイグイ踏みこむ。

男 「どどど、どうかお許しを」

男のそんな哀願の声も聞かばこそ、更には口を大きく開けさせておいて、その中に足の先を思いつき突っ込む。

昆 「私、脂性なの。さあ、今度は足の裏をお舐め！」

男の顔に足を押し当てた絹子さん。気持良さそうに目を細める。こんな事は、やりつけていない男。やがて舌が疲れて一休み。一方快感の持続を中断されて、すっかり怒ったのは絹子さん。壁に立てかけてある鞭を持ってきて、メッタメタに男を打ちのめす。男、不自由な体で悲鳴を上げて暴れもがくが、その首筋は絹子さんのたくましい足で、しっかりと踏みしかれているのでままにはならない。絹子さん、そんな男の体の動きを足に感じて一層刺戟されるのか、ますます鞭を振るってところかまわず打ちのめし続ける。しばらくそうこうするうちに、やがて絹子さんのその真白な体も、ややピンク色に汗ばみ、一方、男はといえば氣息奄々、いい加減に虫の息。やせこけたその体には、真赤なみみずばれが数知れず。



昆 「ああ、さっぱりしたわ。けど、ちょっと休ませてやるとするか。あまり今のうちに痛めつけちゃうと、後の楽しみにも差しかえるし……」

さすが、我等が未来の女権専制国家の女君主、慈悲深くていらっしゃる。絹子さん、男の頭を足の先で軽くこづいて、ソファァーに腰を下ろす。そして、すんなりとした形のいい指にタバコをはさんで、紫色の煙を心地良さそうに天井にはきつける。今の今まで、男に

死ぬ程の思いをさせて荒れ狂い、暴虐の鞭を握った同じ指とは、とても思えない。

昆 「さあてと……」

立ち上がった絹子さん。タバコをくわえたまま男に歩み寄る。そして、荒い息をはき続けている男の顔の上に、非情にもお尻を降ろしてしまふ。目も鼻も口もぴたりと押しつぶされた男、息がつかなくなってがき始める。

昆 「さあ、今度は、いいというまで、奉仕するの！ さっきのように手を抜くと承知

しないよ。又、鞭をたっぷりくらわさせてやることになるから、その時は覚悟を申し

絹子さん、男の顔の上から、ほんの少しお尻を持ち上げてやる。男、大きく息を吸いこんでから、おそろおそろ奉仕しはじめる。

昆 「そうそう、その調子。お前、はじめにしては、仲々、うまいわね」

絹子さん、時々押しつぶしては、もがき苦しむ男の不様な表情を鑑賞する。やがてこの遊びにも、充分、堪能した絹子さん。今度は男の髪をわしづかみにして、トイレに引きたてる。

昆 「さあ、今度はお前を、トイレトペーパーとして使ってやる。ペーパー代わりの雛鳥の苦しみを、とっぷりとお味わい！」

夜の更けるのも忘れて、美しき新宿の女王の淫虐な欲望は、自分本位の方法で、今や全く抵抗するすべも無く、その身を横たえてい、哀れなやせこけ記者の上に、次から次へと、あくことなく荒れ狂う。

観念しきった男は犬以下の、そんな行為にも、唯々諾々と従う……。

夜のとばりに、包まれた「家畜人ヤプーの館」の店内の片隅。もうそろそろ、夜の白らむのも近い……。

## 新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

### ☆賞金☆

|    |       |     |
|----|-------|-----|
| 優作 | 一篇につき | 参万円 |
| 秀作 | 一篇につき | 五千元 |
| 佳作 | 一篇につき | 三千元 |

### ☆規定☆

- 一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。
- 一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。
- 一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。



〓 縄とカメラVのルポ 〓

## 深田菊子の

## SM生活について

塚 本 鉄 三

「この前の帰り途、地下鉄に乗って釣革を握ってたら、手首の縄のあとを、じろじろと近くの人が見るので困ったわ」

深田菊子は、私と逢うなり、そんなことを言った。私は「ふん、ふん」と聞いているよな、いないような風で黙殺していた。

心の中では、「さもありなん」とひそかに憂慮していたのだ。彼女は手首と言っていたが、実際は手首どころか、二の腕の方がひど

りといった縄のあとは、かくしようがないのだ。

縄でぎゅうぎゅう縛り上げた上で、右に左に転がしたりしたのだから、縄のあとだけでなく、軽い皮下溢血を起こして赤黒い変色が縄の型と共に残っているのだ。

「弱ったナ」と思った。

胸や背中、腹、太股なんかは洋服でかくれるから、まあいいだろう。

いのである。なにしろ、色が白くて、ふっくらとした肌が、肩からもろに剥きだしになっているるノースリーブだから、はっき

未婚の彼女のことだから、そこまで縄あとを調べる男性はいないだろうから、その点はまず安心としても、手首から二の腕にかけての縄のあとは、どうも弱ったことである。

だが、「困ったワ」と言っている深田菊子が、今日も約束の時間ぴったりに来てくれたのは、余り困っていないのかもしれない。

伸びやかな真白い腕に、あざやかな縄のあとが、くっきりと残っているのも、オツなものじゃないか——と言って見たかった。

彼女は私の気持を察してか、そのことについて深くは追求せず、一転して話題を変えてきた。彼女の気持のよいところである。



「私、運転免許証、持ってるのヨ」

ハンドバッグの中から取り出して見せる。  
満十九才八カ月、立派に普通免許を受験できる年齢である。

「それじゃ、いっちゃん、ハンドルを握ってみるか」

私が運転席を変わるゼスチュアを示すと  
「わあッ、怖い！」

彼女は後ずさりする。黒のワンピースがよく似合う大柄な肢体が、一瞬、まぶしく私の視界の中で派手に躍り、若い女性特有の甘ずっぱい体臭が鼻をくすぐる。

私は彼女の身体を抱きしめて、もみくちゃにしてやりたいという衝動にかられる。しかし、慌てることはないのだ。やがて、全裸にして縛り上げてしまえば、もうそれから、私の言いなり放題になる可愛い人形ではないのだ。

今まで私の彼女に対して持っていたイメージを変えなくてはならない気がしてきた。

数度逢っているが、一度も遅れてきたことのない彼女。若い女性の時間に対するルーズさをよく知っている私にとって、深田菊子の几帳面さは大変好ましく、信頼感が一回毎に増してきた。



三脚二台、カメラ三台に交換レンズ、ストロボ三灯、フラッドランプ、スポットランプなどの撮影用の重装備に、諸々の緊縛用具を携行する私に対して、彼女は必ずその一部を積極的に持ってくれた。

一方的に私が深田菊子を縛り責め、そしてあられもない責められている姿態を撮影して

いるが、二人の間になんとなく、ほのぼのとした心の通いが出来てきたように思える。

それが彼女が本来Mであるからなのであるうか。私が彼女が一番好むところの責めを丹念に、しかも執拗に行なうから二度——三度

——四度と、回を重ねるに従って、彼女の心が私の方へ傾斜してくるようにも思えるし、





私の心の中にも、深田菊子に対する可憐さというものが増してきたように思う。

△この世の中に、Mの女性なんて、果たして実際にいるのだろうか——▽

という素朴な疑問は、本誌の読者にしても当然、誰でも一応は抱く事柄かもしれない。

実際、そういった通信が、本誌上にもよく載っていたことがある。

夫婦の中で夫がSで、Mの素質のある妻を

長年月に亘って飼育した場合、SとMとの夫婦の仲が琴瑟相和して、理想的なM夫人が誕生したということは、渡部好美夫人や三浦純子夫人の例を挙げるまでもなく、多くの事例の存在すること、これは否定することの出来ない事実であることは納得できる。

だが、しかし——。

二十才になるかならない未婚の女性で、Mの願望に身を灼くといったことは、いささか

理解しにくい事柄かもしれない。

私も、以前はそういう疑問を持っていた時期があったが、でも、実際に身近かに若い女性のM性に接してみると、摩訶不思議な女性の神秘性に眩惑されるから妙である。

深田菊子、そして同じ年頃の高村浩子の両人は、極く最近、私が緊縛写真を撮影した女性であるが、私が飼育するまでもなく、最初から「緊縛モデル」を志望するだけあって、完璧に近い△Mの天使▽であった。

荒尾慶子は、年齢は若い、既に夫である人から飼育の洗礼を受けた女性であるので、深田、高村の二嬢と同日に論ずることは出来ないが、やはりMの素質を十二分に具えたエンゼルには違いない。

深田菊子にしても、高村浩子にしても、本誌の緊縛女性として登場するまでは、他人から縛られたという経験は只の一度も持っていない。それが偶然、奇クを手にするこによって、自分の体内に潜むM性を察知して、いち早くモデルに応募してきたわけである。

二十才に満たざるうら若き女性が、普通だったなら、怖ろしさに身をふるわすであろう緊縛を好むとは、一体どうした心の動きなのだろうか——。



この間の告白は、高村浩子については、奇ク五月号で「被虐こそ私の夢」同じく六月号で「妄想の自画像」そして、七月号では辻村氏がカメラハントで「華麗な衝撃」と題して書いておられる。

深田菊子については、八月号で私がカメラルポとして「Mの天使とその瞳」という一文を書いたきりであるが、これは第一回目のいわばファーストインプレッションであって、文章も短く、正鵠を得たものではなかったと今では私自身大いに反省している。

こうした年若い女性のMの萌芽ともいふべき女性心理の微妙な変化を具さに知りたいと思うのは、あながち私一人ではあるまい。

幸にして、高村浩子は筆が立つので、二回に亘って△告白▽の文章を本誌に寄せたが、これ以上、突っ込んだ心理描写（それも自分自身の特異な性傾向に関して）を彼女に要求するのは酷であるかもしれない。専門の心理学者にしたって、若い女性のマゾヒズムについてよく判る筈がないのに、二十才になるかならない女性に、深刻なレポートを求めるということは無理だろう。

ただ願わくは、若し気が向いたならば、今後共にながしかの文章を投じられたら、大い

に我々の参考になるのになあと思う。

深田菊子は最初から、私は文章はよう書かないと断わっているの、この方は期待しないが、私の無遠慮な問いに対して、只ニヤニヤと笑ってばかりいないで、適確な答えをしてほしいものだと思える。

近頃は「ポルノ論争」とか「ポルノ解禁」とかいう話題がマスコミを賑わしてきているので、愈々日本も文化国家の仲間入りを果すのかと一見、気をもたすようであるが、やはり保守的気分の強い日本では、そう急にゼンマイがもどけたようにはならないだろう。



大臣を見ても殆ど明治生れである。僅か全日本人口の中数パーセントしか占めていない明治生れの老人が、現在の日本の政治、経済界は勿論のこと、司法界でも主要なる位置を独占している。先ず、こうした明治生れの老骨が死に絶えてしまわなくては、とても文化国家になりそうにない。

明治生れのオヤジに追い使われて戦場で血を流した大正生れは、哀れという存在であるが大きな期待を持つことは出来ないだろう。やはり昭和生れの間人が、日本を支配するようになったら日本も大きく変わるだろう。

閑話休題――。

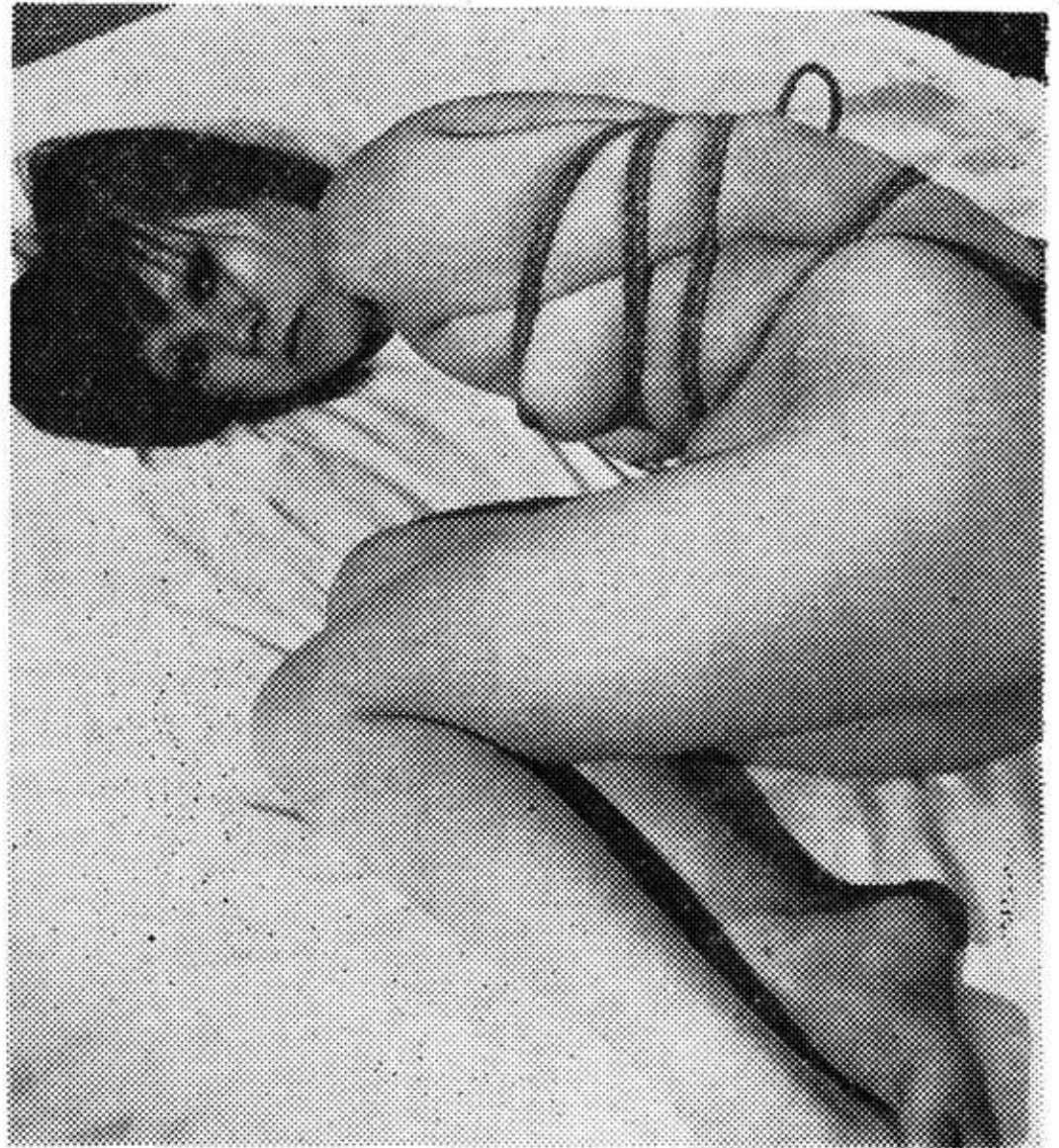
さて、いずれポルノが解禁になるとして、(いつのことか判らないが)今のうち、撮影しておくのも無意味ではない。先日、11PMで実際に16ミリでポルノ映画を撮影しているグループのことが放映されたが、(たしか日本人の女性と黒人男性の組合わせだった)私はポルノ式のSM劇を撮影したい意欲を大いに持っている。

逞しい黒人の暴漢が、日本の美しい婦人を襲う。日本人の老人が洋傘を手にして黒人に手向かうが黒人は素手で老人の洋傘を奪い、殴り倒してしまう。黒人に拐われた日本の婦人はモーターの一角に連れ込まれる。

真白い肌の上に荒れ狂う毛むくじらの黒い肌――。ここでポルノ映画の独壇上である場面が執拗に展開する。

勿論、サジスチックなポルノである。案外出演の希望者も多いのではなからうか。

現在の日本の法律でも、人に見せたり公開したりさえしなければ、撮影すること自体は



一向に差支えないのだから、自分一人だけで大いに楽しむのも、また愉快ではないか。

深田菊子、高村浩子は共にM傾向の中でも多分に露出症的なフィリングを持っている。△坐禅ころがし△という責め方がある。

これは足をあぐらに組まし、右足首を左の股の上へ、左足首を右股の上に挟ませるので

ある。こういう具合にしてから女体を横に転がすと、秘所は自ら熟した果物のいみ割れるような状態になり、責手の意のままになろうというものである。

この坐禅ころがしと同じような意味で、海老縛りにしておいて、横に、仰向けに、うつ伏せにと、いろいろに位置を変えさせてみると大変面白い。なにしろ、縛った両手首を額につく位女体を二つ折りに固定するのだから、その苦痛たるや、相当なものである。

放置する時間が長ければ長いほど、苦痛が次第次第に加わってくる。体の固い男性とか中年肥りで腹の突き出た者であったら、忽ち悶絶してしまうだろう。

深田菊子、高村浩子の二嬢などは若くて柔軟な肢体だから、海老縛りに縛り上げた当初は、そう苦痛を訴えなかったが、流石に横にころがすと、肘が床にすれ、縄が二の腕に喰い込み、耐え難い痛さに、思わず疼痛の呻きを洩らす。そうであろう、横臥させても、仰





臥させても、伏臥させても、縄が皮肉に喰い込み、床との接点である肘とか脛とか腕とか、柔らかい皮膚が破れるほどに緊張させられるからである。

そればかりではない。花芯が雄芯おしべも雌芯めしべも

いみ割れたように露出して、かくすすべもない羞恥責めの姿態である。

私は殊更、意地悪く些細に観察してみる。

だが、不思議な現象が起こってきた。

そうした苦痛の極限状態の中で、彼女たちの「疼痛を訴える呻き」が薄らいだかと思うと、花卉の開閉が途端に激しくなり、やがて悦虐の果ての甘い滴りを、しとど漏らしはじめたのである。

私は、そんな状態を十二分に見届けてからおもむろにカメラを取り上げ、落着いてシャッターを切っていた。もうこういう状態を確認した以上、慌てる必要はないのだ。

カメラの焦点を合わせ、ライトを照らし、私が眼でじかに被写体を観察し、そしてファインダーのピントグラスの上で、慎重に操作すればするほど、彼女の羞恥はいや増し、且、悦びも倍加するのである。

十数枚の写真を、あらゆる角度から撮りまくったあとで、縄

を解いたところ、深田菊子は、ぐったりと床の上にのびていながらも、その顔の表情には満ち足りた羞らしいが、はつきりと読みとることが出来た。

「痛い、痛い」と、彼女が疼痛の呻きを洩らしたとき、私が驚いて縄を解いていたら、彼女の羞恥にまみれた悦虐の状態を見ることが出来なかったであろう。

足首にも、二の腕にも、背中にも、赤く色づいた深い縄の痕が白い肌にくっきりと残っていて、私が手で触ってみると掌にありありと肌の凹凸がわかるほどである。

そのときの深田菊子は、それほど肌についた縄の痕を気にしていない風である。しかし冒頭にも書いたように、地下鉄での釣革を握ったときの手首に残っている縄痕を気にしているのである。激情のひとつが去ったあとには、やはり反省が生まれるのだろう。

数回に亘って深田菊子を縛ってみて、よく観察してみると、厳しい縄目を受けるとのことよりも、羞恥責めの方により関心が深いというように見受けられた。

関谷富佐子は簡単な縛り方で激しいムチ打ちを好んだが、深田菊子は縛りそのものが好きというよりも縛りは只身体の自由を奪うだ

けでよく、それから以後は汚辱の中にのちまわる羞恥責めが大好きであった。

観客の中に裸身を晒して踊るストリッパーが、かぶりつきの見物人に対して見せる特出しショーの御開帳。深田菊子の求めるものは特出しショーのように自らするのではなく、縄という小道具によって強制される開股縛りである。多数の観客の目の代りに羞恥の焦点を凝視するのはレンズの目である。

一条さゆりというストリッパーは舞台の上での御開帳の最中、幾度も幾度も恍惚状態を味わうということであるが、開股縛りでライトを当てられただけで深田菊子は忽ち昇天してしまうのだから、鋭敏さは、まさに感度100といつてよいだろう。

二十才に満たない美女が、このようにM感度満点の女体を持っているということは天性具わった素質なのか、或は後天的に受けた教育（飼育）の賜物なのだろうか。

読者の方々も、そういった謎を知りたいだろうし、私もはっきり知りたいという欲望とはっきり判らないもどかしさを感じる。

だが、深田菊子は至って天真爛漫である。自分の好きなように行動し、好きなようにあるがままの反応を如実に示す。何故か、そん

な理由をセンサクする閑もないようだ。

「何故か？」と問えば、「何故そんなことを訊くの？」と問い返すだろう。

温かい血の通った美しい肌の女体が、その香ぐわしい体臭と共に息づいているのだ。

理由とか理窟とか、七面倒くさいことは考えずに、先ず縄を手にして緊縛を試みよう。

現実には彼女が貴方の巧みな縄捌きに対してどのように見事に反応して、悦虐にむせび泣くかを眺めればよいのだ。

後手に縛っておいて、すらりと伸びた深田菊子の右手を握って持ち上げてみる。

掌に伝わるやわらかい感触。なんともいえない、ふんわりとした体温。細い静脈がうっすらと浮かんでいる薄い皮膚の胫には、うぶ毛さえも生えていない。思わずかぶりつきたような衝動にかられるが、それは後のお楽しみに残しておいて、縄の一方を、右足首に一回・二回・三回と回して、しっかりと縄端を固結びに締めあげる。

その縄を滑車に通して引き揚げよう。

五センチ、十センチ、十五センチ。

右足首は縄に引っ張られて、次第次第に上へ挙ってゆく。単に苦痛を与えるのが目的なら、片足吊りに責めたてれば、吊られていな

い方の足をばたばたさせて、吊られた方の足首を中心にして、ぐるぐる回ることだろう。

だが、今は羞恥責めが目的であって、徒らに物理的な苦痛を与えるばかりが目的ではない。吊られた方の足が一本の棒のように伸びきって、僅かに臀部の一端で体重を支えた深田菊子が、残った足で床の上を掻きまわすので、ぱっくりと口を開いたような状態になってしまう。

しばらく跪いていたが、やがて疲れてぐったりとなったのか、安定したポーズに落着いて疼痛が比較的うすらいだのか、菊子の身体は片足を高々と挙げたままで動きを止めてしまった。今が丁度シャッターチャンスだ。

私は十分にカメラを引いてロングで一枚撮った。絞りはF8、光のまわりをよくするためストロボは各々3米から4米に後退さす。

次は一灯を壁にバウンズさせて、カメラを床すれすれに下げて、高く挙げた片足に焦点を合わせる。こうしたとき、上からのぞける一眼レフ（二眼レフもそうだが）は極めて便利である。続いて花卉にピントを合わせてのクローズアップである。マミヤプロフェッションナールは、蛇腹が伸びるので、プロクサーや接写リングの必要はない。只、二眼レフなのでパ





ラックスに注意しなければならない。

絞りはF22。これでもうウブ毛の一本も、皺の一つも見逃すことはない。

この間、時間にして三分あまり。静脈のすいて見える真白い太股が、かすかに痙攣を起こし、床についたまま思いきり捻げきった足の拇指に力が入って、くの字に曲っている。

ポーカ。フェイスのあどけない顔を心持ち

ゆがめて、僅かに口を開いているのを女体の彼方に眺めて、私はおもむろに刷毛とパイプを取り出した。

天井の噴気孔からは冷房の風が絶え間なく吹きつけているので、部屋の中は深海のようにひややかに、静まりかえっている。

高手と吊った足首を締めつける縄の痛さも後手首や二の腕、胸乳を厳しく縛った縄の痛

さも、今はもう何も感じない。感じないどころか、その痛さが、むしろ痺れるような快感となって全身を突き走るのである。

もがき、うめき、もだえ――。

冷房のよくきいた深海の部屋に、むんむんとした熱気が、こもりだした頃、汗に塗れた女体がぐったりと伸びて、始めて縄目に対する痛さを訴える。

こうして、女体に羞恥責めを加える際、女性の視線を気にする人は（山本章氏のように目隠しをする人もあるが）膝をついて尻を突っ立てたポーズをとらせるとよい。両手首は背中へ回して括ておく。

肉づきのよい円々とした臀部は無防備のまま、Sマニアの食欲をそそるように目の前に輝くような白い肌を晒している。

浣腸ファンにも、A感覚探求者にも好みのポーズである。深田菊子は名前の通り素晴らしい菊花の持主である。そして、またこの尻立ての態位を何よりも好んでいる。

ムチ打ちは好まないようだが、若しムチ打ちや平手打ちを加えるなら、このポーズをとらしておくが一番、好都合である。

無防備感是被虐者に対して大きな不安感を抱かすが、この不安感M性の女性にとって

は、たまらない刺戟となって全身をさいなむものである。ましてや、自分の身体の死角となって男性が何を企んでいるのか、何を施そうとしているのか、さっぱりわからないのであるから、あたかも、お尻がもぞもぞとする被虐感に相当なものであろう。

深田菊子は勿論、読者通信の中でも『羞恥責めの好きな若いS男性を求めています』と言っている通り△羞恥責め△は大好きだという女性である。

こと△羞恥責め△に関しては、少々のことでもネをあげることはない筈である。というよりも寧ろ、若いS男性の△羞恥責め△を心から望んでいるといってよいだろう。

写真を撮影する方は私が担当するから、誰かS男性で羞恥責めの巧みな方があったら、登場して責め手となって存分に腕を揮い、深田菊子のM性を満足させてくれないだろうかと思う。深田菊子が「若いS男性」といったのは、彼女が二十才に満たない若さの持主だから、そう書いたまでで、私が数回逢った上での感じでは、必ずしも若い相手を求めているというのではなさそうである。羞恥責めにはベテランの年輩の人でも、腕にさえ自信があれば若い方でも一向に差支えない。

七月初旬のある日のこと、約束していたので、私は撮影器具や緊縛用具一切を車に積み込んでおったが、深田菊子は逢うなり泳ぎに行きたいと言いだした。カンカン照りで街の舗道が、燃えるように熱気を放散しているのに、誰も泳ぎたくない日であった。

水着を持ってきているのか、と尋ねたところ、持ってきていないという。それじゃ、どうするのか、と言うと、何処か素裸で泳げるところはないかと、如何にも深田菊子らしい発想である。

「それじゃ琵琶湖へでも行くか」

私が、そう言った途端、

「まあ、嬉しいッ」

と、彼女の目がぎらぎらと輝いて、大仰に喜んでみせた。如何にも嬉しいといった表情である。タオル一枚準備していないのに、全く、いい気なものである。

阪神高速道路から名神高速道路に乗り継いで栗東インターで国道8号線へ出る。30分ばかり走って長明寺の水泳場に達した。

駐車場に車を預けバスタオル二本を買う。この付近では、勿論素裸で泳げるような場所はない。二時間で一万円というモーターボートを借りて桟橋からヤマハに乗る。

アクセルをいっぱい引いて時速四十キロぐらいだろうか、湖面を滑るように、と言いたいが、余り波も立っていないと思うのに、ボートの底が水面を叩いて、ドンドンドンと相当なショックである。アウトボートを運転するよりも、ハンドル付のモーターボートの方が大分、運転は楽である。沖へ出てから減速しておいて深田菊子とハンドルを交わる。泳ぎたいと言っていた彼女であるが、だだっ広い湖面を右に左に自由にハンドルを切って走りまわるボートが気に入って、運転するのに夢中になっている。

沖の島を一周してから更に北上して彦根近くまで湖上を走る。いくらも、無人の湖岸があるので素裸で泳ぐことも出来るし、沖でだったら、天衣無縫で泳いでいたとしても、誰もとがめだてはしないだろう。

ボートの縁から手を水中に浸してみると、思ったより冷たそうである。準備体操もしないで急に飛び込んで心臓麻痺でもやらかしたら怖ろしいので私は水の中へ入るのを尻込みした。深田菊子は大分慣れたらしくハンドル捌きも鮮かに、湖岸の松並木を左手に見て、一気に南下する。

水しぶきを挙げて疾走するのは痛快だし、



水上では何の障害物もなくて、交通渋滞もないので極めて愉快である。一旦ハンドルを握ると中々替ろうと言わない彼女は、もう泳ぎのことなど、すっかり忘れてしまったように急ハンドルを切ったりしてボートの運転に熱中している。流石に棧橋へ着けるのは自信がないらしく、私に替ってくれという。

約二時間にわたる湖上での疾走は、バスタオルをかぶってはいたが、陽にも灼け水しぶきに肌を晒して軽い疲労を覚えた。

国道8号線を大津まで来たとき、何か比叡山の中腹から山頂にかけて、キラキラと灯の明滅が車の進行に従って見えかくれしているのをフロントガラス越しに眺められた。逢坂山の渋滞をやっと通り越して京都市内に入った頃は日もすっかり落ちて、南禅寺前のホテル街のネオンが夜霧にうるんでいた。

『SMフォートの撮影』から『SMプレイ』へそして『SMポルノ』へとエスカレートしなければ、おさまらない昨今の風潮である。

スエーデン、デンマークの北欧から西独などのポルノグラフィの本場から、さてはアメリカにかけて、最近ではポルノも、サド、マゾやレズシーン、ホモシーンに至るまで広範囲に亘っているとのことである。



「サジスチックなポルノグラフィの主演女優になってみませんか」

私は冗談のように深田菊子にきいてみた。

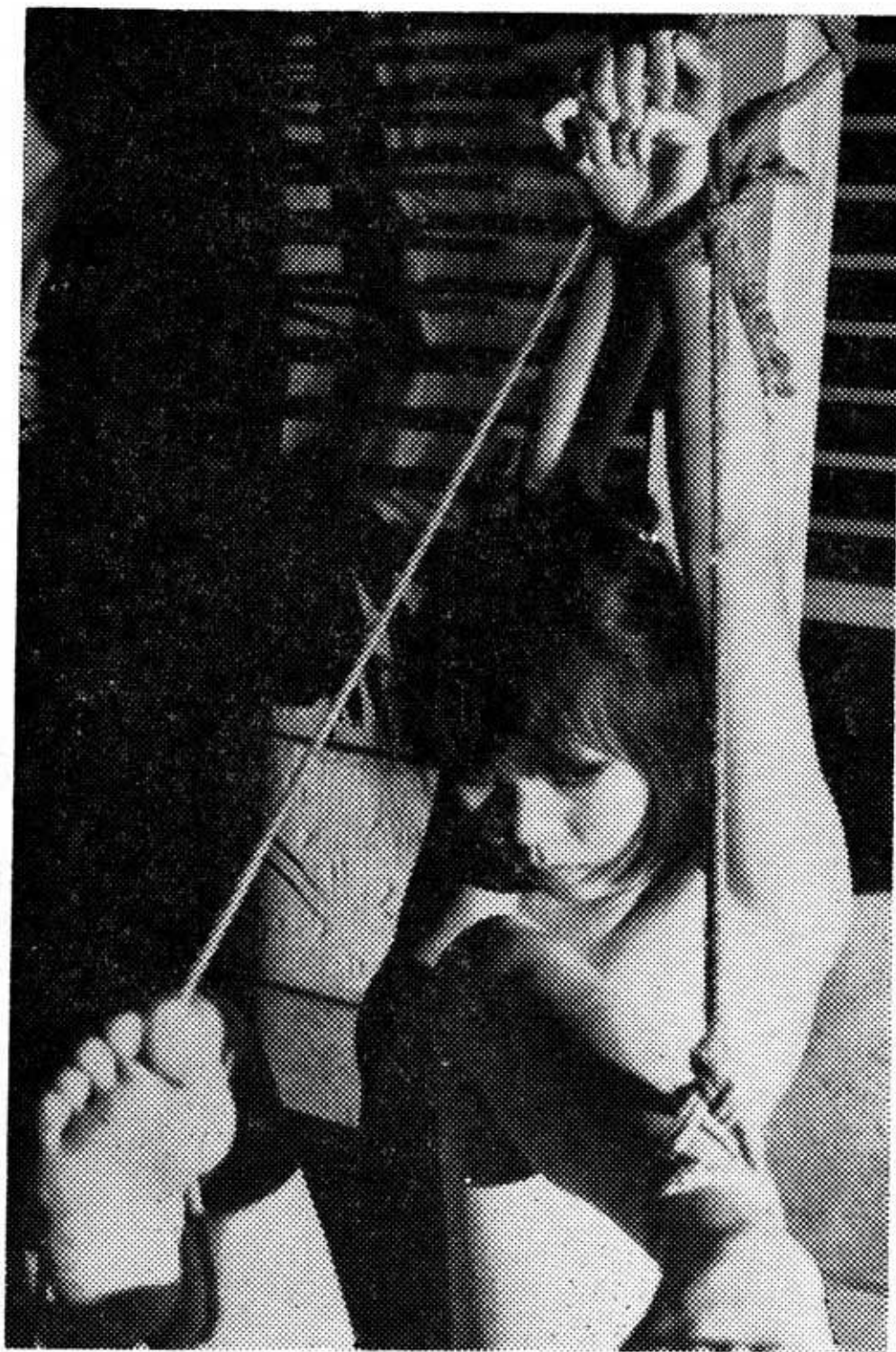
「私は構いませんけど、私のような者でも勤まりますでしょうか」

「いや、貴女だったら、バッチリ最適任者ですよ。承諾して下さいたならネ」

彼女は自信なさそうだったが、満更でもな

い顔付きで期待している風でもあった。

もし彼女を主演にして素晴らしいポルノ映画やスチールが完成したら——。そう考えただけでも、私は胸がわくわくしてくる。さしあたり、『花と蛇』の中の一場面なんか、うまくアレンジしたら、ぞくぞくするような写真が、きっと撮れることだろう。川田や鬼源の配役志願者も殺到するのではなからうか。



まだ話はしていないが、そうすると、高村浩子や荒尾慶子、それに前田真知子なんかも参加してくれるかもしれない。

深田菊子を含めて、こうしたM女たちは、若くて美しいばかりではなく、最大の魅力は素人であるということだ。

ピンク映画の女優やストリップパー、それにお客商売でもまわっているキャバレーやバーの

ホステスなど、美しくて、演技も上手であるが、それだけに、わざとらしさが目について新鮮さがなく、すぐ鼻についてしまう。演技がオーバーになればなるほど、迫力が薄れてしまうから妙である。如何にメーカーシップを凝らし、背景を見事にしても、造り物の無味乾燥さからは逃れることは出来ないのだ。

M女たちに見る素人臭さの中にある真実味

が大きな魅力なのである。だから、非公開のポルノグラフィに於いても粧わざる商品の良さを、最大限に発揮してくれるのではなからうか。私はなんとなく、そう考える。

一回目、二回目、三回目、四回目と回を重ねるに従って始めのぎこちなさや堅さが次第に解け、単なる縛りが緊縛プレイとなり、やがて、それがSMプレイに変化してゆく。

深田菊子は今宵で五回目になる。

陽のあるうちに終わってしまう予定が思わぬ遠出のために、京の宿に沈没してしまっと思わぬ処で夕食を摂る始末とはなった。

快い疲れは休息を求めていたが、暮れなずむ京洛の宵は、なんとなくなまめいていて、このまま彼女を家に帰してしまうには惜しい気がしきりにする。とはいっても、今これから緊縛フォトを撮影するためカメラを操作するのは、これも臆劫である。車のトランクの中にはカメラも縄も全て準備してあるから深田菊子がOKすれば直ぐにでも着手できる。

私は、ふん切りがつかず迷っていた。

深田菊子は帰ろうとは言わなかった。これから起るであろうハプニングに期待したような素振りでも時間の経つのも一向に気にしない風であった。



「今晚はどうだ。一つ、カメラを抜きにして君の望む羞恥責めというのをやろうか」

「そんなの、嫌だわ」という彼女の返事が返ってくるかも、しれない。そのときは、こう言って口説いてやろうと、その文句まで考えていたのだが――。深田菊子の返事は、

「ええ、思いきり苛めて頂戴。私だったら、カメラを使って下さっても、いいのよ。私、一度、もう泣き出してしまうくらい、責めて貰いたい。そして、そのときの表情も写真に撮っておいてほしいワ」

彼女のこうした返事を聞いては、もうカメラワークを面倒がってはおれない。

縄と8米のエヤーレリーズを装着したカメラ（勿論、頑丈な三脚の上に載せてある）を持って部屋に案内された。

ストロボ三灯を左右各一個と天井に配置すると、これで撮影はOK。装填したフィルムのある限り、レリーズのゴム球を押さえさえすれば連続でシャッターが切れるのだ。

夜は明けても、もう日は暮れることはないのだ。私は落着いた気持ちで彼女に入浴を、うながした。

真白いシートが敷き詰められたクッションのよくきいた蒲団が別室の隅に主待顔に二つ

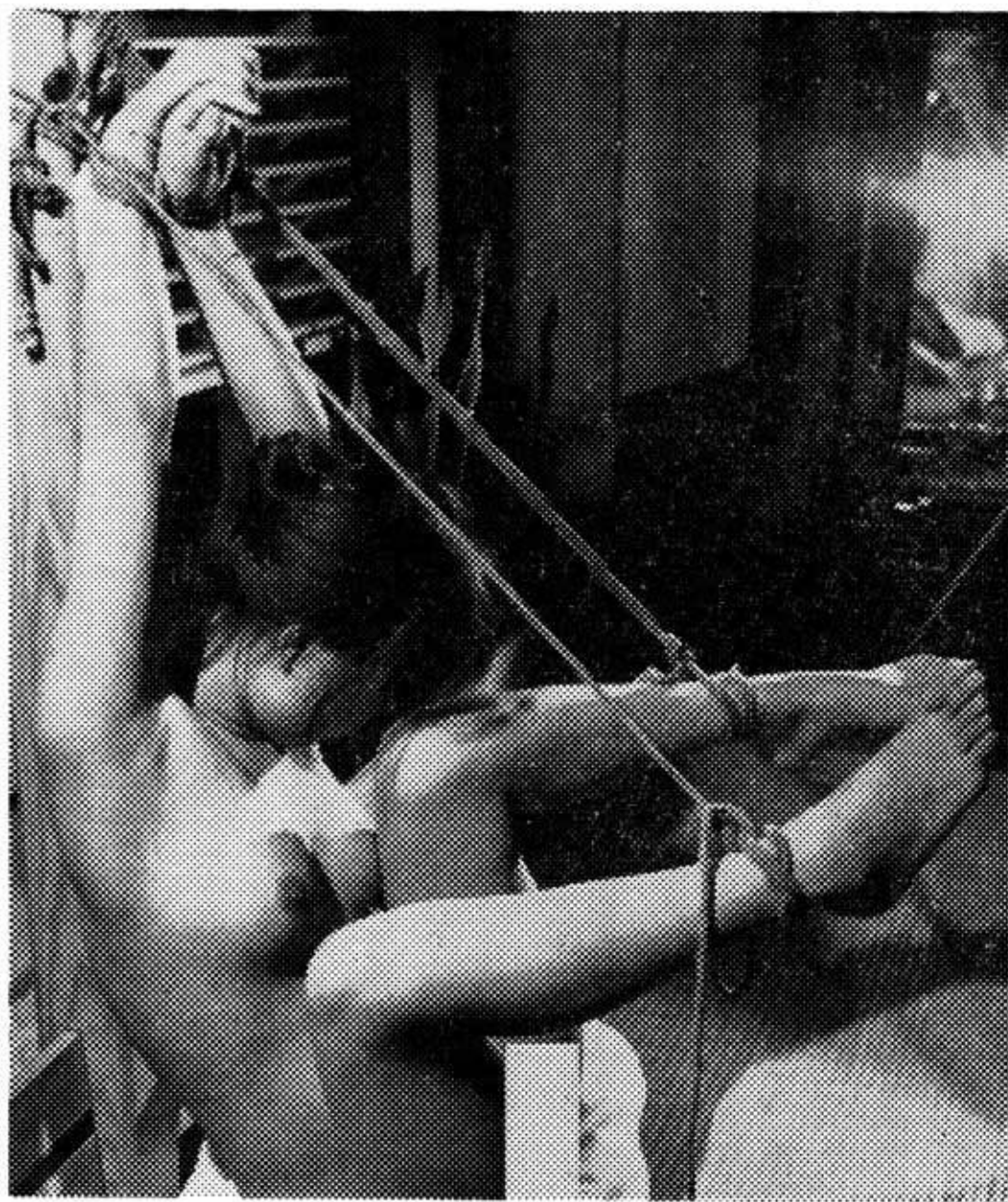
の枕を並べて置かれてある。

深田菊子は、まだ湯気のほかほかと立つ、剃玉子の様な白い肌をバスタオルに巻いて浴室から出てきた。私は使い古して、くたくたにくたびれた綿ロープで彼女の両手首を背後に縛り、蒲団の上に転がした。

曾て後手高手小手に縛り上げて一晩中、放

置しておいたことがあったが、尿意を催して辛抱出来なくなった女は、一時間もかかって縄を解いたことがあった。朝になって、私が見に来たら、解いた縄を放り出したまますやすやと眠っていた。

たしか、縄をチラリと見せただけで、



顔を真赤に紅潮させるほどの縛り好きのM女性であったが、一晩中かかって、ネチネチと責め続けるスタミナは今の私には持ち合わせに任す外ないような気がする。

蒲団の上に深田菊子を縛ったままで転がしておいて、私はゆっくり入浴した。

琵琶湖でのモーターボート遊びで、すっかり汗まみれになった身体を、浴槽に沈めて、これからの女体責めについての構想を、あれこれと考え練った。

深田菊子は、自分の私生活のことに關しては私には、よく喋った。人なつっこい近代的な娘であるから、問わずとも自分の方から、世間話のようにして私に聞かすのであった。でも、どうしてSMに興味を抱くようになったかは、余り喋っていない。

よし、そうだ。今晚は深田菊子のM生活について、責めながら聞き出してやろう——。

私はそう思いつくと、浴槽を出て素肌に着衣を引っかけた。幸い、提げてきた小道具入れのバッグの中には、浣腸器具一式が入っている。大中小三本のガラス製シリンドラー、イリガートル、イチジク浣腸、エネマシリンジ、それに導尿用のカテーテル。

その外、耳鼻科用の開孔器（これは辻村氏と一緒に古道具屋へロープを買いに行ったとき、ガラクタ箱の中に入っていて二足三文で買った物だ。案外、古道具屋には責道具の掘出物がある）。クリップ、太筆、ペンチ、セロテープにビニールテープ、刷毛、メンソレタム、大小二組のバイブレーター。太いの

と細いのと捻れたのと三本の蠟燭、マチ針、コケシ人形（中にバイブを入れるようになったもの）、洋鉄、羽毛、手鏡、消ゴム、細い針金、押ピン、サロンパス、不易糊、安全剃刀に電気カミソリ（電池用）綿棒——。

といった責めの小道具が詰まっている。

これから、あくどい羞恥責めにあうことも知らぬ氣に、深田菊子は無邪氣に仰向けに蒲団の上に寝たまま、流行歌を誦んでいる。

準備万端、整え終えた私は、深田菊子の足もとへにじり寄り二五〇Wの写真電球を点灯した。急に自分の下半身の方が明るくなったので彼女は、おびえたような視線を向けた。

私は彼女の足を握った。

柔らかな、ふくよかな感触が私の掌に快く伝わってくる。血の通った温かさがジンと響いてくる絹羽二重のようなタッチである。

すらりとはよく伸びた足の指。決して小さい足とはいえない。昔は小さな足が美人の一つの要素とされていたのだそうだが、今日的な女性には、すこやかに伸びるにまかせているし日本式に坐するという、習慣を余り持たないの

で、坐りダコも出来ていない。

私は深田菊子のSM生活について訊きだそうと、矢つぎ早に質問を浴びせた。

「初体験は、いくつの時だった？」

「ボーイフレンドは何人いるのか？」

「SMに關心を持ち始めたのは何時か？」

「縛られた時の感じは？」

「奇巧に読者通信を出した動機は？」

「浣腸に対して、どう思うか？」

「同性愛に興味を持っているか？」

「人の前で排便が出来るか？」

「身体の中で最も鋭敏なのは何処か？」

「一番好む体位は何型か？」

「今まで何人位と性体験を持ったか？」

殊更、意地の悪い質問を次々と放って、彼女を困らせ、返事を渋っていると、刷毛で足の拇指のツケ根から土踏まずにかけて、擦った。彼女は身体を捻って大仰に擦ったがり、私が握っている足首をふりほどこうと蒲団の上をころがり回った。蒲団はクッションがよ

くきいているので、後手に括った縄目が背中の下になっても、さして痛くないだろう。

そのかわり、魚がはね上がるように動き回るので、ゆっくり刷毛を当てて擦っていると、うわけにはゆかない。左右上下に激しく動く足の裏に刷毛の焦点が、きまらないのだ。

私は手にした刷毛を投げ捨てた。

羞恥責めは、まだ序の口である。責めの小



道具には事欠かない。

私は徐々に別の縄を取りだして足首に巻きつけていた。

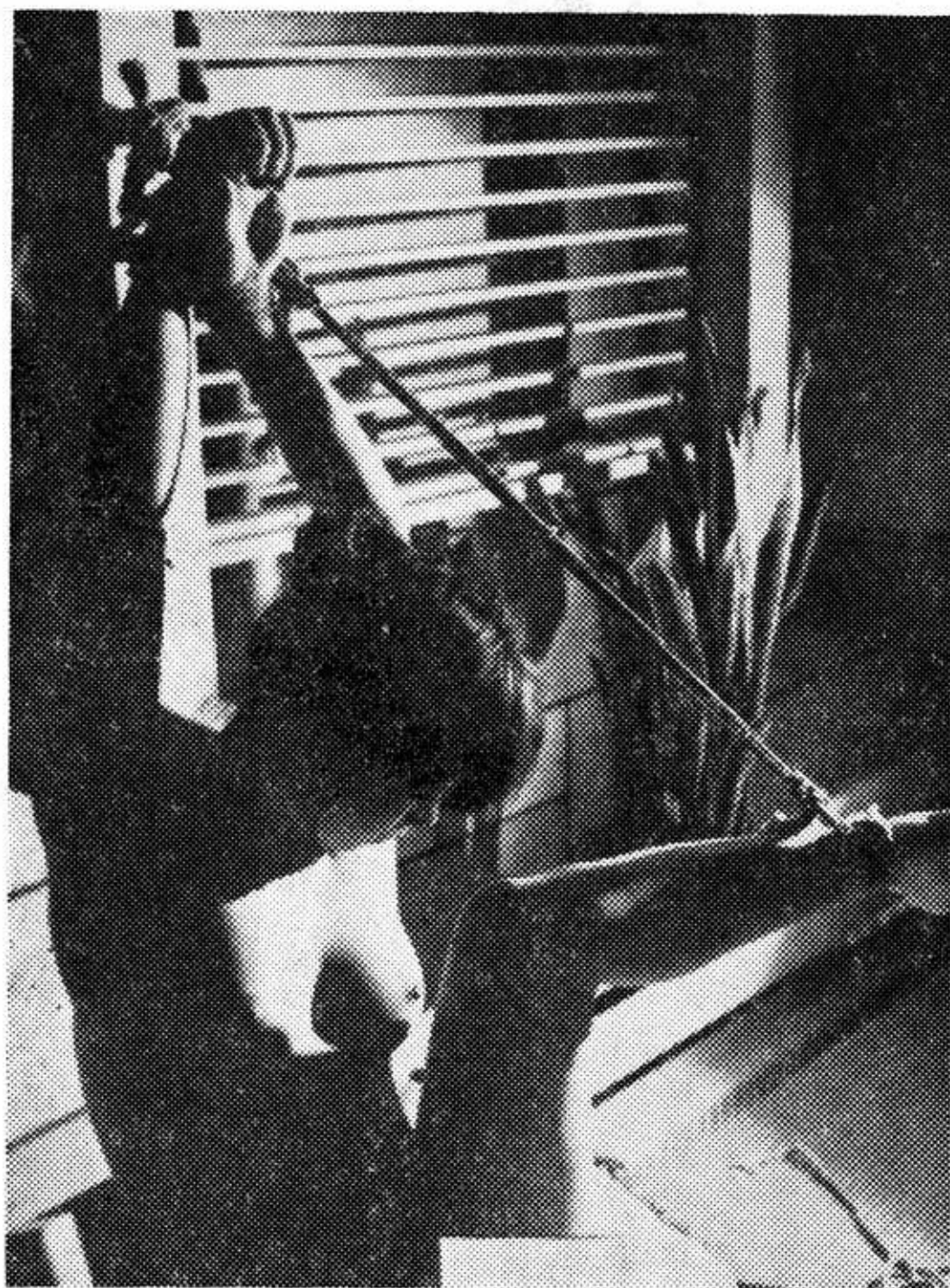
深田菊子にヒューヒューという悲鳴を間断なく挙げさせ、悦虐の泥沼の中に、とっぷりと浸らせてやるのは、この機会よりない。

左足首を縛った縄を隣の部屋との間の鴨居に通して引張った。この時、今まで無言だった彼女が声を出した。「ねえ、お願い。トイレへ行かせて——」

さっき、風呂から上がるなり冷蔵庫のビールを一本、空けさせたのが、今になって効いてきたものと見える。勿怪の幸である。

「トイレなんか行く必要はない。このままの恰好で、ここでやってしまえ」

「いや、いや。こんなところでは出来ないワ」私は、それには答えず、更に右足首にも縄



を巻きつけ、畳と造り庭の境界にある手摺に結びつけた。

それから行なわれた排尿責めの詳細については私は筆にする勇氣を持たない。又、豪華な蒲団をビショビショにしてしまったホテルに対して、お詫びの言葉もない。

皎々と輝く白日のような電光の真下で繰り

ひろげられた絢爛たる饗宴を、私は自分の目でつぶさに見ることが出来た。

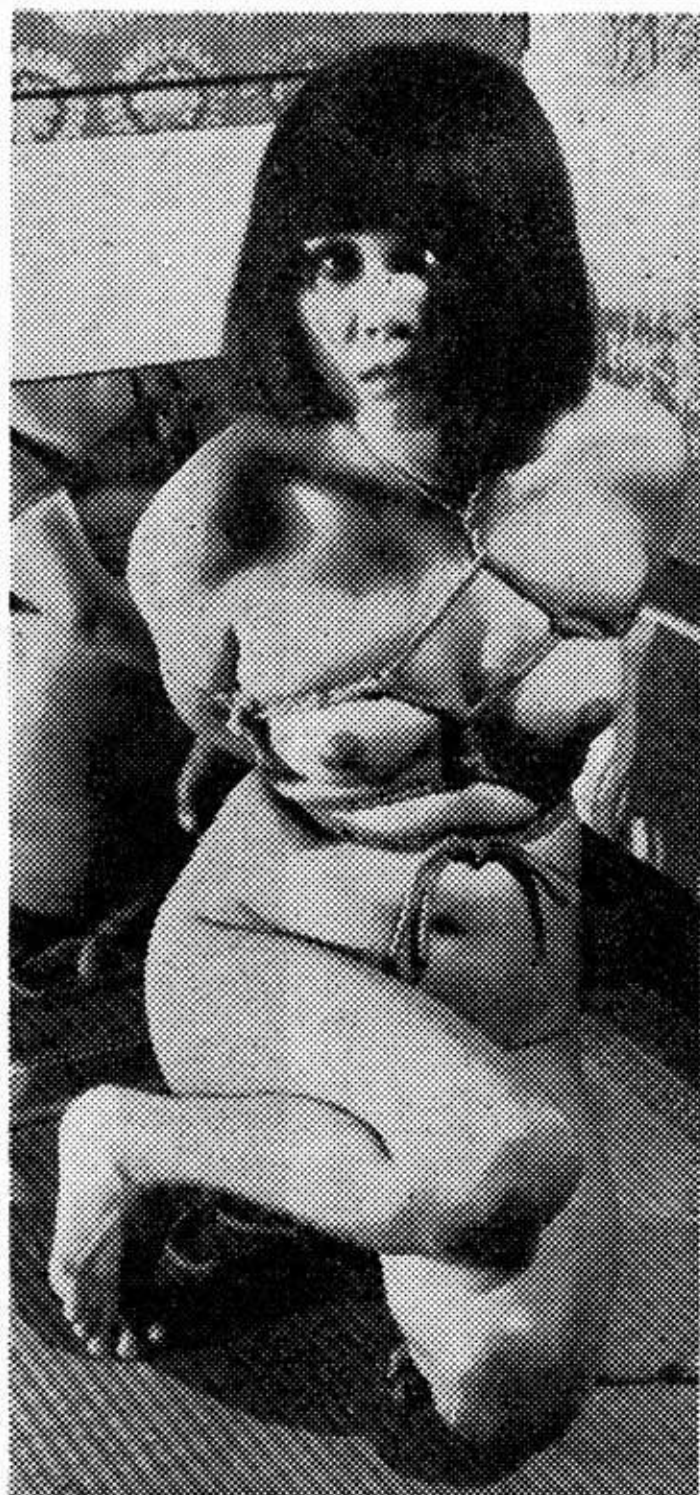
条件反射というものがある。トイレへ向けば余り尿意を催しておらなくとも、自然にスムーズに尿は出てくる。私たちは幼いときから、トイレで排泄をするということに慣らされているからである。

それが、一旦病氣なんかで、蒲団の上とか畳の上とかで、如何に便器を与えられたからといって、急に排泄出来るものではない。

ましてや、便器も与えられず、異性の見ている前で排泄を行なうということは如何に激しい尿意に襲われていようと、若い女性の身として容易に果されない。

私はこの間のやりとりの時間稼ぎで、深田菊子のSMについて、相当広範囲に聞き出すことが出来た。

初体験は十七才の春。今のボーイフレンド



は白人の青年を含めて五人。SMに始めて興味を持ったのは今年の二月頃。一番好む体位は（彼女は消え入りそうな羞らいを見せて、犬のような恰好と言った）背後位。

浣腸はされたことはないが、されてみたいとは思ふ。縛られた時の感じは、余りきつくて肌に痕の残るようなのは、いや。縄は身体

の自由を奪うだけで痛くするのは好かない。こうしたことを訊き出すだけでも、中々時間がなかった。次第に尿意が激しくなるので彼女も上の空である。でも、時間が経つだけでは一向に排尿はしない。「トイレへ行かせて——」

哀願を続ける彼女。私の問いに対して返事をしさえすれば許してもらえんと思っていたのが、一向に解いてくれないと判ると、今度は必死になって尿意をこらえはじめた。

爆発的な排尿の起爆剤になったものは、不思議なこと、それはバイブレーターであった。それを、何処へ当てたかって？ それは一寸、秘密である。

ひとたび、括約筋の栓がゆるんでしまうとあとは一瀉千里である。最後の一滴を洩らしきってしまうまで、私はシャッターを切るのも忘れて、じっと凝視し続けていた。

遠くで汽笛の音が響いて、はじめて旅の空であるという反省が胸にこたえた。

準備した小道具も数々のプランも、激情が爆発してしまうと、淡雪のように消え去ってしまうものである。

私はライトを消すと、ぐったりと蒲団の上に伸びている深田菊子をそのままにして、浴室へ向かっていった。

間断なく盛り上がるように、溢れてきた液体が逆光線を受けて、まるで宝石の輝きに見えた美しさを、私は忘れることが出来ない。

トイレの薄汚れた便器の中ではなくて、豪華な蒲団の上で行なわれただけに全く素晴らしい排尿のショーであった。私はカメラのシャッターを切らなかつたのが惜しまれたが、この演出には彼女も満更でもなかつたらしく「次には浣腸しているところや、排泄しているところを撮ってもいいわよ」

と、別れ際に言っていたから、いずれは羞恥責めの一環として、浣腸、排泄などを加味し、オシメ、生理帯などの小道具を用いた責めを、深田菊子に対して、ネチネチと行ないたいと考えている。嘗て関谷富佐子に鞭打ち責めを行なったように——。

——（おわり）——



△内容主要見出し一覧▽

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中ではありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となった訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

〒558 大阪府住吉郵便局私書函第41号  
 暁出版株式会社宛

須坂 旭・画



# 男 二 人

〓 被虐の旅 〓 シリーズ

由 利 美 千 子

葉山がサンフランシスコへ私に会うためにだけ来たとは思えなかったが、異国で久しぶりに会った私達は、語りあう時間も無く、いきなり葉山に責められることになってしまったのだ。

「私が悪かったの」

私は椅子に縛りつけられて彼の靴で踏みにじられても仕方なかった。

でも、ジョンとも約束して

いた。

サンフランシスコで会おうと……。

ジョンはロスアンゼルスから、わざわざ飛行機でサンフランシスコまで、来てくれるのだ。日本の娘が口から出まかせを言ったとは思われなくなかった。

「いじめてもいい。でも、あしたの九時までにホテルへかえして……」

私は葉山に言った。

「あしたは団体行動をとらなければ、いけないの」

それは葉山につく、嘘だった。私が彼に嘘をついたのは、これが始めてだった。私は朝十時にかかってくるジョンの電話のために、ホテルにいなければ、いけないのだ。

ジョンには自由行動だといい、葉山には団体行動だという。私は葉山に責められても仕方ないと思った。しかし、どっちを、よけい愛しているというわけではない。ただジョンとの約束を守りたかった。相手が外国人なので、よけい、そう思うのかもしれない。『今夜は、ここへ泊まっても、いいんだね』

「ええ」

私はリーダーに、すでに断わってあった。その時は、まさか葉山と一緒に夜を明かすと



は思っていなかったのだ。

ディズニースタンドで、ジョンがサンフランシスコまでくると云った時、ジョンと一緒にジョンの叔母の所へ行くか、ホテルへ泊まるようになるのではないかと思ったからだ。

しかし、葉山に私は言った。

「あなたから電話がかかった時、今日は一緒に過ごせると思ったので、リーダーに断わってきたの。親戚に泊まるからって……。でもあしたは、みんなと一緒に市内見物しなければいけないの」

私は又しても、嘘に嘘を重ねた。

しかし葉山は、やっと機嫌を直したようだった。

「じゃあ、あとでゆっくり、いじめてやる」

そういうと、私の縄をといてくれた。

「バスを使っておいで」

私はお風呂の中で、又苦しめられるのではないかと、ふと思った。

「大丈夫だよ」

彼は、いつものように私の気持を、すぐ反映する。

「風呂へ入ってから外へ出てみよう。どうせあしたの市内見物はバスで行くんだろう。その前に有名なケーブルへ、のっておかなければ……」

葉山は言った。

あしたは団体行動だといった嘘を、うたがもしない彼に、安心しながら済まないと思った。

ケーブルカーといっても、小さな箱型のチンチン電車のようなものだった。

日本の都会から順に電車が姿を消していくのに、このチンチン電車はサンフランシスコの名物になっている。

町角に立って、近づいてくる電車を見た時前にも後にも、ぶらさがるように乗っている人を見て、とても一杯で乗れないと思ったが中はガラガラだった。

若者たちは、わざとぶらさがって、歩道を歩く女の子にウィンクしたり、手を振ったりする。िकास子が、みつかると、さっとおりる。そのために、ぶらさがるように乗っているらしかった。

電車の中にも、どこでもおりられる。天井に一本の綱がわたっていて、それを下へ引くとチンチンと鳴って止まってくれるのだ。

体の大きな、黒人の混血のような車掌が料

金をとりにくる。一人二十五セントだった。日本円に直すと九十円で、一寸、高いみたいだが、一ドルが日本の百円ぐらいの値打になるから、日本のバス代とたいして変わりはないのである。

電車は坂を上がったり下りたりしてノロノロと進む。そして最後の坂をグングンと下った所が漁港のようになっていて、魚や蟹やエビや貝を、山のように並べて売っている。

プリンのカップのようなものに、ほぐしたカニのミヤ、エビを入れて売っているのを、人々は手に持って、食べながら歩いている。そうして売らなければ売りにくいのかしらと思うほど、丸ごとのカニ一匹は大きい。北海道のカニに似ているが、すごく大きい。エビも伊勢エビの親玉のようなエビだ。

「カキを食べよう」

葉山が言った。

これが又、大きい。

殻の大きさがタバコの箱より大きい。銀行なんかでくれるマッチぐらいの大きさといえば、いいだろうか。

それを氷の上に乗せて冷やしてある。そえてくれるレモンが、日本のような薄っぺらな輪切りではない。

殻ごと手にとってミの上へ、レモンをかけて小さなフオークでスルツと口へ運ぶ。磯の香りがして何ともいえず、おいしかった。

「こんな大きな蛎は日本でみたことないわ」  
私が、いった。

「その殻をもらっていつて、みせたらいい」  
葉山が言った。

店の人はニコニコと、いくつも殻を紙袋に入れてくれた。

その殻に使い道があるうとは、その時、私は考えていなかった。

ホテルへ帰る途中のレストランで、食事をすませたので、あとは寝るだけだが、まだ私のお仕置は終わっていないかった。

私は又、着ているものを全部ぬがされた。首に縄がかけられ、胸の所から亀甲型に、私は罪人のように縛られた。二の腕にも、太腿にも縄が、まわされる。

自分の体が縄で固定されていくのが、心地よかった。

「椅子に縛りつけることは、アメリカ人でも出来る。こういう縄のかけかたは、しなかったらう」

彼は言った。

私は、だまっていた。

メキシコ村で会った青年がマゾだったといふところまで、私は話していた。

しかし、私の体に残っている痕は、相手がマゾでは、つけられない痕なのだ。

彼は私を縛りあげると、バスルームからタオルを持ってきて床に敷き、その上へ、さっき私がもらってきた蛎の殻を並べた。

「さあ、坐るんだ」

私は蛎の殻が責め道具になることを始めて知った。

殻の外側は噴火孔の模型のようにデコボコしている。その外側を上に向けて並べてあるのだから、小石の上へ坐るより痛いことは分かっていた。

「何を、ぐずぐずしている。坐るんだ」

彼は、突きとばすように私を坐らせた。

「あっ、痛っ！」

とたんに悲鳴が私の口から、こぼれた。

そろばん責めというのがあるが、この蛎の見殻は、もっと足を傷つけた。

私は、思わず腰を浮かした。

「きちんと坐るんだ」

彼は邪険に私の肩を押さえつけた。

「ううっ……」

私は歯をくいしばって、痛さをこらえた。

「アメリカ人に何をされたのだ？」

私は口が、きけなかった。

痛さをこらえるのが、やっとだった。しかし、直ぐに私は膝を崩した。とても正座していられたかった。けれど崩しても、なお痛かった。

彼は私のうしろへ、さつき私を縛りつけた椅子をおくと、椅子の向きを反対に私の背と椅子の背と合わさるようにして、私の後手に縛った縄を、その椅子に、くくりつけ、別の縄で私の縄と椅子の足を一つに結んだ。私は無理に正座させられて、仕置柱にくくられたのと同じになった。

「痛い……痛い……」

私は胸まで波打たせて、訴えた。

「貝殻をとって……たまんない……」

「まだ、これからだよ」

彼は平然と見ている。

そして、旅行用の大きなトランクを、ドンと私の膝の上に置いた。

「ああっ……」

私は身を泳がせるように、もだえたが、動けなかった。

貝殻が足に、めりこむ。



その痛さ……。

私は正常に息が出来なかった。

体の一番中心に当たる下腹部の粘膜まで、ぎゅうっと、しめて痛さを、こらえる。

しかし長いこと息をとめてはいられない。

又、ホッと吐いて、又グツとこらえる。

「ううっ……ううっ……」

油汗が浮いた。

「どうだ、こたえるか？ 拷問の石のように

重くは、ないはずだよ」

私は、ただ耐えた。じっと動かずにいることが、痛さと戦う唯一のポーズだった。

「痛さに慣れたようだね。じゃあ、可愛がってやるか」

彼は私の乳房をつかんだ。

身動き出来ない私を面白そうにみながら、

乳房をもみ、乳首をいじった。

「ああっ……ああっ……」

私は、しのび泣くような声をたてた。

体が火の玉のように燃えた。

痛さが、ころよくさえ思われた。

彼はトランクをどけると、私の膝にまたがった。それはトランク以上の重味だった。

「貝殻をのけて……おねがい」

私は言った。

「いや、まだ、だめだ。アメリカ人に、こんなことされたのか？」

彼は、乳をいじりながら、いう。

私は首を振った。

「じゃあ、何をされた？」

彼は、またいでいる膝を、ゆすった。

私の足は貝殻にくいこんで、こすられることになる。それは足にヤスリをかけられるのと同じ痛さだ。

「かんにんして……貝殻をどけて……」

私は日本へ帰っても、蛸を食べる度にこの痛さを思い出すに違いないと思った。

「よし貝殻は、とってやろう」

彼は、やっと腰と椅子を結んだ縄を、いれてくれた。私は足をずらし、足を少し開いた

形で、膝を上へあげることが出来た。

しかし、私の脛にくっついて離れない殻もあった。

彼は貝殻をとって紙袋へ入れた。敷いたタオルに点々と血がついていた。

私の手は、まだ椅子に、くくられていた。

私はジョンとフレッドのことを話した。

しかし、ジョンと二人でディズニールランドで遊んだことも、もう一度、ジョンと会う約束があることも、到底、葉山には告げられな

かった。

○

葉山と、もう一度、夕食を食べる約束をして、私は朝早くホテルへ帰った。

両足にホータイをするわけにもいかなかった。私はタルカムパウダーをはたいて、靴下を穿いた。

希望者だけ、市内観光のバスで出て行ったあと、私はひとり部屋に残っていた。

昨日、ジョンの電話を待っていた時ほどには、期待の喜びはなかった。

しかし、リーンとベルが鳴った時、やっぱりもう一度、ジョンに会える、たのしさが胸にジーンと、きた。

私は悪い女なのだろうか。

しかし、日本にいた時、葉山以外の何人の男に会っても心をひかれなかったのに、ジョンに何となく心ひかれるのは、日本人にはない魅力を持っているからだと思う。外人崇拜ではないと思うのだが……。

「すぐに、そこへ行って、いいか？」

とジョンは、きいた。

私はロビーで待っていると答えた。

口紅をぬり直して私がロビーへ下りていくと、もうジョンが立っていた。

「昨夜は、どこへ行ったの？」

ジョンが、きいた。

「お友達とフィッシューマンのマーケットへ行って、蛸を食べたの」

「一緒に行けたら、どんなによかったろう」

「ごめんなさい。そのかわり、今日は夕方までフリーなの」

「夜は？」

「みんなと一緒に夕食を食べるの。ロスでつき合わなかったから、ここでは日本から一緒に来た人たちと同じようにしたいの」

「じゃあ、とにかくボクの車に乗ろう」

ジョンは叔母の車を借りて来たという。

サンフランシスコの郊外にある叔母さんの家でお昼を食べることにして、ジョンは車を走らせた。

有名な金門橋を見せてくれるという。

私は助手席から街の景色をながめながら、デイズニーランドと一緒に歩いた楽しさが、よみがえってきた。

（何故なのだろう）

私は思う。葉山という時とは違った楽しさがあるのだ。

私は葉山にいじめられることを望みながら苦痛に対するおそれがあった。それは人間の

本能のおそれなのかもしれない。

縛られることが好きなくせにひどいめにあわされることに恐怖があり、心がたくなるのだろう。

ジョンといると、反対だった。

ジョンは今日も、いじめられたいと思ってるのだろうか。

私は、ジョンに女王のように、ふるまえるのだ。

それが、もし楽しさにつながるとしたら、私は両棲動物のようにSにもMにもなれるのだろうか。

金門橋は絵葉書や映画でおなじみだった。

それよりも、アル・カポネが囚われていたという島が売りに出ているのが興味深かった。そんな所に、この世の地獄島を作ったら、どうだろう。

それに対する、いろんな構想が頭に浮かんだが、それを英語で話すほど、私は英語にツヨクなかった。

「ボクが、すごい金持だったら、あの島を買って、キミを島の女王にしてあげる」

ジョンは言った。

ジョンも又、私の思ったようなことを考えたのだろう。

車はジョンの叔母の家へ向かっていった。

「叔母は留守なんだ。ボクが小さい時から知っている、通いの家政婦がいるけれど、ボクたちがついたら彼女は家へ帰ってもらう。あとは二人で、ゆっくり昼食をたのしもう」

ジョンは言った。

ジョンの両親も旅行中だった。叔母も又、旅行中だという。アメリカ人は旅行好きなのか、休暇が多いのか、ゆとりがあるのか、多分、そのどれもだろう。

そしてジョンの叔母の家も又、ロスアンゼルスでジョンの家に、よく似ていた。

しかし、昼間とはいえ、誰もいない家に二人きりでいることに、落ち着かないものを感じた。それはジョンの家へ始めて行った時よりも、二人の心が近づいてきたせいなのだろう。

昼食をすますと、私たちはもう一度、車の人となった。

「どこへ行くの？」

と、きいたが、

「行けばわかる」

といって教えてくれなかった。

車はスピードをあげて走った。

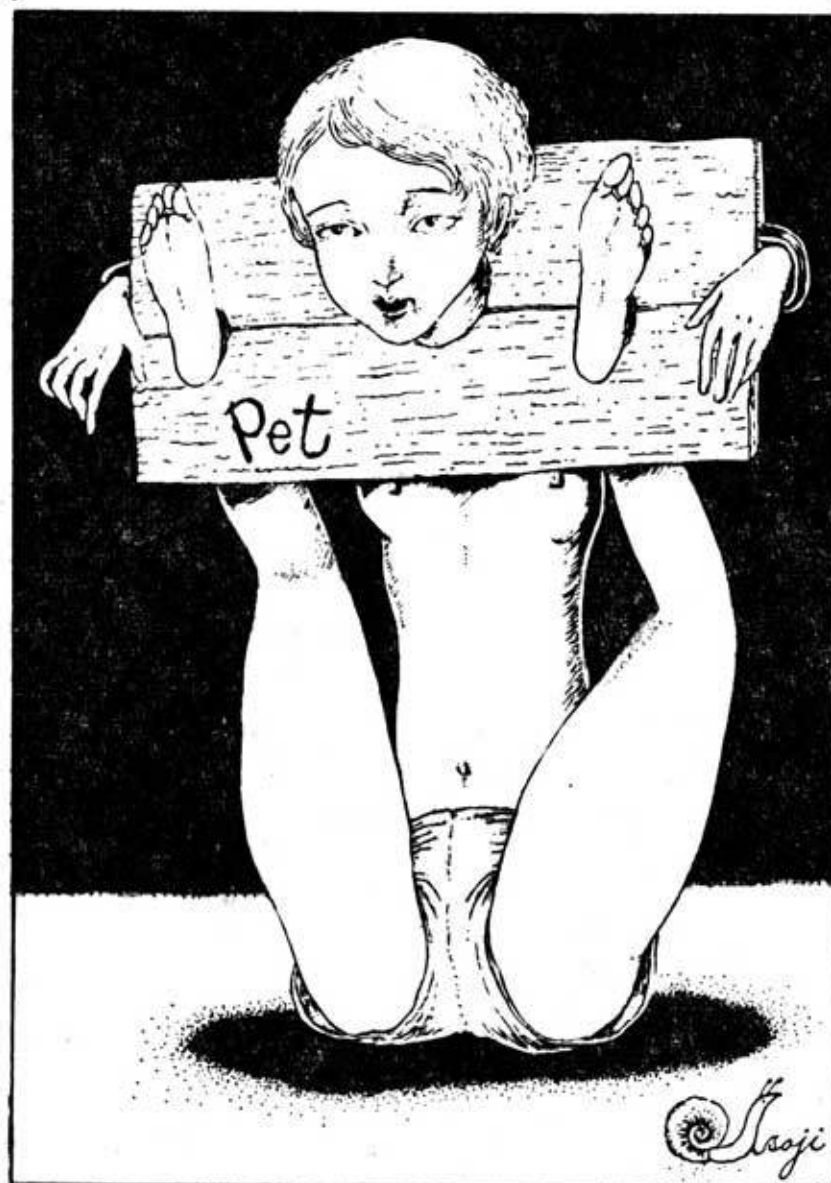
途中から川が見え出した。日本の田園にも



……僕のイメージ画集……

ボクの愛するペット

……室井亜砂路……



ありそうな景色だった。

やがて車は森の中へ入っていった。大きな森だった。自動車の通れる道がついているのに、森はシーンとしていた。

森の中でジョンは車をとめた。

「少し、歩こう」

ジョンは言った。

外へ出ると香ばしい木の匂いがした。見廻すと、同じような丈の高い太い木にとりまかれている。地面には、こまかい木の皮が、いっぱい敷きつめられ、それがしめって何とも

いえない香ばしい匂いを発散しているのだ。

ジョンは車のトランクをあけ、トランクへ首を突っこむようにして、ゴソゴソと音をさせていたが、紙袋を手にしてトランクをしめた。

私の体の芯に何かジーンとくるものがあった。私は、その紙袋の中味が分かるような気がした。

私たちは森の中へ進んだ。木の皮におおわれた、きれいな道が幾条も走っていた。

ジョンは片手で私の腰を抱くようにして歩

いていく。そのたくましい体に、私は山賊につれさられる娘を夢みた。

もしジョンが、この森の奥で急に私の体をねじふせて縄をかけ、この太い木に縛りつけたら、どうだろう。

私は、ふと葉山と行った夢科の落葉の道を思い出した。

しかし、こんな深い森が日本にあるだろうか。私は、この木の皮の匂いの中で、いじめられたいと、しきりに思った。

「ボクは、この森が好きで何度も来ている。そして、いつもこの太い木に、ぐるぐる巻きに縛られたいと思っていた」

ジョンは私に分かるように、ゆっくり、しやべった。

「たのむ。ボクの夢をかなえてくれ」

ジョンは、紙袋をさし出した。

「いいわ」

私は私の夢をひとまず、おあずけにして、ジョンを縛りあげてやろうと思った。それは私が私の化身を縛るのと同じなのだ。私は私がされたいように、ジョンの手を後ろに、ねじあげた。

ぐるぐると縄を、かける。

別の縄をジョンの首に、かけた。

「昔、日本の罪人にかけた、特別な縄のかけ方なのよ」

私はジョンに言った。しかし亀甲型の縄のかけ方をよく知っているわけではなかった。私は自分が葉山にされたように、ジョンのスーツシャツの上から縄をかけた。ジョンの上半身は動けなくなった。大きな体が縄をまとうと、虐められるみじめさではない、別の美しさがあった。

よく地獄極楽の絵巻物に、瘦せて、骨ばかりの亡者が、血の池地獄へおとされたり、針の山を歩かされたり、鬼の金棒で打たれたりしている図があるが、私はその責苦そのものに肌がチリチリするような興味はあっても、亡者に美しさを感じたことはなかった。しかし、今、縛られたジョンを美しいと思った。そして、そのたくましい体が縄をまといながらもだえると、美しさは更に増すだろう。

「坐りなさい」

私は言った。

「日本人のように、きちんと坐りなさい」

ジョンは長い足を折って正座しようとしたが、うまく坐れなかった。

「こういう風に坐るのよ」

私は木の下の上にハンドバッグに入っ

ていた風呂敷をひろげ、靴をぬいで坐ってみせた。

ジョンは、それをまねたが、靴を履いたままでは無理なようだった。

私はジョンの靴をぬがし、ついでに靴下もとった。

紙袋の中には靴も入っていた。

ジョンの正座は長くは続かない。足をくずすと私はジョンの背に鞭をふり下ろした。

日本の男でも、正座するのは楽ではない。まして外国人にとって、それは拷問と同じだった。私は別の縄でジョンの胫と腿を一つにくくった。これで足をくずそうとしても動けないのだ。

私は鞭を片手に、わざとジョンのまわりをゆっくり、まわった。

縄をかけられて、無理やり正座させられているジョンは性の囚われ人だった。

「降参した？」

私がきくと、ジョンは首を振った。

私はジョンの背に鞭を振り下ろした。

「あっ！」

とジョンの体が、前のめりになる。

私はジョンの肩に鞭をあてた。右肩を打ち左肩を打つ。その度にジョンの体は左右に、

ゆれた。そしてジョンは、ついに縛られたまま、横に倒れてしまった。

「ダメ！ちゃんと坐り直しなさい」

そう言っても無理なのは分かっていた。

ジョンは自分の力で起き直ろうとするが、手も足も自由には、ならないのだ。その無駄な努力をわらうように、

ピシッ！

と、私は鞭をならし、彼の足を打った。

「さあ、今度は木に縛ってあげる」

私は彼の足の縄を、といた。

「こっちへいらっしゃい」

私が急に縄尻を引いたので彼はよろけた。はだしの足が、彼をよけい、囚人のように見せた。

私は大きな木を背に彼を立たせると、縄尻を木に巻きつけた。そして別の縄を彼の首にくくると、その先を高い枝に投げて、くぐらせた。私は、その先を引いた。

「ああ……」

彼は爪先立って、首のしまるのを防いだ。

「苦しい？」

私は微笑んだ。

大きな外国人が私の人形のように思い通りになることに快さがあった。ましてジョンは



ハンサムだった。苦痛にゆがむ顔に、美しさがあつた。

「前にも女の子に虐められたことある？」

ジョンは首を振った。

私は首の縄を引いた。

「ああ……」

と、ジョンはうめきながら、

「ネバー」

と言った。

私は縄を、ゆるめた。

縄をゆるめると彼は、ほっとしたように、踵を地につけた。

「犬は、なんてなくの？」

彼は答えない。私は縄を引く。

「犬のように、ないてごらんさい」

彼は、せい一杯、背のびして、のどがしまらないように努力しながら、

「パウ・ワオ」

と、ないた。私は縄を、ゆるめる。

彼がホッとするひまもなく私は縄を引く。

「ネコは？」

「ミュー・ミュー」

大きな男が泣きそうな声で言った。

私は片手で首から木の枝へかけた縄尻を持ち、片手で鞭を持つと、彼の爪先立った足の

裏を、鞭の先でスーッと、こすった。

「あっ！」

と彼は足の裏を地につけたので、首がぐつと、しまった。

「ううっ！」

という声に、私は縄をゆるめた。

「コンコン、コンコン」

と彼は苦しそうに、せきこんだ。

「さあ、もう一度、じっとしてないと首がしまるわよ」

私は、縄を引く。又、彼は爪先立つ。私はその足の裏を、くすぐる。

「うふ……うふ……」

彼は体をふるわせて、こらえた。

急に車のとまる音が割に近くで聞こえた。

私は、あわてて木の枝にかけた縄の先を握っていた手を放し彼の首から縄をほどいた。

そしてスルスルと縄を手元に、たぐった。

まだ木に縛っている縄も、囚人のようにかけた縄も、とかなければ、いけない。

人が来る……。

私は、あわてた。あわてると、よけい結び目が、ほどけなかった。

ガヤガヤと森の一角に人が近づいた。

私は彼の縄目を私の体でかくすようにして

木に縛ったままの彼に、おおいかぶさるようにして彼の唇に自分の唇を重ねた。

それは遠目には、恋人同志が接吻しているように見えるだろう。

私にしたら、その場をぐまかす口づけだったが、彼は激しく私の口を吸った。それは渴いていたものが、水を与えられたような激しさだった。

縛られて、女を抱くことも出来ないまま、ただ全身の愛情を唇に集結して求める接吻は火のように熱かった。

その火の、はてりて私も燃え、長い、長い口づけになった。

遠い人影は二人の邪魔をしないように心をくばってくれたのか別の道へ入っていった。私は、とうとう葉山以外の男と、愛の接吻をかわしてしまった。

葉山を裏切ったことに、なるのだろうか。

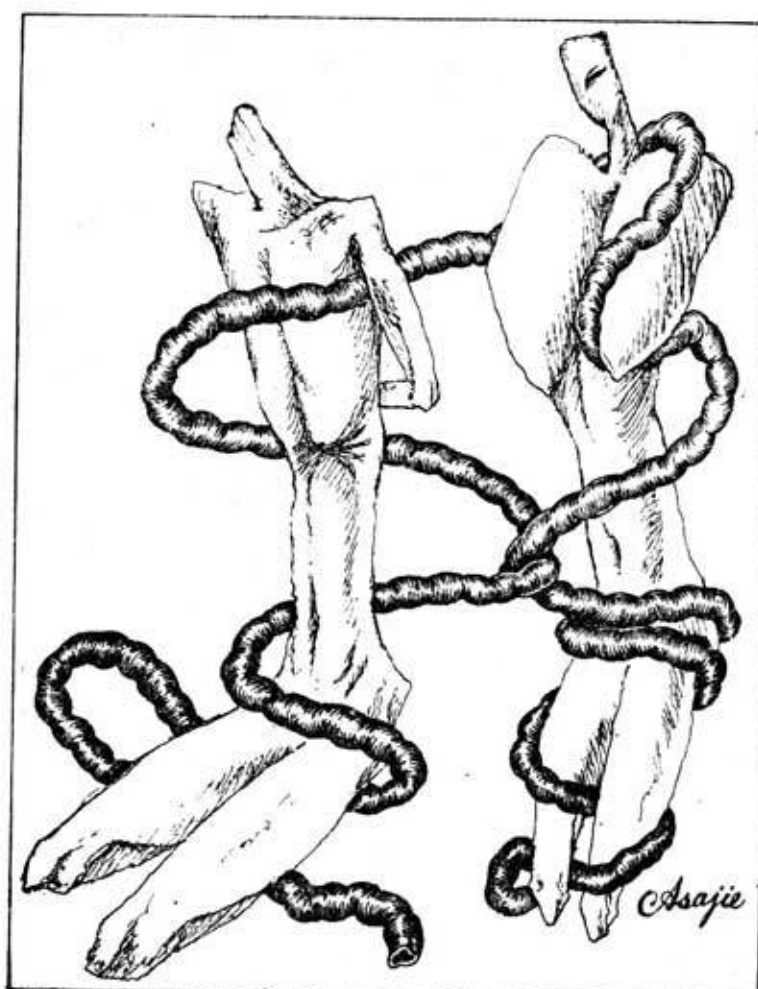
しかし、立木に縛りつけたままの男と、かわした接吻は、私にとって甘美だったし、ジョンにしたら、夢が本当になったように思われたのだろう。

縄目をとくと、その大きな手で私の手を包むようにして、ものもいえず、私の瞳を、みつめていた。

1

血まみれだった。尻の奥が、ひりひり痛みだす。また始まったのか……!

一月に一、二回はこんなふうになって、数日間ぶっ続けに苦しまなければならぬ。おまけに、腸が三センチ近くも飛び出ているので、それだけよい裂傷が広がるのだ。排泄のたびに、腸がもこもこと外側に飛び出してゆくのが良くわかる。だが、決して悪い感覚



カット・室井亜砂路

ではない。腫れ物が引いてゆくように腹の中が空っぽになって、内臓がかすかに引っぱられる。何とも奇妙な気分だ。ふむ、おまけにそれは官能的な刺激に似ている。息苦しさを感じ始めると、おれは節制心を失って、そのまま、手慰みに移ったりする。そうさ、だからトイレに入るたびに、おれは必要以上に体力を消耗させてしまい、ますます瘡せ細ってゆくのだ。

おれが最初にこうした体質になったのは、ほんの二年ほど前のことだ。それ以前は何と

懸賞入選創作

# 荒遊会

じん  
神

ひさし  
久

もなかった。この下宿に来て坐り生活を始めたときに、尻の構造が微妙に変化したらしくて、とうとうこんな風になってしまったのだ。しかし後悔しているわけではない。

初めの頃は、完全に飛び出してしまった腸を、腹の筋肉だけによって内側に引き戻すことができた。腹の中に戻ってくる腸は既に冷たくなっていて、まるで自分のからだの一部分とは思えない。冷蔵庫から取り出したばかりのウィンナ・ソーセージがひとりでもぐり込んでくるような気分だ。ふむ、そもそも

(上)



おれは冷え症なのだ。冬の便器にまたがっている時、飛び出した腸が冷え込んで、ぶるぶる寒がっているのが、はっきりわかる。風邪をひきそうなくらい寒れっぽく縮こまっている。ああ、そんな冷んやりした塊を腹内に引き戻すのは、何とも言えない快的さだ。背筋が、ぞくぞくする。腸が収まる瞬間、ほんの二、三回経験したのみではあったが、オルガスムスらしきもの(?)を、感じたことがある。全く、こうした楽しみは普通の人間にはわからないことなのだろうが……。

だが、最近では事情が変わってきた。どうしたわけか、飛び出た腸が自力では元に戻らなくなってしまったのだ。

精一杯努力してみても、ぴくりとも動かない。しかたなしに、手を使って押し込めてやらなければならぬが、これは、あまり気持ちの良い動作ではない。多すぎる食物を、むりやり飲み込むような気分だ。それが出てくる時とまるで違って、わざと押し込める時には少しも官能的気分がわかない。腹が突っ張ってきて、おお、実に不愉快なのだ！

尤も、こうした気分には、かなり個人差があって、おれと恰度、逆のことに快的さを感じる人間もいるかもしれない。ふむ、しかし

おれの場合は、やっぱり不快なのだ。

そこで、思い切って、それを飛び出たままの状態に放っておこうと思った。どうせ出てくるのだから、むしろ出たがって出てくるのだから、出したままにしておくのが自然法則にかなったことだと思ったのだ。

しかし、どうもいけない。歩くたびに気になるし、うまく坐ることができない。何をするにも気が散って、落着きが、なくなってしまう。おまけに肌着は一日で汚れてしまう。

……結局、この試みは諦めざるを、えなかった。腸が蠢く快感を楽しむのは、密室の中だけに限るようだ。

ロール・ペーパーを引きちぎる……ひりひり痛んだ。

腸そのものの感触は、大いに好ましいのだが、しかしその表面が切れて痛むのには、へいこうする。おれは貧血気味なのだ。陶器の箱が真赤に染まったりすると、頭がふらふらして、からだ全体が、がくんがくんになる。おれはまだ二十三才だというのに、ひどく瘠せていて、貧血気味で、その上に冷え症なのだ。全く、悪いところだらけなのだ。

トイレに三十分以上も引きこもっていたので、いささか足が痺れた。ぎこちなく揺れな

がら、どうにか自室に戻る。

来客のようだ。あがり口に、男物の黒い皮靴と女物の濃紺の小さな靴が一足ずつ、揃えてある。おれの下宿にわざわざ来るような人間は、たった一人しかいない。Kだ。Kが来たに違いない。……しかし、この女靴は誰のだろうか？ 見当がつかない。ふむ、おれの知らない女性に違いない。

ドアを開けて覗き込むと、二人の来客が、かつてに上がり込んで窓ぎわに陣取り、本を拡げているのが目に付いた。

「ああ、Kか、良く来たな」

「おお、邪魔しているよ」

Kは火を付けたばかりのタバコを振り廻しながら、こちらを振り向いた。見ていた本をぱたんと閉じて、おれに差し出す。マスターズの『歴史上の性犯罪』だった。おれが常々読みたいと思っていたものだ。Kが手みやげ代りに持ってきてくれたものらしい。さっそく礼を言った。この男はおれと同じ大学の学生で、一年ほど前からの知り合いなのだ。学年は同じだが、おれよりは二つばかり若く、それだけに元気が良い。交際範囲がすこぶる広く、少々傍若無人なところがある。

もう一人の来客は、かわいそうなほどに瘠

せこけた女学生だった。高校生だろうか。顔色は妙に白っぽく、ところどころ静脈が透けて見えて、しかし唇には、まるで赤味がなかった。どこかに病気を持っているのに違いない。手足などは、くっきりと骨が浮き出て、その上、その骨が今にも、ぽきりと折れそうなくらいに細いのだ。おれも確かに瘡せてはいるが、でも、これほど、ひどくはない。ふむ、まるで生き返ったばかりのミイラだ。セーラー服の中身をうっかり覗き見たら、きっと吐気を覚えるのに違いない！ しかし顔立ちを見ると、瘡せている割には、りこうそうな、可愛い表情をしている。黒目が大きく飛び出し、夜行性動物のように、うむ、まるで、ふくろうの目玉のように、きらきら輝いている。……それにしても、なぜKは、こんな少女を連れてくる気になったのだろう。「そうだ、まず紹介しておこう」と、Kは少女の肩に手を置いて言った。「これはね、おれの妹なのだよ」

おれは二人の顔を見くらべる。なるほど、そう言われてみれば、何となくそんな気もしてくる。Kは中肉中背で、からだつきはこの少女とまるで違うのだが、でも目付きが似ている。……ずうずうしさ！ そんな感じが良

く似ている。少女は今のところ一ことも口を開かないが、たぶん猫かぶりでもしているのだろうか。おれだったら、たとえば友人の家にでも黙って入ったりはしないのに、……ああ、この少女はKと同様にずうずうしいのに違いない。

Kは、にやりと笑った。

「実はね、これはきみと同じ△特技▽を演れるのだよ」

すると少女は恥ずかしそうにうつ向いた。

「え、何を演れるんだって？」

「ふむ、妹の腸はいつでも外へ飛び出したがっている、全く、いつでもだ！ おまけに、その出かたと言ったら、まるで、きみにそっくりなのだよ。精力的！ なのだ。きのう思い付いて物差しで測ってやったら、恰度三センチの長さだった。きっかり三センチ。まるで、きみのとそっくりなのだよ。どうだい、今日の楽しみが一つ増えただろう。Hさんの家に行く楽しみがね……妹はね、おれがきみのことを話してやったら是非見てもらいたいのって言うんだ。おやおや、急に恥ずかしがりはだしたりして、まさか、この場に及んで気が変わったのじゃないだろうね」

そう言われると、少女は、きっと顔を上げ

た。さっきとは打って変わって妙に強情そうな態度だった。

「あたし、逃げたりはしません。せっかく同好のお友だちを得られる時ですもの、……覚悟はしていますから、好きなだけ見ていただきたいわ」

「うむ、よろしい！ それなら、今ここで、すべてを見せてやったら、どうだい？ 彼はきっと見たがっているんだ。おまえが、われわれの会に加わるだけの資格があるかどうかをね。そうだろう？」

Kは、おれの同意を求めた。おれは正直に言って、まるでその気がなかったが、彼らの意欲に押されて、ついつい、うなずいてしまった。この子は、きっと子供みたいな味気の無い、からだつきをしているのに違いない。どう考えたって、おれの好みではないのだ。

少女は、おれの顔を覗き見るようにして顔を赤らめた。でも、少しも恥ずかしそうではなかった。自信たっぷりな目付きだった。きびきびと立ち上がって部屋の中央に坐り、小さすぎる尻を持ち上げる。紺のフレア・スカート、さっとめくりあげた。おれは唾を飲み込んだ。おお、スカートの下には何も着けていないのだ。いきなりむき出しの尻が現わ



れた。薄青い、りんごのようにすべすべした男の子のように、小さな尻だった。そして、驚いたことには、大事なところが、つるつるだった。おれは興味をそそられて、顔を近寄せる。剃ったわけではない、初めから生えていないのだ。ちよつ、この子は發育不良なのだろうか！

少女は、おれの思惑をよそに、ますます、大胆にふるまい始め、四這いになった。顔がほの紅く染まる。腹に力を込めたらしい。

おお、見るまに肉塊が躍り出てきた。数秒のうちに完全に伸びきると、可愛らしく口を尖らせた。

「ああ！ で、出ましたでしょう？」

と少女が、うめいた。

「ううむ！ 本当だ。なんて、可愛いんだろ

う」  
おれはそう答えながら、自分の声が妙に熱っぽいのに気がつき、はっとした。……おれはこの少女を気に入りはじめたのだろうか。それとも、単に、似た者同志を見つけて喜んだだけなのだろうか？

「もう、いいでしょう？ ねえ、終えてもいいんでしょ？」

少女の快活な声に、おれは反射的に、「あ

あ！」と答えてしまった。本当は、もう少しくわしく見つめたかったのだが、もう遅かった。緑色の固そうなりんごは、くるるんとひと揺れたかと思うまに、腸の端っこをするすると隠してしまったのだ。

Kの言葉で、おれは我に返った。

「ところで、きみの方は成功したのかい」

「ああ、……やっぱり駄目だったよ」

と、おれは力なく答えた。

「ほう、やっぱり、だったか」

「そうなのだ」

おれは、にが笑いだした。

今日はH氏の家に集まる予定の日だった。

しかし今日に限って、おれたちは女性の同好者、を連れて会合することに決めていたのだ。

だが、おれは初めから、その約束を守る気がしなかった。なぜなら、不幸なことに、おれ

には全然そうした女友だちがいないのだ。現在はもちろんいないし、未来にもいそうにな

い。おれはどうやら、そうした交際能力を欠いているらしいのだ。しかし、あの顔の広い

Kは、ぴちぴちした娘たちを五、六人ほど連れてくるに違いない。だから、おれはそのお

こぼれをもらい受ければ良いだろう。そんなふうに考えて安心し切っていたのだ。

でも、こともあろうに、あのKがこんなガリガリの妹しか連れてこられなかったところから想像すれば、彼もまたその方面で失敗したのに違いない、ふむ、おれとあまり変わらないのじゃないか。

Kはおれと違って、尻が凡人並みだった。

いくら頑張ったところで腸はいくらも飛び出さなかった。彼はそのことを大いに恥じていた。それでも、彼には全く別の「特技」があった。ふむ、彼はヘルニアだったのだ。

半年ばかり前、Kは自室に、おれを招き入れて、それが、ふくれ上がってゆく様を、とつくりと、見学させてくれた。風船玉の中に固型物が、流れ込んでくるようなユーモラスな動作で、ころころとふくらんだ。ふくらみ切ると艶が出て、熟した夏みかんのようだった。大きさは一抱えもある、ずっしりと重そうな、直径が十五センチばかりの球体だ。風船が張り切っている最中、Kはうっとり目を閉じている、幸福そのものといった艶やかな顔色を見せながら……。

子供の頃から、Kは、この「特技」を持っていたらしい。普通の子供がこんなになつたら、たぶん保護者が驚いてさっさと手術して封じ込めてしまうだろう。ところが彼の両親

は極端な手術嫌いだったらしい。それで漢方で治療しようとしたのだ。でも、なかなかきめが現われない。Kは、腰のある部分を圧迫するためのゴム・ベルトを、常に、からだにはめるようになった。幸か不幸か、その後漢方治療は中絶した。だから、彼は今でもゴム・ベルトを腰にはめている。それを外したとたんに風船が、もともと、ふくらんでしまい、場所柄もわきまえずに、うっとりしてしまうのだそう。彼はその予防器具を愛用して、こんなことを言う。「これは、おれだけに役立つ貞操帯なのだよ」と。

Kとおれが親しくなったのは、互いに肉体の秘密を見せ合って以来のことだった。

秘密は、凡人には起こりえない。特にKの場合は、そうなのだ。秘密とは、すなわち、△特技▽なのだった。

どちらかと言えば、Kの方が△特技▽に熱中しがちだった。もちろん、おれも負けずに演じ返してやった。でも、互いに演じ合うだけ、見せ合うだけで、おれたちはそれ以上の関係には入らなかった。ふむ、それだけで充分だったのだ。Kの本心については、よくはわからないのだが、おれ自身の理由を説明するならば……おれは見ていだけで満足なの

だ。おお、そう。ただ見ているだけで、あるいは、場合によっては、ただ想像するだけで、よいのである。

おれの官能は、おれの尻の中に閉じこもってしまっている。ひたすら頑固に閉じこもっていて、人見知りするくらいなのだ。他人の力を借りるなど、まるでつまらないことのように思えてくる。……たぶん、おれは内向的すぎるのだろう。ちよっ、その上、禁欲的すぎるのだ。おれは異性と交渉を持つとしたり、同性に興味を覚えたりしたことは、ただの一度も(?)ない。尤も、ころころと太った可愛い娘の、尻を叩いてやりたいと思っただけはあるが、それにしても、ただそう願望しただけであって、実行した事など一度も、ない。ふむ、実行したくてもできないのかもしれない。おれは気が小さいのだ。世間から復讐されるのが怖いのだ。そう、おれの生活から、ただ一つかみの快楽をも奪われるのが、いやなのだ。

Kの場合は更に深刻なのだろう。彼はおれよりずっと顔が広いし、女友達も大勢いる。だが、おそらく肌をこすり合わせるような相手は一人もないのじゃないだろうか……。ふむ、相手の女の子が彼の風船玉を愛してく

れるならば、話はだいぶ変わってくるのだがしかし、そんな理解のある女性はいきつと、おれ以上に内向的に官能を処理しているのに違いないのだ。

でも、もしかすると……この△妹▽とかいう少女が、Kの恋人なのかもしれない。ふむそれは、大いに有りうることだ。Kの好みはおれと、まるで正反対で、

「瘡せこけた女を見ると、ぶるぶるするほど感じ始めて、たちまち風船玉が、はち切れそうになる。いやゴム・ベルトなんか、少しも役に立ちやしない。ぱちん! と、はじけ飛んで地面におちこちてしまう。風船は、こちらんこちんの夏みかんになって、ぽっぽと湯気を立て始めるんだ!」

と言っている。ならば、この△妹▽は、Kを愛したことがあるのだろう。少なくとも夏みかんをなんとかしてやったことぐらいは、あるに違いない。おお、みかんの渋さにへいこうして、顔をしかめている様子が目に見えるようだ。この気が強い少女は、そんなことぐらい易々とやってのけてしまうのじゃないだろうか? 興味ある問題だ。たしかKは昔から妹と同じ部屋に暮していると言っ



## 読者ギャラリー 『夏の夜の夢』 岡 たかし



たが、おれは一度もその現場を見たことがなかった。だが、それは事実には違いない。ちょっと、こんな性質の女の子なら、たしかに同棲しているのに違いないのだ。この子が、もっと太ってさえいれば……ああ、おれも、妹が欲しくなってきた！

それに、Kは△不能▽なのだから、相手は妹であろうが母親であろうが、生物学的には安心していられるはずだ。うむ、Kは特別な△不能者▽なのだ。興奮すると、固くなるはずのものの代りに、風船の方がふくらんでくる。風船玉がこちこちになるにつれて、こち

こちになるべきものの方は、ますますだらりと垂れてしまう。おれはその実演を見るたびにおかしくって吹き出しそうになるのだが、それでも悪いことだと思って必死にこらえるのだ。ふむ、それは治しようにも、どうにもならないものらしい。尤も、手術してヘルニアを治療してしまえば、治るのかもしれないのだが、彼は、一向にその気にならないらしい。おお、むしろ△不能▽であることを誇りにしているくらいなのだ。

△妹▽は部屋の隅に正座して、じっとおれの様子をうかがっている。可愛らしくないこともないが、しかし、どうもしつこすぎる。おれは好きになれそうにもない。

「おい、もう三時になるよ。そろそろ出かけないか」

とKが言った。

おれは、うなずいて腰を上げた。ああ、いよいよだ。おれはちょっぴり不安を覚え、溜息交りの声がだらしなく震えた。Kの△妹▽は、機敏な動作でスカートの皺を伸ばしている。痒せっぽちのくせに、なんて元気がいいのだろう。ふむ、まだほんの子供だと言うわけなのか。……それでも、顔つきから察すると、この三人の中で彼女が一番度胸がすわっ

ていそうだ。Kもそう思ったに違いない。彼はハ妹Vの動作から目を外すと、誇らしげにおれに笑いかけた。

2

H氏の家は、ここから、そう遠くはない。歩いて五分もかからない。毎週一回、水曜日になると、Kとおれは、揃ってH氏の家に集まることにしているのだ。

H氏は年齢三十三才、でっぴり太った気さくな人で、銭湯を経営している。おれが風呂に行く時はたいてい、このH氏が番台から下界を見おろしている。うらやましい仕事だ、とおれは、いつも思うのだが、H氏自身は、とくに目が肥えてしまっていて、滅多なことでは悦びを感じないと言うのだから、手放しで歓べる仕事では、ないのかもしれない。

おれは二年ほど前から、この銭湯に通っていた。しかし、H氏と知り合ったのは、わずか半年ほど前のことだった。それは、Kとおれが互いのハ特技Vを見せ合った直後のことだった。Kは器用な手つきで夏みかんをペしやんこに変えてしまい、ゴム・ベルトをはめこむと、こんなことを言った。

「きみに紹介したい人がいるのだけれど、どう？　そう、おれたちと趣味が一致する人なんだよ。学生ではないけれどね、とにかく信用のおける人物だ」

おれは、ちよっぴり興味を抱いた。

「その人はね、風呂屋の主人なのだよ」そう、風呂屋だ。きみの知っているはずの、あの「熱泉亭」なんだ！　……H氏はあの浴室を貸してくれるはずだ。とにかく物わりの良い人物だからね。そう、あの広々とした水色のタイル貼りの中で裸になってみるのさ。そう、その場で官能するんだ。欲情してみるんだ。晴れ晴れとした気分になれるよ。そうだと、天井高く噴き上げることだってできるんだ！　もし、へとへとにしょぼくれたら、迷わず浴槽に飛び込めばいい。そうだよ。おれたちは大浴場を官能的に私物化できるんだよ」

話を聞き進むうちに、おれはすっかりその気になった。それで、次の水曜日に、連れ立ってH氏を訪ねることにした。

この日は浴場の定休日だ。普通の客は一人もない。

H氏に会った。おれたちは座敷には通されずに、いきなり案内された浴槽は、いつも以

上に清らかな湯にみたされ、洗い場には、見馴れぬビニール張りの安楽椅子が、三つばかり並べてある。おれのことはKの口を通して事前に知らされてあったようだ。

H氏は赤ら顔でにこにこ笑いながら、さっそくおれのハ特技Vを見学させていた。きいた、丁寧な要求してきた。突然のことなので、おれは少々気がひけたが、思い切って裸になり、安楽椅子の上で四ツ這いになった。腸は、たちまち、ぷくりと飛び出した。H氏は、それを見て、しきりとほめてくれ、色艶が若々しい、熟成した梅干のように食欲を掻き立てる、と言いだした。その瞬間、いきなり、なま暖いものが触れてきた。びっくりして、飛び上がった。振り向いて見ると、H氏が、おれのとび出した腸に、舌を伸ばしてきいていた。少々気味悪く感じた。でも、Kに注意されて、おれは、がまんすることにした。なめられて減るわけのものでは、ないのだから。ううむ！　悪い気分ではなかった。

十分ほどすると、H氏は、

「どうか気を悪くなさらないでください。わたしは見せていただけなんです。そう赤土が吐き出される瞬間を……」

おれは、ともかく引き受けることにして赤



土の塊を二つほど吐き出してやった。ふむ、H氏はそれを両手のひらに受け取ると、深く嘆息した。

椅子からのろのろと滑り降りると、いつのまにかKもH氏も丸裸になっている。Kの風船玉は、はち切れんばかりだ。

H氏はおれに向かって巨大に肥満した尻を突き出し、彼の秘密をじっくりと見学させてくれた。おれは驚いて声も出なかった。H氏の肛門は一つきりではなかった。畑に播かれた植物の種子のようにあちこちに根を伸ばしおお、全部で十七個もあったのだ！ それも集中しているわけではない。尻の全部分から太ももの上部にかけて、淡々として物凄く、それぞれが一つずつ、きちんと形態を整えているのだった。H氏の話では、若い頃からたゆまぬ努力を続け、食事にも気を配り、絶対に医者には、かからぬようにして養生した結果、漸くここまでこぎつけたのだと言う。穴ぼこだらけの脂<sup>あぶら</sup>っぽい肌には重厚な美しさにじみ出ていた。

H氏は自分が吐き出す赤土を、胴体に塗ってくれるように頼み込んだ。おれたちは快く引き受けて、両手をあちこちに差し出した。十七の門から、次から次へと細ぎれの赤土が

飛び出てくるのだ。その忙しかったこと！しかし、おれたちは機敏に両手を交錯させ、とうとう一つも受けのがすことがなかった。

H氏の胴体が赤土に覆われてゆくと、彼は満足そうに、全身で震えた。

幸か不幸か、H氏には男色の趣味はないらしく、おれは一安心した。

互いに、鑑賞者と被鑑賞者の立場を交替しながら、おれたちは倒錯的な、よもやま話にふけた。寒気を覚えてくると何度も熱い湯を頭からかぶった。ふむ、ともかく、こうして趣味が一致する世代を越えた友人ができたわけで、おれたち三人は皆、それぞれ満足し合い、その日の会合を漸く終えたのだった。

それからというものの、毎週一回、KとおれはH氏の銭湯に遊びに出かけることになったのだ。ちょっとした△交遊会△だった。いや△荒遊会△と言うべきか。

△会△の主役は、互いの視線と言葉だった。会うたびごとに、おれたちはその都度の工夫をし合ったが、しかし、だんだんと飽き始めてきた。ちよっ、おれたちは愛し合っていたわけでも何でもない。ただ単に興味だけでつながっていたようなものだったから、SM的な愛技にひたるわけにはゆかない。自分自身

のエロチシズムだけが頼りだ。ふむ、互いの目と口とだけが刺激物だったわけなのだ。それだからこそ、ともかく半年もすると飽きてきたのだった。しかし、半年間も興味を保ったということは、実は驚くべきことなのだ。おれたちは、むしろ精神的につながっていたのかもしれない。

「ううむ、おれにはわかりますよ。Hさんにしろ、おれたち二人にしろ、求めているものは同じなのですよ」

とKが言った。

「ほう、それは何なのですか？」

とH氏が、十七の門を始末しながら問いかける。Kが答えた。

「自己愛、自己愛を求めているのです！」

「おや、おや、またきみのおハコが出たね。おれはむしろ他人を欲しいと思っていたんだよ。そう、他人をね。ぴちぴちした女の子が良い。なるべく太ももが張り切ってる女の子が良いんだ。もしそんな娘が現われて、われわれの仲間になってくれたらありがたいのだ。そうだろう？ おれは近頃どうも以前とは違って、実行欲がでてきたようなのだよ。K、きみにしたってそうなのだろう？ おれたちはまず、手ごろな女の子を選んで拷問し

てみたら良いのではないだろうか。拷問！

この魅惑的な言葉を頭の中に閉じこめておかないで、思いきって実行してみたいんだ。おれは一度で良いから、あの柔らかげな、西瓜のように丸々とふくらんだ尻を叩いてやりたいと思っていたんだ。ああ、思いつ切り血まみれになるまでひっぱ叩いてやりたい。だがその前にこちらがへとへとになってショック死してしまうかな。別に女の子の尻にこだわらるわけではないんだが、ともかく今は他人が必要だ。おれたちの官能をかき立てる様な魅惑的な他人の存在がね。他人とは、すなわち△興味▽なのだ。そうした△興味▽が現われれば、何もかもうまくゆく。おれはそう思っているんだがね」

とおれが言うと、Kは、にやりと笑った。

「興味！ そうだ。たしかに興味が必要なのだ。でもね、興味はたしかに、きっかけなのかもしれないが、しかし実は原因ではない。むしろ単なる結果なのだね。そう、あるいはある隠れた官能の過程だと言っても良い。そんなものを当てにすることはできないんだ。しかし、きみは、こう言いたいのだろう！ おれは尻がぴちぴちと、はち切れそうな娘に興味があるのだ。太ももが、もりもりして大

地を転げ廻るような娘に興味があるのだからこそ、おれは太った娘を拷問し、尻の肉が炎の様に充血するまで鞭打ってやりたいのだ。

それとは逆に、おれは瘡せっぱちの少女には興味がない。だから、少女のぺちゃんこの乳房を見ただけで吐き気がしてくるんだ、とね……そうだろう。だが、とんでもない！ それは、まるっきり逆なんだよ。きみは勘違いしているのだ。本当のところはこうなのだ。

きみは、きみの心が官能しているために、きみの精神が欲情しているために単なる大根足の、でぶちんの女の子をエロチックに見つめている。きみの官能が女性的なるものを彼女に、見出している。でぶちんであるか瘡せっぱちであるかは、単なる習慣なのだ。個人差なのだ。△興味▽なのだ。そんなものは、どんな風にも改造できるし好きなように理屈づけることができる。そうでしょう？ そう△興味▽というものは単なる言いわけにしかすぎない。大事なものは、そんなものじゃない。大事なことは実行する原動力なのだ。つまり、ひたすらな△信念▽が必要なんだ！」

するとH氏が口を開いた。

「と言うと、官能的に生きようとする信念、欲情的になろうとする信念、そうした信念が

必要だと言うわけですか？」

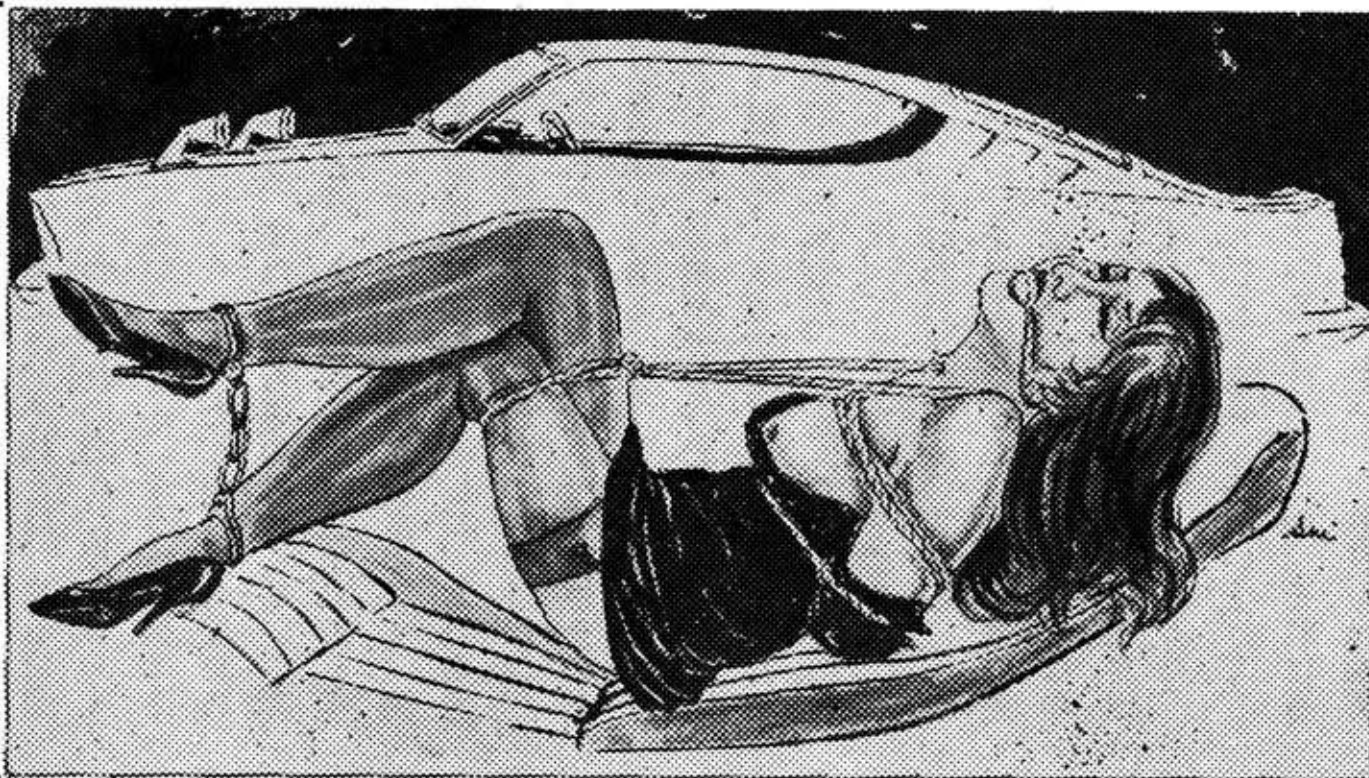
「そう、その通り！ そうした信念、あるいは信仰が必要なのです。そこで、その信仰の内容だが……つまりそれは自己愛、自分自身を愛すること、それ以外には絶対にありえないわけなのです。……しかし、そこで自分を愛するために、ちょっとしたきっかけが必要になる。ほんのちょっとした興味が必要になってくる。そう、そうでしょうが、その興味というのは、ただ一種類しかない。それは女性、少女、ただ、それだけでしかないのです。でもね、われわれが女性に興味を覚えるというのは、実は、彼女を愛したり逆に愛されたり、あるいは強姦したり、縛ったり、鞭打ったり、さらには子供をはらませたり、といった素朴な理由からではないのです。そう断じてそんな空<sup>から</sup>っぽな理由からではない！ そんな生産的な理由からではない。尤も、縛ったり、鞭打ったり、ということは少々別格に考えなければいけません。しかしその二つを除いて考えてみてごらんさい。そうそんな行為は何千年も昔から、チンパンジーの一家が、しつこいほど繰り返していることだ。われわれは、もっと人間らしくならなければならない。そうだ、純粋な人間にならない



読者ギャラリー

『車』

志羽 利也



ければ、いけないのです」

「わからないね？ きみは、なぜ女を求め  
るのだろう？」

とH氏が、つぶやく。

「その理由こそ、あなた御自身が毎日毎晩  
実践なさっておられることなのです。簡単  
に言えば、われわれは、女性的存在に近づ  
こうとして、努力を重ね続けているのです  
よ！」

「何だって？」

「そう、われわれは女性的になろうと苦心  
している。全身の働きをそうした理想に近  
づけようと日夜、苦心惨たんしているのだ  
す。知っての通り女性の全身は、そのすべ  
てが性感帯だ。乳房、唇、髪の毛、ふくら  
はぎ。……そうした小道具が、単なる小道  
具ではなくって、それらは女性そのものな  
のです。なぜなら、それらが官能的である  
からなのです。彼女の尻が女性そのもので  
あるのは、実はその尻が欲情することを知  
っているからこそ、そうであるのです。で  
は、女性そのものとは何か。官能性そのも  
のである女性とは一体、何なのか。といっ  
た疑問が起きてきます。つまり、これは女  
と男の区別なのです。結局は、そういう事

になってくるのです。自然科学者だったら、  
こう言うかもしれない。それは性ホルモンな  
のだと。だが、とんでもない見当違いだと、  
おれは思うんです。女性の乳房に男性が狂喜  
して噛みちぎりたいという欲求を起こすのは  
絶対にそんな理由からではない。では本当の  
答は何なのか、それはこうなのです。女性の  
本質とは△意味△なのです。つまり△充実△  
なのです。それに引き替え、男性とは何だと  
思います？ そう、これは難問です。実は男  
性というのは、女性ではないあらゆるものを  
示しているのです、だから△中性△などとい  
うものは実は存在しない。そんなものは、す  
べて男と同じものなのです。ほら、ここまで  
言えばわかるでしょう。そう、男性の本質と  
は△無意味△あるいは△不満△あるいは△闘  
争△なのです。つまり女性は、あらゆる点に  
ついて男性より優<sup>すぐ</sup>れている。全く、あらゆる  
点についてそうなのです。そしてこの状態が  
続く限りに於いて女性はすべての行為によっ  
て男性を見くだしなければならぬし、男性  
は女性のための奉仕者とならねばならないの  
です」

「きみが、フェミニストだったとは知らなか  
ったよ」

とH氏が目を円くする。

「おお、おお！ 早まって、誤解しないでください。おれの考えは、それとは、まるで違うのですから。われわれの考えに根拠があるなどと思っではいけません。そう、根拠のある思想などは、今まで、ただの一度も現われなかったし、また今後も現われっこないので。思想とは、より確からしい空想であるにすぎない。そう、すべては虚構なのです。真実味のある虚構なのです。そして、おれの考えている虚構によれば、われわれ男性は純精神的にわれわれ自身を進化させて女性そのものになる事ができる。言い替えれば△意味▽そのものになる事ができるわけなのです！」

そう叫んで、Kは大きく息を吸い込んだ。興奮して頬が真紅だ。

「女の子が、ぽってりした乳房を揉まれて官能したり、われわれが、彼女の太もものに噴き出た大粒の汗を見て欲情したりするのは、実は、彼女が△意味▽そのものであるからなのです。△意味▽が人間を官能させ、欲情させ充実させ、幸福にさせるのです。もちろん、おれだけがそうした△意味▽を吸い上げて、一人が、んしているわけじゃない。それはもっと開放的なものだ。そう、△意味▽は世界

全体のもの、人類全体の財産、そのようなものなのだ。そう、それは生理学的なものや生まれつきのものではない。なぜなら、原始人はそれを知らなかった。原始人は性欲を知っていたが△意味▽を知らなかった。だから官能しなかった。そして、幸福をも知らなかった。わかりやすく言えば、原始人は女性と男性との区別がなく、単にオスとメスの区別しかなかった。だから女を縛ったり、鞭打ったり、浣腸させたりして、女の△意味▽を味わうことを、知らなかったわけだ。そうだから△意味▽は始めからあったわけではない。ごく最近になって文明が始まってから漸く現われてきたのです。△意味▽は歴史の中で生れ育ってきた。それはその時代の人々の心に浸透して彼らを官能させた。官能は新しい欲情を起こさせた。その欲情は、次の時代の△意味▽を生み出した。それは次の官能に働きかけた。そう、こうして△意味▽と官能との歴史は現代にまで及んでいるのです。現代文明のすべてが△意味▽に転化し、われわれを欲情させようとしている。現代に生きているからこそ、われわれは、美女の尻に化学薬品を注入することに悦楽を感じるのです。彼女の尻から、どろどろの赤土が噴出するのを見て

よだれを流すことができるのです。だから人類の歴史とは、つまりは△意味▽の歴史なのだ。官能の歴史なのだ。それ以外のものでは絶対にありえないのです。だからこそ、世界は女性の味方なのです。理想的なことを言えば、女性の柔らかな太もものみが万物を支配しうるし、万物は、特に男性は、彼女の存在のしかた、つまり女の△意味▽を見つめ直しそれを熱烈に、信仰しなければならいのです。そう、これこそが最高の真理なのです。われわれは、ある柔らかな肉体を、ふと見出す。意識して、目を皿のようにして、見出すのではなく、さりげなく思いがけなく見出すのです。そう、その瞬間、われわれは△意味▽に襲われて、びくりとする。たとえば彼女の尻を見て、女性的な官能という△意味▽に爆撃されてしまうのです。すると、どんなことが起こりますか。そう、まず目玉の底がチカチカし、息切れがしてくる。よだれが垂れてくる。胸が苦しくなる。冷汗が噴き出す。視界がかすんでくる。そして一カ所がコチンコチンになる！ 尤も、おれの場合は風船玉が、はち切れそうになるわけだがね。はっはっは……ともかく官能するわけです。そのこと、その事実が重要なのです。初めに



言葉ありき！ 初めに△意味▽が発生して、次に官能が起るのです。肉体が欲情するのは、それから先の事なのです。この事実が重要なのだ。つまり、このことによって、われわれは歴史を超越することができる。突如として歴史の限界を踏み越えてしまい、純粹な人間性そのものになることができるのです」

Kは、ここで一息ついたが、H氏が何かいかけようとする前に、再び続けはじめた。

「なぜなら、今までの歴史というのは、つまり△女と男▽の歴史だった。誤ってはいけない。△男と女▽の歴史などというものは、ただの一瞬だって存在しはしなかった。そうなのだ。われわれの祖先の歴史はすべて、ことごとくすべて△女と男▽の歴史だったのだ！ 歴史上の主人公は常に女性だった。それに引きかえ、男性というものは、ずるがしこい寄生虫にすぎなかった。そう、女性の乳房に喰らいついたまま、一向に離れようとはしない醜い寄生虫だったのです。原始時代の女性はただのメスだった。男はただのオスだった。彼らは平等だった、平等に△意味▽以前の、存在者だった。ところが、文明社会が始まると、男女の関係が、変わってくるのです。そう。女は△意味▽を手に入れ、充実自足して

しまう。彼女はオナニーによって幸福に包まれるのだ。ところが男の方はどうだったか。そう、まるで様子が違うのだ。男はゴツゴツと、たくましい骨体美になり果ててペニス以外の官能器官をすべて失ってしまう。そのくせ唯一のその器官そのものが女性の場合ほどうまくは働かない。だから彼は深い幸福にひたることはできない。いや、幸福などというところではない。彼は△女性ではない▽という、ただそれだけの理由で常にきりきりと不幸に見舞われなければならないのだ！」

Kの言葉がとぎれたが、H氏は口を開こうとしなかった。Kは更に続けなければならない。

「こうして男は自分の生まれの悪さを、がつがつ歎き逆に女の生まれの良さを羨んだ。羨むどころではなく、次には、ねたみ始めた。更には、憎悪し始めた。そうだ、男は女から充実した△幸福▽を略奪しようとして、決心したのです。男がその決心をした瞬間、古代文明が初めて誕生することになったのです。決心した男は何をしたのか、……強姦です。そう男は絶えず女を犯し続けることによって、自分の欲情に従い、女を仮死させることによって、更には女の腹が醜く膨張するのをから

かってやることによって、自分自身の幸福を得ようとした。逆に女を不幸に落とそうとした。彼は△勝利者▽になろうとした。だが、それはまるで見当違いのやり方だったのだ。それは単なるうさ晴らしにすぎなかった。彼は女をエロチックに泣かせ、たびごとに無意味な△男らしさ▽を身につけ、ふてぶてしくなり、本末転倒して、遂に女性の本質である△意味▽を見落としてしまった。たくましさ、が幸福と勘違いされ男は自立している気分になった。ああ、とんでもない。なんて馬鹿氣ているのだろう！ 事實は、全く逆だったのだ。男は男であろうとする限りに於いて結局は乳房に喰らいついた寄生虫でしかないのです。しかし、われわれは、こうした失敗の歴史を引受ける必要はない。われわれは、忌むしい過去を切捨てなければならない。こうした△強姦の歴史▽を踏み潰してしまわなければならない。われわれは歴史から脱出することによって、ただちにユートピアに入ることができるのです」

「それは……」遂にH氏が口を挟んだ。「どうすることだ？」

Kはニヤリとした。

「そう、それならば一体どうしたら良いのか

という疑問は当然です。だが、答は簡単です。△自己愛▽なのです。……ところが、男というものは、△無意味▽そのものなのです。だから愛するに<sup>あた</sup>価しないものなのです。だからわれわれは、ある操作をしなければならいほんの、ちょっとしたことです、しかし、なかなかむずかしいことなのです。それは、どんなことか。つまり、女性自身から△意味▽を借りてきて、われわれ、自身の肉体の中に埋め込んでしまうことなのです。……そうすれば、われわれは男でありながら精神的には女性でありうる。だから自分を好きなだけ愛することが出来る。われわれは自給自足して完全なエロチシズム現象となる。かくして永遠の幸福にひたり切ることが出来るのです。われわれの見すばらしい乳首は、たちまちにして二十代の女の子の愛くるしいそれと同じものになる、同じ△意味▽に転化する。そうして、われわれは、ここに始めて女性に追いつくのです。女性と同等な存在になることができるのです」

「だがねえ」と、おれはいいかけたが、Kは手を上げて、おれを制した。

「ところが、しかし、われわれは、こうした精神的存在になりたいのだが、なかなか思う

様にはゆかない。努力してみてもすぐには効果が現れない、あせっても無駄なのです。われわれの心は△強姦の歴史▽によって、これまで形成されてきた。これを改造するのは並々ならぬことなのです。だから少しづつ、地道に努力を重ねてゆかなければいけない。その方法としては、たとえば、こんなものがある。つまり現実の魅力あふれる女性とエロチックに交渉し合うのです。その官能行為を積み重ねることによって、無意識的に、△意味▽を心に沈澱させてゆくのです。それは厳しい自己訓練です。外国語でも学ぶ時のような謙虚な気持ちになって行なわなければ、とても勤まりはしない女性探究の自己訓練なのです。女性は、われわれの相談役であり、指導者であり、且また理想なのです。そう、われわれが女性を求めるとするならば、そうした付き合い方しかできないはずだ。それ以外の交際はすべて素朴で野蛮な強姦行為の変形でしかありえないそうしか言えないのです。われわれはこんなぐあいに、ふむ、長々とした努力を積み重ねてゆく。そして自己愛の練達者となり、遂には人類を超越するのです」

「うむ……、しかしね」

と、再びおれは言いかけて詰まっちゃ

た。頭が混乱してきたのだ。ふむ、Kの言うのは矛盾だらけだ。まるで詭弁なのだ。そう思うのだが、しかし……。

「もちろん、Hさんには奥さまがいらっしゃるのだが、おれたち二人は自由の身、というわけだ。だから、おれたちが、この会に女性たちを招き入れて、そこで何とかして官能し合うとしても、そこでの愛し方というものはちょっと普通の性交渉とは違ったものでなければならぬ」

「ほう、それはフリー・セックス？」

とH氏。

「おお、もちろんそうです。確かにそうなのです。しかし、それはごく単純な条件にしかすぎない。われわれはそうした反道徳的な段階を一举に乗り越えて、理想的なエロ行為をしなければならぬ。そこでだ。自己愛のため何をするべきか？　そう、われわれは全身を性感帯に変えなければならぬ。手足の二十本の指をクリトリスに改造しなければならぬ。いいですか、ペニスに改めるのではなく、クリトリスに改めなければならぬのです。それから、鼻の穴やその他のくぼみをそれぞれ、ヴァギナに改造しなければならぬ。男は、からだの道具類をすべて女性的に



改めなければならぬのです。とは言っても整形手術や性転換手術をして変形させるわけではない。そう、もっぱら精神的に、肉体の一片々々に女性としての△意味▽を限りなく与え続けてゆくのです。ペニスにしたって、あれは元々は女性特有の器官だったのですからね。……ところで、そのためには、そう、大きな障害がある。われわれは、この障害のために数千年間に亘って、すっかり盲にさせられてきた。それがあまりにも強烈な伝統を背負っていたために、われわれはチンパンジー並みの性生活をすることに何らの疑問をも持ちえなかったのだ。そうでしょうか？　そう、障害とは、あのことです。つまり、ペニス、プラス、ヴァギナというあの硬直した約束事のことなのです。あの素朴極まる儀式のことなのです！　われわれはこの儀式に直面するやいなや、△男性的▽であることに執着してしまつて、自己愛の理念をすっかり忘れてはて、ただちに△強姦の歴史▽の中に転落してゆくのです。これは恐ろしいことだ！　そう、われわれはこの伝統的な技術を拒絶すべきだ。徹底的に拒絶しなければならぬのです。……そのためには一つの方法がある。それは、あらゆる倒錯的な愛技を次から次へ

と試みてゆくという、そうした実践的な方法なのです」

「と言うと、具体的には、どんなことをするわけ？」

ニヤツとしたH氏の質問。

「そう、それだが、さっきも言ったように、各人いろいろな好みがあつて一口には言えない。ええと、たとえばね……」

とたんにKが言葉につまる。

「ははは。わたしはね、毎晩々々寝る前に、少なくとも一回以上は女房に流腸してやっているのだがね」

H氏がそう言ったので、おれたち二人は目を丸くした。やはり社会人と学生とでは、実生活のレベルが、まるで違うらしい。Kにしたら結局は理論倒れで、現実には何も、やっではないらしいのだから……。

H氏の笑い声に頭を冷やされたのか、Kは急に無口になつてしまった。

「ともあれ、わたしはK君の意見に、だいたいの賛成するよ。われわれの集まりには、女ッ気が必要なのだ。どうだね？」

とH氏が、おれの顔を見やる。ふむ、まるで同感だ。途中経過はともかくとして、その結論はおれの考えとまるで同じじゃないか！

「そこでね、きみたち、この次の会合までに奮起して、各人が一人ずつ、少なくとも一人ずつ、女性を連れてくることにしたら良いと思うのだが、どうだろうか？」

おれは、困つたことになったと思つた。まるで心当たりがなかったからだ。しかしKは何か思うことでもあると見えて、たちまち嬉しそうな表情をした。

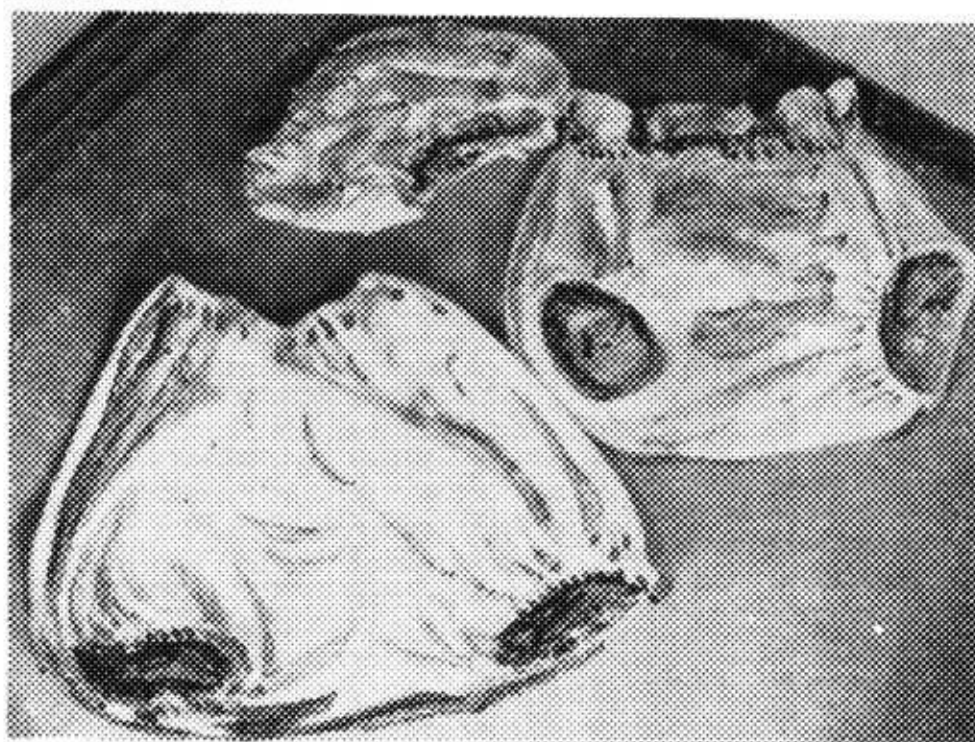
H氏は言つた。

「連れてくる女性はどうなんでも構わない。若くても年寄りでも、太つていても瘠せていても、美人でも醜女でも、どんな女でも構わない。ただし、彼女を連れてくる本人が、何らかの魅力を感じていなければいけない。お、そうだ。それと同時に、その女性がこうした倒錯に理解があつて、しかも口が固い、ということが絶対に必要なだね。ここで、きみたちに予約しておいても良いのだが、わたしは、自分の女房を仲間に入れようと思つてゐるんだ」

「おお、本当ですか！」

おれは嬉しさのあまり、椅子から転げ落ちた。

——（以下次号）——



僕は、独身サラリーマンですが、子供の頃から、何故か黄色の下着の、それも女性用に愛着をもつ者です。白の下着も嫌いではありませんが、何かもう一つ、ものたりなくて、それが黄色いシミか、何かで汚れていなくて、満足できないのです。

中学生の頃、女性用のそんな下着類が手に入らないもどかしさから、専ら絵をかくて欲

女性下着愛好者の告白

## 黄色の幻想

久留米 I E

求をなぐさめていたのが懐かしく思い出されますが、今の会社に勤務するようになってから、いろいろと集め始めました。

黄色いズロース、パンティ、スリッパ、ブラジャー、生理バンド、ストッキング、などが現在の手持品ですが、みな黄色か、オレンジ色がかったものです。

さがしてみると、意外に、女性用下着で黄色いものというのは、少なくて苦労？ しました。男物にもありますが、興味はありません。

スーパーや、洋装店などをぶらついていて黄色い色が見えたら、たまらなくなつて、女店員が変な顔するのもかまわず、すぐに買ってしまうのですが、おかげ？ で、この五年間に一つ二つと買い集めたり、自分で手製の

ものを作ったりして、現在は、大型スリッパースに二つ分、たまりました。

日頃も、黄色のスリッパと、ズロースかパンティを、大抵身につけているのですが、夜になって、アパートの部屋の一面に、黄色の下着を広げて眺めたり、鏡の前で、あれこれと選んで黄色い女装をして楽しむのが、現在の僕の生きがいです。とくに僕の自慢の品はサテンの黄色（輝いて金色にもみえます）のパンティ、厚手のビロードのブルマー、黄色のゴムのパンティです。

どうして、僕にこんな変わった趣味ができたのかよくわかりませんが、多分、小学校の頃に夜尿症があつて、母が穿かせてくれた黄色のズロースのためではないかと思っています。母は、汚れが、めだたない様に黄色のネ



ル地で、大型のズロースを何枚も、作ってくれました。その肌ざわりのよさと、きれいな黄色が忘れられないのですが、どうして男の子にズロースを作ったのか——少しでもオシッコが外にもれないようにという、オシメカバーのつもりだったのでしょうか。はじめ恥かしがっていましたが、あとでは太腿にパチンと気持よく締まるゴムの感触が、たまらなく好きになり、昼間でもはいていたいように思いました。

そして、夜尿症がよくなったあと、

ダンスの底にしまいこまれた、そのズロースをときどき、こっそりとり、出してはき、押入れの中で、わざと少しオシッコを洩らして楽しんだこともありました。

こういう過去の思い出のせいでしょうか、僕はオシッコ遊びが大好きです。黄色い下着というのも、オシッコと結びついているので好きなのかもしれません。

黄色の下着もつづけていると、何か変化が欲しくなるときがあります。そんなとき、白いズロースをはいて、ビニールを広げた床の上で横になり、少しずつ、オシッコで汚してゆく遊びをします。そして最後には、背中ま



で、びっしょり濡らしてしまったものを、わざと洗濯しないでビニールの袋につめておきます。二、三日たつと、とてもなつかしい匂いの濃い黄色いズロースが出来上がります。

浣腸遊びを知って、二、三回、いちじく浣腸をして、わざとそのまま粗相して汚してしまふ遊びもしましたが、これはあとの仕末が大変なので、あまり行ないません。

ふつうは、黄色のパンティストッキングの上にアメ色のゴムパンティか、メンスバンドをつけます。その上に、黄色のレースのついたパンティかズロース類。そしてブラジャーにスリップです。薄い黄色のネグリジェも二

枚もっています。これが正装です。黄色いブラウスの上からサテンの輝くパンティを付けますと、踊子になった気分です。黄色のビロイドのブルマーをはくと、何かサーカスの少女のようです。こうして、鏡の前で時間を忘れ、ポーズをとっては、前から横から飽かずに眺めます。写真をとることもありますが、仲々黄色の思ったような、いい色が、うつりません。

最後には大抵、鏡の前の正装した婦人は、みんながみている前で恥かしい粗相をしてしまいます。パンティからストッキングを通して、生暖かい液体が、ちよろちよと伝わる感触は最高です。サテンの踊子も踊りすぎてせっかくの輝くサテンのパンティを汚してしまいます。サーカスの少女も厚いぶかぶかのブルマーの中を、びしょびしょに濡らしてしまうのです。

どなたか、この黄色い女性や少女を縛って拷問したい方はいらっしゃいませんか。ムチの下で、身もだえしながら、あるいは、みんなから、みられている前で、輝くような黄色い布を黒っぽく汚してしまふでしょう。

— S M カメラ・ハント — 三浦純子の巻 —

悦

虐

の

生

態

辻村

隆

仕事の関係上、いろいろの人から電話がかかるので、その時も、

「三浦ですが……」

という電話の声に、聞き覚えはあったが、咄嗟には思い出せず、さて誰だったのかと、めまぐるしく頭の中で、声の主を探索していたが、ヒョイと脳裡に浮かび上がってきた。

「ああ、四日市の……」

「ええ、そうなんです。本当にあれ以来、長い間、御無沙汰しました。実は今日、商品の仕入れで、上阪したのですが、若し御迷惑でなかったら、一寸お邪魔してもよろしいでしょうか？」

「どうぞ、どうぞ。その後どうしていらっしゃるのかと思っていました。奥様お元気？」

「ええ、お蔭様で……」

「時々、奇クサロン欄で拝見していますよ」

「家内もよく、辻村さんのことを噂しております」

「それで今日、何か特別に私に用事でも？」

「ハイ、つまらぬ私事なのですが、一度辻村さんに御相談したいと思ひまして」

「お役に立つかどうか分かりませんが、それじゃ、お待ちしていますよ」

私は尚も、始めて訪問する彼の為に、道順を分かり易く説明して、電話を切った。思い

がけぬ不意の来客に、忘れかけていた、三浦純子夫人の、豊満な女盛りの、淑かな美しい裸像が、臉の奥にありありと浮かび上がってくるのであった。

昨年の九月初旬、名阪国道を車で四日市まで走り、夫婦プレイの一コマを、湯の山の、いで湯の宿で撮って以来、私は純子夫人とは会っていない。(45年12月号参照) 心は、三十才前後の円熟した人妻と、今ひとたびの機会を願い乍ら、夫の三浦敬一に内緒で、呼び出す程の勇氣もなく、貞淑な純子夫人が、それに応ずるはずもないと勝手にあきらめて、三浦敬一からも連絡の途絶えた筈、既に一年



たらず経過していたのであった。

あの日、車を運転しての戻り道、三浦敬一は私と純子夫人だけの、二人きりのプレイを約束してくれ、彼女も亦、眼許が妖しく笑って、それを期待しているかのようであった。その期待も空しく、あの日以来、バツタリと音信は途絶えてしまったのである。

夫婦愛虐の旨酒に酔い痴れている時は、心を自由奔放にかり立てるものである。湯の山温泉ホテルの一室では、彼等もその気でいたことに嘘はなかった。

旨酒の酔いさめ果てた時、夫は妻を一人でやる危惧にさいなまれ、狐疑逡巡が、いつしか心を重くしていたに違いなかったようである。その三浦敬一が今、何と違ってか、私を訪れようとしている。

最近、断片的に奇クサロン欄で見受ける、純子夫人の緊縛図を思い浮かべ、彼は彼なりに折々に緊縛プレイのフォトを撮っている現状は、未だプレイの熱さめやらず、情熱を燃やしている一つの証明のようでもあった。

二女が女兒を出産して、私にとっては、二人目の外孫を連れて帰っているの、座敷はひっくり返っている。生まれ立ての赤ん坊と賑やかな二女が存在で、私の心もSMから遠

ざかり、何となくホーム的な雰囲気浸っていた折であった。

離れ座敷の方を手早く片付けて待つ間もなく、三浦敬一は玄関のブザーを押した。

突然の訪問を恐縮しながら、はじめて訪れた私の家庭を、何が好奇の目で、彼は眺めていた。ごく平凡で、ありきたりの家庭が三浦敬一にとっては不思議に思えるのであろうか。月々のカメラ・ハントに憂身をやつす虚名の私と、平凡な家庭内の私が、SMの思考では、どうにも焦点が合いかねる様子であった。

同好者の訪問で、私の態度も、家庭での、よきパパから、須臾にしてSMの探究者に変化する。

「奥さん、お元気ですか？ 時々、緊縛フォトを奇クサロン欄で拝見しますが、SMのプレイは、現在もずっと続けていられるのでしょうか？」

「ええ、気が向けば撮っております。でも所詮、夫婦プレイは早かれ遅かれ行き詰まるのじゃないでしょうか。近頃、何だか情熱が持てなくなってきたのです」

「どうして？」

「堂々めぐりみたいで、何か新しい刺激が必

要に思えるのです。いわゆるマンネリズムというやつでしょうか。夫婦二人きりの、狭い殻の中に閉じ籠って、SMのプレイをしていても、やるだけやってしまうと、おのずから限界のようなものがあります。SMの世界は広くても、私の好みというものは、そのうちのホンの一部分に過ぎないようです。私の嗜虐の行為に対して、妻は被虐の欲びに開眼しプレイのさなかには、もっと激しいものを要求し、しきりに求めて、私をタジタジとさせます。果ては、辻村さんに虐めてほしいなんて口走るのです。あなたという第三者を交えての、湯の山のプレイが、妻の心の奥底に、いつまでも生きていくのでしょうか」

「夫婦プレイの誰しもが突き当たる、一つの壁です。どんなに美味しい御馳走でも、いつも同じものを喰べていれば、飽きがきますからね。だから、往々にして夫婦プレイヤーは単調を打破しようとして、複数の交歓プレイを求めたり、SMのスイッチングに走ろうとします。それも一つの手段ですが、その行為に走ったからといって、それも一時的なもので、夫婦プレイの根本的な打開策ではないでしょう」

「それで、御相談にあがったのです。どうす

ればいいかと思って……」

「むつかしい問題ですね。奥様が私とプレイしたいと口走るのも、被虐の悦楽の頂点で、より以上のものを、こいねがう心理の現われでしょう。私にとって甚だ光栄の至りですが……要は、緊縛を前戯として、いつも同じコースで、夫婦の交わりに繋がる、その繰り返しだけでは、いつしか昂進している奥様の被虐反応は、満足しなくなってきたのでしよう。一例を挙げると、ポルノ映画を夫婦でみる。始めて見た時には、女性は濡れにぞ濡れしの状態です。同じものを二度、三度、みては、最早、女性の反応は急激に衰えてゆきます。その時、違ったフォトをとり、映画をみせる。その行為は似たりよったりでも女性はそれによって、新たな官能の疼きを覚えて昂まります。謂わば、それに一脈相通ずるものがあるんじゃないでしょうか。夫婦プレイで、近頃よく耳にすることですが、例のバイブレーターの使用ですが、女性は始めのうちこそ、その強烈なショックで、たかだかと歓喜のハーモニーを奏でますが、味をしめていつもいつも使用すると、女体は心とは別に反応を起こしても、何かなし抵抗を感じて、又かという不満が、くすぶり始め、遂には忌

避するようになるものです。女体を敏感に反応させる便利なマッサージ器も、偶に使用することで変化があるのです。要するに、同じことの繰り返しですが、プレイのマンネリズムに繋がるのじゃないでしょうか。手を変え、品を変えてみる必要があると思いますよ。プレイを面倒くさがってはいけません」

「いつでも自由に出来るという気持が、ついプレイをお座なりにする様です。最近は一週に一度ぐらい、プレイを交えての夜を過ごしますが、もう少し回数を減らして、その夜は存分に充実したものにしてみたいとも思っています。量より質というところでしょうか。それをお願いというのは、そのことで……」

と、三浦敬一は、いよいよ、本題を切り出し、SMのプレイの参考資料を拝見したいということであった。わざわざ私宅を訪問したのは、懼らくは、そのことだろうと察していたから、私は彼を伴って「耽奇房」へと案内する。

目を皿のようにして、激しい好奇心で見入っていた彼も、膨大な物量に、次第に飽和状態の倦怠感が浮かび上がってきた。同好者の誰しもが見せる心の動きであった。頃合を計って房を出ると、彼に水割りのウイスキーを

奨め、私もチビチビやり乍ら、さりげなく口をきった。

「湯の山温泉でのプレイのあと、あなたは約束して下さったでしょう、奥さんとの単独プレイを……。正直いって、未だに当てにしているのですよ」

「ええ、妻もそれを期待しているようです。充分、欲ばせてやって下さい。恰度もう生理が、終わるころです。いつでも構いませんから。唯、セックスの方はどうか……」

と意外に協力的な返事であった。彼は言葉を継いで、

「内心、妻は辻村さんの電話を、ずっと心待ちにしていた様ですよ。こちらから掛けるのは押しつけの様に思えて、私達は遠慮していたのです。毎月、新しいハント女性と、奇クの誌上でお目にかかる度毎に、私達のことなどもう忘れておられるものと、諦めていたのです。でも、今日思い切っておたずねして、本当によかったと思います」

私の思考とはウラハラに、三浦夫婦は、私に連絡することを押しつけと考えていたのであった。お互いに遠慮して疎遠になる、こんなことも世の中にはある。三浦敬一は私の虚名に畏怖して、一夫婦プレイヤーなど、もう